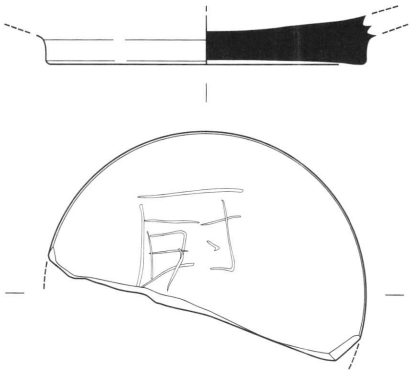
平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）
発掘調査報告書



２０１８

龍　谷　大　学

調査地全景（北西から、平安時代前期）

（1）「厨」銘　線刻緑釉陶器

（2）青銅製鍋

（3）和鏡（松花双鳥文鏡）

（4）平安時代前期の土器

序

龍谷大学大宮学舎の東黌改築にあたり、2016年6月より11月にかけて発掘調査が実施されました。東黌の地は明治期に「普通教校」があった所です。1639（寛永16）年に西本願寺境内に開設された僧侶養成機関「学寮」が龍谷大学の淵源ですが、明治になって寺院子弟中心の「大教校」とは別に、西本願寺は一般学生にも門戸を開き、「普通教校」を開設したのです。龍谷大学が総合大学としての第一歩を踏み出したのがこの場所でした。

江戸期、発掘調査地を含む大宮学舎の地は西本願寺の坊官の邸宅が建っていた所で、下間（しもつま）邸として知られています。本願寺が東西に分かれる前から、本願寺の行政・庶務全般をとり仕切っていたのが下間家であったのです。

本願寺を現在地に移したのは豊臣秀吉ですが、秀吉以前、この辺りが「念仏の地」として知られていたことは注意しておいていいでしょう。「市聖」と呼ばれ、踊り念仏の祖とされる空也上人が布教を行い、鎌倉時代には空也上人を慕って一遍上人が踊り念仏を挙行した場所が当該地域であったのです。

12世紀末から13世紀にかけての京都においては七条町が最も殷賑を極めていたとも言われ、絵巻物などには商業活動が活発であった様子が示されています。当該地域が「七条市町」と呼ばれていたことからも、また、空也上人が「市聖」として記憶され続けたことからもわかるように、この地は平安京の「東市」があったところです。

平安京の市の実態がいかなるものであったかは興味のあるところで、今回の発掘調査においては「厨（くりや）」の字を刻んだ陶器が出土しています。市を管理する「市司（いちのつかさ）」の調理場に関係する遺物とみられます。

龍谷大学大宮学舎の下には市の賑わいが秘蔵されている。本報告書が大宮学舎校地に、少しでも関心をもっていただくきっかけとなれば幸いです。

最後に、発掘調査および報告書作成にご尽力くださいました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2018年３月

龍　谷　大　学
学　長　　入澤　崇

例　言

1　本書は、京都市下京区七条通猪熊東入西八百屋町135－1、2に所在する、平安京跡左京七条二坊五町（東市跡）の発掘調査報告書である。

2　調査は、龍谷大学大宮キャンパス東黌（とうこう）建替えに伴う事前調査として実施した。

3　調査は、学校法人龍谷大学を主体として、大宮学舎建替えに伴う埋蔵文化財調査委員会（委員長 入澤 崇）の指導のもと、國下多美樹（文学部歴史学科文化遺産学専攻教授）が担当した。なお、現地調査では、株式会社文化財サービス（担当大西晃靖）の支援があった。

4　調査期間は、2016年6月27日～11月28日である。

5　本文・図中の方位・国土座標は、世界測地系による。標高は、T.P(東京湾平均海抜高）である。

6　土層名及び出土遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』第24版を用いた。

7　本書の編集は、國下多美樹が担当し、実務は文化財サービス（大西晃靖、古谷真由美、野地ますみ）が分担した。執筆は、以下の通りである。

　　國下多美樹：Ⅰ章、Ⅲ章、Ⅳ章

　　清水真好（龍谷大学院生）：Ⅱ章

　　大西晃靖：Ⅲ章－1・2

　　市川勇樹（龍谷大学院生）・山本未久（文学部生）：Ⅲ章－3－（5）

　　北野信彦（龍谷大学文化遺産学専攻教授）：Ⅴ章－1

　　パレオ・ラボAMS年代測定グループ：Ⅴ章－2

　　中塚 良（向日市埋蔵文化財センター主任）：Ⅴ章－3

8　調査に係わる図、写真、遺物の整理、報告書作成までの作業は、調査担当者の指導のもと、株式会社文化財サービスに委託して行った。うち、和鏡のトレース図は吉兼千陽、断面図は清水真好、銭貨の拓影は市川勇樹、峯森有紀、村上奏衣、山田雄浩、山本未久、吉川智也が行い、銭文の判読は山本未久による。

9　出土遺物の写真撮影は、楠華堂（内田真紀子氏）にお願いした。なお、銭貨は市川勇樹の撮影による。

10　出土資料の分析は、和鏡の成分分析を北野信彦氏にお願いした。年代測定は株式会社パレオ・ラボに依頼し、地形分析の成果とともに中塚 良氏に総括いただいた（第Ⅴ章考察参照）。なお、和鏡と青銅製鍋は、鋤柄俊夫氏のご協力で3次元デジタル情報をいただき保管している。

11　調査に係わる資料は、すべて龍谷大学文学部が保管し、一部展示に活用している。

12　調査の成果については、調査中に公表した現地説明会資料で一定の見解を示したが、整理作業を経た後の本報告書をもって正式見解とする。

13　調査・整理過程で下記の方々の有益なご助言を得た。記して感謝申し上げる（敬称略、所属は当時）。

五十川伸矢（京都橘大学）、伊藤淳史（京都大学文化財総合研究センター）、伊野近富（元京都府埋蔵文化財調査研究センター）、小田桐淳（長岡京市教育委員会）、馬瀬智光、熊井亮介（京都市文化財保護課）、久保智康（京都国立博物館）、岡崎晋明、中川 修、藤原正信、北野信彦（龍谷大学）、辻 純一（宜野湾市民図書館）、中塚 良（向日市埋蔵文化財センター）、長宗繁一（京都市生涯学習総合センター）、西山良平（京都大学）、畑中英二（滋賀県教育委員会）、藤井 整（京都府教育委員会）、本吉恵里子（平安学園中学校・高校）、山本 亮（奈良文化財研究所）、山田隆文（奈良県立橿原考古学研究所）、吉崎 伸、平尾政幸、南 孝雄、柏田有香、近藤奈央、東 洋一、山下大輔（京都市埋蔵文化財研究所）、菅田 薫（文化財サービス）

京都市文化財保護課、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、平安学園中学校・高等学校、松井建設株式会社、近畿機械工具株式会社

14　発掘調査及び整理作業に参加した方々は下記の通りである（所属は当時）。

〔発掘調査〕　神所尚暉、市川勇樹、廣富亮太（以上、龍谷大学院生）、中畑夕衣（龍谷大学学生）、大西晃靖、上田智也、小林一浩、辰巳陽一、田中慎一、広瀬八郎（以上、株式会社文化財サービス）、作業員（株式会社サポートスタッフ）

〔整理作業〕　市川勇樹、廣富亮太、清水真好（以上、龍谷大学大学院生）、吉兼千陽、峯森有紀、村上奏衣、山田雄浩、山本未久、吉川智也、前田詩子、皆川陽奈、西澤和真、永田丈一郎（以上、龍谷大学学生）、赤羽 香、上野恵己、植村明男、内牧明彦、大谷 弘、尾崎枝里子、甲田春奈、多賀摩耶、田邉貴教、西 絢香、西尾知子、本間愛子、溝川珠樹、森 尚子、山内英夫、吉岡創平、米倉美穂、利藤晴、若山美帆、和田 学（以上、株式会社文化財サービス）

15　遺跡の年代観は、主に下記文献に依拠した。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

16　表紙カットは、平安時代前期の「厨」銘線刻緑釉陶器である。

目　次

序

例 言

Ⅰ　調査に至る経緯と経過
1　調査に至る経緯…… 1
2　調査の経過…… 1
3　現地成果の公表…… 3
4　報告書作成…… 3

Ⅱ　位置と環境
1　地理的環境…… 5
2　歴史的環境…… 6
3　既往の調査…… 11

Ⅲ　調査の成果
1　基本層序と遺構面…… 17
2　検出遺構…… 18
（1）2a層上面 …… 18
（2）2b層上面 …… 19
（3）3a層上面 …… 20
（4）3b層上面 …… 21
（5）４層上面…… 27
（6）５層上面…… 30
3　出土遺物…… 33
（1）土器・陶磁器・瓦類…… 33
A　弥生～古墳時代…… 33
B　平安時代…… 33
C　鎌倉時代…… 37
D　室町時代…… 39
E　近世…… 42
（2）石製品・ガラス製品・木製品…… 42
（3）鉄製品・青銅製品…… 43
（4）鋳造関連資料…… 44
（5）銭貨…… 44

Ⅳ　まとめ
1　遺構の変遷…… 47
2　調査の成果と課題…… 48
（1）1期（平安京以前）…… 48
（2）2期（平安京遷都と平安時代前期）…… 48
（3）3期（鎌倉時代以降、室町時代まで）…… 50
（4）4期（安土・桃山時代から近世へ）…… 50

Ⅴ　考察
1　龍谷大学大宮学舎東黌建設地出土和鏡の材質分析と保存処理…… 85
2　龍谷大学大宮学舎東黌調査に伴う放射性炭素年代測定…… 91
3　平安京跡左京七条二坊五町における地形形成過程と人間活動
～古墳出現期前後の放射性炭素年代測定成果から～…… 95

図版目次

巻頭図版1　調査地全景（北西から、平安時代前期）
巻頭図版2　（1）「厨」銘　線刻緑釉陶器　（2）青銅製鍋
（3）和鏡（松花双鳥文鏡）　（4）平安時代前期の土器
図版1　第1調査区　土層断面図1（1:50）
図版2　第1調査区　土層断面図2（1:50）
図版3　第2調査区　1・2区南壁土層断面図（1:50）
図版4　第2調査区　1～3区土層断面図（1:50）
図版5　第2調査区　4・5区土層断面図（1:50）
図版6　第1調査区　2a層上面平面図（1:150）
図版7　第2調査区　2a層上面平面図（1:150）
図版8　第1調査区　2b層上面平面図（1:150）
図版9　第2調査区　2b層上面平面図（1:150）
図版10　第1調査区　3a層上面平面図（1:150）
図版11　第2調査区　3a層上面平面図（1:150）
図版12　第1調査区　3b層上面平面図（1:150）
図版13　第2調査区　3b層上面平面図（1:150）
図版14　第1調査区　4層上面平面図（1:150）
図版15　第2調査区　4層上面平面図（1:150）
図版16　第1調査区　5層上面平面図（1:150）
図版17　第2調査区　5層上面平面図（1:150）
図版18　柵50平面・断面図（1:80）
図版19　築地地業114平面・断面図（1:50）

図版20　埋甕13・53、土坑117、池48a、ピット48b平面・断面図（1:40）
図版21　野壺102・土坑103、井戸128平面・断面図（1:40）
図版22　井戸93平面・断面図（1:40）　土坑75平面・断面図（1:20）
図版23　井戸528、土坑263・264平面・断面図（1:40）
図版24　池256平面・断面図（1:40）
図版25　柵600平面・断面図（1:50）
図版26　礎石列285、礎石列667平面・断面図（1:40）
図版27　溝428平面・断面図（1:40）
図版28　溝430平面図（1:40）
図版29　溝430セクション断面図（1:40）
図版30　溝368平面・断面図（1:40）　溝368遺物出土状況図（1:20）
図版31　溝367平面・断面図（1:40）
図版32　溝622平面・断面図（1:40）
図版33　井戸279a・279b平面・断面図（1:40）
図版34　土坑261、土坑319平面・断面図（1:40）
図版35　土坑286平面・断面図（1:40）
図版36　土坑287、土坑322平面・断面図（1:20）
図版37　土坑623～625、土坑628、柱穴651・土坑627平面・断面図（1:40）
図版38　土坑277・276・235・273・236平面・断面図（1:50）
図版39　土坑386・391・366・317・379・605・621・604・380平面・断面図（1:50）
図版40　土坑309、土坑153、土坑344・345平面・断面図（1:40）
図版41　土坑381・398平面・断面図（1:40）
図版42　礎石列561平面・断面図（1:40）　埋甕538、ピット638平面・断面図（1:20）
図版43　井戸130、井戸362平面・断面図（1:40）
図版44　井戸509平面・断面・立面図（1:40）
図版45　井戸517・518平面・断面・立面図（1:40）
図版46　土坑310、土坑419・420平面・断面図（1:40）
図版47　土坑612平面・断面図（1:20）
図版48　土坑555・ピット560平面・断面図（1:20）
図版49　溝558平面・断面図（1:20）
図版50　溝670平面・断面図（1:50）
図版51　溝681・684・698平面・断面図（1:50）
図版52　井戸540遺物・根太出土状況図（1:20）
図版53　井戸540平面・断面図（1:40）
図版54　土坑559平面・断面図（1:20）
図版55　土坑551、土坑563、土坑580平面・断面図（1:20）
図版56　整地550平面・断面図（1:40）
図版57　出土遺物実測図－1
（古式土師器、古墳時代須恵器、土師器・須恵器　1：4）

図版58　出土遺物実測図－２（土坑559－１　1：4）
図版59　出土遺物実測図－３（土坑559－２　1：4）
図版60　出土遺物実測図－４（井戸540－１　1：4「厨」字は原寸）
図版61　出土遺物実測図－５（井戸540－２　1：4）
図版62　出土遺物実測図－６（井戸540－３　1：4）
図版63　出土遺物実測図－７（井戸540－４　1：4）
図版64　出土遺物実測図－８（井戸540－５　1：4）
図版65　出土遺物実測図－９（井戸540－６　1：4）
図版66　出土遺物実測図－10（平安時代土器・陶磁器・石製品　1：4）
図版67　出土遺物実測図－11（整地550・包含層　1：4）
図版68　出土遺物実測図－12（土坑310　1：4　(171) は1：8）
図版69　出土遺物実測図－13（鎌倉時代土器・陶磁器・瓦　1：4）
図版70　出土遺物実測図－14（鎌倉時代土器・陶磁器・瓦　1：4）
図版71　出土遺物実測図－15（鎌倉時代土器・陶磁器・瓦　1：4）
図版72　出土遺物実測図－16（土坑381・317・319　1：4　(287) は1：8）
図版73　出土遺物実測図－17（土坑392・457・溝367　1：4）
図版74　出土遺物実測図－18（土坑287　1：4　(351) は1：8）
図版75　出土遺物実測図－19（室町時代土器・陶磁器・瓦類　1：4）
図版76　出土遺物実測図－20（溝430　1：4）
図版77　出土遺物実測図－21（埋甕538・溝428　1：4　(422) は1：8）
図版78　出土遺物実測図－22（池256・埋甕53　1：4　(456) は1：8）
図版79　出土遺物実測図－23（石製品・木製品　1：4　ガラス製品・金属製品　1：2）
図版80　出土遺物実測図－24（和鏡　1：1）
図版81　出土遺物実測図－25（青銅製品・鋳造関連資料　1：4）
図版82　出土遺物拓影（銭貨　1：2）
図版83　遺構　（１）調査前（北西から）（２）調査前（南東から）
図版84　遺構　（１）第１調査区2a層上面全景（南から）（２）第２調査区2a層上面全景（西から）
図版85　遺構　（１）柵50（北から）（２）第１調査区５Ｈ・６Ｈ地区礎石群（南西から）
　　（３）築地地業114（北東から）
図版86　遺構　（１）井戸128（北から）（２）埋甕13・53（東から）
　　（３）野壺102、土坑103（南西から）
図版87　遺構　（１）池48ａ（南から）（２）ピット48b（南から）
　　（３）ピット48b土師器出土状況（南から）
図版88　遺構　（１）第１調査区2b層上面全景（南から）（２）第２調査区2b層上面全景（西から）
図版89　遺構　（１）井戸93（北東から）（２）土坑75（南西から）（３）土坑119（南から）
図版90　遺構　（１）第１調査区３層上面全景（南から）（２）第２調査区３層上面全景（西から）
図版91　遺構　（１）第２調査区１区3a層上面（南から）（２）土坑263断面（南から）
　　（３）井戸528（南から）

図版92　遺構　（1）池256中層（貼土）検出状況（南東から）（2）池256完掘状況（南西から）
（3）池256下層瓦出土状況（北から）
図版93　遺構　（1）柵600（北から）（2）礎石列677（南から）（3）礎石列285（北東から）
（4）溝622（東から）
図版94　遺構　（1）溝428礫検出状況（南から）（2）溝428完掘状況（南から）
（3）溝430礫検出状況（南から）（4）溝430完掘状況（南から）
図版95　遺構　（1）溝368（西から）（2）溝368土師器出土状況（南東から）
（3）溝367（北から）（4）溝367断面（北から）
図版96　遺構　（1）井戸613（北から）（2）井戸279a（東から）（3）井戸279b（南から）
図版97　遺構　（1）土坑319（北から）（2）土坑261（南西から）（3）土坑286（南西から）
図版98　遺構　（1）土坑322（東から）（2）土坑287（東から）（3）土坑153（北から）
図版99　遺構　（1）土坑380（西から）（2）土坑317（南東から）（3）土坑309（南から）
図版100　遺構　（1）土坑236・273（北西から）（2）土坑604・621・379（北西から）
（3）土坑391・366・612（東から）
図版101　遺構　（1）土坑623～625・627・628・642・660・661（東から）
（2）土坑344・345（南から）（3）土坑381・392・398（南東から）
図版102　遺構　（1）第1調査区4層上面全景（南から）（2）第2調査区4層上面全景（西から）
図版103　遺構　（1）礎石列561（南から）（2）ピット638（東から）（3）井戸362（西から）
図版104　遺構　（1）井戸130（南から）（2）井戸509（北から）（3）井戸517（南東から）
図版105　遺構　（1）土坑310（北西から）（2）土坑612遺物出土状況（西から）
（3）土坑612（西から）
図版106　遺構　（1）土坑609（南から）（2）土坑419・420（南東から）（3）埋甕538（南から）
図版107　遺構　（1）ピット560断面（南から）（2）ピット560和鏡出土状況（南西から）
（3）土坑555（南から）
図版108　遺構　（1）第1調査区5層上面全景（南から）（2）第2調査区5層上面全景（西から）
図版109　遺構　（1）溝558礫検出状況（南から）（2）溝554・558（南から）
（3）溝670（西から）（4）溝681（南西から）（5）溝684・698（西から）
図版110　遺構　（1）井戸540井戸枠内遺物出土状況（西から）
（2）井戸540根太検出状況（西から）（3）井戸540東部根太検出状況（東から）
図版111　遺構　（1）土坑559（西から）（2）土坑551（南から）（3）土坑563（南西から）
図版112　遺構　（1）土坑580（西から）（2）整地550（北西から）
（3）第2調査区5区南東部断ち割りの状況（南から）
図版113　遺物　出土遺物－1（古式土師器、平安時代土師器・須恵器）
図版114　遺物　（1）出土遺物－2（井戸540）（2）出土遺物－3（鎌倉時代）
図版115　遺物　（1）出土遺物－4（溝367）（2）出土遺物－5（須恵器、墨書土器）
図版116　遺物　（1）出土遺物－6（土馬、石製品、塼、近世土師器）
（2）出土遺物－7（石製品、ガラス製品）
図版117　遺物　出土遺物－8（瓦）

図版118 遺物　（1）出土遺物－9（土製鋳型）
（2）出土遺物－10（土製鋳型・フイゴ羽口・取瓶）
図版119 遺物　出土遺物－11（銭貨－1）
図版120 遺物　出土遺物－12（銭貨－2）

押図目次

図1　調査区設定図（1:400）…… 2
図2　調査過程 …… 4
図3　調査地位置図（1:2,500）…… 5
図4　平安京の地形条件図（河角2001に加筆） …… 6
図5　『一遍聖絵』トレース図（萩本勝氏作図） …… 7
図6　御境内総絵図（日野昭氏作図、一部加筆）…… 7
図7　東市と周辺の調査地点（1:5,000）…… 8
図8　層序と遺構面の関係 …… 17
図9　遺構変遷図－1（古墳時代以前　1:300）…… 52
図10　遺構変遷図－2（平安時代前期：京都Ⅰ期　1:300）…… 53
図11　遺構変遷図－3（平安時代中期：京都Ⅱ期　1:300）…… 54
図12　遺構変遷図－4（鎌倉時代　1:300）…… 55
図13　遺構変遷図－5（南北朝時代　1:300）…… 56
図14　遺構変遷図－6（室町時代前半　1:300）…… 57
図15　遺構変遷図－7（室町時代後半　1:300）…… 58
図16　遺構変遷図－8（安土・桃山～江戸時代初期　1:300）…… 59
図17　遺構変遷図－9（江戸時代　1:300）…… 60
図18　遺構変遷図—10（幕末～明治時代　1:300）…… 61
図19　出土銭貨種別点数ヒストグラム …… 82

表目次

表1　東市周辺の既往の調査一覧 …… 9
表2　平安京左京七条二坊五町（東市町）の変遷 …… 49
表3　遺物観察表 …… 62
表4　銭貨一覧表 …… 81

Ⅰ　調査に至る経緯と経過

1　調査に至る経緯

龍谷大学は、大宮キャンパス東黌建物の耐震化をはかる目的で建替え工事を計画した。当該地域は、周知の埋蔵文化財包蔵地であり、京都市文化財保護課と埋蔵文化財の保護についての協議を重ねることになった。その結果、文化財保護法92条に従って開発にともなう届出を行うこと、新築建物と既存建物の範囲が重なる部分も含めた全域について、試掘調査の結果を踏まえたうえで、調査の範囲と方法を決定することが確認された。なお、調査主体については、当大学で調査機関を設け、報告書作成、出土資料の保存･管理、活用に供することを前提に進めることになった。

試掘は、京都市文化財保護課によって2016年６月１日～３日に実施された。試掘調査は、調査対象地域内で８箇所の試掘を行い、遺跡の遺存状況と層序を確認するものであった。その結果、旧建物基礎を残す形で調査を行えば遺構・遺物が残されていることが明らかになり、調査トレンチが設定され本調査を実施することになった。なお、調査体制等は下記の通りである。特に、外部委員には調査期間中の遺構検出段階、掘り下げ段階で何度も検証いただき適切なる助言をいただいた。厚く御礼申し上げる。

調査体制	学術調査委員会は次の委員によって構成した。期間中、３回の委員会を開いた。
名　称	大宮学舎東黌建替え工事に伴う埋蔵文化財調査委員会
委員長	入澤 崇（龍谷大学文学部長・当時、現龍谷大学長）
委　員	岡崎晋明（龍谷大学名誉教授）、平林章仁（龍谷大学文学部教授・当時）、木許 守（御所市教育委員会）、堀 真人（滋賀県文化財保護協会）、國下多美樹（龍谷大学文学部教授）
調査支援	大西晃靖（文化財サービス）
調査事務	龍谷大学文学部教務課、財務部管理課
外部検証委員	鋤柄俊夫（同志社大学文化情報学部教授）、吉崎 伸（京都市埋蔵文化財研究所）

2　調査の経過

調査は、敷地のほぼ中央西寄りに第１調査区、南東に第２調査区の２箇所のトレンチを設けて実施した。まず、重機によって第２調査区より表土（層厚1.1～1.2 m）を除去した。敷地南部（６区）は旧校舎のコンクリート布基礎によって著しく撹乱され、基底砂礫層まで削られていたが、北部の５箇所（１～５区）で近世の整地土とみられる暗褐色系土以深の堆積土を島状に確認した。

第１調査区では、表土（層厚0.7 m）を除去したところ、第２調査区と同様の堆積状況であったが、建物関連の基礎の撹乱が及ばない範囲が多く、相対的に地層の遺存状況が良好であることが判明した。

以上の各調査区の状況を踏まえ、以深は人力による掘下げによって調査を進めることとした。

その結果、古墳時代、平安時代、鎌倉時代～南北朝・室町時代、近世、近代の各時代について、

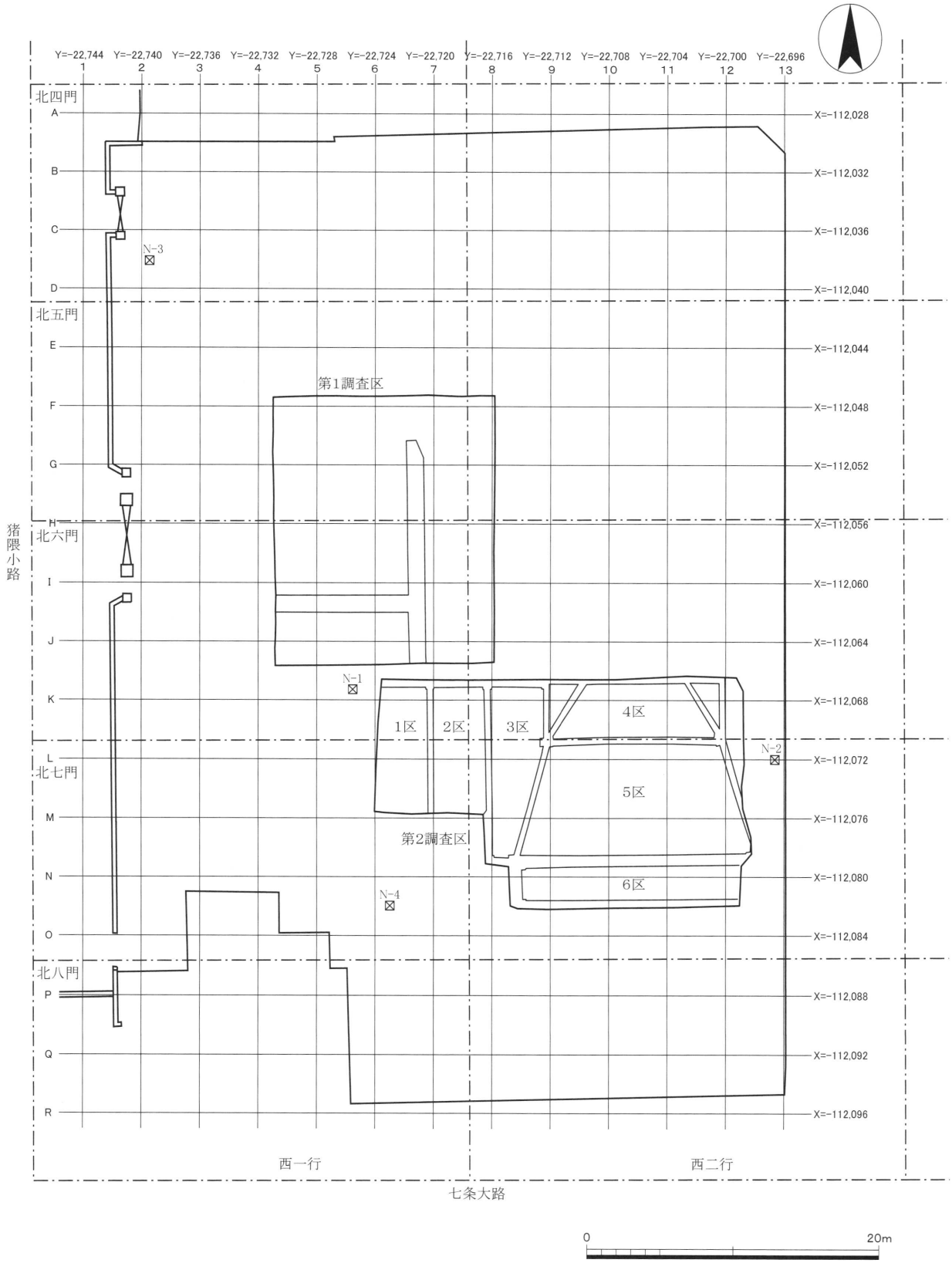


図１　調査区設定図（1:400）

５面の遺構面を確認した。

測量・地区割　測量は、VRS・GPS 測量によって敷地内に世界測地系新点Ｎ－１・２・４、TS 測量によって同新点Ｎ－３の成果を求めた。成果は以下の通りである。

Ｎ－１（第２調査区北西）	X ＝－ 112,067.282 m	Y ＝－ 22,725.523 m	H ＝ 27.489m
Ｎ－２（第２調査区東）	X ＝－ 112,072.008 m	Y ＝－ 22,696.634 m	H ＝ 27.440m
Ｎ－３（敷地北西隅）	X ＝－ 112,038.088 m	Y ＝－ 22,739.454 m	H ＝ 27.635m
Ｎ－４（敷地南西隅）	X ＝－ 112,081.972 m	Y ＝－ 22,722.990 m	H ＝ 27.387m

地区割りは、敷地全体を包括するものとして北西地点を基点に４ｍ方眼で組んだ。地区名は、東西軸アルファベットとして北から南へ、南北軸をアラビア数字として西から東に番号を付し、北西のポイントを地区名として遺物等取り上げに利用した。

３　調査成果の公表

現地説明会　中世の調査がほぼ終了した10月16日(日)には、一般向けの現地説明会を実施した。250名の参加者があった。なお、これに先立つ、10月13日（木）午後に現地で報道提供を行い成果の説明を行った。

平安学園考古学クラブの見学　10月11日（火）に教員、学生の見学を受け入れた。

発掘ニュース　また、調査の進捗状況と成果をいち早く一般に伝えるため、『龍谷大学大宮学舎遺跡発掘ニュース』VOL. １～６を刊行し、文学部への供覧とともに現地入口に常備して配布に努めた。なお、この作成は主に参加学生が行った。

解説板の設置　改築された大宮キャンパス東黌の入口に、「平安京東市跡－大宮キャンパス東黌地下の遺跡」と題する遺跡解説板を新たに設け、遺跡の成果とともに平安京東市跡の存在を普及するための努力を行った。

展示コーナーの設置　大宮キャンパス東黌１階ホールに、出土品と成果を紹介する展示コーナーを設ける予定である。

４　報告書作成

報告書作成は、調査担当者の指導のもと、出土遺物整理及び編集作業を株式会社文化財サービスに委託して行った。また、一部の出土資料の整理作業は龍谷大学文学部考古学研究室で行い、その成果を報告書に反映させた。

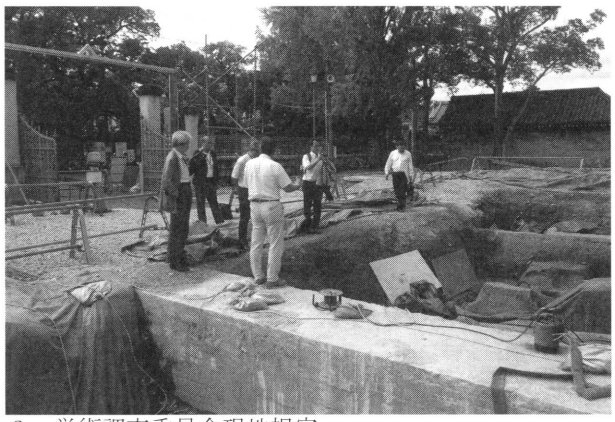
1　重機掘削

2　中世遺構調査経過

3　平安時代遺構調査経過

4　現地説明会

5　断面剥ぎ取り


6　学術調査委員会現地視察

7　外部検証委員　鋤柄氏現地視察

8　外部検証委員　吉崎氏現地視察

図２　調査過程

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境（図３・４）

本調査地は、七条通と堀川通の交差点の北西約 180 mに位置し、龍谷大学大宮キャンパス旧東黌の敷地に相当する（図３）。現地表面の標高はおよそ 28 mである。平安時代前期頃までの当地域は、鴨川の氾濫による扇状地を形成していた（図４）。平安時代中期以降には、右京における紙屋川の氾濫や、低湿な地形環境という条件から、鴨川の段丘化が進行していた左京へと土地利用が移るとみられている[1)]。

周辺は堀川（現在の堀川通よりも西に位置した）と大宮川（現在の大宮通付近）が南北に流れており、それに挟まれるかたちで東西が仕切られ、東市４町（左京七条二坊三・四・五・六町）と外町８町（七条一坊十三・十四町、七条二坊二・七町、七条二坊十一・十二町、八条二坊一・八町）の 12 町で構成されていた。平安時代をとおして、本調査地は左京七条二坊五町の東市の一角に位置する。

現在の景観として、東市関連の様相は残っていないが、近世以降の宅地割りを踏襲しながら通りに面して家屋が建ち並んでいるのが特徴といえる。

本調査地の東には、堀川通が南北に走り、本来の堀川小路と油小路の間に位置する。堀川通の西側には世界遺産として登録されている西本願寺が、東側には仏具屋や旅館を始めとする施設が軒を連ねている。

また、本調査地一帯には、龍谷大学大宮キャンパスがあり、本館・北黌・南黌・旧守衛所・正門などが重要文化財として指定されている。本調査地と大宮キャンパスの間に位置する猪熊門は、西

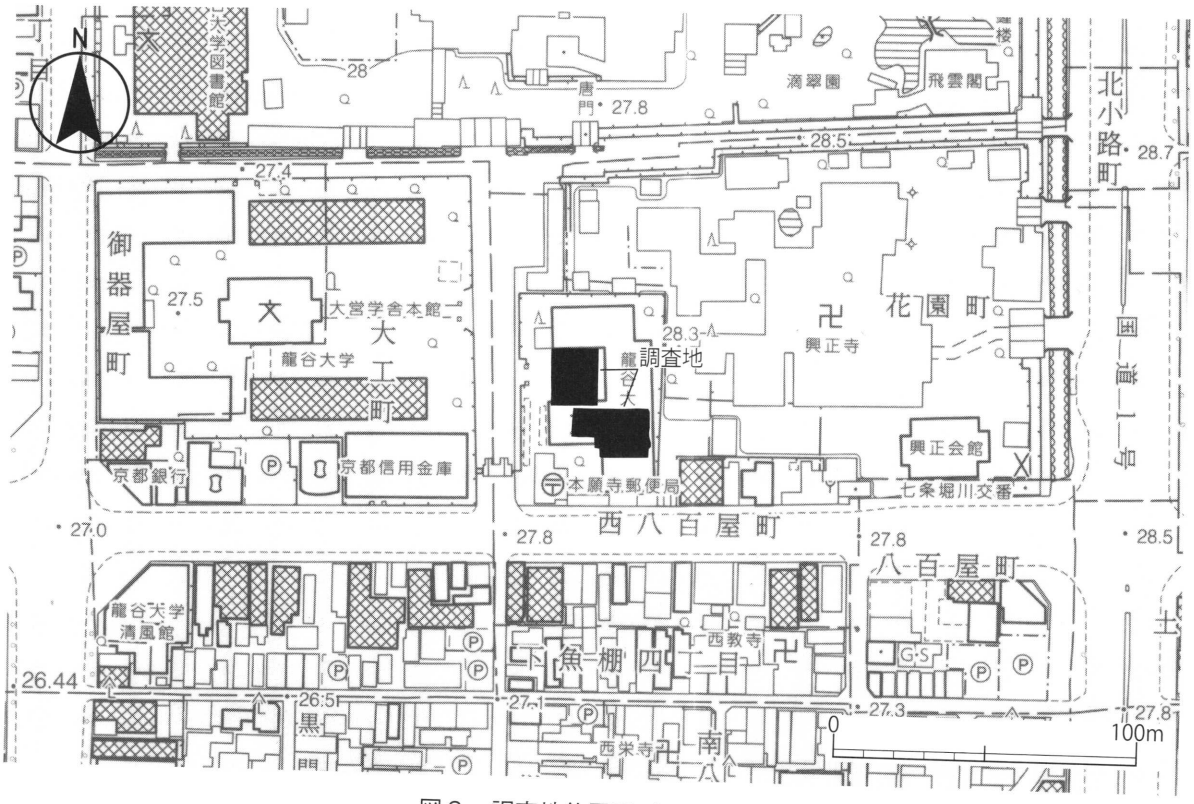


図３　調査地位置図（1:2,500）

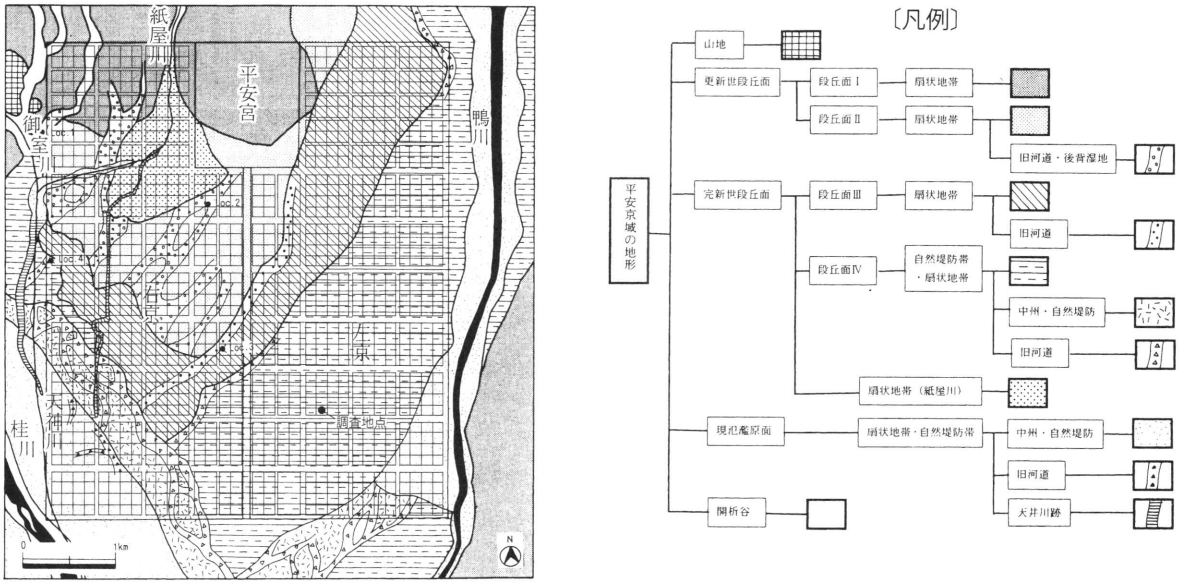


図４　平安京の地形条件図（河角2001に加筆）

本願寺の国宝唐門・大玄関門・台所門に通じている。明治13年（1880）７月20日に明治天皇皇后両陛下が行幸された際には、七条通から猪熊門を通って大宮本館に入られたとの記載もあり[2]、現在では大学生の通学路として利用されている。

２　歴史的環境（図５・６）

本調査地は、平安京左京七条二坊五町南西部にあたり、平安京における経済拠点であった東市の一角に当たる。古代の宅地割りである四行八門制では、西一・二行北五・六・七門に相当する。『日本紀略』の延暦13年（794）７月８日条に「遷二東西市於新京一、且造二廛舎一、且遷二市人一、」とあるように、平安京遷都[3]に先立ち市が設置され、廛舎（みせのや）が建ち並んでいた。『関市令』[4]の毎肆立標条には「凡市、毎レ肆立レ標題二行名一。」とあり、肆（いちくら）毎に表札を下げて軒を連ねていたようである。また中世の史料ではあるが、『東市町正応五年前図』[5]の中央部には「市町」とあることから、その土地利用がみてとれる。

中世に入ると、東市としての機能は薄れて、代わって町尻小路と七条大路を中心に発展してきた七条町へ取り込まれるようになる。寿永２年（1183）に成立した『拾遺抄註』に「市門ハ、七条猪熊ナリ、七条町トイヘル、僻事也、市屋アリ、市マツリアル所ナリ」とあることから、その状況が窺い知れる。この七条町については、「七条・町周辺では、11世紀後半に生成・形成の過程をたどり、12世紀の鋳造関連遺物が地域一帯を特徴づけている」[6]と、鋳造活動が七条町の特徴として位置付けられている。

前述の『東市町正応五年前図』の中には、「市堂空也上人開基」と書かれている箇所がある。「市堂」というのは、『金光寺縁起』に「山城国愛宕郡洛陽七条堀川、市中山市屋道場金光寺者、遷都以来、市姫大明神の神勅によつて、承平年中、空也上人開基あり。昼夜不断に念仏三昧を修練し給ふ霊場なり。」とあるように、承平年間（931～938）に空也によって開基された道場（市屋道場・金光寺）

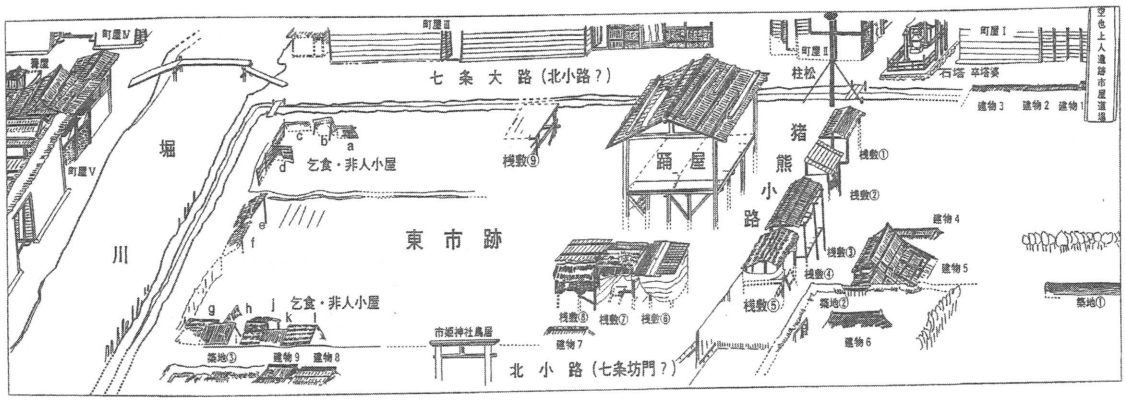


図５　『一遍聖絵』トレース図（萩本勝氏作図）

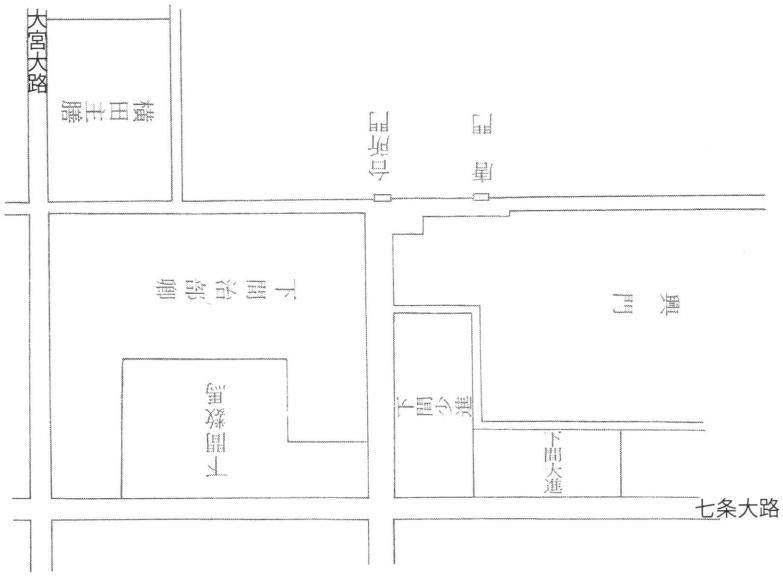


図６　御境内総絵図（日野昭氏作図、一部加筆）

のこととされている。この道場に関して、弘安７年（1284）に一遍が東市を訪れた際に、唐橋法印印承（作阿）という人物が帰依し、天台から時宗になったという話が伝わっている[7]。時宗の開祖一遍の伝記絵巻である『一遍聖絵』からおこされた作図（図５）には、中央に踊屋が描かれており、そこで踊り念仏が行われた。その後天正 19 年（1591）には、豊臣秀吉による京都政策の一環で鴨川の西へ移転させられた[8]。

さらに、本調査地の北（七条坊門小路より北側）には日蓮宗の本国寺があった。貞和元年（1345）に「勅願所本国寺、今後被レ遷二帝都一訖、永不易之寺地任二望之旨一、六条楊梅東西二町南北六町令レ全二官領一早可レ被レ致二建造一之由、院宣所候也、仍執達如レ件」と、日蓮宗の本国寺が東西２町と南北６町の計 12 町の寺域を構えたことが『本国寺文書』に記されている。『二水記』の天文元年（1532）８月７日条には、「本国寺用害馳走了」とあるように、軍事的性格が強かったことが窺える。元亀２年（1571）９月 18 日付のゴア発ガスパル＝ヴィレラよりポルトガル国アビスの僧院のパードレ宛に送った書翰[9]には、「敷地の周囲には深さ及び幅相当たる濠」があったと記されている。これらから、中世における当地域は経済活動（東市・七条町）と宗教活動（時宗道場・日蓮宗本国寺）が活発であったことが知られる。

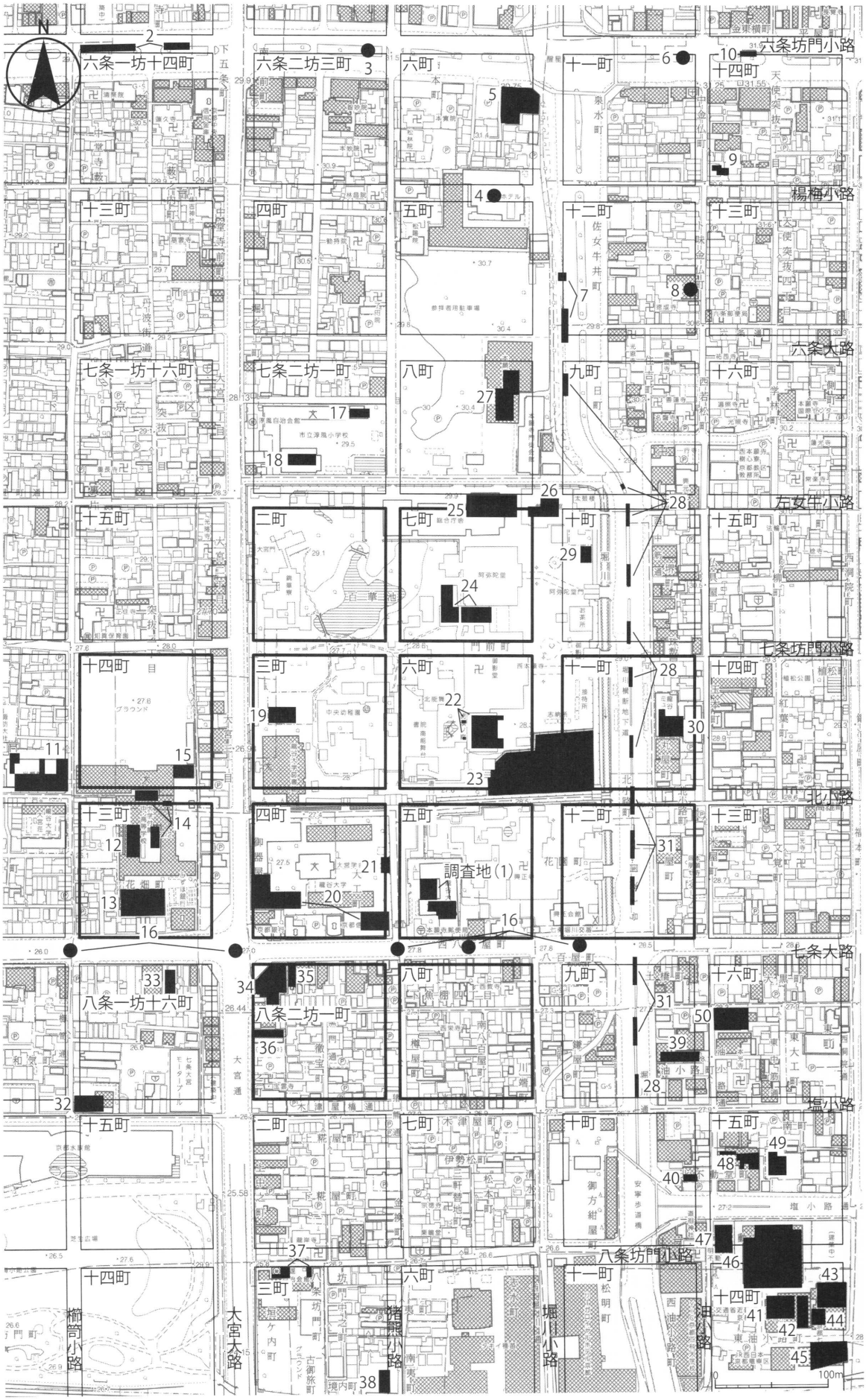


図７　東市と周辺の調査地点（1:5,000）

表1　東市周辺の既往の調査一覧

地点	調査地	条坊・区画施設	宅地関連遺構	流路・包含層	備考	報告書
1	本調査地					
2	六条一坊三・十一・十四町	平安中期～室町の六条坊門小路南側溝、近世の六条坊門小路南側溝	平安中期～室町の柵列・柱穴、近世の柱穴・土取穴、近世以降の柱穴・土坑	平安の包含層		1
3	六条二坊三・六町	平安の六条坊門小路南側溝	平安の建物、平安～桃山の柱穴・土坑、室町～桃山の濠		古墳の溝	2
4	六条二坊五町		平安中期の掘立柱建物・方形柱穴列、平安後期～鎌倉の井戸、平安以前～中世の柱穴・土坑・溝、室町末の溝、中世～近世の井戸・柱穴・土坑・溝、近世以降の井戸・柵・礎石建物・柱穴・土坑・土蔵基礎・舟入・溝	ベースは砂礫層、平安以前の流路	本国寺関連遺構・遺物	3
5	六条二坊六町		平安の井戸、鎌倉の井戸・土坑・柱穴・墓、室町の井戸・土坑・掘立柱建物・溝、室町以前の溝、室町以降のピット群、江戸の井戸・柱穴列・土取り坑・掘込・溝	弥生の自然流路	弥生前期～後期の土器、古墳前（布留式）の土器、本国寺関連遺構・遺物	4
6	六条二坊十一・十四町		平安の井戸・柵列・柱穴・土坑、鎌倉～室町の井戸・柱穴・土坑・溝、桃山～江戸の井戸・土坑		古墳の土器	5
7	六条二坊十二町	中世～近世の堀川河道			江戸の木製品	6
8	六条二坊十二町		平安～近世の井戸・竈・柱穴・土坑・土坑墓・掘立柱建物・溝			7
9	六条二坊十四町	平安中期後半～鎌倉の油小路東側溝、中世の北七－八門界溝	平安前期の土坑、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・ピット・埋甕、平安の整地層、鎌倉の整地層、中世の井戸・土坑・溝、江戸の井戸・土坑・溝	ベースは砂礫層	弥生中期（Ⅲ～Ⅳ様式）の土器、古墳前（布留式）の土器、13c前半のウマ埋葬遺構	8
10	六条二坊十四町・三坊三・六町		平安～鎌倉の土坑・柱穴、室町の井戸・柱穴・土坑、江戸の石室・井戸・瓦溜・土坑、平安後期～江戸の整地層	ベースは砂礫層	古墳の溝	9
11	七条一坊十一町	平安前期の西三－四行界柵列	平安前期の井戸、平安の井戸・柱穴、中世の井戸・土坑、江戸後半～明治初期の耕作土層、近世の井戸・柱穴・土坑	ベースは砂礫層、平安京造営以前の自然流路	鎌倉後期以降の東寺と同范の軒丸瓦	10
12	七条一坊十三町		平安後期の井戸・溝、鎌倉の井戸、室町の井戸・土坑・溝、近世の耕土層	ベースは砂礫層、河川の流路		11
13	七条一坊十三町	平安～室町の西二－三行界溝	平安前期の井戸、鎌倉前半の井戸、室町後期の井戸、室町後期～桃山の溝、江戸の溝・井戸・建物、江戸末期～明治の耕作土層		平安の籠編物・石銙帯・水晶玉	12
14	七条一坊十三・十四町		近世～近代の耕作土	ベースは砂礫層		13
15	七条一坊十四町		平安前期の井戸、鎌倉～室町の井戸			14
16	七条一・二坊、東市、七条大路	平安後期の七条大路北側溝、近世の路面	鎌倉～室町の溝、室町以降の溝、江戸の柵、近世の井戸・土坑、近世～現代の埋甕・溝	ベースは砂礫層	弥生土器、古墳の土器	15
17	七条二坊一町		鎌倉～江戸の井戸・柱穴・土坑・溝		本国寺関連遺構	16
18	七条二坊一町		平安の井戸、室町後半の池、近世の溝		平安前期の土器群	17
19	七条二坊三町	本願寺境内と町屋の南北方向の境界溝	平安中期の溝、平安後期～鎌倉の井戸、江戸前期～後期の井戸・土坑など、江戸後期の建物		弥生土器、古墳の土器	18
20	七条二坊四町	東市の時期の大宮大路東側溝	平安後期の井戸、室町の井戸、江戸の瓦溜	ベースは砂礫層	古式土師器、古墳前（布留式）の土器、平安京以前の須恵器	19
21	七条二坊四町		近世の瓦溜・礎石・土坑			20
22	七条二坊六町		平安末期～鎌倉の土坑・溝、室町の井戸、桃山末～江戸前期の柱穴・土坑、江戸中期～後期の井戸・瓦列・建物・土坑	中世～江戸の包含層	古墳の土器、寛永13年の整地面	21
23	七条二坊六・十一町		池庭遺構（醒眠泉・滄浪池）	室町の包含層		22
24	七条二坊七町		平安前期中頃の土坑、平安前期の建物、平安～鎌倉の井戸・土坑・溝、室町後期～安土桃山の溝、安土桃山以前の井戸、安土桃山末期～江戸前期の池・陸部整地層（瓦溜め）、江戸前期の池・石垣状遺構・杭列・柵・石列状遺構・整地層・建物・土坑・陸部整地層、江戸前期～中期の石積土坑・井戸・整地層・土坑、江戸後期以降の井戸・敷石遺構・漆喰タタキ・礎石、江戸後期以降の整地層	平安の包含層、中世の包含層	弥生土器	23
25	七条二坊七町、左女牛小路			自然流路など		24
26	七条二坊七・八・九・十町、左女牛小路、堀川小路	平安末～鎌倉の堀川小路西側溝	平安～鎌倉の井戸・柱穴・溝、鎌倉の整地層、室町前半の整地層、室町後半の整地層、室町の池状遺構・柱穴・土坑、安土桃山～江戸初頭の池・柱穴・土坑・堀、江戸前期の整地層、江戸後期～末期の整地層	ベースは砂礫層、古墳（庄内・布留式並行期）の包含層、室町の流路	古墳の土器	25
27	七条二坊八町		平安前期の土坑、平安中期の井戸・土坑、平安末～鎌倉前期の井戸・柱穴・土坑・溝、鎌倉後期～室町初頭の柱穴・土坑・溝、室町の井戸・整地層・柱穴・土坑・堀・溝、江戸の井戸・土坑・堀状遺構	平安の包含層	本国寺関連遺構・遺物	26
28	七条二坊九・十・十一町、八条二坊九町	平安前期の左女牛小路南側溝・西二－三行界溝、平安後期の西二－三行界ピット列、平安中期～後期の西二－三行界道路敷、鎌倉前期の七条坊門小路北側溝、西一行北一－二門界溝、西一行北三－四門界溝	平安前期～中期の土坑・ピット、平安時代の井戸・土坑・ピット	ベースは砂礫層、古墳前の包含層	弥生後期の落込・溝、弥生土器（畿内第Ⅴ様式）、古墳前の落込、古墳前（布留式）の土器、平安時代の一括資料、鎌倉時代の一括資料	27
29	七条二坊十町		平安後期の整地層・柱穴・土坑、平安末～鎌倉の井戸・柱穴・土坑、室町の柱穴・土坑、江戸の井戸・整地層・建物・柱穴・土坑	ベースは砂礫層	弥生後期前半の土器	28
30	七条二坊十一町	平安中期の西三－四行界溝・北四－五門界溝、鎌倉の東市外町に伴う区画溝	平安前期の土坑・溝、平安後期の井戸・掘立柱建物・溝、平安後期～鎌倉の井戸・整地跡・土坑・溝跡、鎌倉の井戸・溝、中世後期の整地層、中世末～近世の井戸・土坑		古墳の土坑、古墳前の土器、平安～鎌倉の鋳造関連遺物	29
31	七条二坊十一・十二町、八条二坊九町、北小路	平安前期の北小路両側溝・北小路路面、平安中期以降の西二－三行界道路	平安後期～鎌倉の土坑、江戸以降の井戸	ベースは砂礫層、平安前期の包含層、平安中期～後期の包含層	弥生～古墳の土器、平安前～中期の土器・陶磁器・鋳造関連遺物	30
32	八条一坊十六町	鎌倉～室町の塩小路側溝・櫛笥小路側溝	平安前期の井戸・柱穴・土坑、平安後期の柱穴・土坑、鎌倉～室町の石敷き遺構・井戸・整地層・柱穴・土坑・埋甕・溝・炉、近世～近代の井戸・土坑・柵（塀）・溝	ベースは砂礫層、中世の包含層	弥生土器、古墳の土器、鎌倉～室町の鋳造関連遺構・遺物	31

地点	調査地	条坊・区画施設	宅地関連遺構	流路・包含層	備考	報告書
33	八条一坊十六町		平安末～鎌倉初期の井戸・整地層・土坑、鎌倉の井戸・柱穴群・土坑・埋甕、鎌倉～室町初期の井戸・柱穴群・土坑・埋甕、安土桃山～江戸初期の落込・土坑、江戸の石垣痕跡・井戸・杭跡・整地層・土坑・根石	ベースは砂礫層	弥生土器、奈良の瓦	32
34	八条二坊一町	平安後期～鎌倉の七条大路南側溝・大宮大路東築地内溝、室町の大宮大路東築地内溝	平安前期の井戸、平安後期～鎌倉の井戸・礎石建物・土坑・埋甕・溝、室町の井戸・土坑、江戸後期～明治の井戸・鋳造坑・溶解炉基礎	ベースは砂礫層	古墳前の土器、江戸後期～明治の鋳造関連遺構	33
35	八条二坊一町	平安後～室町の七条大路南側溝	平安後の土坑、鎌倉～室町の建物・土坑			34
36	八条二坊一町	平安の大宮大路東築地内溝・北四－五門界溝	平安前期の井戸・柵列・ピット群、平安～中世の整地跡・土取痕・ピット群・溝跡、中世末～近世の整地跡・土坑・ピット群・溝、近世末～近代初頭の土坑・廃棄土坑・炉	ベースは砂礫層、平安の包含層、中世以前の包含層、中世末～近世の包含層、近世末以降の包含層	近世末～近代初頭の鋳造関連遺構	35
37	八条二坊三町		安土桃山末期の柱穴、江戸初期の耕作土層、江戸の礎石・土坑・土間・溝・礫面、江戸後期～近代の瓦溜・瓦列・土坑・埋納土坑	ベースは砂礫層	江戸後期～近代の鋳造関連遺物	36
38	八条二坊三町	室町の北六－七門界溝（礎石列を伴う）、安土桃山～江戸の区画溝・柱穴列	平安末期の井戸・土坑、平安の整地層、鎌倉の井戸、室町の井戸・土坑・溝、安土桃山～江戸の土坑・溝、江戸の整地層		室町～江戸の構	37
39	八条二坊九町	平安～近世の油小路路面・油小路西側溝	平安の整地層・柱穴・土坑、鎌倉～室町の井戸・柱穴・土坑	ベースは砂礫層、平安の包含層、中世の包含層、近世の包含層		38
40	八条二坊十町・油小路	平安の油小路西側溝・油小路路面・西四行北四－五門界柵列、平安末～鎌倉の油小路西側溝、室町の油小路西側溝・路面	平安後期の井戸、平安の杭列・柱穴・土坑、平安末～鎌倉の井戸・土坑・溝、室町の土坑・溝、近世の整地層	ベースは砂礫層	室町の鋳造関連遺構・遺物	39
41	八条二坊十四町		平安末の池・石敷遺構（地業）・土坑（地鎮）、鎌倉の柱穴・土坑、室町前期～中期の井戸・墓・溝、桃山時代の墓		室町前期の病変に侵された人骨	40
42	八条二坊十四町		平安前期の土坑・溝、平安後期の溝、鎌倉の井戸、室町前半の土坑、平安後期～江戸の溝、室町～江戸の墓		平安京成立以前の竈（把手）、室町前半の犬骨を含む土坑、鋳造関連遺物	41
43	八条二坊十四町	北二－三門界柵列	平安前期の池状遺構、平安後期～室町の井戸・柱穴・土坑・墓・掘立柱建物・溝、幕末の地鎮土坑・土坑・木樋暗渠	ベースは砂礫層、中世の包含層	鎌倉～南北朝の鋳造関連遺物、江戸後期の墨書土師皿（梵字・経文）	42
44	八条二坊十四町		平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑、江戸の溝		鎌倉～室町の鋳造関連遺物	43
45	八条二坊十四町	平安後期～鎌倉中期の西三行にあたる溝	平安前期の土坑、平安の柱穴・土坑、平安後期～鎌倉中期の井戸・柱穴・土坑など、鎌倉後半～室町前期の井戸・柱穴・土坑、室町後期の柱穴・溝、江戸前期の井戸・土坑・溝、近世の耕作土層・溝	ベースは砂礫層	弥生土器、古墳の土器、鎌倉後半～室町前期の鋳造関連遺物	44
46	八条二坊十四・十五町	平安後半～鎌倉の八条坊門小路両側溝・八条坊門小路路面、鎌倉後半～室町の八条坊門小路両側溝、室町前半の八条坊門小路路面	鎌倉後半～室町の井戸・竈・柱穴・土坑・埋甕・炉、室町前半の井戸・柱穴・土坑・墓、江戸後半以後の井戸・土坑・堀・溝など、江戸の耕作土層	ベースは砂礫層	鎌倉後半～室町の鋳造関連遺構・遺物	45
47	八条二坊十五町、八条坊門小路、油小路		平安中期の園池、平安後期～鎌倉の井戸・柱穴群・土坑・炉、室町の井戸・柱穴群・土坑・炉、江戸の耕作土層、近世の井戸・土坑・溝	ベースは砂礫層、平安前期の流路	平安後期～室町の鋳造関連遺構、平安末～室町中期の鋳造関連遺物	46
48	八条二坊十五町	平安後期～鎌倉の四行八門制に規制される柵、室町の四行八門制に規制される溝・北三－四門界柵・路面（辻子）	平安中期以前の柵・土坑、平安後期～鎌倉の井戸・柵・建物・土坑、平安の整地層、室町の井戸・肥溜・柵・建物・土坑・埋甕・炉、江戸の耕作土層	ベースは砂礫層、古墳の流路	平安後期～室町の鋳造関連遺物、室町の鋳造関連遺構	47
49	八条二坊十五町	鎌倉後期～室町前期の西二行北三－四門を区切る柵（塀）・西二行北四門の北限を区切る柵（塀）、天正地割による「東中筋通」の路面・東側溝	古墳後期の建物・柱穴、鎌倉後期～室町前期の建物・柱穴群・土坑・溝、安土桃山～江戸前期前葉の建物・柱穴群・土坑・溝、江戸前期中葉～末の柵（塀）・建物・土坑・溝、江戸中期～後期初の柱穴群・土坑・溝、江戸後期前葉の土坑・溝、江戸後期後葉の建物・柱穴・土坑・溝、近世の耕作土層	ベースは砂礫層	弥生土器、古墳の土器、古墳後期の建物・柱穴	48
50	八条二坊十六町		平安の池状落込・井戸・土坑・溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・ピット、江戸の井戸・土倉（地業基礎）・土坑墓		鍛冶関連遺物	49

近世になると、浄土真宗の本願寺が大坂の天満から当地域へ移転してきた。天正19年1月に「本願寺（顕如）殿今日ヨリ京都ヨリ御下向也、従二関白（秀吉）殿一寺内可レ被二相替一之由有レ之、然者下鳥羽ヨリ下淀ヨリ上之間、何レノ所ナリトモ御好次第ニ被レ定二堤構等一、又御堂等普請等可レ被二仰付一之由、殿下ヨリ被レ仰了、当年中ニ可レ被レ引之（由脱カ）有レ之」[10] とあるように、当時関白であった秀吉が本願寺の寺基を、京都の下鳥羽から淀の間に求め、年内に移るようにとの指示があったという。しかし、実際には同年閏1月5日に「今度当寺京都へ被二引越一付而、於二六条一屋敷傍爾之事、南北二百八十間、東西三百六十間之内、本国寺屋敷南北五十六間・東西百二十七間相二除之一、其外令レ寄二付之一畢、然上者地子之儀、如二田畠年貢一、全可レ有二寺納一候也」[11] と、京都六条の地に南北280間、東西360間の寺域が定められたのである。寺内町形成初期に作成された西本願寺所蔵の『六条境内略絵図』には、東側南北301間5尺2寸、西側南北322間5尺5寸、東西421間半の範囲で寺内町が描かれており、規模を拡大しながら寺地を確保していったようである。

このように、本調査地は天正19年以降に本願寺の敷地となり、寛永８年（1631）10月の『御境内総絵図』（図６）によると、本願寺の坊官であった下間少進家の屋敷が構えられていたことになる。江戸時代を通して少進家がその地を所有していたが、明治４年（1871）５月に太政官の命により門跡の号や坊官の名称が廃止され、地方貫属に加えられた[12]。その後明治10年１月に下間邸跡地で大教校の建設が着手され、明治12年に落成している[13]。明治18年には、普通教校設立のため少進家の屋敷が改修され、別に教場１棟と寄宿舎３棟が建てられた[14]。この頃に下間少進家の屋敷が解体されたと考えられる。

３　既往の調査（図７、表１）

本調査地は、平安京の東市に該当する。西本願寺周辺における調査事例はさほど多くなく、未報告のものも散見され、充実しているとは言い難い。そこで、現在まで実施されている東市周辺の調査をまとめておく。なお、調査地点の番号は図７と表１に一致する。

調査地点12は学校法人平安学園校舎増築工事に伴う発掘調査である。平安時代後期の井戸・溝が検出されているが、中世以降の削平により東市関連の遺構は認められていない。

調査地点13は学校法人平安学園平安中・高等学校110記念体育館建築工事に伴う発掘調査である。平安時代前期の井戸、平安時代～室町時代の西二行と西三行を区切る溝が検出されている。特筆される遺物として、平安時代の井戸から出土した籠編物・石銙帯・水晶玉がある。

調査地点15は現在報告されていないが、平安時代前期の井戸を検出している。

調査地点16は七条通市電撤去後の上下水道管設置に伴う発掘調査である。櫛笥小路の交差点にあたるトレンチでは平安時代後期の七条大路北側溝が検出された。

調査地点19も報告されていないが、平安時代中期の溝と平安時代後期～鎌倉時代の井戸を検出している。

調査地点20は龍谷大学大宮キャンパス西黌・清和館の改築・新築に伴う発掘調査で、平安時代後期の井戸のみが検出された。

調査地点22は親鸞上人七百五十回大遠忌の記念事業として実施された本願寺参拝部棟の建替えに伴う発掘調査である。平安時代末期～鎌倉時代の土坑・溝が検出され、うち溝は七条二坊六町を南北に分断する東西溝であることが指摘されている。

調査地点24は西本願寺の式務部棟新築工事に伴う発掘調査である。平安時代前期の土坑と東西２間以上 × 南北２間以上で柱間が1.2ｍを測る建物、平安時代の井戸・土坑・溝が検出された。調査地では、平安時代中期～後期にかけての遺物（緑釉陶器椀・皿底部・口縁部片、青磁、白磁片など）がほとんど磨滅のない状態で池堆積土・陸部整地層・池埋立土（整地層）などから出土している。報告によると、池を掘下げた土の中にこれらの遺物が含まれていたとみられることから、古い時期の遺構は安土桃山時代末期～江戸時代前期頃にかけて行われた土地開発の中で破壊されたと考えられている。

調査地点26は西本願寺白洲境内地聞法総合施設の建設に伴う発掘調査である。平安時代末期～

鎌倉時代の堀川小路西側溝、平安時代～鎌倉時代の井戸・柱穴・溝が検出された。

調査地点28は堀川共同溝の建設に伴う発掘調査である。平安時代前期の左女牛小路南側溝、平安時代前期～中期の土坑・ピット、平安時代前期～後期の西二行と西三行を区切る遺構〔東市の範囲では、七条坊門小路の南側トレンチで溝状遺構（平安時代前期）とピット列（平安時代後期）、さらに一つ南側のトレンチで溝状遺構（平安時代前期）〕、平安時代の井戸・土坑・ピットを検出している。

調査地点30は龍谷ミュージアム建設に伴う発掘調査である。平安時代前期の土坑・溝、平安時代中期の西三行と西四行を区切る溝・北四門と北五門を区切る溝、平安時代後期の井戸・掘立柱建物・溝、平安時代後期～鎌倉時代の井戸・整地跡・土坑・溝跡が検出された。掘立柱建物は東西1間以上（1.5 m以上）× 南北4間（3.6 m）ある。調査地では、9世紀代の整地層（SX1025）から鋳造関連遺物がまとまって出土している。他にも平安時代の土坑や溝から出土しており、東市周辺には工房が所在していたと推測されている。

調査地点31は調査地点28の前年度に実施された堀川共同溝建設工事に伴う発掘調査である。平安時代前期の北小路両側溝・同路面、平安時代前期～後期の包含層、平安時代後期～鎌倉時代の土坑が検出された。七条大路より北の3つのトレンチでは平安時代前期～中期の遺物が出土量・種類共に豊富であると報告されている（緑釉陶器、灰釉陶器、輸入青磁、坩堝、鞴羽口、鋳型の破片、鉄滓、土馬など）。とりわけ、七条大路に一番近いトレンチの出土遺物の質・量の多様さは、東市の外町という遺跡の性格と様相を直截に反映していると指摘されている。

調査地点34は龍谷大学大宮キャンパス清風館建設に伴う発掘調査である。平安時代前期の井戸、平安時代後期～鎌倉時代の七条大路南側溝・大宮大路東築地内溝・井戸・礎石建物・土坑・埋甕・溝が検出された。このうち礎石建物は、東西3間以上 × 南北3間の規模と想定され、大宮大路築地内溝から約0.8 m西に位置する。東西方向の溝も検出され、これについては大宮大路東側溝と築地内溝をつなぐ溝として想定されており、礎石は両溝をつなぐ橋を支えるものとして解釈されている。

調査地点35は未報告だが、平安時代後期の土坑、平安時代後期～室町時代の七条大路南側溝を検出している。

調査地点36は龍谷大学大宮キャンパス白亜館建設に伴う発掘調査である。平安時代前期の井戸・柵列・ピット群、平安時代の大宮大路東築地内溝・北四門と北五門を区切る溝、平安時代～中世の整地跡・土取痕・ピット群・溝跡が検出されている。

以上の成果をまとめると、まず東市の様相としては、古いもので七条二坊三町において平安時代中期の溝、後期～鎌倉時代の井戸が、そして四町では平安時代後期の井戸、六町では平安時代末期～鎌倉時代の土坑と七条二坊六町を分断する東西溝が検出された。このようにみると、充分な調査が進められているわけではなく、平安時代の遺構はほとんど検出されていない状況である。とりわけ、前期に係る遺構は皆無に近く、東市の様相は依然として不明な点が多い。

次いで、外町の様相についてまとめておく。東市から西へ大宮大路を隔てた七条一坊十三・十四

町では、平安時代前期の井戸、後期の井戸、溝、平安時代～室町時代の西二行・三行界溝が検出されている。後世の削平によって遺構が削られている可能性が指摘されており、その全容は詳細ではない。また東市の北に位置する七条二坊七町では、平安時代前期の建物、土坑と平安時代～鎌倉時代の井戸、土坑、溝が検出された。以上のような様相が東市の西と北の外町に見られるが、それに対して東市の東や南の外町では全く異なる様相が見られる。まず七条二坊十一・十二町では平安時代前期の西二行・三行界溝、北小路両側溝、北小路路面、土坑、溝、中期の西三行・四行界溝、北四門・五門界溝、前期～中期の土坑、ピット、後期の西二行・三行を区切るピット列、井戸、掘立柱建物、溝、後期～鎌倉時代の井戸、整地跡、土坑、溝が検出された。また、七条大路を挟んで八条二坊一町では、平安時代前期の井戸、柵列、ピット群、後期の土坑、平安時代の大宮大路築地内溝、北四門・北五門界溝、後期～鎌倉時代の井戸、大宮大路東築地内溝、七条大路南側溝、礎石建物、土坑、埋甕、溝が検出されている。他所と比較して後世の開発があまり加えられなかったためか、平安時代前期～後期にかけての遺構が比較的多く検出されている。宅地関連の区画施設と考えられる遺構も多数見つかっていることから、その土地利用も明らかになりつつある。

註

1）河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地活用の変遷」（日本文化財科学会『考古学と自然科学』第42号、2001年）
平安時代中期以降には、鴨川の段丘化により河川の氾濫原が減少したことで、土地利用が可能な面積が増加した。

2）足利瑞義編『龍谷大学三百年史』龍谷大学出版部、1939年、P.616-617

3）『日本紀略』には、以下のようにある。
（延暦13年10月28日）　十月丁卯、…遷レ都、詔日、云々、
（延暦13年11月8日）　丁丑、詔、云々、…此国山河襟帯、自然作レ城、因二斯形勝一、可レ制二新号一、宜下改二山背国一為中山城国上、…号曰二平安京一、

4）『養老令』

5）脇田晴子「王朝の経済生活」（京都市編『平安の新京』京都の歴史　第1巻、學藝書林、P.527）

6）西山良平「町小路の北と南」（西山良平・鈴木久男・藤田勝也編『平安京の地域形成』京都大学学術出版会、2016年）

7）梅谷繁樹「遊行派と時宗十二派」（清浄光寺史編纂委員会編『清浄光寺史』藤沢無量光院清浄光寺、2007年）

8）『大谷本願寺通紀』巻第九

9）『耶蘇会士日本通信』

10）『言経卿記』天正19年1月20日条

11）「豊臣秀吉朱印状」（西本願寺所蔵）

12）首藤善樹「本願寺坊官下間諸家の成立と変遷」（千葉乗隆編『本願寺教団の展開』永田文昌堂、1995年）

13）中川修・福嶋寛隆「大教校」（龍谷大学三百五十年史編纂委員会編『龍谷大学三百五十年史』通史編上巻、龍谷大学、2000年）P.411

14）中川修・福嶋寛隆「普通教校」（龍谷大学三百五十年史編纂委員会編『龍谷大学三百五十年史』通史編　上巻、龍谷大学、2000年）P.445

【報告書一覧】

（1）上村和直「23　平安京左京六条一坊三・十一・十四町」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』2012年）

（2）上村和直・本弥八郎・磯部勝「16　左京六条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983年）

（3）上村和直「25　平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2012年）

（4）植山茂編『平安京左京六条二坊六町』平安京跡研究調査報告　第17輯、古代学協会、1986年

（5）上村和直・吉川義彦「11　左京六条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1984年）

（6）平安京調査会　原山充志「13　平安京左京六条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』1991年）

（7）上村和直「15　平安京左京六条二坊十二町」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2011年）

（8）元興寺文化財研究所編『平安京左京六条二坊十四町・烏丸綾小路遺跡』2017年

（9）上村和直・久世康博「9　左京六条二・三坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1985年）

（10）平安学園考古学クラブ編「平安京東市周辺の調査―左京七条一坊十一町―」『平安学園教育研究会研究論集』44、平安学園教育研究会、2003年

（11）前田義明「18　左京七条一坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983年）

（12）平安学園考古学クラブ編『平安京東市外町の調査―平安京左京七条一坊十三町―』平安学園平安中・高等学校、1986年

（13）平安学園平安京跡遺跡調査委員会「平安京左京七条一坊十三・十四町の調査」『研究論集』第41号、平安学園教育研究会、1998年

（14）平安京調査会、1976年　※未報告

（15）上村和直「16　平安京左京七条一・二坊、東市跡」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2011年）

（16）平尾政幸・辻純一「13　左京七条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1984年）　※未報告だが、昭和54年にも北東約100ｍのところで平安時代の建物や井戸、本国寺に関連する濠などの遺構を検出している。

（17）平尾政幸・久世康博「10　左京七条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1985年）

（18）京都市埋蔵文化財研究所編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2008－1、2008年　※未報告

（19）網干善教編『龍谷大学構内発掘調査報告書―大宮学舎西黌・清和館建設に伴なう事前調査―』龍谷大学校地学術調査委員会、1980年

(20) 網干善教編『重要文化財　龍谷大学正門―解体修理にともなう事前発掘調査報告書―』龍谷大学校地学術調査委員会、1977 年

(21) 京都市埋蔵文化財研究所編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊六町（東市）跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007 － 18、2008 年

(22) 近藤知子「5　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1998 年）

近藤知子「5　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成９年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1999 年）

近藤知子「7　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 10 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2000 年）

近藤知子「4　平安京左京七条二坊・名勝滴翠園」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 11 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2002 年）

近藤知子「8　名勝滴翠園・平安京左京七条二坊跡」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 13 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2004 年）

近藤知子「7　名勝滴翠園・平安京左京七条二坊跡」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 14 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2004 年）

(23) 京都市埋蔵文化財研究所編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2008 － 1、2008 年

(24) 本願寺境内学術調査会『本願寺境内発掘調査概報』1983 年　※ 未確認

(25) 近藤知子「3　平安京左京七条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1997 年）

(26) 近藤知子「7　平安京左京七条二坊・本圀寺跡」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1996 年）

(27) 平安京調査会　小森俊寛・原山充志「8　平安京左京七条二坊・八条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1989 年）

(28) 京都市埋蔵文化財研究所編『史跡本願寺境内・平安京左京七条二坊十町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007 － 2、2007 年

(29) 文化財支援センター編『平安京左京七条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書―龍谷ミュージアム建設に伴う発掘調査―』龍谷大学、2010 年

(30) 平安京調査会　小森俊寛「7　平安京左京七条二坊・八条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1988 年）

(31) 関西文化財調査会編『平安京跡発掘調査報告―左京八条一坊十六町―』2004 年

(32) 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京左京八条一坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013 － 16、2014 年

(33) 龍谷大学編『平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書―龍谷大学大宮学舎清風館建設に伴う調査―』2009 年

(34) 平安京調査会、1976 年　※ 未報告

(35) 文化財支援センター編『平安京左京八条二坊一町（東市外町）発掘調査報告書―龍谷大学大宮学舎白亜館建設に伴う発掘調査―』龍谷大学、2011 年

(36) 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京左京八条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006 − 11、2006 年

(37) イビソク関西支店編『平安京左京八条二坊三町－南夷町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』イビソク京都市内遺跡調査報告　イビソク編　第 11 輯、2014 年

(38) 上村和直・久世康博「8　平安京左京八条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1988 年）

(39) 堀内明博「15　左京八条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 57 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1984 年）

(40) 加納敬二・真喜志悦子「6　平安京左京八条二坊 1」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 9 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1999 年）

(41) 近藤章子「5　平安京左京七条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 11 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』2002 年）

(42) 東洋一・南出俊彦「6　平安京左京八条二坊 1」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 8 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1998 年）

(43) 南出俊彦・久世康博「7　平安京左京八条二坊 2」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 8 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1998 年）

(44) 百瀬正恒「4　平安京左京八条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 7 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1997 年）

(45) 鈴木廣司「7　平安京左京八条二坊 2」（京都市埋蔵文化財研究所編『平成 9 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1999 年）

(46) 日開調査設計コンサルタント編『平安京左京八条二坊十五町』株式会社日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書　第 1 集、2007 年

(47) 京都市埋蔵文化財研究所編『平安京左京八条二坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003 − 17、2004 年

(48) 国際文化財株式会社　西日本支店編『平安京左京八条二坊十五町跡』2016 年

(49) 木下保明「15　平安京左京八条二坊」（京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 62 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1991 年）

【図版出典】

図 3 ： 筆者作成。

図 4 ： 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地活用の変遷」（日本文化財科学会『考古学と自然科学』第 42 号、2001 年）に加筆。

図 5 ： 平安学園考古学クラブ編「平安京東市周辺の調査―左京七条一坊十一町―」『平安学園教育研究会研究論集』44、平安学園教育研究会、2003 年より転載。

図 6 ： 日野昭「平安京東市跡の変遷」（網干善教編『重要文化財　龍谷大学正門―解体修理にともなう事前発掘調査報告書―』龍谷大学校地学術調査委員会、1977 年）より転載・一部加筆。

図 7 ： 六条大路以南の調査地は、辻裕司「平安京左京域南部における遺跡の展開」（西山良平・鈴木久男・藤田勝也編『平安京の地域形成』京都大学学術出版会、2016 年）を参考に作成し、六条大路以北については新たに調査報告書を参考にして作成した。

Ⅲ　調査の成果

1　基本層序と遺構面（図８・図版１～５）

調査地の現況は、東黌建設時の盛土によりほぼ平坦であり、現地表面の標高は 27.4 ～ 27.6 m である。盛土は層厚 0.7 ～ 1.0 m で調査地の全域に分布する。盛土層以深を、上位より大きく１～５層に区分し、２層と３層は上下２層に細分した。

1 層　黒褐色・暗灰色系の粘質シルト・砂質シルト層による近代の整地土である。調査区のほぼ全域に分布する。層厚 0.2 m。調査では、重機により現代盛土層とともに掘り下げた。

2a 層　本層上面より人力による調査を開始した。黄褐色・にぶい黄褐色・明黄褐色を呈するシルト・砂質シルト層による近世の整地層である。調査区の全域に分布する。層厚 0.1 ～ 0.2 m。2a 層上面では、幕末～近代の遺構を検出した。

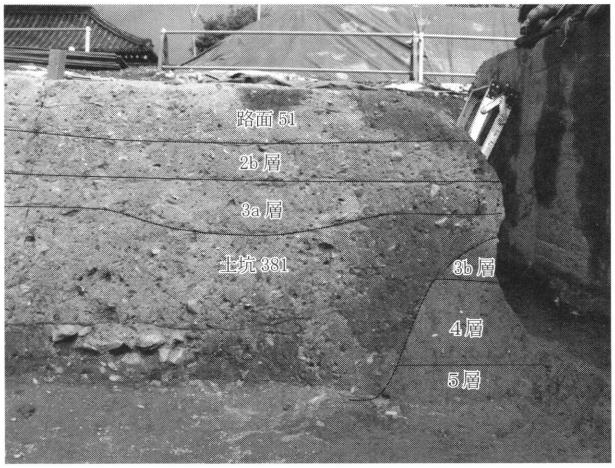
2b 層　褐色・にぶい黄褐色・暗褐色・灰黄褐色を呈する粘質シルト・砂質シルト層による近世の整地層である。調査区全域に分布する。層厚 0.1 ～ 0.15 m。2b 層上面では、江戸時代後半の遺構を検出した。

3a 層　暗褐色系のシルト層による室町時代末頃の整地層である。調査区のほぼ全域に分布する。層厚 0.1 ～ 0.15 m。3a 層の上面では、安土・桃山～江戸時代初期の遺構を検出した。

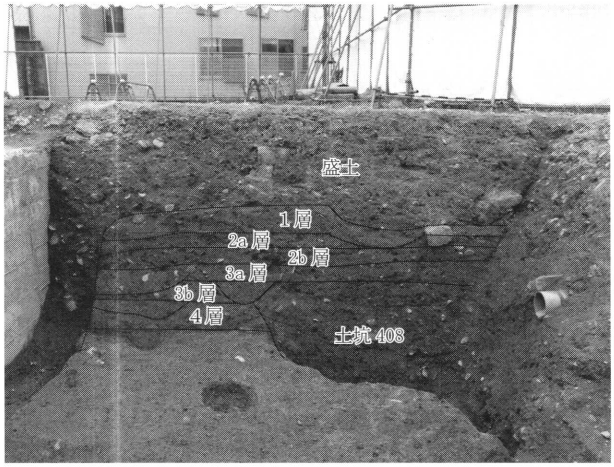
3b 層　黒褐色系のシルト層による室町時代の整地層である。調査区の全域に分布する。層厚約 0.2 m。土層断面の観察により、４層上面での調査時に検出した南北朝～室町時代の遺構が 3b 層の上面から切り込むことを確認した。3b 層上面は、南北朝～室町時代の遺構面であると推定される。

4 層　オリーブ褐色・灰オリーブ色・浅黄橙色砂質シルトを中心とする層で、いわゆる「ウグイス土」と呼ばれる平安時代後半の整地層である。調査区のほぼ全域に分布する。層厚約 0.2 m。４層の上面では、鎌倉時代の遺構を検出した。

5 層　灰色・黄色系の粘土～砂礫層である。古墳時代前期以前の自然堆積層で、旧堀川の河川堆積物や扇状地堆積物からなる。５層上面では、古墳時代前期及び平安時代前期の遺構を検出した。



第１調査区　Ｇラインセクション東端部



第２調査区　１区南壁

図８　層序と遺構面の関係

2　検出遺構

調査は、2a 層、2b 層、３層、４層、５層の各層上面で計５面の調査を行い、その結果弥生時代～近代の遺構を検出した。検出した遺構の総数は 500 基（条）を超え、大半は 3b 層及び４層上面で検出した中世の遺構である。以下、各層上面で検出した遺構について記述する。

（１）2a 層上面（図版６・７・84 ～ 87）

2a 層上面では、幕末～明治時代の遺構を検出した。検出した遺構は、柱穴、溝、井戸、土坑、池、整地跡等である。

〔柱穴・礎石等〕

柵 50（図版 18･85）　第１調査区５Ｆ～５Ｈ地区で検出した南北方向の柵である。検出長 11.4 m。柱間は残存する礎石や柱穴から、概ね 1.8 mと推定される。第１調査区北端付近に位置する２基の礎石列は、間隔が 0.8 mと他に比べて狭いことから、門跡の可能性が高い。下間屋敷内に設けられた塀跡と推定される。

礎石群　第１調査区５Ｈ区、第２調査区１～３区で検出した礎石群である。礎石に使用されている石材は、0.3 ～ 0.4 m大の砂岩、チャート等である。下間屋敷内の建物や塀等に伴うものと考えられるが、建物等の復原には至らなかった。

築地地業 114（図版 19･85）　第２調査区６Ｌ～ 11 Ｌ地区で検出した東西方向の地業跡である。検出長 21 m。幅約 0.6 mで溝状に布掘りした後、柱位置（Ｓ１～ 12）をさらに１段掘り込み礫で根固めする。柱間は 1.8 mを測り、一部に礎石が残る。第２調査区２区では、地業付近に瓦片が多く散乱していたことから、瓦葺き塀の基礎であったと推定される。

〔井戸〕

井戸 128（図版 21・86）　第２調査区５区９Ｌ地区で検出した井戸である。掘方は径 1.12 mの円形を呈し、検出面から 1.1 m下位で、井戸枠の痕跡と推定される径 0.58 mの円形で 0.5 m掘り下げる。底面の標高は 24.26 mである。埋土に漆喰片や礫を多く含む。近世陶器、染付、瓦等が出土した。

〔土坑〕

土坑 103（図版 21・86）　第２調査区３区８Ｌ地区で検出した土坑である。現代の暗渠排水溝により土坑の南側を切られる。平面形は径 0.7 mの円形を呈し、深さは検出面より 0.32 mである。埋土は漆喰片を多量に含む黒褐色粘質シルトである。

土坑 117（図版 20）　第２調査区１区６Ｋ地区で検出した土坑である。平面形は長軸 1.53 m、短軸 0.58 mの楕円形を呈し、深さは検出面より 0.15 mである。埋土は黒褐色シルトである。土坑内に３～ 20 ㎝の礫が多く含まれる。

〔その他の遺構〕

整地 15　第１調査区４Ｆ・４Ｇ・５Ｇ地区で検出した整地層である。褐色･黄褐色系のシルトで、

層厚 0.05 ～ 0.1 mである。

路面 51　第１調査区の柵 50 の東側及び７Ｈ地区で検出した硬化面である。柵 50 の東側では、幅約２m・南北約 8.5 m、７Ｈ地区では幅約 3.5 m・東西約２mを検出した。よく締まった礫混じりのシルト層が約５cmの厚さで、２～３層積土されているＬ字形に折れ曲がる道路遺構と推定される。但し、コーナー部では検出されていない。

埋甕 13・53（図版 20・86）　第１調査区４Ｇ地区で検出した埋甕遺構である。方形の掘方内に信楽焼の甕を東西に２個並べて据え付けたものである。西側を埋甕 13、東側を埋甕 53 と付した。埋甕 13 は、口縁部～体部の上位が壊され、残存する体部径 0.4 m、深さ 0.45 mである。埋甕 53 は、口径 0.55 m、深さ 0.52 mである。埋甕 53 周囲の地表面には、漆喰塗りの痕跡が確認された。埋甕 13 の内面に、白色化したリン分が付着していることから、便所として利用されたと推定される。埋甕 53 の甕内埋土から煉瓦が出土したことから、埋没時期は近代とみられる。

野壺 102（図版 21・86）　第２調査区３区８Ｌ地区で検出した漆喰張りの野壺である。現代の地中梁基礎攪乱により遺構の西側を切られる。平面形は径 1.1 mの円形を呈し、深さは検出面より 0.3 mである。漆喰は側面にのみ施され、漆喰の厚さは６cmである。

池 48a（図版 20・87）　第１調査区５Ｇ地区で検出した漆喰張りの池である。平面形は長軸 1.44 m、短軸 0.68 mのやや歪な楕円形を呈し、検出面からの深さは 0.4 mである。漆喰の厚さは、約５cmである。底面は丸みを帯びる。池 48a の西側で検出した溝 46 は、池 48a への導水施設として設けられた可能性がある。京都御所東方公家屋敷群跡で検出された漆喰張りの金魚鉢と類似していることから[1]、池 48a は下間屋敷内に設けられた金魚鉢であった可能性が高い。

ピット 48b（図版 20・87）　池 48a の漆喰を除去した段階で、ピット 48b を検出した。平面形は径 0.45m の円形を呈し、深さは検出面より 0.25 mである。ピット内を漆喰板により八分割し、分割された空間には、拳大前後の石が詰められている。ピットの底から薄緑色の小石、土師器の小皿が出土した。出土した土師器皿の年代は、京都Ⅻ期に属する。池 48a の構築に先立ち、水に関連する祭祀あるいは鎮檀跡であろうか。

その他、第１調査区では幕末の廃棄土坑と推定される土坑１、桶等の据付跡と推定される土坑 11、埋土に炭化物や焼土を含む窪み状遺構 41、北西から南東方向に延びる溝 47 等を検出した。５Ｈ地区、７Ｇ・７Ｈ地区で、径 0.2 ～ 0.3 mの柱穴を複数検出した。第２調査区では、４区で不整形の廃棄土坑 109、南北溝 110、５区で不整形の廃棄土坑 115 を検出した。いずれも幕末の遺構と推定される。

（２）2b 層上面（図版８・９・88・89）

2b 層上面では、江戸時代の遺構を検出した。検出した遺構は、柱穴、礎石、溝、井戸、土坑等である。

〔柱穴・礎石〕

礎石群　第１調査区５Ｈ・６Ｈ地区及び第２調査区１区で検出した礎石群である。下間屋敷内の建物や塀等に伴うものと考えられるが、建物等の復原には至らなかった。

〔井戸〕

井戸 93（図版 22・89） 第１調査区５Ｆ地区で検出した井戸である。井戸枠は検出されず、素掘りの井戸と推定される。井戸の南半部を検出し、北半部は調査区外に及ぶ。平面形は幅 1.6 mの隅丸方形を呈し、深さは検出面より 0.94 mである。底面の標高は 25.48m である。埋土は、灰色系及び黒褐色系のシルト・粘質シルトである。埋土には礫、炭化物を含む。

〔土坑〕

土坑 119（図版 89） 第２調査区５区 10 Ｌ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の北側を切られる。平面形は径 1.4 mの円形を呈し、深さは検出面より 0.55 mである。埋土は、オリーブ褐色及び黒褐色粘質シルトである。土坑内から瓦が多量に出土し、建物の解体に伴う瓦を一括投棄したものと推定される。出土した瓦は、18 ～ 19 世紀に属する。

土坑 75（図版 22・89） 第１調査区５Ｉ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の南側を切られる。平面形は幅 0.74 mの方形を呈し、深さは検出面より 0.41 mである。埋土は、黒褐色系及び黄褐色の砂質シルトである。遺物は京都XII期に属する土師器とともに、須恵器、焼締陶器、染付、唐津、瓦等が出土した。

〔その他の遺構〕

第１調査区では、平面形が円形・方形を呈する廃棄土坑と推定される土坑を複数検出した。いずれの土坑からも 18 ～ 19 世紀に属する遺物が出土した。また、第１調査区４Ｆ地区・４Ｈ～７Ｈ地区、第２調査区１区で、径 0.2 ～ 0.3 m大の柱穴・ピットを検出した。

（３）3a 層上面（図版 10・11・90 ～ 92）

3a 層上面では、安土･桃山時代～江戸時代初期の遺構を検出した。検出した遺構は、土坑、柱穴、溝、池等である。

〔柱穴・礎石等〕

柱穴は、主に第１調査区５Ｆ地区、第２調査区１・４・５区で検出した。径 0.2 ～ 0.4 m大のものが多い。礎石は、主に第２調査区１区で検出した。検出した柱穴や礎石から、建物や柵等の復原には至らなかった。

〔井戸〕

井戸 528（図版 23・91） 第２調査区３区８Ｍ地区で検出した井戸である。４層の調査時に検出したが、安土･桃山時代の遺物が出土したことから 3a 層上面に対応する井戸であると判断した。掘方は、長軸 1.35 m、短軸 1.25 mの丸みを帯びた方形を呈し、深さは検出面より 1.35 mである。井戸枠は方形木枠で、一辺約 0.65 mを測る。側板の遺存状態は悪いが、縦板横桟組と推定される。底面の標高は 24.36 mである。遺物は京都Ｘ期新～XI期古段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器、瓦、石製品等が出土した。

〔土坑〕

土坑 263（図版 23・91） 第１調査区４Ｇ地区で検出した土坑である。平面形は長軸 1.0 m、

短軸0.62ｍの丸みを帯びた方形を呈し、深さは検出面より0.39ｍである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は褐灰色粘質シルトである。礫や瓦を多く含む。遺物は京都Ⅺ期古段階に属する土師器とともに、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑264（図版23） 第１調査区４Ｇ地区で検出した土坑である。平面形は幅0.65ｍの丸みを帯びた方形を呈し、深さは検出面より0.37ｍである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は褐色粘質シルト、褐灰色粘質シルトである。遺物は京都Ⅺ期古段階に属する土師器とともに、焼締陶器、瓦等が出土した。

〔池〕

池256（図版24・92） 第１調査区４Ｆ・４Ｇ地区で検出した平面方形の池状遺構である。池の東肩のみを検出し、西側は調査区外に及ぶ。試掘坑により遺構の南肩を切られるが、南北幅は約８ｍと推定される。掘方は、肩口よりほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。掘方底部付近には近世初頭の瓦が多量に投棄されていた。埋土は大きく３層に分けられ、上・中・下層とした。上層はにぶい黄褐色粘質シルト、中層は黄褐色系粘質土、下層は灰色系粘質土である。上層は池内埋土、中層は層厚0.1ｍの池内の貼土、下層は掘方埋土と推定される。深さは検出面から中層まで0.3ｍ、掘方の底面までは0.85ｍである。遺物は土師器、須恵器、青磁、染付、施釉陶器、瓦質土器、瓦が出土した。掘方出土遺物は京都Ⅺ期古段階に属し、池埋土出土遺物は京都Ⅺ期中段階に属する。

〔その他の遺構〕

第１調査区では、廃棄土坑と推定される土坑223・257・260・272等を検出した。５Ｆ地区では、南北溝221を検出した。第２調査区では、廃棄土坑と推定される土坑131・133・135・163・164・166・168を検出した。２区の東端部では、南北溝と推定される溝132を検出した。

（４）3b層上面（図版12・13・93～101）

3b層上面では、南北朝～室町時代の遺構を検出した。検出した遺構は、柱穴、溝、井戸、土坑等である。４層上面の調査時に検出した遺構のうち、土層断面の観察、切合い関係、出土遺物の年代観から3b層上面に対応すると判断した遺構を含む。

〔柱穴・礎石等〕

3b層上面では、多くの柱穴が検出された。第１調査区６Ｆ・７Ｆ・７Ｇ地区、第２調査区１・４・５区で多く分布する。径0.2～0.4ｍ大のものが多い。第１調査区６Ｆ・７Ｆ地区、第２調査区１区では、礎石を据付けた柱穴を複数検出した。また、第２調査区４区では拳大の礫を根固めとする２基の柱穴（柱穴451・453）を検出した。建物の復原には至らなかったが、礎石列、柵として復原したものについて以下に記述する。

礎石列285（図版26・93） 第１調査区４Ｈ・５Ｈ地区で検出した北五門と六門の推定境界ラインに位置する東西方向の礎石列である。調査時には、上位の溝状遺構285と下位の柱穴382～384を別遺構として検出したが、北五門と六門を区画する布掘りの礎石列と推定される。布掘りは

幅0.7 m、検出面よりの深さが0.33 mであり、断面形は逆台形を呈する。柱穴382～384には礎石が据え置かれる。礎石は、柱穴382と384に据えられた礎石間は1.0 mであり、礎石の据付高もほぼ同じである。柱穴383は柱穴382に切られ、礎石も他より高い位置に据えられていることから、礎石列285と別遺構であった可能性が高い。遺物は京都Ⅸ期新段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、古瀬戸、焼締、瓦等が出土した。

柵600（図版25・93） 第1調査区7F～7H地区で検出した南北方向の柵である。検出長6.8 m。軸線は北東から南西方向に振る。柱穴629・639・376・393・640からなり、柱間は約1.0 mである。柱穴629・376・393・640には礎石が据えられる。柱穴埋土は黒褐色、灰黄褐色粘質シルトである。西一行と二行の境界推定位置で検出し、区画に伴う柵や塀の可能性がある。柱穴639から、京都Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、焼締陶器等が出土した。

礎石列667（図版26・93） 第1調査区6F地区で検出した南北方向の礎石列である。柱穴633、641の2基を検出し、調査区外北側へ延びると推定される。柱間は2.1 mである。径約0.4 mの柱穴の底に0.2～0.4 mの礎石を据える。掘立柱建物の一部の可能性はあるが、調査区内で対応する他の柱穴や礎石は確認できなかった。柱穴633から、京都Ⅷ期新～Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、焼締陶器等が出土した。

〔溝〕

室町時代の区画溝を複数検出した。

溝428（図版27・94） 第2調査区2区7K・7L地区で検出した南北溝である。第1調査区では溝の延長部を検出しなかったことから、第1・2調査区間で東または西方向に折れ曲がるか、終息すると推定される。第2調査区南壁断面での土層観察により、3b層上面から切り込む溝であることを確認した。幅1.6 m、深さは3b層上面より0.8 mである。断面は逆台形を呈し、底面は丸みを帯びる。埋土は上・中・下層の大きく3層に区分され、上層は暗オリーブ褐色粘質シルト、中層は暗オリーブ褐色・オリーブ黒色粘質土、下層は炭化物を含むオリーブ黒色粘質土である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、古瀬戸、焼締陶器、瓦等が出土した。出土遺物には、鎌倉～室町時代前半に属する遺物も含まれるが、底付近の堆積土から京都Ⅹ期中段階に属する土師器皿が出土していることから、室町時代末頃の溝である。

溝430（図版28・29・94） 第2調査区3区8K・8L・8M地区で検出した南北溝である。幅1.42 m、深さは検出面より0.8～1 mである。断面は逆台形を呈する。埋土は、上・中・下層の3層に大きく区分され、上層は黒褐色・オリーブ褐色を呈する砂質・粘質シルト、中層は暗褐色系・黒褐色を呈する砂質・粘質シルト、下層は黒褐色・黒色系を呈する粘質土・粘質シルトである。上層の埋土には径5～15 cm前後の河原石が大量に含まれ、溝の埋没時に沈下防止を目的として礫を多量に投棄したと推定される。遺物は土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、輸入陶器、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。各層で出土した遺物に時期差は見られず、京都Ⅹ期古段階に属する。

溝368（図版30・95） 第1調査区5F・6F地区で検出した東西溝である。溝367を切る。幅0.8 m、深さは検出面より0.2～0.35 mである。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土・粘質

シルト、暗灰黄色粘質土である。Y= － 22,727.600 付近で、溝の西端部を検出した。溝の西端部付近では、土師器皿がまとまって出土した。遺物は京都Ⅸ期新～Ⅹ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、焼締陶器、瓦等が出土した。

溝 622（図版 32・93） 第１調査区５Ｈ～７Ｈ地区で検出した東西溝である。北五門と六門の推定境界ラインに位置し、北西から南東方向に若干振る。長さ 6.6 m、幅 0.9 m、深さは検出面より 0.2 ～ 0.45 mである。断面は傾斜の緩い「U」字状を呈する。埋土はオリーブ褐色砂質シルト、黒褐色砂質シルトである。遺物は京都Ⅸ期古～中段階に属する土師器とともに、白磁、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

溝 367（図版 31・95） 第１調査区５Ｆ・５Ｇ・５Ｈ地区で検出した南北溝である。Ｇラインのセクション断面の観察により、3b 層上面から切り込む溝であることを確認した。幅 1.2 ～ 1.4 m、深さは 3b 層上面より 1.1 mである。断面は逆台形を呈する。X= － 112,057 m付近で溝の南端を検出し、北は調査区外に延びる。埋土は黒褐色系の粘質シルト、粘質土である。遺物は京都Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、白磁、焼締陶器、瓦器、瓦質土器、古瀬戸、瓦、砥石等が出土した。

〔井戸〕

井戸 613（図版 96） 第１調査区４Ｉ・５Ｉ・４Ｊ・５Ｊ地区で検出した素掘りの井戸である。井戸の北半部を検出し、南半部は調査区外に及ぶ。平面形は幅 1.4 mの方形を呈し、深さは検出面より 0.65 mである。底面の標高は 24.88 mである。埋土は、灰黄褐色粘質土、褐灰色粘質土である。遺物は京都Ⅹ古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

井戸 279a（図版 33・96） 第１調査区４Ｆ地区で検出した井戸である。井戸 279b を切る。掘方の平面形は長辺 2.14 m、短辺 1.76 mの方形を呈し、深さは検出面より 1.75 mである。井戸枠は、縦板横桟組で、一辺 0.7 mの方形を呈する。北及び西側井戸枠の約 0.2 m外側で横板組の井戸枠の痕跡を検出した。当初は、一辺 0.8 ～ 1.0 mの横板組の井戸枠であったものを、井戸枠を縮小して縦板横桟組の井戸枠に作り替えたと推定される。底面の標高は 24.52 mである。遺物は京都Ⅹ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、白磁、焼締陶器等が出土した。

井戸 279b（図版 33・96） 第１調査区４Ｆ地区で検出した井戸である。井戸 279a により遺構の北側を切られる。掘方は直径約 2.2 mの歪な円形を呈し、深さは検出面より 1.75 mである。井戸枠は幅 20 ～ 30 ㎝の縦板を 11 枚組む多角形を呈する。井戸枠内の埋土には、焼土と炭化物が多量に含まれる。出土遺物に鋳型片も含まれていることから、井戸の埋没時に鍛冶に伴う廃棄物を投棄したと考えられる。底面の標高は 25.55 mである。遺物は鋳型片の他に、京都Ⅷ期新段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、焼締陶器、瓦質土器、瓦等が出土した。

〔土坑〕

土坑の大半は、第１調査区で検出した。第１調査区の５Ｇ地区、７Ｇ～７Ｉ地区では複数の土坑が切り合った状態で検出した。土坑は、地下式倉庫とみられるものの他、鍛冶等に伴う廃棄土

坑を多く検出した。

土坑 319（図版 34・97） 第１調査区５Ｆ地区で検出した土坑である。４層上面で検出したが、土層断面の観察から 3b 層上面から切り込む遺構であることを確認した。平面形は長軸 2.8 m、短軸 1.8 mの南北に長い方形を呈し、深さは 3b 層上面から 0.48 mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色砂質シルトである。地下式倉庫の可能性がある。遺物は京都Ｘ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締陶器等が出土した。

土坑 322（図版 36・98） 第１調査区６Ｆ地区で検出した土坑である。平面形は径 0.7 mの円形を呈し、深さは検出面から 0.14 mである。埋土は炭化物を含む黒褐色粘質シルトである。土坑から、青銅製の鍋が伏せられた状態で出土した。青銅鍋の他には、京都Ⅸ期新～Ｘ期古段階に属する土師器とともに、白磁等が出土した。

土坑 287（図版 36・98） 第１調査区５Ｈ・６Ｈ・５Ｉ・６Ｉ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の東部を切られる。平面形は方形を呈し、南北幅 1.84 m、深さは検出面より 0.45 mである。肩口からなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト、暗褐色砂質シルト、暗オリーブ粘質シルト、黒褐色粘質シルトである。土坑内に、京都Ⅸ期新段階に属する土師器皿が多量に投棄されていた。

土坑 286（図版 35・97） 第１調査区５Ｇ地区で検出した土坑である。平面形は幅 3.0 mの方形を呈し、深さは検出面より 0.55 mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色、暗オリーブ褐色を呈する粘質シルト、砂質シルトである。埋土に炭化物を含む。遺物は京都Ⅸ期新段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、瓦、砥石等が出土した。

土坑 261（図版 34・97） 第１調査区６Ｆ・７Ｆ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の南側を切られ、北側は調査区外に及ぶ。平面形は方形を呈すると推定され、東西幅 4.9 m、深さは検出面より 0.5 mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色系やや粘質シルト・粘質シルト、にぶい黄褐色砂質シルト、暗オリーブ褐色やや粘質シルトである。埋土に炭化物を含む。土坑内の調査区北壁付近で礎石の可能性のある石列を検出した。地下式倉庫の可能性がある。遺物は京都Ⅸ期中段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、古瀬戸、焼締陶器、瓦、金属製品等が出土した。

土坑 235（図版 38） 第１調査区７Ｈ地区で検出した土坑である。土坑 273 を切り、攪乱により遺構の西側を切られる。平面形は南北幅 2.0 mの方形を呈し、深さは検出面より 0.2 mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は暗褐色やや粘質シルトである。埋土に炭化物を含む。遺物は京都Ⅸ期中～新段階に属する土師器とともに、青磁、白磁、施釉陶器、焼締陶器、瓦、塼等が出土した。

土坑 273（図版 38・100） 第１調査区７Ｇ・７Ｈ地区で検出した土坑である。土坑 236 を切り、攪乱により遺構の西側、土坑 235 に南側を切られる。平面形は南北幅 2.5 mの方形を呈し、深さは検出面より 0.5 mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は暗オリーブ褐色粘質シルト、黒褐色粘質シルトである。埋土に炭化物を含む。遺物は京都Ⅸ期中段階に属する土師器とともに、瓦器、白磁、古瀬戸、焼締陶器、滑石等が出土した。

土坑379（図版39・100） 第1調査区7G・7H地区で検出した土坑である。同位置の上位で検出した土坑273の下層であった可能性がある。土坑621を切り、攪乱により遺構の西側を切られる。平面形は南北幅2.25mの方形を呈し、深さは検出面より0.15mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は京都Ⅷ期新～Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締、瓦等が出土した。

土坑236（図版38・100） 第1調査区7G地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の北及び西側、土坑273により南側を切られる。攪乱や別遺構に切られるため規模は不明であるが、平面形は方形を呈すると推定される。深さは検出面より0.5mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は暗褐色砂質シルト、黒褐色やや粘質シルトである。埋土に炭化物を含む。遺物は京都Ⅸ期中～新段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、古瀬戸、瓦質土器、瓦、塼等が出土した。

土坑604（図版39・100） 第1調査区7G地区で検出した土坑である。同位置の上位で検出した土坑236の下層であった可能性がある。平面形は南北幅2.45mの方形を呈し、深さは検出面より0.42mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土はオリーブ褐色粘質土、黒褐色粘質土・砂質シルトである。遺物は京都Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、瓦器、白磁、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑276（図版38） 第1調査区7H・7I地区で検出した土坑である。土坑277を切り、攪乱により遺構の西側を切られる。平面形は南北幅1.3mの東西方向に長い楕円形を呈し、深さは検出面より0.35mである。底面は丸みを帯び船底型を呈する。埋土は暗褐色やや粘質シルト、オリーブ褐色系粘質シルト、黒褐色粘質シルトである。埋土に炭化物を含む。遺物は京都Ⅸ期中段階に属する土師器とともに、青磁、白磁、焼締陶器等が出土した。

土坑277（図版38） 第1調査区7I地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の西側、土坑276により北側を切られる。平面形は南北幅0.95mのやや歪な円形を呈し、深さは検出面より0.45mである。底面は丸みを帯び船底型を呈する。埋土は黒褐色やや粘質シルトである。遺物は京都Ⅸ期中段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締陶器等が出土した。

土坑317（図版39・99） 第1調査区7H地区で検出した土坑である。平面形は径約1.8mの円形を呈し、深さは検出面より0.3mである。底面平坦で円柱状を呈する。埋土は暗褐色砂質シルトである。埋土に炭化物を含む。土坑の底面付近で、厚さ3cm程の炭層を検出した。土坑の側面に厚さ3cmの板張りと考えられる痕跡が見られ、桶等の据付跡ではないかと推定される。遺物は京都Ⅸ期古～中段階に属する土師器とともに、須恵器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑380（図版39・99） 第1調査区7G地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の西部を切られる。平面形は径1.85mの円形を呈し、深さは検出面より0.35mである。底面平坦で円柱状を呈する。埋土は暗オリーブ褐色砂質シルト、炭化物を多く含む黒褐色粘質シルト、オリーブ黒色粘質シルト、暗オリーブ褐色砂質シルトである。最下層の暗オリーブ褐色砂質シルトは貼床と推定される。土坑の側面に板張りの痕跡は確認できないが、規模や平面形が土坑317と類似し

ていることから、土坑380も桶等の据付跡の可能性が高い。遺物は京都Ⅸ期新～Ⅹ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑623（図版37・101） 第1調査区6Ｆ地区で検出した土坑である。溝325により遺構の西側を切られる。平面形は南北幅1.45ｍの円形を呈し、深さは検出面より0.12ｍである。底面平坦で皿状を呈する。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は京都Ⅷ期中段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、白磁、河南産緑釉陶器、焼締陶器等が出土した。

土坑624（図版37・101） 第1調査区6Ｆ地区で検出した土坑である。土坑623により遺構の西側を切られる。平面形は径1.2ｍの円形を呈し、深さは検出面より0.25ｍである。底面はやや凹凸が見られる。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は京都Ⅷ期新～Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、焼締陶器、瓦等が出土した

土坑627（図版37・101） 第1調査区7Ｆ地区で検出した土坑である。柱穴651に遺構の南側を切られ、北部は調査区外に及ぶ。平面形は東西幅1.45ｍの隅丸方形を呈し、深さは検出面より0.33ｍである。底面はほぼ平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は京都Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦質土器、焼締陶器等が出土した。

土坑605（図版39） 第1調査区7Ｇ・7Ｈ地区で検出した土坑である。土坑379により遺構上位が削平され、深さ0.1ｍ程度が残る。平面形は径約1.5ｍの歪な円形を呈する。底面平坦で皿状を呈する。埋土はオリーブ褐色砂質シルトである。遺物の出土は無く時期は不明であるが、土坑317・380と同様の桶等の据付跡と推定される。

土坑309（図版40・99） 第1調査区5Ｈ・5Ｉ地区で検出した土坑である。平面形は径1.1ｍの円形を呈し、深さは検出面より0.3ｍである。肩口からなだらかに傾斜し、底面は平坦である。埋土は褐灰色砂質シルトである。平面形がほぼ歪みのない円形を呈することから、土坑317・380と同様の桶等の据付跡の可能性が高い。遺物は京都Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、輸入陶器、瓦質土器、焼締陶器等が出土した。

土坑386（図版39） 第1調査区7Ｉ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の西及び南側を切られるため、正確な規模は不明である。深さは検出面より0.05ｍである。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。遺物は京都Ⅶ期新～Ⅷ期古段階に属する土師器とともに、白磁、瓦等が出土した。

土坑391（図版39・100） 第1調査区7Ｈ・8Ｈ地区で検出した土坑である。平面形は南北幅2.3ｍの方形を呈し、深さは検出面より0.35ｍである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は京都Ⅶ期新～Ⅷ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、白磁、輸入陶器等が出土した。

土坑344（図版40・101） 第1調査区4Ｇ・5Ｇ地区で検出した土坑である。池256に西側、溝367に東側、礎石列285に南側を切られる。南北幅0.65ｍ、深さは検出面より0.43ｍである。埋土は黒色粘質土、暗オリーブ褐色粘質シルトである。遺物は京都Ⅷ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑 345（図版 40・101） 第１調査区４Ｇ・５Ｇ地区で検出した土坑である。池 256 により西側、土坑 344 により南側を切られる。平面形は南北幅 1.8 ｍの歪な方形を呈し、深さは検出面より 0.5 ｍである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色系・暗褐色系を呈する砂質・粘質シルトである。遺物は京都Ⅷ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、焼締陶器、石製品等が出土した。

土坑 153（図版 40・98） 第２調査区１区６Ｋ地区で検出した土坑である。平面形は径 1.3 ～ 1.4 ｍの円形を呈し、深さは検出面より 0.95 ｍである。底面は丸みを帯び、断面は「U」字状を呈する。埋土はオリーブ褐色砂質シルト、灰色粘質シルト、黄灰色粘質シルトである。遺物は京都Ⅶ期新～Ⅷ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、青磁、瓦質土器、瓦、塼等が出土した。

土坑 381（図版 41・101） 第１調査区５Ｇ・６Ｇ地区で検出した土坑である。土坑 398 の上位を切り、土坑 287 に南側を切られる。平面形は不整形を呈する。深さは、検出面より 0.4 ｍである。底面平坦で皿状を呈する。埋土は黒褐色・暗褐色系の砂質・粘質シルトである。埋土に炭化物や焼土を含み、小鍛冶に伴う廃棄土坑と推定される。遺物は京都Ⅷ期古～中段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締、フイゴ、施釉陶器、瓦、青銅製の手鍋把手等が出土した。

土坑 392（図版 41・101） 第１調査区５Ｇ・６Ｇ地区で検出した土坑である。複数の別遺構により遺構の西及び南側を切られ、規模や平面形は不明である。深さは検出面より 0.3 ｍである。底面平坦で皿状を呈する。埋土は灰色シルトである。埋土に炭化物や焼土を多く含み、小鍛冶に伴う廃棄土坑と推定される。遺物は京都Ⅷ期新～Ⅸ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁等が出土した。

土坑 398（図版 41・101） 第１調査区６Ｇ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の東側、複数の別遺構により遺構の北及び南側を切られ、正確な規模は不明である。平面形はやや歪な楕円形を呈する。深さは検出面より 0.45 ｍである。底面平坦で皿状を呈する。埋土は黒褐色粘質・砂質シルトである。埋土に炭化物や焼土を含み、小鍛冶に伴う廃棄土坑と推定される。遺物は京都Ⅶ期新～Ⅷ期古段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、焼締等が出土した。

〔その他の遺構〕

第１調査区では、上記以外にも複数の土坑が検出された。径 1.0 ～ 2.0 ｍ程の歪な円形を呈する土坑が多く、方形や不整形を呈する土坑も少数みられる。第２調査区でも径 1.0 ｍ前後の土坑が複数検出された。１区６Ｋ地区で検出した土坑 406 は大型の土坑で、京都Ⅶ期新段階に属する遺物が出土した。その他に、第２調査区１区６Ｋ地区で東西溝 165 を検出した。

（５）４層上面（図版 14・15・102 ～ 107）

４層上面では、鎌倉時代の遺構を検出した。検出した遺構は、柱穴、礎石列、溝、井戸、土坑、埋甕等である。

〔柱穴・ピット等〕

４層上面では、多くの柱穴・ピットを検出した。第１調査区では４Ｈ～６Ｈ地区、５Ｆ地区に多く、第２調査区では１、４、５区に集中する。検出した柱穴は径0.2～0.4ｍ大のものが多く、礎石を伴うものも確認された。複数の建物が想定されるが、明確な建物として復元はできなかった。以下に、礎石列として復原したもの及び一部のピットについて記述する。

礎石列561（図版42・103） 第２調査区５区11Ｌ・12Ｌ地区で検出した東西方向の礎石列である。柱穴483・484・485の３基を検出し、柱間は１ｍである。径0.5～0.6ｍの柱穴内に0.2～0.4ｍ大の石を礎石として据える。各柱穴から京都Ⅵ期新～Ⅶ期古段階に属する土師器とともに、瓦器が出土した。

ピット638（図版42・103） 第１調査区５Ｈ地区で検出したピットである。径0.28ｍの円形を呈し、深さは0.16ｍである。埋土は、オリーブ褐色やや粘質シルトである。ピットの上位から、京都Ⅵ期新段階の土師器皿が重なった状態で出土した。

ピット560（図版48・107） 第２調査区４区10Ｋ地区で検出したピットである。５層上面で検出したが、断面の観察により土坑555を切り込むと判明し、４層上面に対応すると確定した。平面形は径0.3ｍの円形を呈し、深さは検出面より0.2ｍである。ピット内から直径10.2㎝の青銅製の和鏡が完形で出土した。地鎮に伴い埋納されたものではないかと推定される。鎌倉時代の和鏡の他に、土師器、須恵器等が共伴したが、いずれも細片であるため詳細な時期の特定は難しい。

〔井戸〕

井戸は、第１調査区で１基、第２調査区で４基検出した。第２調査区で検出した井戸は、５区の11ライン周囲に集中する。

井戸130（図版43・104） 第２調査区５区10Ｌ・10Ｍ・11Ｌ・11Ｍ地区で検出した井戸である。掘方の平面形は長辺2.6ｍ、短辺2.15ｍのやや歪な方形を呈し、検出面よりの深さは0.9ｍである。井戸枠は縦板横桟組で、一辺0.8～0.9ｍの方形を呈する。側板の遺存状態は悪い。井戸枠は西側に寄る。掘方には、裏込めとして５～20㎝大の礫が多量に含まれていた。底面の標高は24.52ｍである。遺物は土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦等が出土した。掘方出土遺物は京都Ⅶ期中段階、井戸枠内出土遺物は京都Ⅶ期中～新段階に属する。

井戸362（図版43・103） 第１トレンチ４Ｇ地区で検出した井戸である。掘方の平面形は長軸1.3ｍ、短軸1.2ｍの丸みを帯びた方形を呈し、深さは検出面より0.75ｍである。井戸枠は、一辺約0.8ｍの横板組である。底部付近の横板のみ残存していた。底面の標高は24.76ｍである。遺物は京都Ⅵ期新段階に属する土師器が出土した。

井戸509（図版44・104） 第２調査区５区10Ｌ・11Ｌ地区で検出した井戸である。北隣で検出した井戸517・518を切る。掘方の平面形は長軸2.52ｍ、短軸2.45ｍの隅丸方形を呈し、深さは検出面より1.55ｍである。井戸枠は縦板横桟組で、一辺1.1ｍの方形を呈する。井戸枠の南東側には、隅柱の痕跡が残っていた。側板の遺存状態は悪く、腐食して痕跡のみ残るものや内側に倒れ込むものが大半であった。底面の標高は24.55ｍである。遺物は京都Ⅵ期新段階に属する土師

器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦等が出土した。

井戸517（図版45・104） 第2調査区5区10K・11K地区で検出した井戸である。井戸518を切り、井戸509により掘方の南側を切られる。掘方の平面形は東西幅1.2mの方形を呈し、深さは検出面より1.1mである。井戸枠は縦板横桟組で、一辺0.7mの方形であるが、土圧により内側に押され変形する。側板は腐食により遺存状態が悪い。底面の標高は24.65mである。遺物は土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。井戸枠内出土遺物は京都Ⅵ期中～新段階に属し、掘方出土遺物は京都Ⅵ期中段階に属する。

井戸518（図版45） 第2調査区5区10K・10L地区で検出した井戸である。コンクリート地中梁により遺構の北側、井戸509･517に東側を切られる。井戸枠は検出されず、素掘りの井戸か、側板が抜き取られた可能性がある。コンクリート地中梁や井戸517に切られるため正確な規模は不明であるが、掘方の平面形は隅丸方形を呈すると推定される。深さは検出面より0.75mである。底面の標高は24.95mである。遺物は京都Ⅵ期古～中段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、褐釉、焼締陶器、瓦等が出土した。

〔土坑〕

第1調査区、第2調査区ともに複数の土坑が検出された。大半は、平面円形もしくは方形を呈する廃棄土坑と推定される。埋土に炭化物や焼土を多く含み、鋳造関連遺物が出土するなど鍛冶に伴う塵芥処理土坑と推定される土坑もある。

土坑419（図版46・106） 第2調査区1区6K地区で検出した土坑である。土坑420を切り、土坑153により遺構の北側を切られる。平面形は径1.15mの円形を呈し、深さは検出面より0.4mである。底面は丸みを帯びる。埋土は褐灰色砂質シルトである。遺物は京都Ⅶ期古段階に属する土師器が出土した。

土坑420（図版46・106） 第2調査区1区6K地区で検出した土坑である。土坑419により遺構の北側を切られる。平面形は径1.25mの円形を呈し、深さは検出面より0.45mである。底面は丸みを帯びる。埋土は褐灰色粘質シルトである。遺物は京都Ⅵ期新段階に属する土師器とともに、瓦質土器等が出土した。

土坑555（図版48・107） 第2調査区4区10K地区で検出した土坑である。第5層上面の調査時に検出したが、鎌倉時代の遺物が出土したことから、4層上面に対応する遺構である。平面形は長軸2.2m、短軸1.4mの南北方向に長い長方形を呈し、深さは検出面より0.15mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は灰オリーブやや粘質シルト、砂質シルトである。遺物は京都Ⅵ期新段階に属する土師器とともに、須恵器、河南産緑釉陶器等が出土した。

土坑612（図版47・105） 第1調査区7H地区で検出した土坑である。平面形は長辺2.76m、短辺1.25mの南北に長い長方形を呈し、土坑の長軸は北東～南西方向に振る。深さは検出面より0.5mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は灰オリーブ砂質シルト、オリーブ黒色粘質シルト、灰オリーブ粘質土である。最下層の灰オリーブ粘質土は層厚0.05mで貼床と推定される。貼土の上面には、部分的に炭化物が薄く堆積していた。遺物は京都Ⅵ期中～新段階に属する土師器とと

もに、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締陶器が出土した。

土坑 310（図版 46・105） 第１調査区５Ｈ・５Ｉ地区で検出した土坑である。平面形は方形土坑を重ねたような不整形を呈する。深さは検出面より 0.8 mである。底面平坦で箱状を呈する。埋土は黒褐色、灰黄褐色を呈する砂質・粘質シルトである。埋土に炭化物や焼土が多く含まれることや、鉄滓・鋳型片・坩堝等の鋳造関連の遺物が出土することから、小鍛冶に伴う廃棄土坑と推定される。鋳造関連の遺物の他に、京都Ⅵ期中段階に属する土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、瓦質土器、焼締陶器、瓦等が出土した。

土坑 609（図版 37・106） 第１調査区５Ｆ・６Ｆ地区の調査区北壁付近で検出した土坑である。土坑の北側は、調査区外に及ぶ。東西幅 1.65 m、深さは検出面より 0.7 mである。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は京都Ⅵ期中段階に属する土師器とともに、瓦器等が出土した。

土坑 628（図版 37） 第１調査区６Ｆ地区の調査区北壁付近で検出した土坑である。土坑の大部分は調査区外北側に及ぶため、規模や平面形は不明である。埋土は暗オリーブ褐色粘質シルト、黒褐色粘質土である。埋土に炭化物を含む。遺物は京都Ⅵ新段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦器、瓦質土器、青磁、白磁等が出土した。

〔埋甕〕

埋甕 538（図版 42・106） 第２調査区２区７Ｋ地区で検出した埋甕である。常滑の大甕が据え付けられ、残存する体部径は 0.85 m、深さは検出面より 1.0 mである。甕の底部～体部が据えられた状態で残り、肩部の大半は甕内部の埋土内に含まれていた。口縁部片は、埋土内からも出土していない。

〔その他の遺構〕

第１調査区では、上記の廃棄土坑の他に不整形の土坑 313・314・316・387・661・671・672・678 を検出した。第２調査区では、１・２区で大型の廃棄土坑と推定される 407・408・415・512・535・536 を検出した。また、１・２・４・５区で 1.0 ～ 2.0 m前後の土坑を複数検出した。２区で検出した平面円形を呈する土坑 515 は、埋甕の据付跡であった可能性が高い。

（６）５層上面（図版 16・17・108 ～ 112）

５層上面では、古墳～平安時代前期の遺構を検出した。遺構の大半は、第２調査区で検出された。平安時代前期の遺構は、京都Ⅰ期中～新段階と京都Ⅱ期中～新段階の２時期に大きく分かれる。検出した遺構は、柱穴、土坑、井戸、溝、整地等である。

〔柱穴〕

柱穴は、主に第１調査区５Ｆ・６Ｆ地区、第２調査区４・５区で検出した。径 0.2 ～ 0.4 m大のものが多い。検出した柱穴からは、建物や柵等の復原には至らなかった。

〔溝〕

溝 558（図版 49・109） 第２調査区５区９Ｌ地区で検出した南北溝である。地盤改良跡と考えられる整地 550 の掘り下げ後に検出した。第２調査区４区９Ｋ地区で検出した土坑 589 は、溝

558の北側延長部の可能性もある。区画溝の可能性があり、溝中心の座標はＹ＝－22,708.500ｍである。幅約0.5ｍ、深さは検出面より0.15ｍである。断面形は船底型を呈する。埋土は１～８cm大の礫を多く含む黄褐色砂質シルトである。遺物は京都Ⅱ期新段階に属する土師器とともに、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、石製品等が出土した。

溝554（図版109） 第２調査区５区10Ｌ地区で検出した南北溝である。溝558の２ｍ東側で検出した。区画溝の可能性があり、溝中心の座標はＹ＝－22,706.300ｍである。幅0.25ｍ、深さは検出面より0.05ｍである。断面形は船底型を呈する。埋土は灰オリーブ粘質土である。遺物は京都Ⅱ期に属すると推定される土師器とともに、須恵器、瓦等が出土した。

溝670（図版50・109） 第１調査区４Ｆ～７Ｆ・４Ｇ～７Ｇ地区で検出した東西溝である。区画溝の可能性があり、溝中心の座標はＸ＝－112,051.800ｍである。幅1.2～2.7ｍ、深さは検出面より0.1～0.2ｍである。断面形は底面が丸みを帯びた船底型を呈する。埋土はオリーブ黒色粘質シルト、暗灰黄色粘質土である。遺物は京都Ⅱ期中段階に属する土師器とともに、須恵器、緑釉陶器、瓦等が出土した。

溝681（図版51・109） 第１調査区６Ｈ・７Ｈ地区で検出した南北溝である。北東から南東方向に振る。コンクリート攪乱により溝の東部を切られるため、幅は不明である。深さは検出面より0.2ｍである。埋土は砂の混じる暗灰黄色粘質土である。遺物は京都Ⅱ期に属すると推定される土師器とともに、緑釉陶器、瓦等が出土した。

溝684（図版51・109） 第１調査区４Ｈ～６Ｈ・５Ｉ・６Ｉ地区で検出した東西溝である。溝幅は一定ではなく、西部で1.58ｍ、東部で2.56ｍである。深さは検出面より0.05ｍである。埋土は灰黄褐色砂質シルトである。遺物は京都Ⅱ期中～新段階に属する土師器とともに、須恵器、瓦等が出土した。

溝698（図版51・109） 第１調査区４Ｉ～６Ｉ地区で検出した東西溝である。東側では、溝684に上位を切られる。溝の西側は、南に湾曲する。幅1.45ｍ、深さは検出面より0.1ｍである。埋土はオリーブ褐色粗砂である。遺物は京都Ⅱ期中段階に属する土師器とともに、瓦が出土した。

〔井戸〕

井戸540（図版52・53・110） 第２調査区２・３区７Ｌ地区で検出した井戸である。井戸の底面に長さ1.0～1.4ｍ、幅15～20㎝、厚さ約５㎝の板材を井桁に組む。側板は残存していなかったが、一辺約1.2ｍの方形を呈する。深さは検出面より0.4ｍである。底面の標高は24.55ｍである。井戸枠内から多量の瓦と共に、ほぼ完形の須恵器瓶子が５個体出土した。須恵器瓶子は、埋没時の井戸祭祀に伴う可能性がある。また、井戸枠内から、底部に「厨」と線刻された緑釉陶器が出土した。その他に、京都Ⅱ期中段階に属する土師器とともに、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器等が出土した。

〔土坑〕

土坑559（図版54・111） 第２調査区５区９Ｌ・９Ｍ地区で検出した土坑である。攪乱や中世･近世の遺構により切られ、規模や平面形は不明である。底面平坦で皿状を呈する。埋土はオリー

ブ黒色粘質土ブロックや礫等を含む灰オリーブ色砂質シルトである。遺物は京都Ⅰ期中段階に属する土師器とともに、須恵器等が出土した。出土遺物の器形は、杯・皿・椀等の供膳具が中心である。

土坑551（図版55・111）　第２調査区５区11Ｌ地区で検出した土坑である。平面形は長軸1.25ｍ、短軸0.74ｍの楕円形を呈し、深さは検出面より0.1ｍである。底面は丸みを帯びる。遺物は京都Ⅰ期中段階に属する土師器とともに、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器等が出土した。

土坑563（図版55・111）　第２調査区１区６Ｋ地区で検出した土坑である。中世の土坑により遺構の東西側を切られ、平面形や規模は不明である。深さは検出面より0.12ｍである。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。遺物は京都Ⅰ期中～新段階に属する土師器とともに、須恵器、黒色土器、瓦等が出土した。

土坑580（図版55・112）　第２調査区４区11Ｋ地区で検出した土坑である。攪乱により遺構の北側を切られるため、正確な規模や平面形は不明である。深さは検出面より0.07～0.15ｍである。埋土は、オリーブ黒色粘質土である。遺物は古墳時代前期の二重口縁壺が出土した。

〔整地〕

整地550（図版56・112）　第２調査区５区９Ｌ地区で検出した整地跡である。直径１～10㎝大の小礫が多く含む暗灰黄色粘質土により地盤の改良を行なったものと考えられる。厚さは検出面より0.1～0.15ｍを測る。遺物は京都Ⅱ期新段階に属する土師器とともに、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦等が出土した。

〔その他の遺構〕

第１調査区では、幅約0.4ｍの溝状遺構673・679・688・689を検出した。第２調査区では、廃棄土坑と推定される土坑を複数検出した。土坑552・562は平面不整形を呈し、京都Ⅰ期中～新段階の遺物が出土した。土坑565・568・571・579・598は平面方形もしくは不整形を呈し、京都Ⅱ期中～新段階の遺物が出土した。４区10Ｋ地区で検出した平面不整形の土坑581からは、古墳時代前期の二重口縁壺が出土し、土坑580出土の破片と接合した。

註

1）　京都市埋蔵文化財研究所編『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊　2004年

3　出土遺物（図版 57 ～ 82、113 ～ 120、表３・４）

古墳時代～近代の遺物がコンテナに 337 箱出土した。うち、近世前半期以前の遺物を報告対象とした。近世後半期以降の遺物は、約 1/3 を占める。軒桟瓦類と陶磁器類が主体であるが、報告はその一部に留めた。種類別の内容な下記の通りである。

（古墳時代）　古式土師器、須恵器

（平安時代）　土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類

（中　　世）　土師器、焼締陶器、瓦器、瓦質土器、青磁、白磁、緑釉陶器、鉄製品、青銅製品、石製品、土製品、木製品

（近　　世）　土師器、瓦類、ガラス製品、木製品、動物遺存体

以下、時代の古い資料から詳細を述べる[1)]。

（１）土器・陶磁器・瓦類（図版 57 ～ 78）

A　古墳時代（図版 57）

土坑 580（１）　古式土師器の二重口縁壺（１）がある。土坑 580 の破片と接合したもの。口縁部を欠損する。体部外面の頸部近くに櫛描直線文、体部下位に粘土帯を貼り付ける。内外面はハケ調整するが、体部外面は未調整のまま焼成している。近江系土器の影響を受けたものであろう。在地産。庄内式前半期の所産。

第５層（２）　古式土師器の甕である。「く」字状口縁と球胴を有する。体部外面は右下がりのタタキ後ハケ。庄内式期前半の所産。

土坑 597（３）　弥生土器の鉢体部である。外面にヘラ描きの綾杉文を施す。後期～庄内式の所産。

ピット 683（４）　弥生土器壺の底部片。後期の所産。

溝 698・４層（５・６）　古式土師器の高杯（５・６）である。（５）は中実の柱状部と短く開く裾部を有する。（６）は椀状の杯部を有するもの。（５）は庄内式、（６）は布留式の所産。（５）は溝 698、（６）は４層出土。

土坑 319・溝 670（７・８）　いずれも須恵器杯身である。体部外面の 1/2 を回転ヘラ削りする。いずれも受部は丸味を帯びる。（７）は、ＴＫ 208 型式の所産。土坑 319 出土。（８）は MT15 型式前後の所産。溝 670 出土。

以上の遺物のうち、（３～８）は後世の遺構、包含層から出土した混入品である。

B　平安時代（図版 57 ～ 67）

土坑 551（９～ 17）　土師器（９～ 13）、須恵器（14 ～ 17）がある。土師器は、皿Ａ（９）、椀Ａ（10・11）、高杯（12・13）である。外面調整は、（９）が c' 手法、（10）が c 手法、（11）が e 手法。（13）の接合は b 手法（芯棒法）である。須恵器は、壺底部（16）、杯Ｂ（17）である。京都Ｉ期中段階の所産。

土坑 563（18 ～ 21） 土師器の皿（18･19）、椀（20）、須恵器の杯Ｂ蓋（21）である。（18）は底部外面に交差する６本の焼成後線刻がある。

土坑 559（22 ～ 56） Ｉ期中段階の一括性の高い資料である。土師器（22 ～ 45）、須恵器（46 ～ 56）がある。土師器は、杯Ａ（22･23）、皿Ａ（24 ～ 35）、椀Ａ（36 ～ 42）、高杯（43 ～ 45）である。杯Ａは、口縁端部の形態から丸くおさめるもの（22）と内側に巻き込むもの（23）。皿Ａは口縁端部を屈曲して内側に巻き込むもの（24・25）、内上方に突出ないし巻き込むもの（26 ～ 31）、丸くおさめるもの（22）、やや肥厚するもの（33 ～ 35）に分けられる。杯・皿の外面調整は、底部をヘラ削りするｂ手法（24・25・27・32 ～ 35）、全面ヘラ削りするｃ手法（26・28 ～ 31）である。椀Ａの外面調整は、ｃ手法（36・37）、ｅ手法（38 ～ 42）である。（23 ～ 33・36・37・40 ～ 42）は底部外面に焼成後線刻がある。先の（18）と同様に、３本ずつの平行線を重ね６本にするもの（23･26・28・29・31 ～ 33・36・42）が多い。その他、線刻は５本（24・25）、４本（27）、２本（41）、１本（30）の各種がある。

高杯（43 ～ 45）は、柱状部片。面取りは、七角形（43･45）、八角形（44）である。また成形は、粘土紐巻き上げのａ手法（43・44）、ｂ手法（45）である。

須恵器（46 ～ 55）は、杯Ａ（50）、杯Ｂ蓋（46 ～ 49）、杯Ｂ（51 ～ 54）、壺Ａ蓋（56）、壺（55）である。杯Ａ（50）は、直線的な口縁部を有するもの。杯Ｂ蓋（46 ～ 49）は、口縁部がやや内湾気味になるもの（51）、直線的になるもの（52･53）、外湾するもの（54）である。壺Ａ蓋（56）は、屈折する縁部を有するもの。壺（55）は、直立する貼り付け高台を有するもの。

井戸 540（57 ～ 99） 土師器（57 ～ 61）、須恵器（62 ～ 70）、灰釉陶器（71 ～ 74）、緑釉陶器（75 ～ 81）、黒色土器（82 ～ 84）、土馬（85）、砥石（86）、軒丸瓦（92）、平瓦（87 ～ 91）、丸瓦（93 ～ 99）がある。土器・陶器類は、京都Ⅱ期中段階の所産で、当該期の良好な一括資料である。

土師器は、杯Ａ（57）、皿Ａ（58・59）、高杯（60）、甕（61）である。杯・皿は、口縁部上半を横ナデするｅ手法である。高杯（60）は、柱状部片。面取りは七角形で、製作はａ手法である。甕（61）は、口縁部片。端部は内側に巻き込んで上方に凹んだ端面をもつ。

須恵器は、瓶子（62･66 ～ 70）、鉢（63）、壺（64）、甕（65）である。瓶子は、口径 3.8cm 前後、器高９cm 前後の小型品（62・66・67）、口径４cm、器高 12.2cm 前後のやや大型品（68 ～ 70）がある。いずれも底部は糸切り。鉢（63）は、底部片で糸切り。壺（64）は、口縁部が外折して端部を上下に拡張するもの。甕（65）は、端部を外方につまみ出すもの。

灰釉陶器（71 ～ 74）は、椀の底部片（71 ～ 73）、口縁部片（74）である。すべて貼り付け高台である。形態は、（71・72）が端反りし、（73）が凹んだ端面を有する。（73）は底部外面に筆使いのみわかる墨書が残る。

緑釉陶器（75 ～ 81）は、椀（75 ～ 79･81）、皿（80）である。椀（75 ～ 79･81）は、口径 11.9cm の小型のもの（74）、口径 19.8cm の大型のもの（75）である。（75）はほぼ全形が復原できたもの。削り出し高台を有する。底部片では、削り出し高台（76・77・79 ～ 81）、貼り付け高台（78）がある。

特に、(81) は、底部外面に「厨」銘を焼成後線刻する珍しい資料である（巻頭図版２－（１））。筆順も正しく、本来墨書するところを線刻に置き換えたものと推定される。

黒色土器（82 ～ 84）は、内面のみ黒色化するＡ類の杯Ｂである。いずれも高台を有する。口径 16cm 前後のもの（82・83）、口径 21.8cm のもの（84）がある。いずれも内面は密に平行暗文と螺旋状暗文を施す。外面はヘラ削り。

土馬（85）は、頭部と右前足、胴部の一部を残すもの。耳の表現はなく退化して小型化している。

砥石（86）は、砂岩製。直方体状を呈し、長方形の広い面を長軸と平行に使用する。

軒丸瓦（92）は複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当の一部に、内区の蓮弁と外区の珠文が残る。

平瓦（87 ～ 91）は、狭端面ないし広端面と側縁を残すもの。凹面は不調整で布目痕、凸面は縦方向に縄叩きである。すべて一枚作り。

丸瓦（93 ～ 99）は、基部（93・95・98）、玉縁部（94・96・97・99）のそれぞれ断片である。玉縁部は、瓶形の成型台で筒部の内側に玉縁を貼り付ける古代に通有なもの。凹面不調整（布目痕）、凸面縄叩き後部分ナデ消し。

土坑 585（100）　土師器高杯である。柱状部･裾部片。七面取りで芯棒巻きつけ法（b 手法）による。京都Ⅰ期中～新段階の所産。

土坑 562（101 ～ 103）　土師器の皿Ａ（101）、椀Ａ（102）、高杯（103）である。外面調整は、(101) が底部ヘラ削りのｂ手法、(102) がｅ手法である。(103) は八面取りで、ａ手法（輪積み法）によるもの。京都Ⅰ期中～新段階の所産。

土坑 537（104）　白色系の土師器皿である。京都Ⅵ期中～新段階の所産。

土坑 598（105）　長胴タイプの土師器甕の口頸部片。口縁部は「く」字状に外反して端部は上方につまみ上げる。

土坑 565（106 ～ 108）　土師器の皿Ａ（106）､灰釉陶器の椀（107）､耳皿（108）である。(106) は二段ナデするもの。(107) は端反りする高台を貼り付ける。(108) は糸切りの蛇ノ目高台を有するもの。

溝 558（109 ～ 116）　須恵器（109）、灰釉陶器（110 ～ 112）、緑釉陶器（113・114）、砥石（115）、石製紡錘車（116）である。

須恵器（109）は、糸切り底を有する瓶子の底部片。灰釉陶器（110 ～ 112）は椀の底部片（110･111）とほぼ全形の復原できたもの（112）。いずれも端反りする貼り付け高台を有する。

緑釉陶器（113・114）は、蛇ノ目高台を有するもの。

砥石（115）は頁岩製のもの。荒割して直方体状に仕上げる。一面のみ使用する

紡錘車（116）は、石製紡輪で砂岩製のもの。全体を研磨して円形に仕上げ中央に径 0.6cm の円孔を両面から穿つ。工房で使用する穿孔道具であろうか。

ピット 545（117）　灰釉陶器の椀の底部片である。断面三角形の高台を貼り付ける。

土坑 571・溝 684（118・119）　いずれも緑釉陶器の椀の底部片である。端面の凹んだ低い高台を貼り付ける。濃緑色の近江系である。(118) は土坑 571、(119) は溝 684 より出土。

ピット590（120） 土師器椀Ａの口縁部片。外面はヘラ削りする。

溝681（121・122） 土師器皿Ａの口縁部片である。端部が屈曲するもの（121）、口縁部上半が屈曲するもの（122）である。

土坑568（123） 灰釉陶器の壺底部である。外面に自然釉が付着する。高台は、低く貼り付ける。

溝670（124） 土師器甕の口頸部片である。口縁部は強く外方に屈曲して短く伸びたのち上方に肥厚する。

土坑671（125） 土師器甕の口縁部片である。外湾して外端面をやや肥厚する。

整地550（126～137） 土師器（126・129）、須恵器（127・128・130）、緑釉陶器（131～133）、灰釉陶器（134～136）、軒平瓦（137）である。

土師器は、鍔釜（126）、甕（129）である。（126）は短く水平気味に鍔が貼り付けられる。（129）は体部を指押さえで仕上げる中南河内産のもの。須恵器（127・128・130）は、玉縁を有する篠産の鉢（127）、体部の２条も凸帯を有する壺（130）である。破片のために確定しないが、双耳壺と推定される。

緑釉陶器（131～133）は、椀（131・132）と壺（133）である。（131・132）は削り出し高台を有するもの。（133）は小壺である。

灰釉陶器（134～136）は、椀（134・135）と壺（136）である。（134・135）は端反りする貼り付け高台を有するもの。（136）は大きく開く口縁部を有するもの。外面に自然釉が付着する。いずれも東海地方窯産。

軒平瓦（137）は、重画文軒平瓦である。難波宮6572型式の搬入瓦。中央部付近を残す。直線顎である。

５層（138～142・152・153） 上面精査ないし掘り下げ時（遺構に伴うものか）に出土したもの。須恵器（138・139）、土師器（140）、緑釉陶器（141）、灰釉陶器（142）、軒丸瓦（152）、軒平瓦（153）である。（138）は、杯Ｂ蓋で縁部が屈曲する。頂部外面に３本の平行線を重ね６本の交差線とする墨書がある。土坑559の線刻土器と類似する記号である。（139）は貼り付け高台を有する杯Ｂ、（140）は杯Ａの口縁部片である。（141）は削り出し高台を有するもの。（142）は断面三角形の高台を貼り付ける。軒丸瓦（152）は、複弁蓮華文を有するもの。平城宮式の搬入瓦。軒平瓦（153）は、唐草文軒平瓦。段顎を有する。中期の小野瓦窯産。

５層の遺物は、京都Ⅰ期～Ⅱ期の所産である。

４層（143～151・154） 土師器（143）、灰釉陶器（144・145）、緑釉陶器（146～148）、白磁（149）、緑釉陶器（150）、青白磁（151）、土馬（154）である。

土師器（143）は、甕の口頸部片。外面に指押さえが残る中南河内産。灰釉陶器（144・145）は、椀で直立気味の高台を貼り付けるもの。東海地方窯産。緑釉陶器（146～148）は、椀（146・148）と皿（147）である。（146・148）は削り出し高台、（148）は貼り付け高台を有する。白磁（149）は、削り出し高台を有する椀の底部片。輸入陶磁器である。緑釉陶器（150）は、華南産の盤底部

片。青白磁（151）は、印籠形のもの。肩部は丸みを帯び端部は丸くおさめる。土馬（154）は、右後ろ足と尻尾を残すもの。

４層出土の遺物は、京都Ⅰ期～Ⅱ期の所産である。

C　鎌倉時代（図版 68 ～ 71）

土坑 310（155 ～ 173）　土師器（155 ～ 163）、青白磁（164）、青磁（165・167）、瓦器（166・168・169）、須恵器（170）、焼締陶器（171・172）である。

土師器（155 ～ 163）は、コースター状の皿（155・156）、皿（157 ～ 162）、高盤（163）である。

青白磁（164）は、皿の完形品である。扁平で厚手の底部から口縁部が短く立ち上がる。青磁（165 ～ 167）は、壺（165）、椀（167）である。（166）は小さい凹んだ底部を有するもの。（167）は口縁部片である、劃花文を施す。

瓦器（166・168・169）は、椀（166）、羽釜（168）、鍋（169）である。（166）は平底から口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。いわゆる「楠葉型輪花椀」である。内面は口縁部が横方向の暗文、見込みに４分割した重弧文状の暗文を施す。平安京左京、白川を中心に西日本に類例がある。（168）は、口径 29.8cm を測る大型のもの。鍔は、水平気味に短く伸びる。外面に煤付着。（169）は、受け口状を呈する口縁部を有するもの。

須恵器（170）は、東播系のこね鉢である。内面を板ナデし、外面はロクロナデ。片口を作る。口径 30.6cm。

焼締陶器（171・172）は、大甕である。（171）は底部を欠損する。肩に強い稜をもち口縁部は水平近くまで折り曲げて端部を上下に拡張する。内面は口縁部ロクロナデ、体部指ナデ。外面は叩き後ナデ消し。（172）は、口縁部を上下に大きく拡張するもの。軒平瓦（173）は中心飾を残すもの。中期の小野瓦窯産。

井戸 518（174 ～ 177）　土師器（174）、施釉陶器（175・177）、須恵器（176）である。土師器（172）は皿の口縁部片である。施釉陶器（175・177）は、凹んだ小さな底部を有するもの（177）、上げ底の底部を有するもの（177）。須恵器（176）は、「く」字状に外反して外傾する凹んだ端面を有するもの。

井戸 509（178 ～ 192）　土師器（178 ～ 181）、須恵器（182）、瓦器（183・184）、緑釉陶器鉢（185）、青磁（186 ～ 190）、軒瓦（191）、軒平瓦（192）である。

土師器（178 ～ 181）は、皿Ａ（178 ～ 180）の他、杯Ｂ（181）がある。（180）は前期の混入品であろう。須恵器（182）は、東播系摺鉢の口縁部片。

瓦器（183・184）は、皿（183）と椀（184）である。（183）は完形品。（184）は小型品ながら内面に丁寧な暗文を施す。口径 6.8cm。

緑釉陶器鉢（185）は、華南産の鉢口縁部片である。端部を玉縁状に仕上げる。

青磁（186 ～ 190）は、椀（186 ～ 188）、皿（189）、香炉（190）である。椀（186 ～ 188）は、龍泉窯系のもの。底部は削り出し高台である。（186）内面に陰刻花文を施す。（189）は龍泉窯系の皿。

内面の見込みに櫛歯による文様を施す。香炉（190）は、獣脚部分の断片。体部との接合部分のみ残存し、獅子を表現した優品である。

軒瓦（191）は、左巻きの三巴文軒丸瓦（191）、剣頭文軒平瓦（192）である。

以上の遺物のうち、土器類は京都Ⅵ期中～新段階の所産である。

土坑 612（193 ～ 204） 土師器（193 ～ 196）、須恵器（197 ～ 199）、青磁（200・203）、瓦器（201・202）、製塩土器（204）である。

土師器（193 ～ 196）は、皿Ｎの小型品（193 ～ 195）、大型品（196）である。

須恵器（197 ～ 199）は、東播系のこね鉢（197）と甕の口頸部片（198･199）である。（197）は、神出Ⅱ期第２段階に位置付けられる。（198）は東播磨神出窯ないし魚住窯産であろう。口縁部が外湾したのち端部を上下に拡張する。外面を平行タタキする。（199）は端部をつまみ出し、外端面は凹ませるもの。青磁（200・203）は、皿（200）と壺（203）である。（200）は龍泉窯系のもので内面に櫛歯文を施す。（203）は頸部片である。

瓦器（201・202）は、いずれも椀の小型品である。内面に平行暗文を残し、断面三角形の貼り付け高台である。製塩土器（204）は、口縁部片である。逆円錐形を呈すると推定されるもの。

以上の遺物は、京都Ⅵ期中～新段階の所産である。

井戸 517（205 ～ 211） 土師器（205 ～ 207）、瓦器（208・211）、白磁（209）、青磁（210）がある。

土師器（205 ～ 207）は、皿Ｓ（205 ～ 207）である。瓦器（208・211）は、和泉型椀（208）の口縁部片と鍋（211）の口頸部片である。（208）は、口縁部を強く横ナデし、内面に平行暗文を施す。

白磁（209）・青磁（210）は、いずれも口縁部片である。

土坑 609・316（212 ～ 217） （212 ～ 215）は土坑 609、（216・217）は土坑 316 出土。土師器皿Ｎの小（212・213・216・217）と大（214・215）である。京都Ⅵ期新～Ⅶ期古段階の所産。

土坑 398（218・219） 土師器の皿の口縁部片である。京都Ⅷ期中段階の所産。

土坑 608（220 ～ 224） 土師器の皿（220・221）、瓦器（222）、山茶碗（223）、青磁（224）である。（222）は、内面に粗い平行暗文、三角形の高台をなでつけるもの。（223）は退化した高台を有するもの。東海地方美濃窯産であろう。（224）は、口縁部内面に櫛歯文を施すもの。京都Ⅵ期中～新段階の所産。

土坑 515（225・226） 土師器のへそ皿（225）と皿（226）である。京都Ⅵ期中前後段階の所産。

ピット 502（227・228） 瓦器椀（227）、青磁椀（228）である。（227）は口縁部片で内外面に平行暗文を施す。（228）は三角形の高台を貼り付けるもの。内面の見込みに文様を施す。

ピット 459（229・230） 土師器で、コースター形の皿（229）と皿（230）である。（230）は口縁部が外湾して短く開き、底部中央がやや突出する特徴的な形態である。搬入品であろう。京都Ⅵ期前後段階の所産。

土坑 464（231・232） 緑釉陶器素地（231）、軒平瓦（232）である。（231）は、削り出し高台を有する京都産のもの。混入品である。（232）は剣頭文を有するもの。

井戸 362（233・234） 土師器（233）と瓦器鍋（234）である。（233）は完形品。（234）は比較的大きな受け口を持つもの。

土坑 366（235・236） 土師器皿（235・236）である。京都Ⅵ期中段階の所産。

土坑 628（237 ～ 241） 土師器皿（237 ～ 239）、瓦器椀（240）、瓦質土器（241）である。瓦器椀は、楠葉型。内面に粗い平行暗文、見込みに螺旋状暗文を施す。高台は低い三角形のもの。（241）は、奈良火鉢（大和型）である。口縁部がやや外湾ないし直線的に伸びる浅鉢のタイプである。京都Ⅵ期古～中段階の所産。

井戸 130（242 ～ 263） 土師器（242 ～ 253）、瓦器（254・255・257）、瓦質土器（256）、青磁（258・260・261）、白磁（259）、軒平瓦（262・263）である。

土師器（242 ～ 253）は、へそ皿（242）、皿（243 ～ 252）、ミニチュア壺（253）である。

瓦器（254・255・257）は、壺（254）、椀（255）、ミニチュア羽釜（257）である。壺（254）は土師器皿（252）を合わせ口状に蓋をして井筒内から正立して出土したもの。内容物は確認できなかったが、セット関係にある。いわゆる、楠葉型の小型特殊容器である。椀は内面に平行暗文を施すもの。瓦質土器（256）は、大形品の口縁部片である。鍔部は水平近くに大きく伸びる。（257）は三足を伴うものであろう。

青磁（258・260・261）は口縁部片で端部を上方につまみ上げる。（260）は、底部片で花弁状の陰刻をもつ。（261）は、外面に「廿□」と絵画墨書される。白磁（259）は玉縁を有するもの。

軒平瓦（262・263）は、花文を配するもの。（262）は、瓦当面のみ完形。左右に花文単位を３反転、２段に配置する。段顎である。（263）は瓦当の左端部分を残す。

以上の遺物は、京都Ⅶ期中段階前後の所産。

土坑 524（264 ～ 268） 土師器の皿（264・265）・甕（266）、緑釉陶器素地（267）、緑釉陶器（268）である。（266）は外面を指おさえで仕上げる中南河内産。（267・268）はいずれも削り出し高台で京都産。緑釉陶器は混入品である。京都Ⅶ期中段階前後の所産。

土坑 479（269 ～ 270） 土師器皿（269）、軒平瓦（270）である。（270）は大形の珠文を配置するもの。段顎である。京都Ⅵ期段階の所産。

ピット 370（271・272） 土師器皿（271）、焼締陶器甕（272）である。（272）は、常滑焼。頸部が内上方に立ち上がり、口縁端部を外方に折り曲げるもの。京都Ⅶ期古段階の所産。

D　室町時代（図版 72 ～ 77）

土坑 381（273 ～ 287） 土師器（273 ～ 280・283・286）、瓦器（281）、施釉陶器（282）、瓦質土器（284・285）、焼締陶器（287）である。土師器は、へそ皿（273・274）、皿（275 ～ 280）である。（280）の外面に墨書がある。（283）は丸底鉢。（286）は、内傾する口縁部を有するもの。鍔は水平に伸びる。（282）は、天目椀の口縁部片。

（284）は、奈良火鉢である。口縁部が内折する浅鉢タイプ。（285）は短い受け部と内傾する体部を有する。（287）は、常滑産の大甕。口縁部が直立気味に伸びて端部を折り曲げるもの。

以上の遺物は京都Ⅷ期古～中段階の所産。

土坑 317（288 ～ 291） 土師器皿（288）、瓦器羽釜（289）、焼締陶器甕（291）、軒平瓦（290）である。（291）は常滑焼。端部を折り曲げる。（290）は、剣頭文を有するもの。段顎を有する。

土坑 319（292 ～ 294） 土師器皿（292・293）、へそ皿（294）である。京都Ⅸ期新～Ⅹ期古段階の所産。

土坑 392（295 ～ 301） 土師器皿S（296・297）、へそ皿（295）、羽釜（298）、白磁（299）、瓦質土器（300・301）である。（298）は、端部を内側に屈折させて肥厚させるもの。短い鍔を貼り付ける。（299）は玉縁を有するもの。（300・301）は、羽釜（300）、鍋（301）である。

溝 367（302 ～ 318） 溝の上位（302 ～ 312）と下位（313 ～ 318）に分けた。

上位では、土師器（302 ～ 310）、青磁（311）、焼締陶器（312）がある。土師器は、へそ皿（302・303）、皿（304 ～ 310）である。（311）は、龍泉窯産。底部片で直立する高台を削り出す。内面の見込み花弁の陰刻がある。（312）は大甕で口縁端部を上下に拡張するもの。

下位では、土師器へそ皿（313）、皿（315・317）、白磁椀（316）、青磁壺（318）、（320）である。（316）は玉縁状の口縁を有する。（318）は肩部に吊り手を貼り付けるもの。

土坑 457（319・320） 軒丸瓦（319）は三巴文を有するもの。塼（320）は方形瓦製のもの。焼成前の円孔がある。表面縄叩きとナデ。

土坑 287（321 ～ 352） 土師器へそ皿（321 ～ 332）と皿（333 ～ 346）、青磁椀（347）、須恵器（348）、ミニチュア軒丸瓦（350）古瀬戸（349）、焼締陶器甕（351・352）である。（347）は龍泉窯産。内面の見込みに花弁の陰刻がある。（348）は糸切り底を有するもの。（349）は大型も鍋である。口縁端部を水平に引き出す。（350）は三巴文軒丸瓦のミニチュア品である。丸瓦部に接合のための穴も表現される。（351）は、肩部に稜をもち、口縁部は短く外湾して端部を上下に拡張するもの。（352）は丸味を帯びた体部から頸部が短く立ち上がり、端部を折り曲げるもの。

土坑 320（353 ～ 359） 土師器のへそ皿（353）、丸底鉢（357）、瓦器椀（354）、青磁椀（355）、瓦質土器の羽釜（356）、須恵器こね鉢（358）、焼締陶器大甕（359）である。（354）は口縁部下位で屈曲する形態のもの。低い三角形の高台を貼り付ける。（356）は、短い鍔を貼り付ける。（359）は、大甕で端部を折り返す。

土坑 321（360・361） 土師器のへそ皿（360）、瓦質土器の風炉（361）である。

土坑 322（362 ～ 366） 土師器皿である。青銅製鍋の共伴土器である。

土坑 622（367・368） 土師器皿（367）、瓦質土器火鉢（368）である。（368）は内湾して水平な面を作り出す。

土坑 642（369・370） 土師器皿（369）、古瀬戸の盤（370）である。（370）は端部を内側に折り返すもの。

柱穴 384（371・372） 土師器皿（371）、焼締陶器（372）である。（372）は大甕である。強く

外湾して端部を上下に拡張するもの。

溝 368（373 ～ 381） 土師器へそ皿（373）、皿（374 ～ 380）、灰釉陶器蓋（381）である。（381）は扁平な頂部から屈曲して直立する縁部をつくるもの。外面を手持ちヘラ削りする。

土坑 380（382 ～ 386） 土師器皿（382 ～ 384）、施釉陶器椀（385）、焼締陶器甕（386）である。（385）は削り出し高台を有する。（386）は端部を上下に拡張するもの。

礎石列 285（387 ～ 390） 土師器皿（387）、巴文軒丸瓦（388）、軒平瓦（389・390）である。（389・390）は、瓦当面の右部分で反転する花文を有する。

溝 430（391 ～ 416） 下位（391 ～ 398）、中位（399 ～ 403・405・410・412）、上位（404・406 ～ 409・411・413 ～ 416）に分けた。

下位の遺物は、土師器（391・392）、白磁（393）、施釉陶器（394）、瓦質土器（395・396）、青磁（397・398）である。土師器（391・392）は皿である。白磁（393）は壺の口縁部で端部を外折させる。施釉陶器（394）は、口縁部が外湾して端部を上方に拡張するもの。瓦質土器（395・396）は、鍋（395）と羽釜（396）である。

中位の遺物は、土師器（399）、青磁（400・401）、焼締陶器（403・405）、瓦質土器（410）、磁器（412）である。土師器（399）は丸底鉢である。青磁（400・401）は、皿（400）と椀（401）である。（401）は外面に蓮弁がある。焼締陶器（403・405）は、端部を折り曲げるもの（403）と上下に拡張するもの（405）である。瓦質土器（410）は、風炉の口縁部片。端部を内側に拡張する。花文を浮き彫り表現する。磁器（412）つまみを有する小形の蓋である。印籠受け状の縁部をもつ。

上位の遺物は、焼締陶器（404・407）、須恵器（406）、瓦質土器（408・409・411）、塼（413・414）、軒丸瓦（415）、軒平瓦（416）である。焼締陶器（404・407）は、口縁部が外湾して端部を肥厚するもの（404）、口縁部が強く外湾して端部に上下に著しく拡張するもの（407）である。須恵器（406）はすり鉢である。端部を斜内上方に拡張するもの。粗い卸目を有する。

瓦質土器（408・409・411）は、火鉢（408・409・411）の口縁部片である。（408）は円形浮文、（409・411）は菊文をスタンプするもの。

塼（413・414）は、円孔を焼成前に穿つもの。表面は縄叩きと布目痕を残す。軒丸瓦（415）は、三巴文と大ぶりの珠文を配するもの。軒平瓦（416）は、剣菱文を有するもの。

埋甕 538（417 ～ 422） 土師器皿（417・418）、瓦器の羽釜（419）、緑釉陶器椀（420・421）、焼締陶器（422）である。（419）は直立する口縁部に短く水平の鍔を貼り付けたもの。（420・421）は近江系のもの。（422）は常滑焼の大甕である。口頸部がうち欠かれている。肩部に稜を有するもの。底部は凹底である。

溝 428（423 ～ 439） 最下層（423 ～ 427）、下位（428 ～ 435）、中位（436 ～ 438）、礫層（439）に分けた。

土師器（423 ～ 430）、白磁（431・432）、青磁（433・437 ～ 439）、須恵器（436）、軒丸瓦（434）、塼（435）である。

土師器は、へそ皿（423）、皿（424 ～ 429・436）、盤（430）がある。

白磁（431･432）は、椀の底部片。削り出し高台を有する。青磁（433･437 ～ 439）は、椀（433･438・439）、皿（437）である。（437）は輪花の口縁部を有する。外湾する口縁部と削り出し高台のもの。内面に草花の陰刻文がある。（439）は蓮弁を有するもの。

軒丸瓦（434）は三巴文のもの。磚（435）は焼成前に円孔を穿つ。端面に円形のスタンプがある。

E　近世（図版 78）

池 256（440 ～ 455）　土師器（440 ～ 446）、施釉陶器（447･448）、染付（449）、軒丸瓦（450･451）、軒平瓦（452 ～ 454）、鬼板瓦（455）である。

土師器（440 ～ 446）は、皿（440 ～ 445）、甕（446）である。（445）は完形品。口縁部に灯芯痕跡を残し灯明に使われたもの。（446）はタタキ整形で口縁端部を内上方に肥厚するもの。

施釉陶器（447・448）は、椀（447）、輪花皿（448）である。染付（449）は底部片。

軒丸瓦（450・451）は、三巴文のもの。軒平瓦（452 ～ 454）は、中心飾りに花文（453）、草文（452・454）を配するもの。いずれも燻瓦である。

鬼板瓦（455）は、板状を呈し、縁部に凸帯を巡らせる。燻瓦である。

埋甕 53（456）　深鉢形を呈するもの。口縁端部は内外に突出させる。頸部に櫛原体による直線文を施す。

（2）石製品・ガラス製品・木製品（図版 79）

滑石製石鍋（457 ～ 460）　石鍋の断片を加工して温石に再利用したもの。（457）は、口縁部片。図化した左側面に斜めに再加工するノミ痕を残す。5F 地区、土坑 225 出土。（458）は、口縁片の両側面に縦方向の再加工面を残す。5G 地区、土坑 286 出土。（459）は、図化した上面に再加工面を残すもの。5H 地区、土坑 310 出土。（460）は、図化した左上に端面に再加工面を残すもの。5F 地区、土坑 319 出土。

砥石（461 ～ 470）　仕上げ砥（461・462・464・466・467・470）、中～仕上げ砥（463・465・468・469）である。仕上げ砥は、長方形を呈した頁岩製で、小型のもの（461・462・464）、長方形～方形を呈し、両面に多数の溝状の擦痕を伴う凹みを残すもの（466･467･470）に分けられる。中～仕上げ砥は砂岩製で、平面台形、断面方形ないし長方形を呈す。各面に擦痕を残すもの。

（461）は 5G 地区、土坑 287、（462）は 5H 地区、土坑 310、（463）は 7H 地区、土坑 317、（464･465）は 5G 地区、土坑 320、（466）は 5G・5H 地区、礎石列 285、（467）は 5G 地区、土坑 286、（468）は 5G 地区、土坑 367、（469）は 5G 地区、土坑 392、（470）は 5G 地区、土坑 345 出土。

石製円盤（471･472）　粘板岩製。円形に加工した中央に円孔を穿つもの。紡錘車としての用途を持ったかもしれない。（471）は 6F 地区、溝 325、（472）は 5G 地区、4 層上面出土。

太型蛤刃石斧（473）　玢岩製。弥生時代中期の石斧を再加工したもの。用途不明。8M 地区、井戸 528 出土。

木箸（474･475）　断面方形の木製箸である。（474）は末側が残る。4F 地区、井戸 279b 出土。

（475）は、11 L 地区、井戸 509 出土。

碁石（476･477） 石英製の碁石。（476）は 6 H 地区、土坑 247。（477）は 10 L 地区、土坑 519 出土である。

ガラス棒（478） 明青色を呈するガラスを捻り棒状にしたもの。4 F 地区、土坑 260 出土。

（3）鉄製品・青銅製品（図版 79 ～ 81）

鋏（479） 先端を折り曲げて尖らせる鋏の断片である。断面長方形を呈する。5 F 地区、土坑 319 出土。

鉄釘（480 ～ 485） 方頭釘（480 ～ 484）、雁股鏃（485）である、先端が曲げられたものもある。（480）は 6 G 地区、土坑 381、（481）は 7 H 地区、土坑 317、（482 ～ 484）は 4 G 地区、溝 256 出土。（485）は、頭部と先端を欠損する。6 F 地区、土坑 261 出土。

和鏡（486） ピット 560 から出土した。完形品である。内区に二羽（双）の鳥（カササギ）と松葉・花を配する松花双鳥文鏡である。鋳上がりも良い優品である。鈕は、菊花座で 11 世紀後半～ 12 世紀に位置付けられる文様である。内区は、二羽（双）の鳥を左右で天地逆に配置し、一連の松は外区に向けて展開する。また、草花文は、左巻きの草花文と二又に枝別れする草花文が外区に向けてそれぞれ展開する。そして外区の空間を埋めるように蝶々が表現される。径 10.3cm。鏡胎の厚さは、内区 0.10cm、外区が 0.15 ～ 0.20cm である。

本鏡は、11 世紀後半の鏡胎の確立と多度式鏡に端を発する絵画文の系譜にある資料である[2]。鏡胎は厚く、白銅質で文様の残りは頗る良い。仮に鏡の品質を 5 ランクに区分すると、2 ないし 3 ランクに当たり、優品の部類に含まれる。この文様の変化から年代を推定することができる。カササギの尾羽は 3 本表現され、古い様相をもつが、羽は形式化が進み頭の見返りが定型化している。以上から 12 世紀後半の年代と推定される。これは、調査時の遺構の年代観と大きな齟齬がない。和鏡は、墓、地鎮など葬具、鎮魂具として発見されることが多い。本例は、ピットからの出土であり、地鎮の可能性を推定しておきたい

青銅鍋（487･488） 2 点出土した。（488）は手鍋の把手部片である。本体との連結のためのリベットが 3 箇所残る。

（487）は、完形の鍋である。土坑 322 から逆転して出土した。鍋は、底部を調査時に破損させてしまったが、本来完形の優品で、すこぶる残りが良い。平らな底から体部が斜め上方に立ち上がり、口縁部を受け口状につくるもの。対向する位置に吊耳をもつ。吊耳部分は、花弁を表現した U 字形の鉤と口縁部に鋳だされた部分に分かれ、円孔に装着してリベット状に固定する。鍋の口径 23.3cm、器高 8.0cm、厚さ 1mm。

中世の鍋は金属製、土製、石製の 3 種が知られている。金属製鍋は、鉄製、青銅製ともに鋳型に金属を流し込んで作る鋳造によるもので、鉄製品が一般に多い。鋳鉄鋳物は、「一般鋳物」と呼ばれる実用本位の品物であり形状は単純なものが多い。対して、青銅鋳物は、「美術鋳物」と呼ばれ、宗教的器物である。ただし、本来、青銅で作られる器物が鉄で作られる、あるいは、その逆もあっ

たようである。また、鋳造遺跡の調査例から銅鉄兼業の生産形態をとるものが多かったと想定されている。本例も、鉄製の形態（五十川分類の鍋B）を摸倣したものである[3]。弦をつけるための穴のあいた吊耳部分を口縁に付加した形態のものである。鉄製品は底部に短い三足がつく。また、片口につくる銚子もある[4]。平安京内では、片口タイプが左京五条三坊十町、左京五条三坊九町（室町時代後期）等にあり[5]、寺院に関連する地点や工房で出土する傾向がある。鋳鉄製の神仏具も知られている。本資料は、青銅製であるが銘文がなく、煤も付着した実用品であるから、「一般鋳物」とすべき資料である。

なお、本宅地では、銅製品を鋳造しているが、外部から持ち込まれた可能性もある。いずれにせよ、年代の明確な青銅鍋がほぼ完全な形で出土することは極めて稀であり、鋳造の技術史を解明する上でも意義がある。

（4）鋳造関連資料（図版81）

土製鋳型（489～493・496） 青銅製品の鋳造に使われた鋳型である。鎌倉時代と室町時代後半の遺構に伴って出土している。

板状を呈する破片（489～493）とほぼ全形を復原できたもの（496）がある。板状を呈するものは、鋳型面に製品の文様を残すものがないので何を鋳造したかは明確でない。厚さ2.5～3.0cmで、長方形ないし楕円形をしていたと推定される。鏡、貨幣などの小型品の鋳造に供したものであろうか。（489）は4F地区、井戸279a、（490）は4G地区、池256、（491）は5G地区、土坑286、（492・493）は4G地区、4層出土。

（496）は球状を呈するもの。いくつかの鋳型を組み合わせて使用するための部位片で上部が残る。上部外面に帯状の文様帯が2条巡る。さらに上部内面に落とし込む形で円盤が作られている。この鋳型で何を製作したのか確定することは難しい。球体で文様をもつ内型とみると、擬宝珠などの製品かもしれないがさらに検討が必要である。7H地区、鎌倉時代の土坑608出土。

フイゴ羽口（494・495） 羽口の断片がある。（494）は4H地区、ピット267、（495）は5H地区、土坑310出土。

取瓶（497・498） 椀形を呈するもの（497）、筒状を呈するもの（498）がある。（497）は5G地区、室町時代の溝367上位、（498）は6F地区、3層出土。

（5）銭貨（図版82・図19・表4）

出土した銭貨は、総数99点である。そのうち、銭文を判読できたものが60点（うち、渡来銭42点）、不明39点である。銭文を判読できたものは平安時代から江戸時代に鋳造された銭貨であり、その内訳は、北宋銭38点、寛永通寶15点、南宋銭3点、皇朝十二銭2点、明銭1点、絵銭1点である。寛永通寶は永井久美男氏の3期区分に従うと、1期と3期の資料がある[6]。背上部に「文」の字があるものは確認されていない。また絵銭には大黒天が描かれている。

銭貨別の出土個数は1～3点のものが多い中で、皇宋通寶が7点、元豊通寶が5点、元祐通寶が

６点、寛永通寶１期が９点、寛永通寶３期が６点あるという組成上の傾向がある。また銭貨それぞれの出土個数を初鋳年順に並べると、祥符通寶（1009 年）から皇宋通寶（1038 年）、嘉祐元寶（1056 年）から紹聖元寶（1094 年）の期間にはそれぞれ複数枚の銭貨が出土しており、一定の年代幅を有する。

銭貨は、包含層（１層～４層）と遺構面及び遺構から出土した。以下、報告番号順に詳細を述べる。なお、銭貨の基本情報は、一覧表を参照願いたい。

（499 ～ 505）はすべて１層から出土した。うち紹聖元寶（499）、乾道元寶（500）は渡来銭である。寛永通寶は１期（501 ～ 503）と３期（504）の各資料がある。（505）は、絵銭である。形状は円形方孔で大黒天が描かれている。

（506 ～ 510）は、築地地業 114、土坑 54、土坑 67、土坑 117 出土である。土坑 117 からは北宋銭の天聖元寶（508）が寛永通寶１期（509･510）とともに出土したが、混入品とみられる。また、寛永通寶と比べ銭文が摩耗している。

（511 ～ 524）は２a 層出土である。

（525）は、土坑 95 から出土した。政和通寶である。（526 ～ 530）は２b 層から出土した。主に北宋銭が出土しているが、南宋銭である嘉泰通寶も１点ある。

（531 ～ 533）は池 256 の掘方から出土した。３点とも北宋銭である。（534 ～ 540）は３a 層から出土した。

（541 ～ 547）は溝 430、井戸 279a、土坑 269、土坑 319、土坑 391、土坑 392 出土である。（541）は、永楽通寶（1408 年）である。溝 430 上層埋土の礫群から出土した。礫投棄時に混入したもので埋没年代の一時点を示すものと推定される。（548）は３b 層出土である。

（552 ～ 586）は溝 535、井戸 130、土坑 163、土坑 386、土坑 448、土坑 506、土坑 536、土坑 627、ピット 444、埋甕 538 出土である。（553 ～ 557）は井戸 130 から出土した。北宋銭が３点、南宋銭が１点、不明１点ある。そのうち天禧通寶（557）は井戸枠に付着した状態で出土した。（566）は隆平永寶である。鎌倉時代のピット 444 から出土し、混入品である。（566 ～ 586）は埋甕 538 から出土した。そのうち 19 点が甕内の北半分から出土している。北宋銭は祥符通寶（567）と皇宋通寶（570）が出土している。（572・573）、（574 ～ 578）、（579・580）、（582 ～ 584）はそれぞれ癒着しており、文字が判読できない。さし銭であろう。（587 ～ 590）は４層から出土した。（587）は皇朝十二銭の富壽神寶である。元祐通寶（588）は井戸 130 と同じ地区から出土しており、関係性を推定される。（549）は４層出土である。なお、各層の中で最も銭貨の出土量が多い。

（591 ～ 597）は表採及び攪乱から出土した。

註

1）古代～中世の遺物記載では、下記の文献を参考にした。

田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966 年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981 年

『太宰府条坊跡Ⅲ』太宰府市教育委員会　1984 年
森田 稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 日本中世土器研究会　1987 年
『古代の土器研究 - 律令的土器様式の西・東３施釉陶器』（古代の土器研究会第３回シンポジウム）
古代の土器研究会　1994 年
『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社　1995 年
橋本久和「楠葉産瓦質土器からみた平安末・鎌倉時代」『陶磁器の考古学』第３巻　雄山閣　2016 年

２）和鏡については、久保智康氏に関連資料の提供をいただき、各種のご教示を得た。下記の文献を参考にした。

久保智康『中世・近世の鏡』（日本の美術 No.394）至文堂　1999 年
久保智康『鋳造遺跡研究資料 2004』鋳造遺跡研究会　2004 年

３）青銅鍋、および一部の鋳型については、五十川伸矢氏、久保智康氏のご教示を得た。

４）五十川伸矢「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』46 号　1992 年

５）『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書 2015 － 7』(公財) 京都市埋蔵文化財研究所　2015 年

６）永井久美男編『日本出土銭総覧』1996 年版　兵庫県埋蔵銭調査会　1996 年　47 頁

参考文献

『江戸期銭貨概要』日本銀行調査局　1965 年
嶋谷和彦「中世出土銭貨研究の現状－国内模鋳銭を中心に－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第８集　帝京大学山梨文化財研究所　1997 年
内田好昭「第３節　その他の遺物　1　貨幣」『平安京左京北辺四－第２分冊（公家町）－本文』財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2004 年
櫻木晋一『貨幣考古学の世界』ニューサイエンス社　2016 年

Ⅳ　まとめ

1　遺構の変遷（図９～18、表２）

まず、検出された主な遺構群を時期別に整理する。遺構の確認されなかった空白期も含め、特徴的な遺物も合わせて列記することにしたい。なお、時代区分と京都土器編年は必ずしも一致しないが、参考のために対比しておく。

＜平安京以前＞

弥生時代後期以前：氾濫堆積物

弥生時代後期：弥生土器

古墳時代前期：土坑580・581

古墳時代中期：なし

古墳時代後期：後世の地層に混入

飛鳥～奈良時代：なし

＜平安時代＞

平安時代前期（京都Ⅰ期・794～840年頃）：土坑551・559・562・563、ピット

平安時代前期～中期初（京都Ⅱ期・840頃～930頃）：井戸540・土坑568・溝554・558・589・670・684・698・ピット

平安時代中期（京都Ⅲ期頃～Ⅳ期頃・930頃～1080・1090頃）：前半遺物少量、遺構なし

平安時代後期（京都Ⅴ期頃：1080・1090頃～1180頃）：なし

＜中世＞

鎌倉時代（京都Ⅵ期古頃～Ⅶ期中：1180頃～1330頃）：井戸130（方形木組礫裏込）・509（方形木組）・517（小型木組か）・518・362（小型木組）、土坑310（鍛冶遺物廃棄）・612（竪穴）・672・埋甕538、礎石列561、ピット群、

南北朝時代（京都Ⅶ期新～Ⅷ期古：1330頃～1390頃）：井戸279b（多角形井戸枠）、土坑153・345・381・391・406・524、溝165、ピット群

室町時代前半（京都Ⅷ期中～Ⅸ期新：1390頃～1500頃）：溝367・622、柵600・礎石列667、土坑236・276（へそ皿多量）・277・317・309・623・624ピット群

室町時代後半（京都Ⅹ期：1500頃～1580・1590頃）：溝325・368・428・430、礎石列285、井戸279a（方形木組）・土坑156・273・286（土製鋳型）・319・322（青銅鍋）・380、ピット群

＜近世＞

安土・桃山時代：池256、土坑131・260・263・264、溝132、井戸528、ピット群

江戸時代：井戸93、土坑群、ピット群、礎石、野井戸125

＜近代＞

幕末～明治時代：柵50、築地地業114、埋甕13・53、池48、路面51、井戸128、土坑群、ピット群

以上の遺構・遺物のあり方から、遺跡の形成過程に画期を見出すとすれば概ね４期に区分できよう。

すなわち、最初のヒトの活動・生活痕跡である古墳時代前期（１期）、平安京遷都に伴う遺構の形成時期（２期）、平安時代の空白期間をおいて遺構が形成された鎌倉時代（３期）、本願寺の移転に伴う遺構の形成された安土・桃山時代（４期）である。以下、各画期別の遺構・遺物の成果を整理し、課題について触れておきたい。

２　調査の成果と課題

（１）１期（平安京以前）

下層の旧鴨川の氾濫堆積の上面において、古墳時代前期・後期の資料を確認した。従って、小規模ながら当該期の遺跡が付近に存在したことを示す成果となった。今後、周辺の成果と合わせ居住域の実態解明が課題となる。ところで、遺跡の基盤を形成している砂礫層については、地理学的成果と合わせて地層の形成年代を知ることができた意義は大きい。Ｖ章でまとめられているように、下層の流路が形成されたのはAD２世紀前半～３世紀中葉のことで、考古学的成果（二重口縁壺）との対比では３世紀中葉（庄内式期）に時系連続的に遺跡が形成されていることが示唆される。本調査地点の西120m大宮キャンパス内においても古墳時代前期の布留式土器を含む湿地を確認しており[1]、古墳時代の集落が広がっていた可能性が高い。

（２）２期（平安京遷都と平安時代前期）

平安時代前期は、東市の市司の一角に置かれた「厨」関連の官衙施設であった可能性がある。

第2調査区を中心に、土坑、井戸から9世紀前半の土器、瓦類がまとまって出土した。相当規模の方形井戸の存在、「厨」銘線刻緑釉陶器、土師器食器を中心とする遺物組成から、東市の政所に設けた厨房に関係するものと推定される。東市の利用状況を推察させる史料の一つである、『正応五年東市指図』[2]では、五町域は「市司」と記されている。今次調査成果と総合すると、五町は南西部に市司の厨を配置する官衙配置であったことになる。東市には、４箇所の門が設置されており、南正門に相当する猪熊門が正門とすれば、正門に近い側に厨が設置されたことになる。

また、土師器の供膳形態には、類似した表現の線刻土器がまとまって出土した点も注目して良い。同じ表現が墨書土器にも見られるなど、線刻土器の使用階層の問題を検討する資料となるであろう。

町割りにおいては、西一・二行、北五～七門に推定された。溝、柵等で一致するものがなく広域的な宅地利用であったと推定される。

ところで、検出遺構のうち、井戸540の廃棄段階の資料が京都Ⅱ期段階の資料であることは、東市の機能変化と関係するものとみて良い。一方、西市は承和９年（849）に衰退の兆候を示し、逆に東市は繁栄していたとみられ（『続日本後紀』10月20日条）、東市よりも早く衰退が始まったとみられてきた。この東市も10世紀後半にほとんど活動痕跡が見られなくなるのである。律令国家

表２　平安京左京七条二坊五町（東市町）の変遷

土師器の年代		時代区分	主な遺構	宅地の性格	関連史料記事
I	中	794 年	I 中　土坑 559	＜東市＞	
	新				
840 年頃					
II	古				849 年 西市は衰退の兆候、
	中		II 中　方形井戸 540　II か？溝 554・670		東市は繁栄「百姓悉く東に遷り・・」
	新		II 新　土坑 565 溝 558		（『続日本後紀』）
930 年頃					
III	古	平安時代	この頃に平安京東市衰退		
	中				
	新				
1010 年頃					
IV	古		（遺構の希薄な空白期間）		
	中				
	新				
1080 年頃					
V	古				1102 年 稲荷祭で「市町桟敷」
	中				（『本朝世紀』）
	新				1178 年 次郎焼亡で七条大路の南北
					50~60 町被災（『群書類聚』）
1180 年頃				＜七条町＞	
VI	古	1185 年	和鏡ピット 560		1231 年「七条町」の賑わい
	中	鎌倉時代	VI 中　小鍛冶土坑 310		（『明月記』）
			VI 中～新　土坑 612		
	新		VI 新　井戸 509・362		
			VI 新　土坑 420		
1270 年頃					
VII	古		VI 新～VII 古　礎石列 561		1284 年 一遍上人市屋道場で踊念仏
	中			＜八条院町＞	1292 年『正応５年古図』
			VII 中～新　井戸 130		「東市町」（『貞幹識語』）
	新	1333 年	VII 新　土坑 406		1345 年 光明天皇の勅により本国寺
1360 年頃					
VIII	古	南北朝	VII 新～VIII 古　土坑 153・398		
			VIII 古　土坑 344・345		
	中	1392 年	VIII 古～中　土坑 381		
	新	室町時代	VIII 新　井戸 279b		
			VIII 新～IX 古　土坑 392		
1440 年頃					
IX	古		IX 古　区画溝 367		1467~77 年 応仁・文明の乱
	中		IX 中　地下式倉庫 261		
			IX 中～新　鋳造関連土坑 236		
			土器溜まり 287		
	新	1491 年	IX 新　土坑 268 鋳型		
1500 年頃					
X	古	戦国時代	IX 新～X 古　青銅鍋土坑 322		1536 年 天文法華の乱
			X 古　南北大溝 430 礫投棄		
			X 古　井戸 279a		
			X 古　地下式倉庫 319		
	中		X 中　南北大溝 428		
	新	1573 年			1591 年 秀吉により京都に寺地を与えられ、
					天満の御影堂を六条堀川へ移転。

の衰退とともに東市の実態も失われたことを考古学的に裏付けるものとして評価できる。

（3）３期（鎌倉時代以降、室町時代まで）

鎌倉時代には、井戸、土坑、小規模な掘立の柱穴と推定されるピット群など、いわゆる町家が形成されたと推定できる。

遺構群の内容は、柱穴が南側の調査区に、鍛冶資料を伴う土坑は北側の調査区に分布する傾向があり、七条大路側を正面とする町家であったと推定される。もっとも、これは七条大路まで20mほどの未調査空間を残すので推測の域を出ない。

この時期の当地付近の土地利用を知る史料がいくつかある。1178年（治承２）、次郎焼亡により七条大路の南北50～60町が被災した（『群書類聚』）。検出した遺構群の年代からみて、この後に形成された町家の可能性があろう。ちょうど、七条猪熊が「七条町」と混同されるほど賑わっていたと記される『拾遺抄註』（寿永２年：1183年）の記事、『明月記』に「七条町」の賑わいと記された時期とも重なり注目されるところである。「七条町」の中心地は、東におよそ540mに当たる七条町尻小路を中心として展開したとみられている。これらと市町との関係を再考する成果と言えよう。中世京都南部の幹線道である七条大路の機能も含めた評価が必要である。

また、鎌倉時代の宅地の性格と関係する遺物に和鏡を伴うピットがある。いわゆる鎮壇に伴うものであろうが、対象となる施設の性格の決定は難しい。国宝「一遍聖絵」に描かれた踊り念仏との関係も推測の域を出ないが、けっして無関係ではなかろう。

ところで、土坑群から鉄滓、砥石、鉄釘、砥石とともに鋳型が比較的まとまって出土していることから小鍛冶と鋳造が行われていたと判断できる。この手工業生産は、室町時代までほぼ連綿と継続していたと推定される。当地の南東の八条三坊一帯では11世紀から13世紀中葉に鋳造工房がおかれ、「八条院町」として商工業の中心地になった。これとの関係も留意を要する結果となった。

室町時代前半の遺構のうち、区画を示す遺構は注意を要する。北側の調査区では、南北方向の堀状の溝367、これを直交する東西方向の堀状の溝622がある。偶然かもしれないが、溝622は北五門・六門の境界にあたり、宅地内を区画する意識が明確になる。室町時代後半には、北調査区に東西溝368、南調査区に堀状の並走する溝428・430が加わった。とりわけ、溝428・430は一定の幅と深さを備えており防御性をもつ区画と見て良い。このような室町時代における施設は、軍事的な機能を高めた時期があったことを示唆するものであろう。

以上、七条市町においても13～14世紀、金属器工房を生業とする町家の存在が明確になり、七条町全体の実態解明を大きく前進させるものである。

（4）４期（安土・桃山時代から近世へ）

天正19年（1591）、本願寺は大坂天満から六条堀川の地へ移転した（『本願寺文書』閏１月５日条）。当地は、日野昭氏の『御境内総絵図』（寛永８年10月）の分析によって、本願寺の当地移転以来、坊官、下間家の邸宅になったことが知られる[3)]。

調査では、近世初頭に池が設けられ、埋没時に多量の桟瓦とともに埋め戻されたこと、近世末～近代には庭と塀で区画された空間になったことが明らかになった。多量の桟瓦は敷地内に瓦葺き建物が存在したことを示し、小規模ながら庭園を有する形式は公家屋敷にも通じる財力を持った坊官であったことを推測させるものである。

註

1）網干善教『龍谷大学構内発掘調査報告書—大宮学舎西黌・清和館建設に伴なう事前調査—』龍谷大学校地学術調査委員会　1980年

2）脇田晴子「第４節王朝の経済生活」『京都の歴史』京都市　1970年図157掲載
菅田 薫「東西市」『平安京提要』古代学協会　1994年　図１掲載

3）日野 昭「平安京東市跡の変遷」『重要文化財龍谷大学正門』龍谷大学地学術調査委員会　1977年

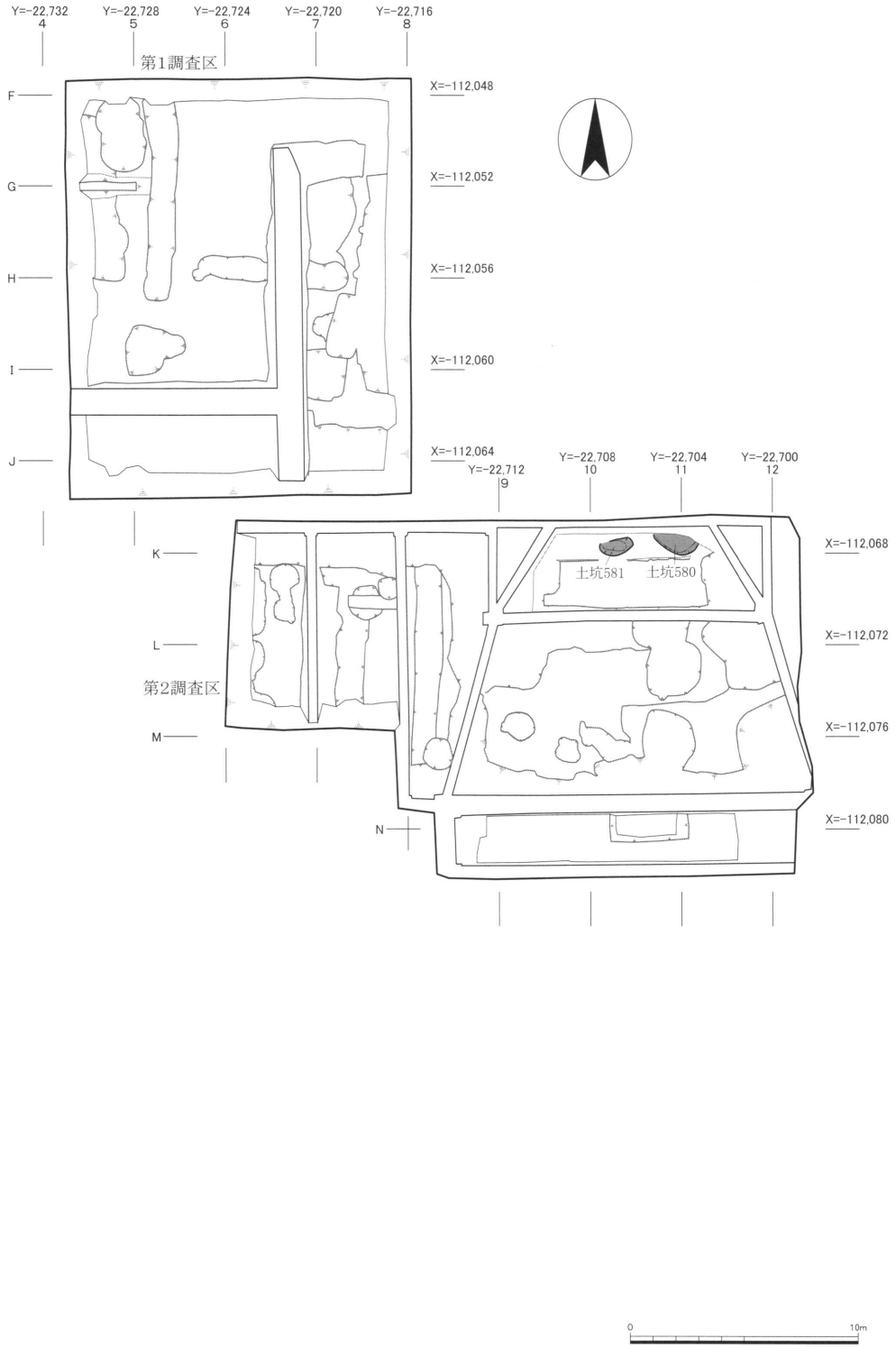


図９　遺構変遷図－１（古墳時代以前　1:300）

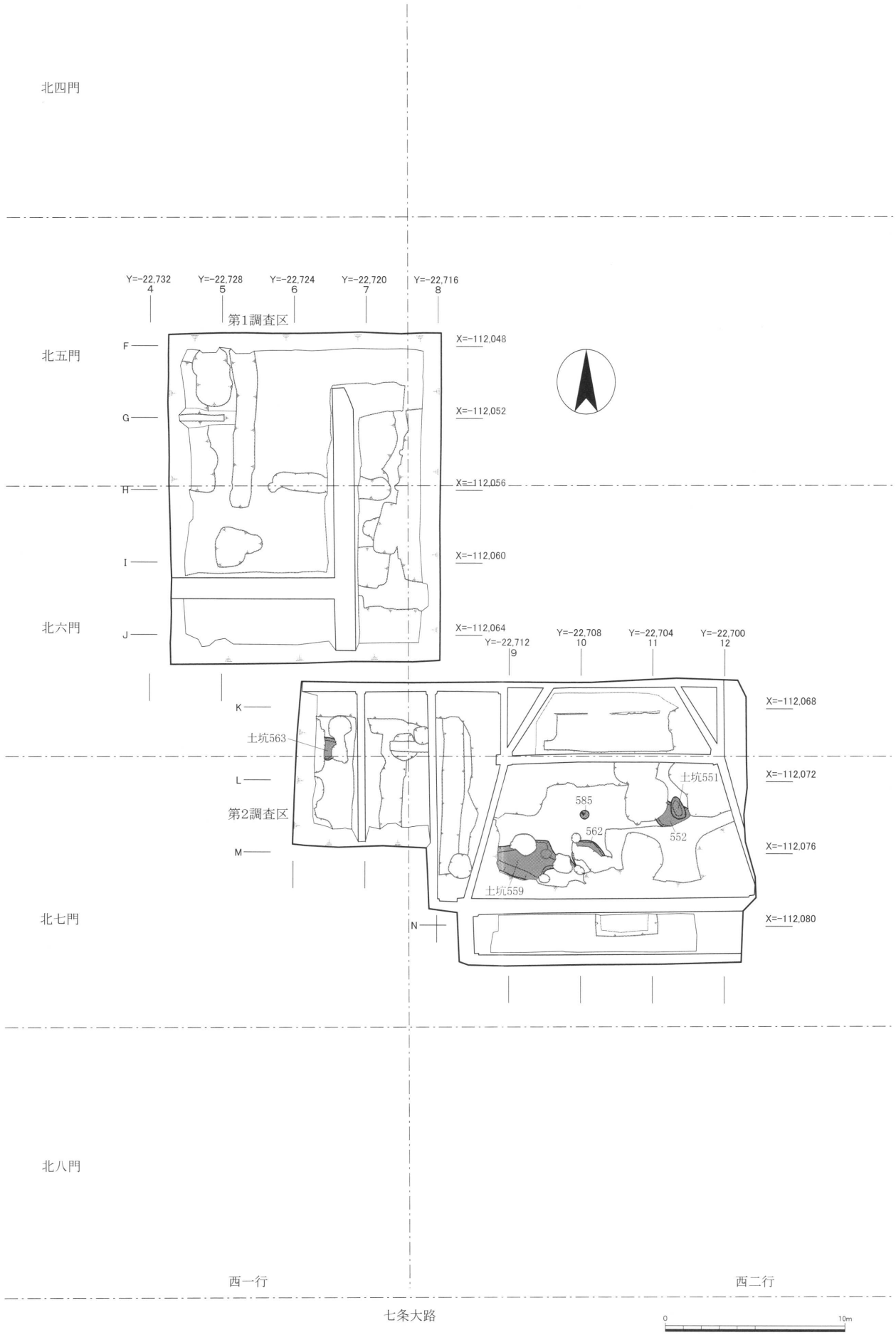


図10　遺構変遷図－２（平安時代前期：京都Ⅰ期　1:300）

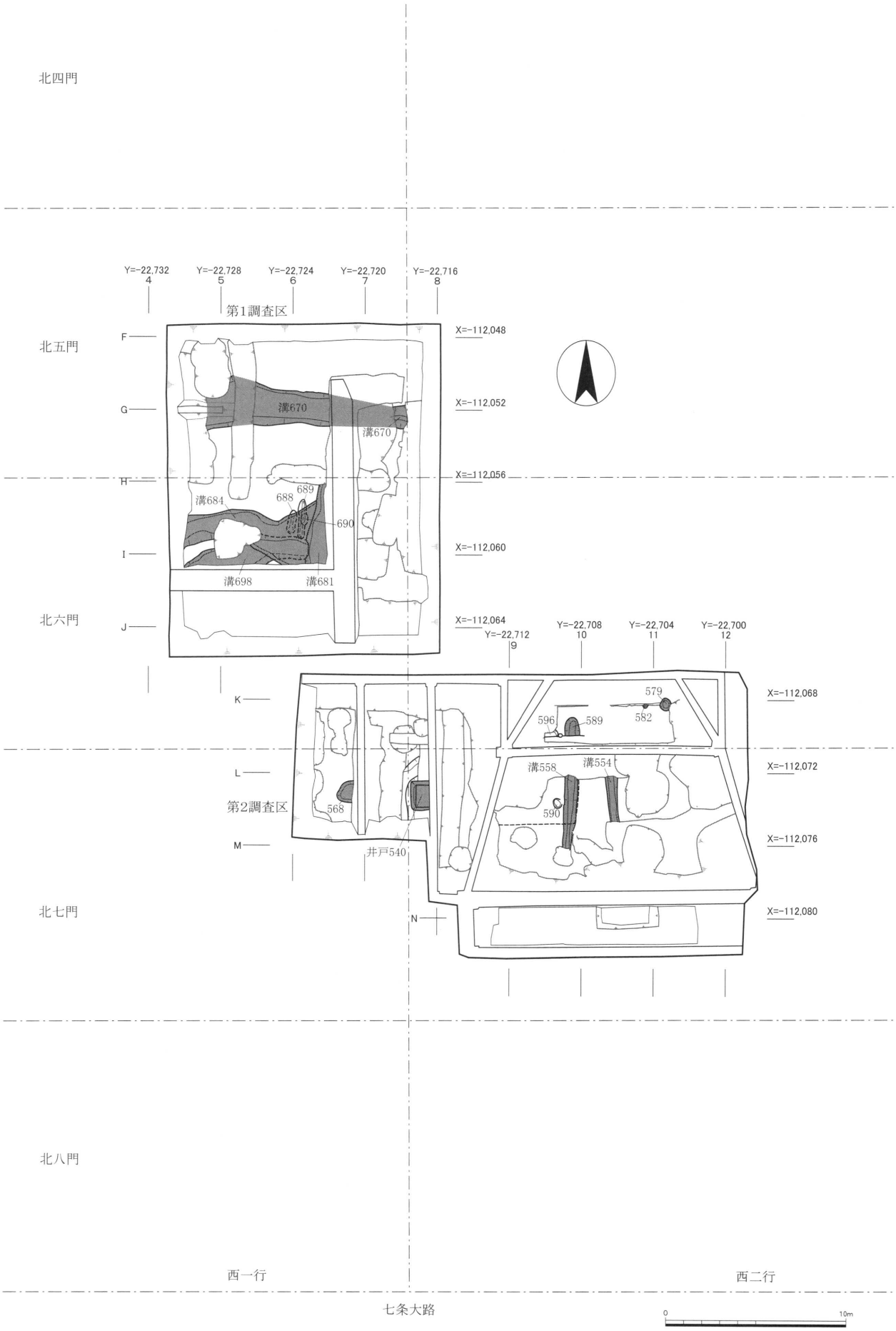


図11　遺構変遷図－３（平安時代中期：京都Ⅱ期　1:300）

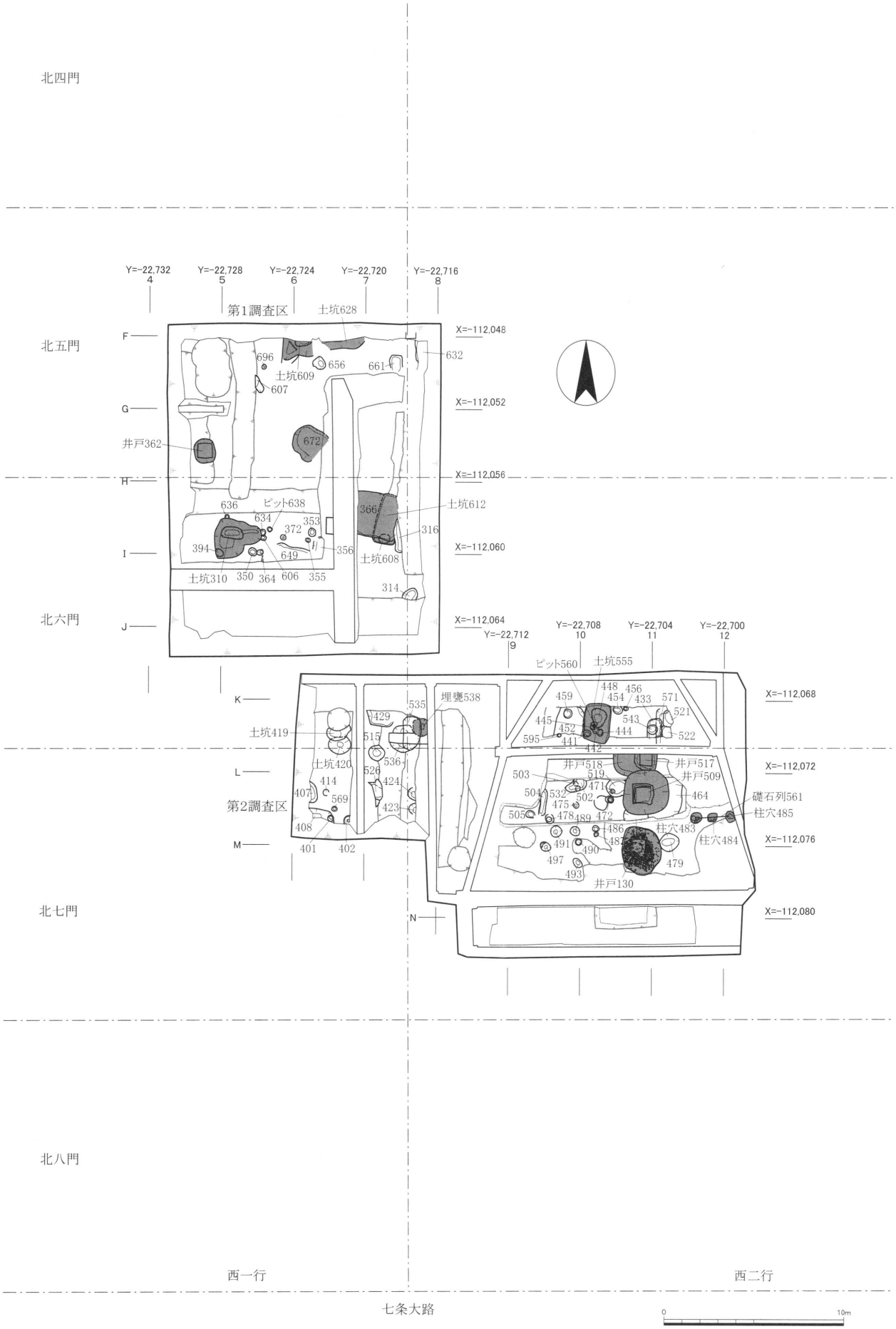


図12　遺構変遷図－4（鎌倉時代　1:300）

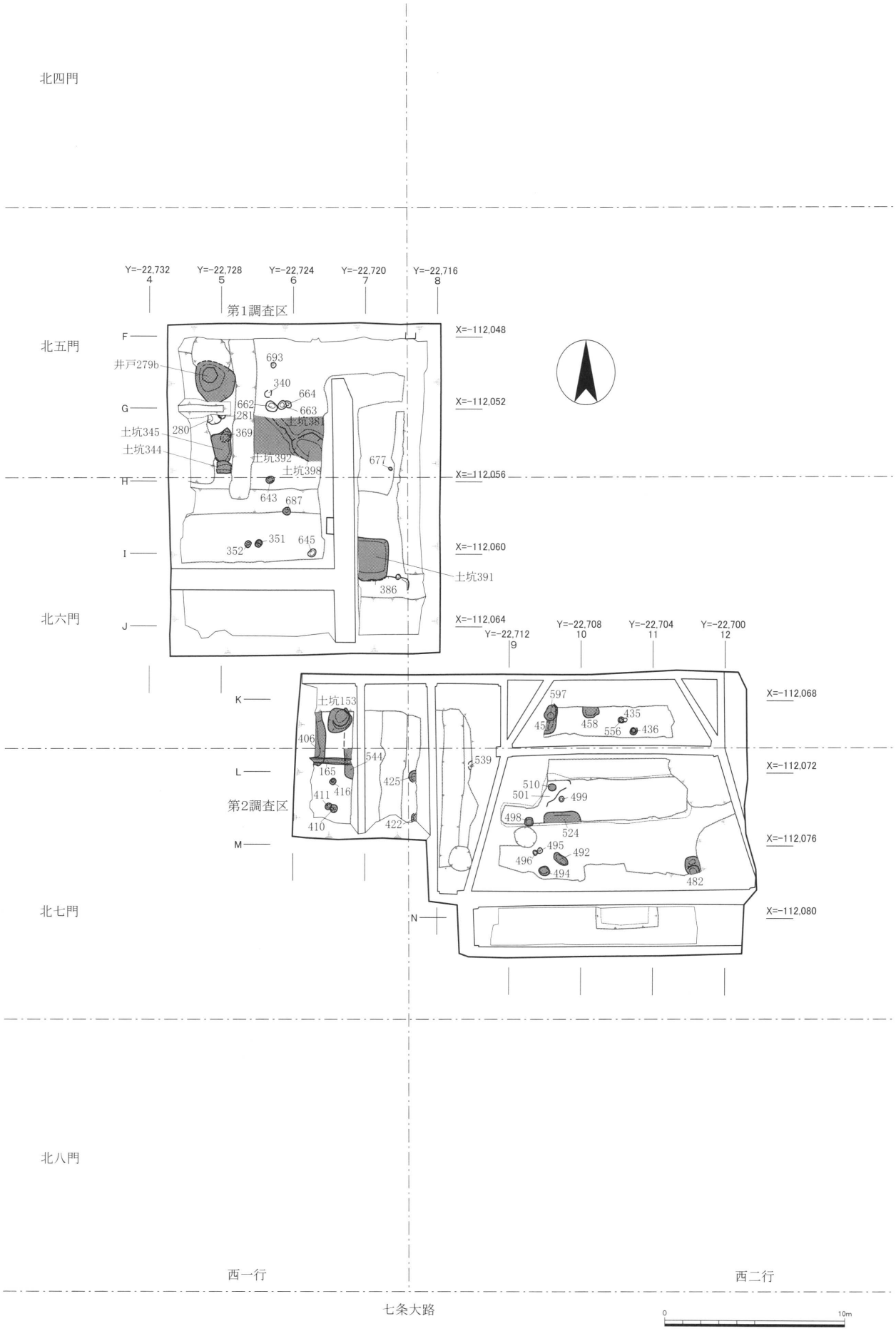


図13　遺構変遷図－5（南北朝時代　1:300）

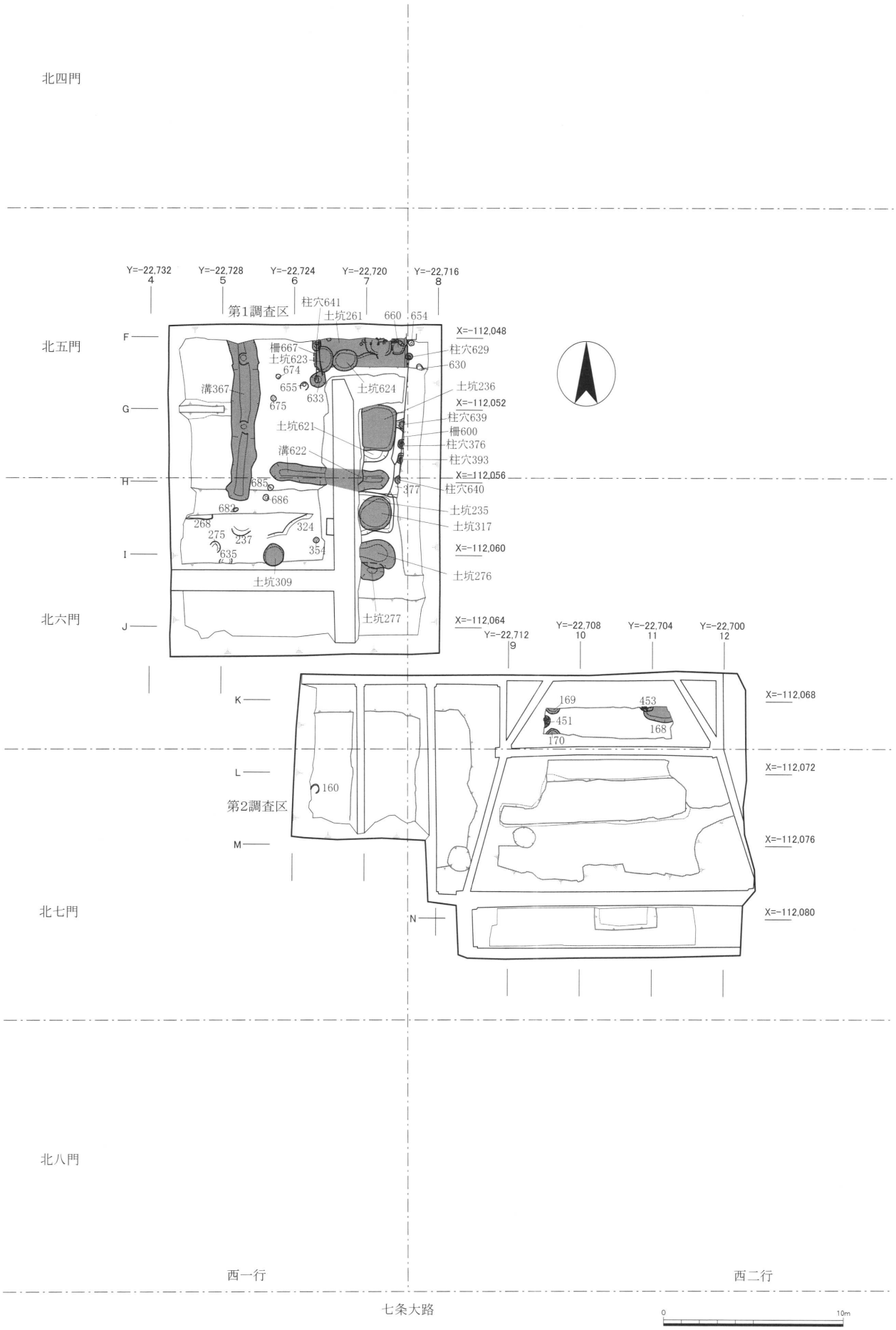


図14　遺構変遷図－6（室町時代前半　1:300）

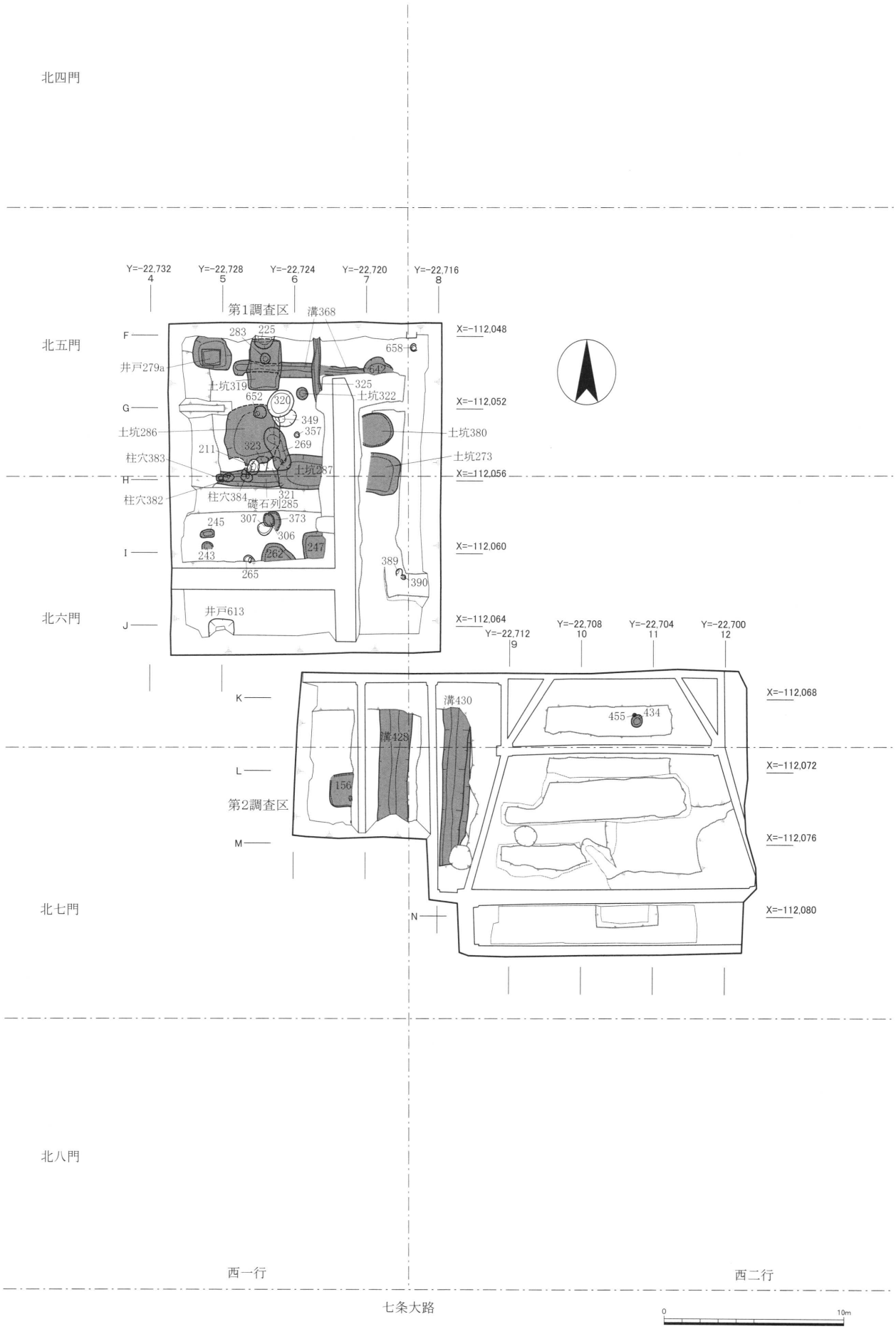


図15　遺構変遷図－7（室町時代後半　1:300）

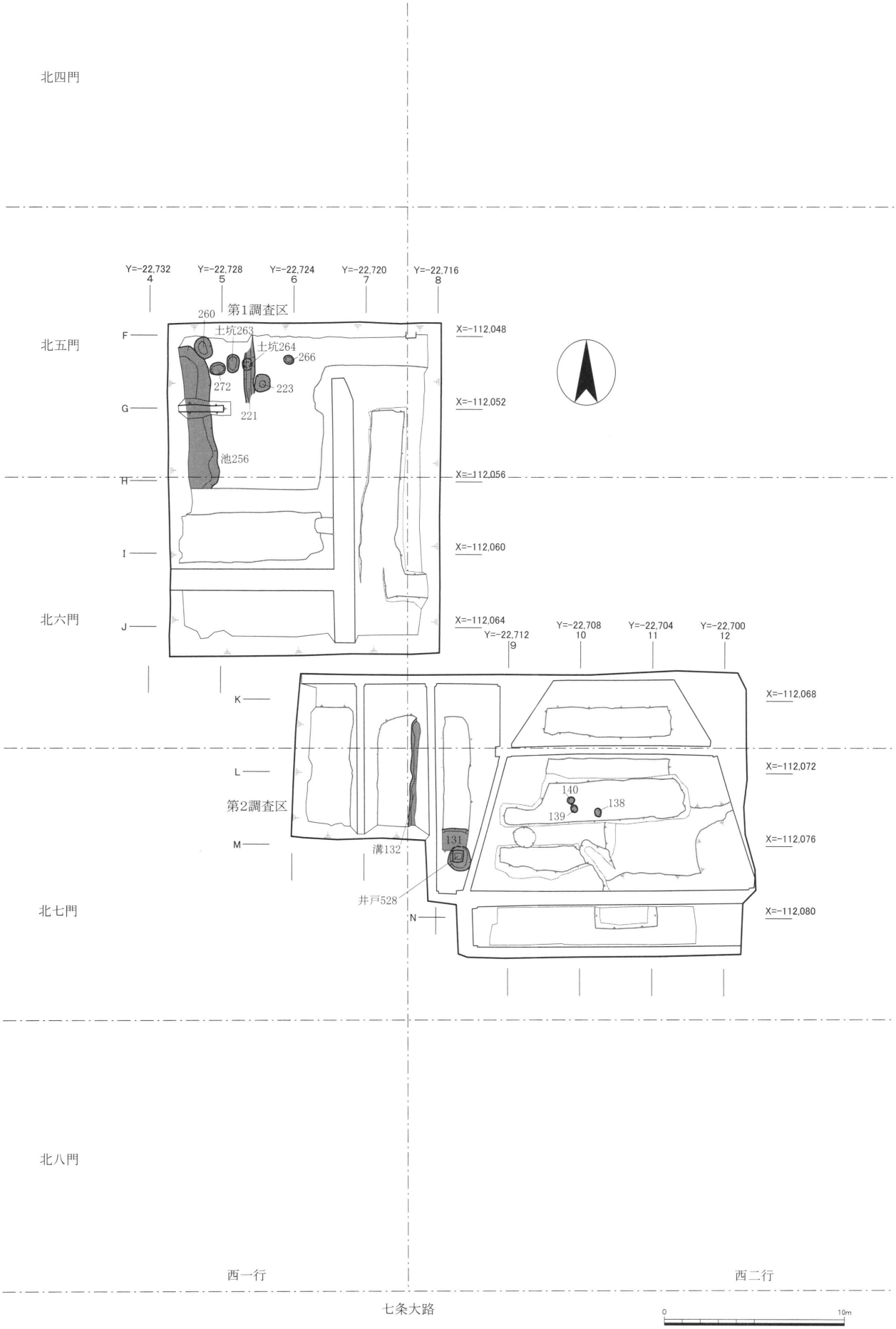


図16　遺構変遷図－8（安土・桃山～江戸時代初期　1:300）

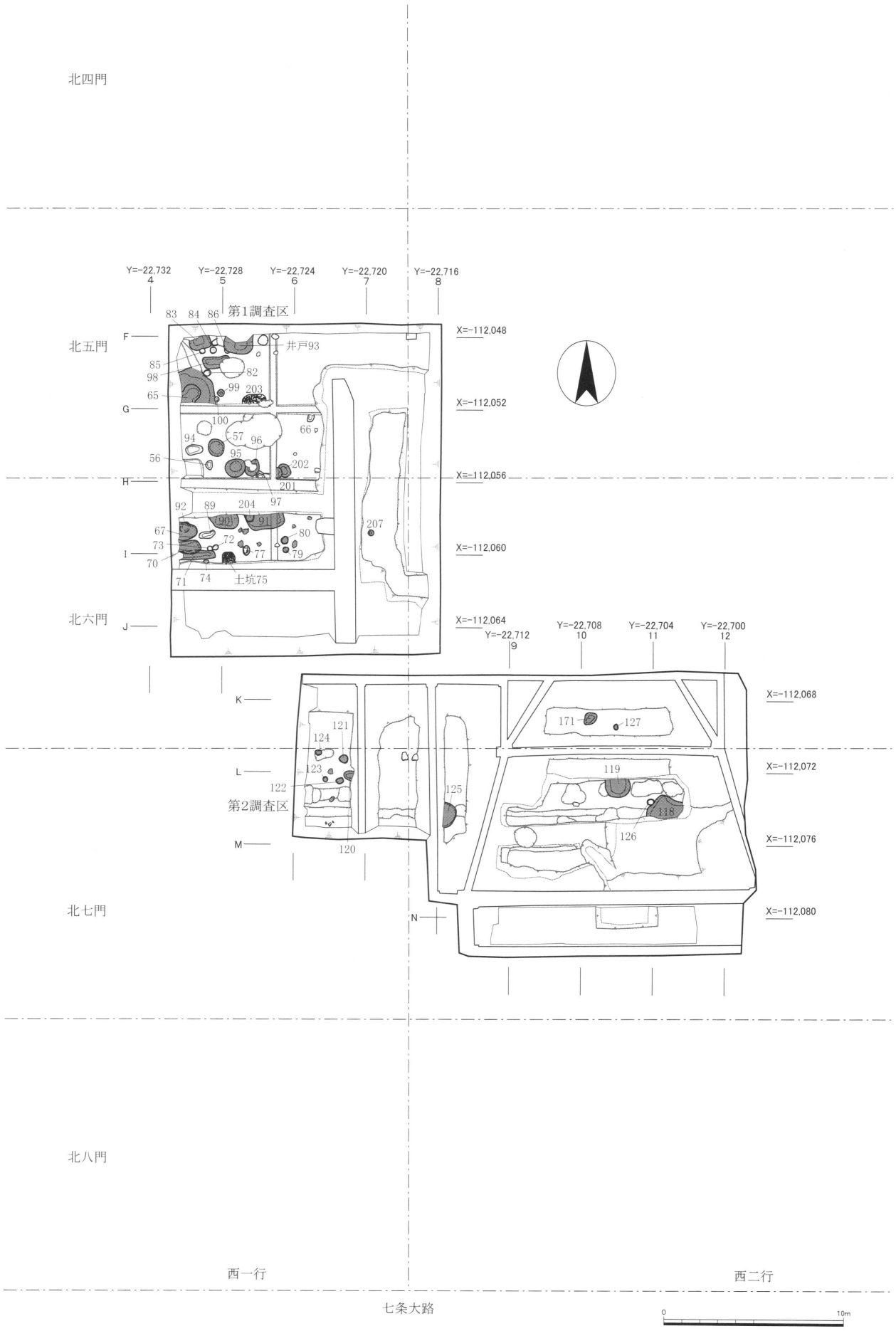


図17　遺構変遷図－9（江戸時代　1:300）

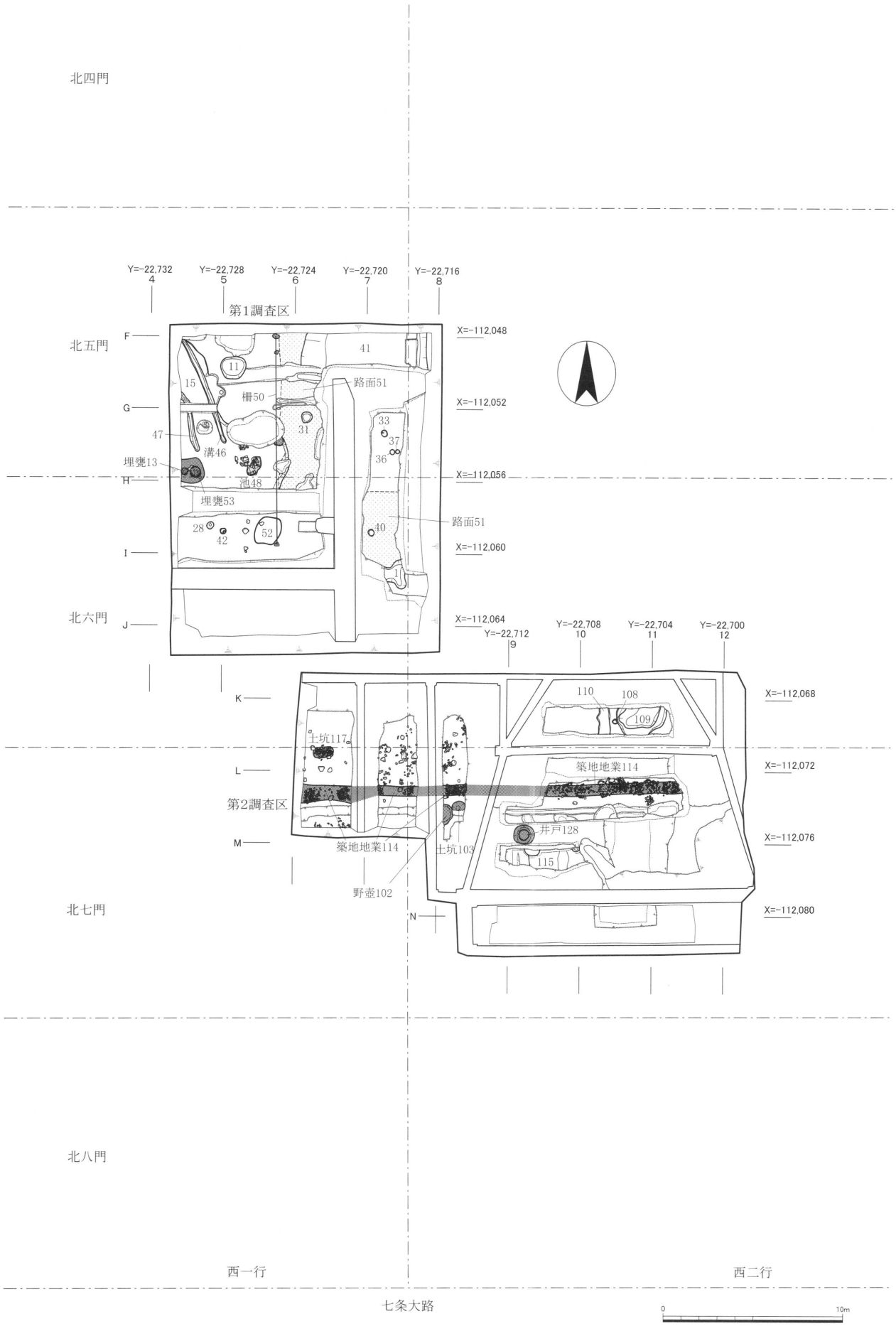


図18　遺構変遷図—10（幕末～明治時代　1:300）

表3　遺物観察表

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
57	1	古式土師器	壷	2	10J	土坑580	—	4.8	(22.2)	褐灰	7.5YR5/1	褐灰	7.5YR5/1	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	(内) ハケ・ナデのちハケ・オサエのちハケ・ハケ、(外) ヨコナデ・ナデ・ハケのちナデ・ハケ・ナデ	外面粘土ひも貼付、粘土塊複数付着
57	2	古式土師器	甕	1	5H	5層	13.5	—	(9.5)	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	(内) ハケ、(外) ハケのちナデ・ハケ	
57	3	古式土師器	鉢	2	9H	土坑597	—	—	(2.6)	にぶい橙	7.5YR7/4	明褐灰	7.5YR7/2	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	(内) 磨滅 (外) —	外面に線刻
57	4	古式土師器	壷	1	5H	ピット683	—	2.1	(2.3)	灰白	10YR8/2	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ナデか（磨滅の為調整不明瞭）、(外) 磨滅の為調整不明瞭・オサエ・ナデ	
57	5	古式土師器	高杯	1	5H	溝698	—	10.2	(5.0)	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/1	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	(内) オサエのちハケか・工具痕かミガキか（磨滅の為調整不明瞭）、(外) ミガキか（磨滅の為調整不明瞭）	
57	6	古式土師器	高杯	1		4層	16.3	12.1	23.45	浅黄橙	7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/6	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	(内) ナデ・ハケ目、(外) ナデ・ヘラ削り・ナデ	
57	7	須恵器	杯身	1	5F	土坑319	—	4.6	(2.7)	灰	N6/0	灰褐	5YR5/2	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・回転ヘラ削り	
57	8	須恵器	杯身	1	6F・6G	溝670	11.5	—	(3.6)	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石を含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・ケズリ	
57	9	土師器	皿A	2	11L	土坑551	15.9	—	2.3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・オサエのちケズリ（単位不明）	c' 手法
57	10	土師器	椀A	2	11L	土坑551	12.2	—	(3.8)	橙	5YR6/6	にぶい橙	5YR7/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・ケズリ	c 手法
57	11	土師器	椀A	2	11L	土坑551	13.2	—	3.3	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ（磨滅の為調整不明瞭）、(外) ヨコナデ・オサエのちミガキ	e 手法
57	12	土師器	高杯	2	11L	土坑551	(34.0)	—	(2.1)	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・ケズリのちミガキ	
57	13	土師器	高杯	2	11L	土坑551	—	—	(17.3)	橙	5YR6/6	明赤褐	2.5YR5/6	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	(内) 芯棒づくり・ナデ、(外) ケズリ面取り・ミガキ	b 手法Ⅴ群、7面取り
57	14	須恵器	杯B蓋	2	11L	土坑551	15.6	—	1.0	灰	N6/0	灰	N6/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデのちナデ・ロクロナデ、(外) 回転ヘラケズリのちナデ・ロクロナデ	重ね焼き痕
57	15	須恵器	杯B蓋	2	11L	土坑551	17.3	—	(1.2)	灰	N6/0	灰	N6/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	(内) ロクロナデのちナデ・ロクロナデ、(外) 回転ロクロナデのちナデ・ロクロナデ	転用硯
57	16	灰釉陶器	壷	2	11L	土坑551	—	6.8	(3.9)	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ、(外) 回転ケズリ・高台貼付時のナデ・糸切り痕か	東海産、外面に自然釉付着（10Y6/2 オリーブ灰）
57	17	須恵器	杯B	2	11L	土坑551	—	8.9	(3.2)	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英を含む）	(内) ロクロナデ・ロクロナデのちナデ、(外) ロクロナデ・高台貼付時のナデ・ナデ	
57	18	土師器	皿A	2	6K	土坑563	20.7	—	2.4	橙	5YR6/6	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ（磨滅の為調整不明瞭）、(外) ヨコナデ・ケズリ	c 手法、線刻
57	19	土師器	皿A	2	6K	土坑563	14.8	—	2.0	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ケズリ・ナデか（磨滅の為調整不明瞭）、(外) ケズリ・オサエか（磨滅の為調整不明瞭）	
57	20	土師器	椀A	2	6K	土坑563	11.9	—	(3.0)	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ナデか（磨滅の為調整不明瞭）、(外) ケズリか・オサエのちケズリ	e → c 手法
57	21	須恵器	杯B蓋	2	6K	土坑563	16.2	—	2.1	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英を含む）	(内) ロクロナデのちナデ・ロクロナデ、(外) ツマミ貼付時のナデ・回転ヘラケズリのちナデ・ロクロナデ	転用硯か
58	22	土師器	杯A	2	9M	土坑559	15.0	—	(3.7)	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	(内) ナデ、(外) ナデ・ケズリ	
58	23	土師器	杯A	2	9M	土坑559	18.0	—	4.3	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ1.5㎜以下の長石・雲母・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ケズリ	線刻
58	24	土師器	皿A	2	9M	土坑559	20.7	—	3.25	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・ケズリ・ケズリのちオサエ	b 手法、線刻
58	25	土師器	皿A	2	9M	土坑559	19.0	—	2.8	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデか・ナデか、(外) ヨコナデか・オサエ	b 手法、線刻

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
58	26	土師器	皿A	2	9M	土坑559	11.7	—	2.6	浅黄橙	7.5YR8/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ヘラケズリ・オサエ	c手法、線刻
58	27	土師器	皿A	2	9M	土坑559	19.4	—	2.7	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	良	密（φ2.5㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ケズリ	b手法、線刻、外面に黒斑
58	28	土師器	皿A	2	9M	土坑559	21.4	—	2.5	浅黄橙	7.5YR8/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	c手法、線刻
58	29	土師器	皿A	2	9M	土坑559	10.5	—	2.5	淡橙	5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ケズリ	c手法、線刻
58	30	土師器	皿A	2	9M	土坑559	20.5	—	2.7	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ケズリ	c手法、線刻
58	31	土師器	皿A	2	9M	土坑559	19.0	—	2.2	にぶい橙	5YR7/4	橙	5YR7/6	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ケズリ・ケズリのちハケ	c手法、線刻
58	32	土師器	皿A	2	9M	土坑559	15.4	—	2.7	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ケズリのちヨコナデ・ケズリ	b手法、線刻
59	33	土師器	皿A	2	9M	土坑559	15.0	—	2.6	橙	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/6	良	密（φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	b手法、線刻
59	34	土師器	皿A	2	9M	土坑559	18.4	—	(2.4)	にぶい赤褐	5YR5/3	にぶい橙	5YR6/4	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・ケズリ	b手法
59	35	土師器	皿A	2	9M	土坑559	17.6	—	2.0	浅黄橙	7.5YR8/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ナデ	b手法
59	36	土師器	椀A	2	9M	土坑559	12.3	—	3.4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ2.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ケズリ	c手法、線刻、黒斑（N4/0灰）
59	37	土師器	椀A	2	9M	土坑559	12.4	—	3.2	浅黄橙	7.5YR8/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヘラケズリ	c手法、線刻
59	38	土師器	椀A	2	9M	土坑559	11.6	—	(3.0)	浅黄橙	7.5YR8/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	e手法
59	39	土師器	椀A	2	9M	土坑559	11.8	—	(3.4)	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	e手法
59	40	土師器	椀A	2	9M	土坑559	12.2	—	3.4	にぶい橙	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/4	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・ナデか	e手法、線刻
59	41	土師器	椀A	2	9M	土坑559	12.0	—	3.5	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエのちケズリ	eのちc手法、線刻
59	42	土師器	椀A	2	9M	土坑559	12.2	—	3.5	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	e手法、線刻
59	43	土師器	高杯	2	9M	土坑559	—	—	(17.0)	橙	5YR7/6	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ナデ・絞り痕・ハケ、（外）ケズリ・ハケのちミガキ	a手法、7面取り、ミガキ5回
59	44	土師器	高杯	2	9L	土坑559	—	—	(3.2)	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ケズリ	a手法
59	45	土師器	高杯	2	9M	土坑559	—	—	(13.8)	橙	2.5YR6/8	橙	5YR7/6	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）芯棒づくり、（外）ケズリ	b手法
59	46	須恵器	杯B蓋	2	9M	土坑559	15.4	—	1.5	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ0.5㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ツマミ貼付時のナデ・ヘラ切りのちナデ・ロクロナデ	ひずみ有、内面転用硯
59	47	須恵器	杯B蓋	2	9M	土坑559	16.0	—	1.9	灰	N6/0	灰	N6/0	良	密（φ3.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ツマミ貼付時のナデ・ヘラ切りのちナデ・ロクロナデ	重ね焼き痕、内面転用硯
59	48	須恵器	杯B蓋	2	9M	土坑559	16.3	—	1.9	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ツマミ貼付時のナデ・ヘラ切りのちナデ・ロクロナデ	
59	49	須恵器	杯B蓋	2	9M	土坑559	14.8	—	(1.4)	灰	N6/0	灰白	N7/0	良	密（φ0.5㎜以下のチャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ヘラ切りのちナデ・ロクロナデ	転用硯
59	50	須恵器	杯A	2	9M	土坑559	16.5	—	3.5	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・回転ケズリのちナデ	口縁部外面に重ね焼き痕

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
59	51	須恵器	杯B	2	9M	土坑559	14.5	9.5	5.6	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）ロクロナデ・高台貼付時のナデ・ヘラ切りのちナデ	
59	52	須恵器	杯B	2	9M	土坑559	15.6	11.6	5.3	灰白	10YR7/1	灰白	N8/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）ロクロナデ・高台貼付時のナデ・ヘラ切りのちナデ	底面に墨書か
59	53	須恵器	杯B	2	9M	土坑559	15.2	10.6	5.1	灰	N5/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・高台貼付時のナデ・ヘラ切りのちナデ	
59	54	須恵器	杯B	2	9M	土坑559	14.5	10.9	5.4	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）ロクロナデ・高台貼付時のナデ・ナデ	
59	55	須恵器	壺	2	9M	土坑559	—	6.3	（6.3）	灰	N5/0	灰褐	7.5YR5/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転ケズリ・高台貼付時のナデ・糸切り痕	外面に自然釉付着、拓本有
60	56	須恵器	壺A蓋	2	9M	土坑559	12.6	—	（1.9）	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	外面に自然釉付着、壺A
60	57	土師器	杯A	2	7L・8L	井戸540井戸枠内	13.8	—	2.5	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ハケのちナデ、（外）ハケのちナデ・オサエ	Ⅱ中
60	58	土師器	皿A	2	7L	井戸540井戸枠内	14.3	—	（1.9）	にぶい黄橙	10YR7/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
60	59	土師器	皿A	2	7L	井戸540井戸枠内	14.4	—	1.9	浅黄橙	10YR8/3	明褐灰	7.5YR7/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデ・ハケのちナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
60	60	土師器	高杯	2	7L	井戸540井戸枠内	—	—	（9.3）	（内）灰白、（外）浅黄橙	（内）5Y7/1、（外）10YR8/3	褐灰	10YR6/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・雲母・赤色粒子を含む）	（内）芯棒づくり、（外）ケズリ	b手法、7面取り
60	61	土師器	甕	2	7L	井戸540井戸枠内	—	—	（2.4）	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/1	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・ハケ	
60	62	須恵器	瓶子	2	7L	井戸540井戸枠内	—	3.7	（5.5）	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ヨコナデ・静止糸切り痕	拓本有
60	63	須恵器	鉢	2	7L	井戸540井戸枠内	—	7.2	（2.9）	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転糸切り痕	拓本有
60	64	須恵器	壺	2	7L	井戸540井戸枠内	10.0	—	（6.5）	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	篠窯産
60	65	須恵器	甕	2	7L	井戸540井戸枠内	17.0	—	（6.5）	黄灰	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y6/1	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）ロクロナデ	内面・外面とも自然釉付着
60	66	須恵器	瓶子	2	7L	井戸540井戸枠内	3.8	4.0	9.4	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ナデ・静止糸切り痕	拓本有
60	67	須恵器	瓶子	2	7L	井戸540井戸枠内	3.9	3.3	8.8	灰	N6/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転削りのちナデ・ナデ・回転糸切り痕	外面に自然釉付着、拓本有
60	68	須恵器	瓶子	2	7L	井戸540井戸枠内	4.0	4.4	12.2	灰	N4/0	灰白	N8/0	不良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転削り・ナデ・糸切り痕	瓦質焼成・焼きムラ有、拓本有
60	69	須恵器	瓶子	2	7L	井戸540井戸枠内	—	5.0	（10.5）	暗灰	N3/0	灰白	N8/0	不良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転削り・ナデ・回転糸切り痕	瓦質焼成・爪形状圧痕有、拓本有
60	70	須恵器	瓶子	2	7L	井戸540井戸枠内	—	4.4	（10.7）	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転削りのちナデ・ナデ・静止糸切り痕	線刻、拓本有
60	71	灰釉陶器	椀	2	7L	井戸540井戸枠内	—	7.2	（1.8）	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）貼付高台・ロクロナデ・釉だれ	重ね焼き痕、内面・外面とも施釉（5Y7/2灰白）、猿投産
60	72	灰釉陶器	椀	2	7L	井戸540井戸枠内	—	7.8	（2.3）	灰白	10YR7/1	灰白	10YR7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・釉ハギ、（外）ロクロナデ・貼付高台・回転ケズリ	釉ハギ、内面・外面とも施釉（10Y6/2オリーブ灰）、猿投産
60	73	灰釉陶器	椀（底部）	2	7L	井戸540井戸枠内	—	9.2	（3.4）	（外）黄灰	（外）2.5Y6/1	灰黄	2.5Y6/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・貼付高台・ロクロナデ	内面に施釉（2.5Y6/2灰黄）、底面に墨書
60	74	灰釉陶器	椀（口縁部）	2	7L	井戸540	11.9	—	（2.4）	灰白	N8/0	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	内面・外面とも施釉（2.5Y7/2灰黄）
60	75	緑釉陶器	椀	2	7L	井戸540井戸枠内	19.8	8.4	7.2	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ミガキ、（外）ロクロナデ・削り出し高台	内面・外面とも施釉（7.5Y7/3浅黄）、Ⅱ中、洛北（西）
60	76	緑釉陶器	椀（底部）	2	7L	井戸540井戸枠内	—	7.5	（2.9）	（外）灰白	（外）10YR8/2	灰白	2.5Y8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ミガキ、（外）回転ケズリ・削り出し高台	内面・外面とも施釉（10Y8/2灰白）、洛北（西）
60	77	緑釉陶器	椀（底部）	2	7L	井戸540井戸枠内	—	5.8	（2.0）	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ミガキ、（外）ロクロナデ・削り出し高台	内面・外面とも施釉（7.5Y6/2灰オリーブ）、高台一部露胎、Ⅱ中

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
60	78	緑釉陶器	椀（底部）	2	7L	井戸540 井戸枠内	—	8.0	（1.9）	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR5/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・貼付高台・ロクロナデ	内面・外面とも施釉（7.5Y5/3 灰オリーブ）、猿投産、Ⅱ中
60	79	緑釉陶器	椀（底部）	2	7L	井戸540 井戸枠内	—	5.8	（1.4）	淡黄	2.5Y8/3	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ミガキ、（外）ロクロナデ・回転糸切り痕（剥離）	内面・外面とも施釉（緑）、全体的に剥離磨滅、洛北（西）
60	80	緑釉素地	椀	2	7L	井戸540 井戸枠内	14.0	6.1	2.9	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ミガキ、（外）ロクロナデ・ミガキ・削り出し高台・回転ヘラ削り	小塩窯産（緑釉タイプ）
60	81	緑釉陶器	椀（底部）	2	7L	井戸540 井戸枠内	—	8.4	（0.8）	—	—	灰白	10YR8/1	良（軟質）	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ミガキのち施釉、（外）ミガキのち施釉、削り出し高台	内面・外面とも施釉（10Y7/2 灰白）、線刻「厨」、Ⅱ（古）
60	82	黒色土器A	杯B	2	7L	井戸540 井戸枠内	16.8	8.8	4.9	（内）暗灰、（外）浅黄橙	（内）N3/0、（外）10YR8/3	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ミガキ、（外）ヨコナデ・ケズリのちナデか・高台貼付時のナデ・貼付高台・オサエ	暗文
60	83	黒色土器A	杯B	2	7L	井戸540	16.0	9.6	5.0	（内）暗灰、（外）にぶい橙	（内）N3/0、（外）7.5YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ミガキ、（外）ヨコナデ・ケズリ・高台貼付時のナデ・貼付高台・オサエ	
60	84	黒色土器A	杯B	2	7L	井戸540 井戸枠内	21.8	10.8	6.1	（内）暗灰、（外）にぶい黄橙	（内）N3/0、（外）10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ミガキ、（外）ヨコナデ・ケズリ・高台貼付時のナデ・貼付高台・ケズリ	暗文
60	85	土製品	土馬	2	8L	井戸540	（残存長）6.0	（残存幅）3.3	6.4	灰白	10YR8/1	灰	N4/0	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）—、（外）ナデ	
60	86	石製品	砥石	2	7L	井戸540 井戸枠内	（長さ）15.5	（幅）8.0	（厚さ）4.3	—	—	—	—	—	—	（表・裏）使用面、（側）自然面	重量1032.0g
61	87	瓦	平瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）16.8	（残存幅）14.5	（厚さ）2.3	灰	N5/0	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子・1.2cm礫を含む）	（裏）タテ方向ケズリ、（表）タテ方向ケズリ・布目	拓本有
61	88	瓦	平瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）18.7	（残存幅）15.0	（厚さ）2.9	黄灰	2.5Y6/1	灰白	N8/0	良	密（φ4.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子・8ｍｍ大礫を含む）	（裏）タテ方向ケズリ・縄目のちケズリ、（表）タテ方向ナデ・糸切りのち布目のちナデ	拓本有
61	89	瓦	平瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）19.8	（幅）27.0	（厚さ）2.0	黒	N1.5/0	灰	N6/0	良	密（φ4.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（裏）布目、（表）タテ方向ケズリ・布目	拓本有
62	90	瓦	平瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（長さ）36.5	（残存幅）13.1	（厚さ）2.1	黒	N1.5/0	灰白	N7/0	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（裏）縄目、（表）タテ方向ケズリ・布目	拓本有
62	91	瓦	平瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）29.1	（残存幅）17.9	（厚さ）1.3	黒	N1.5/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（裏）縄目、（表）タテ方向ケズリ・布目のちタテ方向ケズリ・布目のちケズリ	拓本有
63	92	瓦	軒丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）5.9	（残存幅）8.0	（6.9）	灰	N6/0	にぶい橙	7.5YR7/3	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（裏）—（表）タテ方向ケズリ・笵	複弁蓮華文、拓本有
63	93	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）14.1	（残存幅）13.6	（厚さ）1.6	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（裏）布目・ケズリ・タテ方向ケズリ、（表）縄目のちケズリ	拓本有
63	94	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）21.5	（幅）16.0	8.2	灰	N6/0	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒雲母・赤色粒子を含む）	（裏）布目・タテ方向ケズリ・ヨコ方向ケズリ、（表）縄目のちケズリ・ヨコ方向ナデ・凸帯	厚さ1.7cm、拓本有
63	95	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）12.6	（幅）14.8	7.5	灰	N4/0	暗灰	N3/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒子・1.5cm大礫を含む）	（裏）糸切りのち布目・タテ方向ケズリ・ヨコ方向ケズリ、（表）縄目のちナデ	厚さ1.9cm、拓本有
64	96	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）22.6	（残存幅）17.2	（8.5）	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（裏）布目・タテ方向ケズリ・ヨコ方向ケズリ、（表）縄目のちヨコ方向ナデ・ヨコ方向ナデ・ヨコ方向ケズリ	厚さ2.4cm、拓本有
64	97	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）36.3	（幅）18.0	8.8	暗灰	N3/0	灰白	N8/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒子を含む）	（裏）布目・タテ方向ケズリ・ヨコ方向ケズリ（表）縄目のちヨコ方向ケズリ・ヨコ方向ナデ・ヨコ方向ケズリ	厚さ1.9cm、拓本有
65	98	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）13.2	（残存幅）14.4	（7.4）	暗灰	N3/0	灰黄	2.5Y7/2	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）布目・タテ方向ケズリ・糸切りのち布目、（表）縄目のちナデ・ヨコ方向ケズリ	厚さ1.5cm、拓本有
65	99	瓦	丸瓦	2	7L	井戸540 井戸枠内	（残存長）28.3	（残存幅）14.0	8.4	黒	N1.5/0	灰白	N8/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・黒色粒子を含む）	（裏）布目・タテ方向ケズリ、（表）縄目のちヨコ方向ナデ・ヨコ方向ナデ	厚さ1.7cm、拓本有

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	色調				焼成	胎土	調整	備考
										(内・外)		(断)					
66	100	土師器	高杯	2	10L	土坑585	—	17.1	(17.4)	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) 芯棒づくり・ナデ・磨滅の為調整不明瞭、(外) 面取り・ミガキ・ヨコナデ	b手法、7面取りか
66	101	土師器	皿A	2	10L	土坑562	15.9	—	2.0	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) 磨滅の為調整不明瞭、(外) ケズリか（磨滅の為調整不明瞭）	
66	102	土師器	椀A	2	10L	土坑562	11.9	—	3.0	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・オサエ・ケズリか	
66	103	土師器	高杯	2	10L	土坑562	—	—	(16.1)	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) 粘土しぼり痕・ナデ・ハケ、(外) ナデ・面取り（ハケ残る）	a手法、8面取り
66	104	土師器	皿	2	7K	土坑537	12.6	—	3.2	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	良	密（φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・オサエ	
66	105	土師器	甕	2	7L	土坑598	24.6	—	(13.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ3.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ハケのちヨコナデ・オサエ・ナデ、(外) ヨコナデ・ハケ	外面にスス付着、内面に粘土接合痕
66	106	土師器	皿	2	7L	土坑565	14.9	—	(2.0)	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・オサエ	
66	107	灰釉陶器	椀	2	7L	土坑565	—	7.5	(3.1)	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0mm以下の長石・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ・ナデ、(外) ロクロナデ・高台貼付時のナデ・糸切りのちナデ	内面使用痕・重ね焼き痕、外面に自然釉付着
66	108	灰釉陶器	耳皿	2	7L	土坑565	—	5.6	(2.8)	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ3.0mm以下の長石・石英・チャートを含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・糸切り痕	内面に自然釉付着、拓本有
66	109	須恵器	瓶子	2	9L	溝558	—	4.8	(4.5)	灰	N5/0	灰褐	7.5YR5/2	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・回転糸切り	外面に自然釉付着の痕跡
66	110	灰釉陶器	椀	2	9L	溝558	—	9.0	(2.3)	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・回転ケズリ・貼付高台・回転ケズリ	猿投産、釉付着有
66	111	灰釉陶器	椀	2	9L	溝558	—	6.7	(1.8)	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ、(外) 貼付高台・回転ケズリ	猿投産、内面に使用痕
66	112	灰釉陶器	椀	2	9L	溝558	13.0	6.3	4.5	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・貼付高台・回転ケズリ	猿投産（Ⅱ中）、内面・外面とも施釉（7.5Y7/1灰白）
66	113	緑釉陶器	椀	2	9L	溝558	—	5.8	(1.5)	—	—	灰	N6/0	良（硬質）	密（φ1.0mm以下の長石・チャートを含む）	(内) ロクロナデのちミガキ、(外) 回転ケズリのちミガキ	洛西産、内面・外面とも施釉（5Y5/1灰）
66	114	緑釉陶器	皿	2	9L	溝558	—	7.4	(2.0)	灰	5Y6/1	灰白	5Y7/1	良（硬質）	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	(内) 滑らか、(外) ロクロナデ・回転ケズリ・ケズリ出し高台・回転ケズリ	京都産、素地、重ね焼き痕
66	115	石製品	砥石	2	9L	溝558	(残存長) 10.1	(残存幅) 3.0	(厚さ) 3.8	—	—	—	—	—	—	(表) 使用面・礫面か、(外) 加工	重量160.4g
66	116	石製品	紡錘車	2	9L	溝558	(長さ) 7.7	(幅) 7.6	(厚さ) 4.0	—	—	—	—	—	—	(内) 穿孔、(外) 加工	孔径0.7cm、重量336.0g
66	117	灰釉陶器	椀	2	7L	ピット545	—	6.8	(2.1)	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	(内) ロクロナデ、(外) ロクロナデ・貼付高台・回転ケズリ	内面に使用痕
66	118	緑釉陶器	椀	2	11K	土坑571	—	8.0	(2.2)	(外) 灰褐	(外) 7.5YR5/2	灰	N5/0	良（硬質）	密（φ1.0mm以下の長石・石英を含む）	(内) トチン痕、(外) ロクロナデ・高台貼付時のナデ・糸切り痕	内面・外面とも施釉（10Y4/2オリーブ灰）、近江産
66	119	緑釉陶器	椀	1	5H	溝684	—	8.4	(2.2)	—	—	灰白	2.5Y8/1	良（軟質）	密（φ0.5mm以下の長石を含む）	(内) トチン痕・ミガキのち施釉、(外) 貼付高台・トチン痕・糸切り痕	内面・外面とも施釉（緑色）、近江産
66	120	土師器	椀A	2	10K	ピット590	10.9	—	(2.4)	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ、(外) ヨコナデ・ケズリか	
66	121	土師器	皿A	1	6H	溝681	—	—	(1.3)	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ1.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・オサエ	手の字口縁
66	122	土師器	皿A	1	6H	溝681	—	—	(2.3)	橙	5YR7/6	にぶい橙	5YR7/4	良	密（φ2.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ヨコナデ・ナデ、(外) ヨコナデ・オサエ	二段ナデ
66	123	灰釉陶器	壷L	2	6L	土坑568	—	8.1	(4.2)	灰白	10YR7/1	褐灰	10YR6/1	良	密（φ2.0mm以下の長石・チャートを含む）	(内) ロクロナデ、(外) 回転ケズリ・高台貼付時のナデ	内面・外面とも施釉、猿投産
66	124	土師器	甕	1	4G	溝670	19.0	—	(4.6)	にぶい橙	7.5YR7/4	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ2.0mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	(内) ハケか（磨滅）の為調整不明瞭・板ナデ、(外) ヨコナデ・ナデ	外面にスス付着、伊勢型か

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
66	125	土師器	甕	1	6G	土坑 671	17.5	—	(3.4)	にぶい橙	7.5YR7/3	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ3.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデか（磨滅の為調整不明瞭）・ハケか・ナデ、（外）ヨコナデか（磨滅の為調整不明瞭）・ナデのちヨコナデか（磨滅の為調整不明瞭）	V様式
67	126	土師器	羽釜	2	9L	整地 550	22.2	—	(4.4)	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付ナデ・オサエ	
67	127	須恵器	蓋	2	9L	整地 550	16.0	—	(0.8)	灰白	N7/0	灰	N6/0	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ツマミ貼付ナデ・ロクロナデ	自然釉付着、重ね焼き痕、転用硯
67	128	須恵器	鉢	2	9L	整地 550	—	—	(3.6)	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	篠産
67	129	土師器	甕	2	9L	整地 550	22.2	—	(3.7)	褐灰	7.5YR5/1	灰白	7.5YR8/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・オサエ、（外）ヨコナデ・オサエ	
67	130	須恵器	把手付壺	2	9L	整地 550	—	—	(10.2)	灰	N5/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・突帯貼付のナデ	播磨産
67	131	緑釉陶器	椀	2	9L	整地 550	—	7.8	(2.0)	—	—	にぶい黄橙	10YR7/2	良（軟質）	密（φ1.0 mm以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデのちミガキ、（外）ロクロナデのちミガキ・ケズリ出し高台	京都産、内面・外面とも施釉（明緑色）
67	132	緑釉陶器	椀	2	9L	整地 550	—	5.8	(1.7)	—	—	浅黄橙	7.5Y8/4	良（軟質）	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ロクロナデのちミガキ、（外）ロクロナデのちミガキ・ケズリ出し高台	京都産、重ね焼き痕、内面・外面とも施釉（2.5Y7/4 浅黄）
67	133	緑釉陶器	壺	2	9L	整地 550	—	3.8	(1.8)	灰白	10YR8/2	灰白	N8/0	良（硬質）	密（φ1.0 mm以下の長石・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転糸切り	内面・外面とも施釉（明緑色）、拓本有
67	134	灰釉陶器	椀	2	9L	整地 550	—	7.3	(2.1)	灰白	5Y8/1	灰白	5Y8/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・貼付高台・回転糸切り	猿投産、重ね焼き痕、内面に使用痕、内面に施釉（7.5Y7/2 灰白）
67	135	灰釉陶器	椀	2	9L	整地 550	—	6.4	(2.3)	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・貼付高台・回転ケズリ	猿投産、内面に使用痕、底部に墨書か、内面に施釉（5Y8/1 灰白）
67	136	灰釉陶器	壺	2	9L	整地 550	—	—	(7.0)	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	猿投産、内面・外面とも施釉（7.5Y5/2 灰オリーブ）
67	137	瓦	軒平瓦	2	9L	整地 550	（残存長）9.7	（残存幅）12.0	（瓦当高）6.0	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ4.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（表）ヨコ方向ナデ・タテ方向ナデ・布目のちヨコ方向ナデ、（裏）ケズリか（磨滅）	拓本有
67	138	須恵器	杯B蓋	2	9L	5層上面精査	15.8	—	1.5	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ3.0 mm以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデのちナデ・ロクロナデ、（外）ツマミ貼付時のナデ・回転ヘラケズリのちナデ・ロクロナデ	上面に墨書有・印線刻
67	139	須恵器	杯B	2	9L	5層	—	10.2	(1.4)	灰	N6/0	灰	N6/0	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・貼付高台・ヘラ切りのちナデ	
67	140	土師器	皿	1		5層	12.8	—	(1.6)	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	Ⅲ古
67	141	緑釉陶器	椀	1		5層	—	7.5	(1.7)	（釉）灰白、（胎土）灰白	（釉）10Y7/2、（胎土）2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	良	密（φ0.5 mm以下のチャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	
67	142	灰釉陶器	椀	1		5層	—	7.2	(2.5)	灰白	5 Y 8/1	灰白	5 Y 8/1	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）回転ヨコナデ、（外）回転ヨコナデ・貼付高台	内面・外面とも煤付着
67	143	土師器	甕	2	9L	4層	15.6	—	(5.25)	にぶい褐	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR5/3	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケか・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
67	144	灰釉陶器	椀	2	9L・10L	4層	—	6.6	(1.45)	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ケズリ、（外）ケズリ・貼付高台	
67	145	灰釉陶器	椀	2	9L	4層	—	9.0	(3.6)	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）回転ケズリ・貼付高台	
67	146	緑釉陶器	椀	2	7K	4層	—	7.9	(1.75)	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ケズリ、（外）ケズリ・削り出し高台	
67	147	緑釉陶器	皿	2	9L	4層	13.0	6.1	2.9	（釉）オリーブ灰	（釉）10Y5/2	灰	N6/0	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）ロクロナデ・施釉・削り出し高台	内面に重ね焼き痕有
67	148	緑釉陶器	椀	2	7L	4層	—	7.8	(1.75)	（釉）オリーブ黄	（釉）7.5Y6/3	灰白	7.5Y8/1	良	密（φ0.5 mm以下の石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・貼付高台のち施釉	
67	149	白磁	椀	2	6L	4層	—	6.8	(1.75)	（釉）灰白	（釉）7.5Y8/1	灰白	N8/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	高台一部釉付着

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
67	150	輸入陶器	盤	2	10K	4層	—	—	(2.8)	（釉）明緑	—	灰白	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・ナデ	華南産、内面に文様有
67	151	青白磁	蓋	2	8L	4層	9.8	—	1.95	（釉）明緑灰	（釉）5G7/1	灰白	10YR8/2	良	密	（内）施釉・釉ハギ、（外）施釉・釉ハギ	外面に文様有
67	152	瓦	軒丸瓦	1	6F	5層	（残存長）3.6	—	—	黄灰	2.5Y6/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）貼付時のナデ・ナデ、（外）笵	拓本有
67	153	瓦	軒平瓦	2	9K・10K	5層	（残存長）2.9	（残存幅）9.7	（残存瓦当厚）5.1	灰	N6/0	灰	N6/0	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（裏）ナデ・ケズリ、（表）笵	平安前期、拓本有
67	154	土製品	土馬	2	7L	4層	（残存長）5.8	（残存幅）5.0	(6.9)	橙	5YR7/6	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ	
68	155	土師器	皿	1	5H	土坑310	4.8	—	1.2	灰白	2.5Y8/1	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形
68	156	土師器	皿	1	5H	土坑310	8.2	—	1.4	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	157	土師器	皿	1	5H・5I	土坑310	8.3	—	1.55	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	158	土師器	皿	1	5H・5I	土坑310	8.3	—	1.75	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.5㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	159	土師器	皿	1	5H	土坑310	10.5	—	1.7	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	160	土師器	皿	1	5H	土坑310	13.0	—	2.85	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ5.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	161	土師器	皿	1	5H	土坑310	12.8	—	2.15	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ6.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	162	土師器	皿	1	5H	土坑310	12.9	—	2.75	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	163	土師器	高盤か	1	5H	土坑310	—	11.8	(2.75)	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ5.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ヨコナデ・貼付高台	
68	164	青白磁	皿	1	5H	土坑310	7.8	4.6	1.7	（釉）明緑灰	（釉）7.5GY8/1	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉・回転ナデ	
68	165	青磁	壺	1	5H	土坑310	—	3.7	(1.75)	（釉）灰白	（釉）2.5GY8/0	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉・ケズリ	
68	166	瓦器	輪花椀	1	5H	土坑310	9.8	—	2.9	暗灰	N3/0	灰白	N8/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石を含む）	（内）ミガキ、（外）ヨコナデのちミガキ・ナデのちミガキ	外面に輪花文、見込みに花弁文
68	167	青磁	椀	1	5H	土坑310	—	—	(3.2)	（釉）明オリーブ灰	（釉）2.5GY7/1	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	外面に蓮弁文浮彫
68	168	瓦器	羽釜	1	5H	土坑310	27.8	—	(9.05)	黒	5Y2/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケ・ナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のちナデ・オサエ	外面に煤付着
68	169	瓦器	鍋	1	5H	土坑310	21.4	—	(7.4)	黒	5Y2/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	
68	170	須恵器	鉢	1	5H・5I	土坑310	30.6	11.3	10.7	灰白	5Y7/1	灰白	5Y7/1	良	密（φ6.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・板ナデ、（外）ロクロナデ・回転ケズリのちナデ・ヘラ削り	外面に煤付着
68	171	焼締陶器	甕	1	5H	土坑310	49.8	—	(62.9)	黒褐	10YR3/2	黒褐	10YR3/2	良	密（φ4.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ナデのちタタキ	外面に自然釉付着、拓本有
68	172	焼締陶器	甕	1	5H	土坑310	—	—	(19.5)	褐	7.5YR4/3	灰	5Y5/1	良	密（φ6.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ・粘土接合痕、（外）ヨコナデ・施釉	外面施釉（7.5Y5/3灰オリーブ）
68	173	瓦	軒平瓦	1	4G	土坑310	（残存長）3.5	（残存幅）6.8	（瓦当厚）5.9	灰	N4/0	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ケズリ、（表）ナデ・笵	拓本有
69	174	土師器	皿	2	10K	井戸518	11.7	—	(2.1)	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	175	施釉陶器	皿	2	10K	井戸518	—	3.0	(1.4)	（釉）淡黄	（釉）2.5Y8/3	灰白	2.5Y8/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉・ケズリ	貫入有
69	176	須恵器	壷か	2	10K	井戸518	22.0	—	(4.4)	灰	N4/0	灰	N4/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	
69	177	施釉陶器	壷か	2	10K	井戸518	—	8.9	(6.4)	（釉）オリーブ黄	（釉）5Y6/4	灰	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	
69	178	土師器	皿A	2	11L	井戸509掘方	8.4	—	1.3	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
69	179	土師器	皿A	2	10L	井戸509掘方	8.0	—	0.95	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	180	土師器	皿A	2	10L	井戸509	5.2	—	1.05	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ5.0㎜の礫とφ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	181	土師器	杯B	2	10L	井戸509	—	5.2	（1.7）	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・高台貼付のちナデ	
69	182	須恵器	鉢	2	10L	井戸509	—	—	（7.0）	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ5.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	
69	183	瓦器	皿	2	10L・11L	井戸509	8.8	—	1.65	暗灰	N3/0	灰白	N7/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・工具痕	
69	184	瓦器	小椀	2	10L・11L	井戸509井戸枠内	6.8	—	（2.0）	灰白	N7/1	灰白	N7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデ・ミガキ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	185	緑釉陶器	鉢	2	10L・11L	井戸509	—	—	（2.3）	（釉）明緑	—	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉	華南産
69	186	青磁	椀	2	10L	井戸509掘方	—	5.2	（3.15）	（釉）灰オリーブ	（釉）5Y5/2	灰白	5Y7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	見込みに文様有
69	187	青磁	椀	2	10L	井戸509	—	4.6	（1.9）	（釉）緑灰	（釉）10GY6/1	灰	N6/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	内面に貫入有、高台一部釉ハギ有
69	188	青磁	椀	2	10L	井戸509	—	5.0	（1.2）	（釉）明緑灰	（釉）7.5GY7/1	灰白	N8/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	高台一部釉ハギ有
69	189	青磁	皿か	2	10L・11L	井戸509掘方	—	6.0	（1.25）	（釉）灰白	（釉）5Y7/2	灰白	7.5Y7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・ケズリ	見込みに文様有
69	190	青磁	香炉	2	10L・11L	井戸509井戸枠内	—	—	（2.1）	（釉）明緑	（釉）10G7/1	灰白	N8/0	良	密	（内）ナデ、（外）施釉	
69	191	瓦	軒丸瓦	2	10L	井戸509	（残存長）12.9	—	（推定瓦当径）6.8	灰	N5/0	灰	N6/0	良	密（φ4.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）布目・ナデ・ケズリ、（表）縄目・ナデ・笵	中世以降、拓本有
69	192	瓦	軒平瓦	2	10L	井戸509	（残存長）12.1	（残存幅）7.4	（瓦当厚）2.7	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	やや不良	密（φ4.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）縄目のちナデ・ナデ・ケズリ、（表）布目・ケズリ・笵	中世以降、剣頭文、拓本有
69	193	土師器	皿N	1	7H	土坑612	8.5	—	1.7	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	194	土師器	皿N	1	7H	土坑612	8.4	—	1.2	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	195	土師器	皿N	1	7H	土坑612	9.1	—	1.6	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	196	土師器	皿N	1	7H	土坑612	13.0	—	2.7	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・オサエ、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	197	須恵器	鉢	1	7H	土坑612	29.8	—	（9.6）	灰	N6/0	灰	N6/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	
69	198	須恵器	甕	1	7H	土坑612	31.4	—	（11.1）	暗灰	N3/0	灰白	5Y8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ナデ・同心円あて具のちナデ、（外）ロクロナデ・タタキのちナデ・タタキ	
69	199	須恵器	甕	1	7H	土坑612	—	—	（6.5）	灰	N4/0	灰	N5/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・オサエ、（外）ロクロナデ	内面に自然釉付着（5GY6/1オリーブ灰）
69	200	青磁	皿	1	7H	土坑612	10.7	5.4	2.6	（釉）明緑灰、（外面）灰白	（釉）5G7/1、（外面）10YR8/2	灰白	10YR8/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉・回転ケズリ	底部に墨書、内面に文様有
69	201	瓦器	小椀	1	7H	土坑612	7.7	3.6	2.9	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ミガキ、（外）ヨコナデ・オサエ・高台貼付時のナデ・ナデ	暗文
69	202	瓦器	椀	1	7H	土坑612	8.0	—	（2.25）	暗灰	N3/0	灰	N8/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・暗文、（外）ヨコナデ・オサエ	
69	203	青磁	壺	1	7H	土坑612	—	—	（4.7）	（釉）灰白	（釉）2.5GY8/1	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	
69	204	土製品	製塩土器	1	7H	土坑612	13.8	—	（4.1）	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ	
70	205	土師器	皿S	2	10K	井戸517	12.5	—	3.35	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	206	土師器	皿S	2	10K	井戸517井戸枠内	8.4	—	1.45	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
70	207	土師器	皿S	2	10L	井戸517 井戸枠内	13.6	—	2.3	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	208	瓦器	椀	2	10K	井戸517	12.9	—	(3.8)	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデのちミガキ・ミガキ、（外）ヨコナデのちミガキ・オサエ	
70	209	白磁	椀	2	10K	井戸517 井戸枠内	—	—	(2.1)	（釉）灰白	（釉）N8/0	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	貫入有
70	210	青磁	皿	2	10K	井戸517 井戸枠内	—	—	(2.05)	（釉）灰	（釉）7.5Y6/1	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	
70	211	瓦器	鍋	2	10K	井戸517	21.4	—	(4.5)	灰白	N8/0	灰白	N8/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	212	土師器	皿N	1	5F	土坑609	9.2	—	1.9	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	213	土師器	皿N	1	5F	土坑609	8.2	—	1.8	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着、灯明皿
70	214	土師器	皿N	1	5F	土坑609	13.8	—	2.5	灰黄褐	10YR5/2	褐灰	10YR5/1	良	密（φ4.0㎜の礫とφ1.5mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	215	土師器	皿N	1	5F	土坑609	14.3	—	2.9	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	底部に板圧痕
70	216	土師器	皿N	1	7H	土坑316	8.3	—	1.6	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	217	瓦器	皿	1	7H	土坑316	8.0	—	1.65	灰	N4/0	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形
70	218	土師器	皿S	1	6G	土坑398	13.5	—	(3.7)	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/1	良	密（φ1.5㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	219	土師器	皿S	1	6G	土坑398	12.3	—	(3.3)	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ1.5㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	220	土師器	皿	1	7H	土坑608	8.4	—	1.6	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	良	密（φ1.0㎜以下の石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	221	土師器	皿	1	7H	土坑608	13.5	—	2.7	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・オサエ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	222	瓦器	小椀	1	7H	土坑608	7.9	3.4	2.7	（内面）灰、（外面）灰白	（内面）N4/0、（外面）2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ミガキ、（外）ヨコナデ・オサエ・貼付高台・ナデ	暗文、口縁部に重ね焼きの痕跡有
70	223	山茶碗	椀	1	7H	土坑608	15.4	7.9	4.6	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・貼付高台・ヘラ切りのちナデ	内面・外面とも自然釉付着
70	224	青磁	椀	1	7H	土坑608	15.2	—	(4.4)	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y6/2	灰白	N7/0	良	密（微粒子含む）	（内）施釉、（外）施釉	龍泉窯、内面に文様有
70	225	土師器	へそ皿	2	7K	土坑515	6.3	—	1.75	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	226	土師器	皿	2	7K	土坑515	9.0	—	1.65	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	227	瓦器	椀	2	9L	ピット502	—	—	(3.3)	暗灰	N3/0	灰	N6/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデのちミガキ、（外）ヨコナデのちミガキ・オサエのちミガキ	
70	228	青磁	椀	2	9L	ピット502	—	5.7	(1.8)	（釉）灰白、（外）灰白	（釉）2.5GY8/1、（外）N7/0	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉、（外）回転ケズリ・削り出し高台	見込みに文様有
70	229	土師器	皿	2	9K	ピット459	6.2	—	1.3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	230	土師器	皿	2	9K	ピット459	7.6	—	1.45	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ナデ	
70	231	緑釉素地	椀	2	11L	土坑464	—	6.0	(1.3)	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデのちミガキ、（外）回転ケズリ	緑釉素地
70	232	瓦	軒平瓦	2	11L	土坑464	（残存長）6.9	（残存幅）8.2	—	灰	N6/0	灰	N5/0	良	やや粗（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ・縄目・ナデ、（表）布目・笵・布目	剣頭文、拓本有

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
70	233	土師器	Ⅲ	1	4G	井戸362	9.0	—	15.5	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	234	瓦器	鍋	1	4G	井戸362	23.3	—	(3.6)	灰	N4/0	灰白	7.5Y7/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	235	土師器	Ⅲ	1	7H	土坑366	8.2	—	1.4	にぶい橙	10YR7/3	にぶい橙	10YR7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
70	236	土師器	Ⅲ	1	7H	土坑366	10.2	—	2.8	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の石英・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	237	土師器	Ⅲ	1	6F	土坑628	8.8	—	1.7	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5㎜以下の石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ・ナデ	
71	238	土師器	Ⅲ	1	6F	土坑628	11.9	—	2.3	にぶい黄橙	10YR7/4	—	—	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形、底部に整形台痕及び焼成後の円孔有
71	239	土師器	Ⅲ	1	6F	土坑628	14.5	—	2.8	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	240	瓦器	椀	1	6F	土坑628	13.9	5.2	5.1	灰	N4/0	—	—	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ミガキ、（外）ヨコナデ・指ナデ・貼付高台・ナデ	完形、暗文
71	241	瓦質土器	鉢	1	6F	土坑628	—	—	(9.7)	灰	N4/0	灰	5YR6/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・オサエ・ミガキ、（外）ヨコナデ・オサエ・ヘラ削り	
71	242	土師器	へそ皿	2	10M・11M	井戸130	6.3	—	1.8	灰白	2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	Ⅲｓｈ
71	243	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	7.7	—	1.3	にぶい黄橙	10YR7/3	—	—	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形、Ⅶ中Ⅲ N
71	244	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	7.8	—	1.7	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	245	土師器	Ⅲ	2	10M・11M	井戸130	10.8	—	2.35	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	246	土師器	Ⅲ	2	10L	井戸130	11.4	—	3.0	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	247	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	11.8	—	2.2	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・指オサエ	
71	248	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	9.7	—	1.7	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ナデ	
71	249	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	8.9	—	1.3	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.1㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・指オサエ・ナデ	
71	250	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	7.8	—	1.6	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	251	土師器	Ⅲ	2	10L・10M	井戸130	6.8	—	1.7	灰白	2.5Y8/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ2.0㎜以下のチャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	252	土師器	Ⅲ	2	10M	井戸130	11.4	7.1	2.55	にぶい黄橙	10YR7/4	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形、実測番号347（瓦器壷）とセット
71	253	土師器	ミニチュア壷	2	10L	井戸130	1.6	—	2.7	にぶい黄橙	10YR7/2	—	—	良	密（φ0.1㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形
71	254	瓦器	壷	2	10M	井戸130	5.0	—	6.7	灰	N5/0	—	—	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ミガキ・ナデ、（外）ヨコナデ・ミガキ・ナデ	完形、外面に暗文有（半円10個）、実測番号346（土師器Ⅲ）とセット
71	255	瓦器	椀	2	10L・10M	井戸130	11.7	—	(3.9)	灰	N5/0	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデのちミガキ、（外）ヨコナデ・指オサエナデ	
71	256	瓦質土器	羽釜	2	10L・10M	井戸130	—	—	(7.1)	灰	N4/0	灰白	7.5Y8/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ目、（外）ヨコナデ	
71	257	瓦器	ミニチュア羽釜	2	10L・10M	井戸130	4.1	—	(3.0)	灰	N4/0	灰白	5Y7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・指オサエ、（外）ヨコナデ	口縁部外面にミガキ痕（4本）・鍔に暗文有

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
71	258	青磁	椀か	2	10L・10M	井戸 130	—	—	(2.2)	（釉）灰オリーブ、（胎土）灰白	（釉）7.5Y6/2、（胎土）7.5Y8/1	灰白	7.5Y8/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉	
71	259	白磁	椀	2	10L・10M	井戸 130	—	—	(2.2)	（釉）灰白、（胎土）灰白	（釉）5Y7/1、（胎土）5Y8/1	灰白	5Y8/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉	
71	260	青磁	皿	2	10M・11M	井戸 130	—	5.4	(3.1)	（釉）オリーブ灰、（胎土）灰白	（釉）2.5G Y 6/1、（胎土）N7/0	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	見込みに花弁文有
71	261	青磁	盤	2	10L・10M	井戸 130	—	6.0	(1.6)	（釉）灰白、（胎土）灰白	（釉）2.5Y8/1、（胎土）2.5Y8/2	灰白	2.5Y8/2	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	見込みに文様・高台裏に墨書有
71	262	瓦	軒平瓦	2	10L・11L	井戸 130	（残存長）7.7	（幅）21.0	（瓦当厚）4.3	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密（φ0.1 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ、（外）布目痕・ヘラナデ・笵・ナデ	唐草紋、中世以降、拓本有
71	263	瓦	軒平瓦	2	10L・10M	井戸 130	（残存長）4.55	（残存幅）7.4	（瓦当厚）2.9	灰白	2.5Y7/1	灰白	2.5Y7/1	やや良	密（φ3.0 mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）ナデ、（外）布目痕・笵	唐草紋、中世以降、拓本有
71	264	土師器	皿	2	9L	土坑 524	12.6	—	(1.9)	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ・成形台痕	
71	265	土師器	皿	2	9L	土坑 524	12.7	—	(2.05)	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ（外）ヨコナデ・オサエ	
71	266	土師器	甕	2	9L	土坑 524	14.7	—	(5.8)	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ナデ・オサエ	
71	267	緑釉素地	椀	2	9L	土坑 524	—	7.4	(1.65)	灰	N5/0	にぶい赤褐	5YR5/4	良	密（φ1 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ミガキ、（外）ケズリ・削り出し高台	
71	268	緑釉陶器	椀	2	9L	土坑 524	—	6.9	(2.25)	（釉）明緑	—	灰白	N7/0	良	密（φ0.5 mm以下の長石・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉	内面に重ね焼き痕有
71	269	土師器	皿	2	11M	土坑 479	8.7	—	1.5	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/1	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	270	瓦	軒平瓦	2	11M	土坑 479	（残存長）7.5	（残存幅）8.5	—	灰	N5/0	灰白	7.5Y8/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ・ヨコナデ、（表）布目・笵	
71	271	土師器	皿	1	5G	ピット 370	4.9	—	1.0	灰白	7.5YR8/1	灰白	7.5YR8/1	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
71	272	焼締陶器	甕	1	5G	ピット 370	23.4	—	(5.4)	灰黄褐	10YR5/2	灰褐	7.5YR5/2	良	密（φ2.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・タタキ、（外）ロクロナデ	内面・外面とも自然釉付着
72	273	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑 381	6.6	—	2.1	浅黄橙	7.5YR8/3	灰白	10YR8/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	274	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑 381	6.7	—	1.9	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0 mm以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	275	土師器	皿	1	5G・6G	土坑 381	8.8	—	1.8	灰白	2.5 Y 8/2	灰白	2.5 Y 8/2	良	密（φ0.5 mm以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	276	土師器	皿	1	6G	土坑 381	9.6	—	1.8	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	良	密（φ3.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	277	土師器	皿	1	5G・6G	土坑 381	9.2	—	(1.9)	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着
72	278	土師器	皿	1	5G・6G	土坑 381	10.4	—	2.4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ2.5 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	279	土師器	皿	1	6G	土坑 381	11.4	—	3.1	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ3.0 mm以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	280	土師器	皿	1	6G	土坑 381	—	—		灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ4.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）オサエ	墨書「ト」
72	281	瓦器	椀	1	5G・6G	土坑 381	13.6	—	(4.0)	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密（φ0.5 mm以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ミガキ、（外）ヨコナデ・ナデのちミガキか	
72	282	施釉陶器	天目椀	1	5G・6G	土坑 381	11.6	—	(4.4)	（内面釉）オリーブ黒、（外面釉）黒	（内面釉）7.5Y2/2、（外面釉）2.5 Y 2/1	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ0.5 mm以下の長石・赤色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉	
72	283	土師器	丸底鉢	1	6G	土坑 381	9.6	—	(6.4)	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ2.5 mm以下の長石・石英・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ	内面に使用痕

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
72	284	瓦質土器	火鉢	1	5G・6G	土坑 381	27.6	—	10.9	灰	N4/0	灰白	2.5Y8/2	良	密（φ1.5 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコ方向のミガキ・ミガキ・ナデ	外面に部分的に布目有
72	285	瓦質土器	鍋	1	5G・6G	土坑 381	25.6	—	（6.8）	灰	N4/0	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.5 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	286	土師器	羽釜	1	6G	土坑 381	25.6	—	（4.9）	浅黄橙	10YR8/3	灰	5 Y 6/1	良	密（φ2.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・羽部貼付時のナデ	
72	287	陶器	甕	1	6G	土坑 381	55.0	—	（9.8）	にぶい黄橙	10YR4/3	灰白	5Y7/1	良	密（φ3.5 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）ロクロナデ・ナデ	外面に自然釉付着（5GY7/1 明オリーブ灰）
72	288	土師器	皿	1	7H	土坑 317	8.6	—	1.6	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	289	瓦器	羽釜	1	7H	土坑 317	19.8	—	（12.3）	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	良	密（φ3.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のちナデ・オサエ	外面に煤付着
72	290	瓦	軒平瓦	1	7H	土坑 317	（残存長）3.8	（残存幅）5.2	（瓦当厚）2.6	黄灰	2.5Y6/1	黄灰	2.5Y6/1	良	密（φ2.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ケズリ、（表）布目・笵	剣頭文、拓本有
72	291	焼締陶器	甕（口縁部）	1	7H	土坑 317	30.0	—	（7.8）	暗赤褐	5YR3/3	褐灰	10YR6/1	良	密（φ5.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・施釉	外面施釉（7.5Y7/3 浅黄）
72	292	土師器	皿	1	5F	土坑 319	15.4	7.2	2.7	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
72	293	土師器	皿	1	5F	土坑 319	8.8	—	1.75	にぶい橙	7.5YR7/4	—	—	良	密（φ1.0 mm以下の長石・チャート・雲母・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形
72	294	土師器	へそ皿	1	5F	土坑 319	7.6	—	1.75	にぶい橙	7.5YR7/4	—	—	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形
73	295	土師器	皿S	1	5G	土坑 392	7.3	—	1.9	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.5 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ、オサエ	
73	296	土師器	皿S	1	5G	土坑 392	8.5	—	2.1	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ1.0 mm以下の長石・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエのちナデか	
73	297	土師器	へそ皿	1	5G	土坑 392	12.1	—	（3.0）	灰白	2.5YR8/2	灰白	2.5YR8/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	298	土師器	羽釜	1	5G	土坑 392	—	—	（3.9）	浅黄橙	10YR8/4	褐灰	10YR6/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・羽部貼付時のナデ・ナデ	
73	299	白磁	椀	1	5G	土坑 392	16.4	—	（3.8）	（釉）灰白	（釉）7.5Y7/1	灰白	N7/0	良	密（φ0.5 mm以下のチャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉	
72	300	瓦質土器	羽釜	1	6G	土坑 392	19.5	—	10.3	灰	N5/0	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・羽部貼付時のナデ・オサエ	外面に煤付着
73	301	瓦質土器	鍋	1	5G・6G	土坑 392	28.4	—	（11.7）	暗灰	N3/0	灰白	5Y7/1	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ	内面・外面とも雲母付着
73	302	土師器	へそ皿	1	5G	溝 367 上位	7.1	—	1.8	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5 mm以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	303	土師器	へそ皿	1	5G	溝 367 上位	7.7	—	1.7	淡赤橙	2.5YR7/4	淡赤橙	2.5YR7/4	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	304	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	8.6	—	2.4	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエのちナデ	
73	305	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	11.2	—	2.1	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	良	密（φ1.0 mm以下の長石・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	ひずみ有
73	306	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	11.2	—	2.8	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ1.0 mm以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	307	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	11.9	—	3.0	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5 mm以下のチャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	308	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	12.7	—	3.1	灰白	2.5Y8/2	—	—	良	密（φ1.5 mm以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエのちナデ	完形、口縁部に煤付着
73	309	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	15.9	—	3.7	灰白	10YR8/2	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0 mm以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエのちナデ	
73	310	土師器	皿	1	5G	溝 367 上位	15.9	—	3.7	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ0.5 mm以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエのちナデ	
73	311	青磁	椀	1	5G	溝 367 上位	—	5.8	（2.9）	（釉）明緑灰	（釉）7.5GY7/1	灰白	N7/0	良	密（φ0.5 mm以下の長石・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台・回転ケズリ	見込みに印花文有

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
73	312	焼締陶器	甕	1	5G	溝367上位	—	—	(7.9)	にぶい橙	5YR6/4	灰白	N7/0	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	内面・外面とも自然釉付着
73	313	土師器	へそ皿	1	5G	溝367下位	7.1	—	1.9	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	314	土師器	皿	1	5G	溝367下位	8.8	—	2.3	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	内面に付着物有
73	315	土師器	皿	1	5G	溝367下位	10.2	—	2.3	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着
73	316	白磁	椀	1	5G	溝367下位	16.8	—	(3.4)	（釉）灰白	（釉）5Y7/1	灰白	N7/0	良	密（φ0.5㎜以下のチャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉	
73	317	土師器	皿	1	5G	溝367下位	14.1	—	3.2	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
73	318	青磁	耳付壺	1	5G	溝367下位	—	—	(3.4)	（釉）オリーブ灰	（釉）2.5GY6/1	灰白	N7/0	良	密（微粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉	
73	319	瓦	軒丸瓦	2	9K	土坑457	（残存長）3.5	—	—	灰	N6/0	灰	N6/0	良	やや粗（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ、（表）ナデ・笵	巴文
73	320	瓦	磚	2	9K	土坑457	（残存長）14.0	（幅）16.7	（厚さ）6.1	暗灰	N3/0	灰	N4/0	良	粗（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）縄目、（表）縄目・ナデか	穿孔
74	321	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.0	—	2.0	浅黄橙	（内）7.5YR8/3、（外）10YR8/3	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅲsh、大きさ・中、厚手
74	322	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.3	—	1.8	浅黄橙	7.5YR8/3	灰黄褐	10YR6/2	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	白色系、Ⅲsh、Ⅸ期、屈曲有、大きさ・中、厚手
74	323	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.3	—	2.0	浅黄橙	（内）7.5YR8/3、（外）10YR8/3	—	—	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅸ期、Ⅲsh、大きさ・中、厚手、屈曲有
74	324	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	6.5	—	1.7	浅黄橙	10YR8/3	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅸ期中か、Ⅲsh、大きさ・小、薄手
74	325	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.8	—	2.1	浅黄橙	10YR8/3	—	—	良	密（φ6.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅸ期か、Ⅲsh、大きさ・特大、他より器高有、厚手
74	326	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.6	—	1.95	浅黄橙	7.5YR8/3	—	—	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅲsh、大きさ・大、厚手
74	327	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.6	—	2.1	浅黄橙	7.5YR8/3	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅲsh、大きさ・中、厚手
74	328	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.4	—	1.8	浅黄橙	7.5YR8/3	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅸ期、Ⅲsh、底部・内面・外面に焼きムラ有、大きさ・中、厚手
74	329	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	6.5	—	2.5	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	Ⅲsh、内面・外面1/2に焼きムラ有、大きさ・小、薄手
74	330	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	6.9	—	2.0	浅黄橙	10YR8/3	—	—	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅲsh、大きさ・小、薄手
74	331	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.2	—	2.0	浅黄橙	7.5YR8/3	—	—	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅲsh、底部・内面・外面に焼きムラ有、大きさ・中、厚手
74	332	土師器	へそ皿	1	5G・6G	土坑287	7.8	—	2.0	灰白	7.5YR8/2	浅黄橙	10YR8/4	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ナデ・オサエ、（外）ナデ・オサエ	Ⅲsh、大きさ・大、厚手
74	333	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑287	8.6	—	1.7	橙	5YR7/6	橙	5YR7/6	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを少量含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	褐色系、Ⅸ期、大1
74	334	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑287	6.9	—	1.5	にぶい橙	5YR7/4	—	—	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャート・風化黒雲母を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	完形、褐色系、Ⅸ期以降Ⅹ期以前
74	335	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑287	8.5	—	1.7	淡橙	5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	褐色系、Ⅸ期、大1か
74	336	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑287	8.7	—	1.9	（内）淡橙、（外）橙	（内）5YR8/4、（外）5YR7/6	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ8.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	褐色系、Ⅸ期、大1
74	337	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑287	8.2	—	2.1	にぶい橙	5YR7/4	にぶい橙	5YR7/4	良	密（φ4.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	褐色系、Ⅸ期からⅩ期以前

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
74	338	土師器	Ⅲ S	1	5G・6G	土坑 287	7.4	—	1.5	浅黄橙	10YR8/3	—	—	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	完形、Ⅸ期、口縁部の一部焼成不良（灰黒色）
74	339	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑 287	7.6	—	1.3	灰白	10YR8/2	—	—	良	密（φ3.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	完形、白色系、Ⅸ期
74	340	土師器	Ⅲ S	1	5G・6G	土坑 287	8.1	—	2.0	浅黄橙	7.5YR8/3	—	—	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	完形、白色系
74	341	土師器	Ⅲ N	1	5G・6G	土坑 287	8.8	—	1.9	にぶい橙	7.5YR7/4	明褐灰	7.5YR7/2	良	密（φ3.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	褐色系、Ⅸ期、大1
74	342	土師器	Ⅲ S	1	5G・6G	土坑 287	8.6	—	2.0	浅黄橙	10YR8/3	にぶい橙	10YR7/4	良	密（φ2.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	白色系、小
74	343	土師器	Ⅲ S	1	5G・6G	土坑 287	11.0	—	2.0	灰白	10YR8/2	にぶい黄橙	10YR8/4	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ナデ・オサエ	口縁部内面に指ナデアゲ痕跡有、白色系、Ⅸ期か、大
74	344	土師器	Ⅲ S	1	5G・6G	土坑 287	11.7	—	2.2	浅黄橙	7.5YR8/4	—	—	良	密（φ1.0 ㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形、白色系、Ⅸ期か、大
74	345	土師器	Ⅲ S	1	5G・6G	土坑 287	13.0	—	2.4	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・チャート・風化黒雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	外面に煤付着、白色系、Ⅸ期、大
74	346	土師器	Ⅲ	1	5G・6G	土坑 287	8.4	—	2.4	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
74	347	青磁	椀	1	6G	土坑 287	—	5.0	（2.05）	（釉）オリーブ灰	（釉）10Y5/2	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	見込みに花弁文有
74	348	施釉陶器	Ⅲ	1	6G	土坑 287	11.3	6.0	2.95	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4	良	密	（内）施釉・ロクロナデ（外）施釉・ロクロナデ・糸切り痕	口縁部施釉（5Y6/4 オリーブ黄）、瀬戸産、拓本有
74	349	古瀬戸	鉢	1	6G	土坑 287	32.5	—	（9.9）	（釉）オリーブ黄	（釉）7.5Y6/3	灰白	5Y7/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉・ケズリ	瀬戸産
74	350	瓦	小軒丸瓦	1	6G	土坑 287	（長さ）6.5	—	（瓦当径）5.3	灰	N5/0	—	—	良	密（φ2.0 ㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ナデ、（外）ケズリ・タテ方向のナデ・笵	完形、拓本有
74	351	焼締陶器	甕	1	6G	土坑 287	51.0	—	（38.0）	暗赤褐	5YR3/6	黄灰	2.5Y5/1	良	密（φ6.0 ㎜の礫と φ3.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・オサエのちナデ、（外）ロクロナデ・ヨコ方向のナデ・タテ方向のナデ・タタキ	外面に自然釉付着、拓本有
74	352	焼締陶器	甕	1	6G	土坑 287	44.3	—	（18.5）	暗赤褐	5YR3/3	灰白	5Y7/2	良	密（φ10.8 ㎜の礫と φ10.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・オサエのちナデ、（外）ロクロナデ・板ナデか	外面に自然釉付着
75	353	土師器	へそ皿	1	5G	土坑 320	7.0	—	1.6	浅黄橙	7.5YR8/4	—	—	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・黒色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	完形
75	354	瓦器	小椀	1	5G	土坑 320	7.6	4.0	2.8	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密	（内）ヨコナデのちミガキ・ヨコナデ、（外）ヨコナデ・ナデ・高台貼付時のナデ	
75	355	青磁	椀	1	5G	土坑 320	14.0	—	（4.2）	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y6/2	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	
75	356	瓦質土器	羽釜	1	5G	土坑 320	—	—	（4.45）	暗灰	N3/0	灰黄	2.5Y7/2	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・ナデ	
75	357	土師器	丸底小鉢	1	5F	土坑 320	10.2	—	（4.5）	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ナデ、（外）ハケのちヨコナデ・ハケ	
75	358	須恵器	鉢	1	5G	土坑 320	24.4	—	（4.65）	灰	N5/0	灰	N5/0	良	密（φ7.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	内面にワラ痕有
75	359	焼締陶器	甕	1	5F	土坑 320	26.9	—	（5.7）	褐	7.5YR4/6	黄灰	2.5Y1/6	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	口縁部から内面にかけて自然釉付着
75	360	土師器	へそ皿	1	5G	土坑 321	7.5	—	1.7	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	361	瓦質土器	風炉	1	5G	土坑 321	16.2	—	（4.75）	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケのちナデ、（外）ヨコナデ・板ナデ・吊り手貼付時のナデ	外面に吊り手有
75	362	土師器	Ⅲ	1	6F	土坑 322	—	—	（2.0）	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	363	土師器	Ⅲ	1	6F	土坑 322	—	—	（2.0）	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	364	土師器	Ⅲ	1	6F	土坑 322	—	—	（2.0）	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
75	365	土師器	皿	1	6F	土坑 322	—	—	(2.1)	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	366	土師器	皿	1	6F	土坑 322	—	—	(2.0)	にぶい黄橙	10YR7/3	褐灰	10YR6/1	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	367	土師器	皿	1	6G	溝 622	7.0	—	(1.7)	灰白	10YR8/2	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ	
75	368	瓦質土器	火鉢	1	6G	溝 622	30.0	—	(4.6)	（内面）灰白、（外面）暗灰	（内面）10YR8/1、（外面）N3/0	灰白	10YR8/1	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ミガキ・ヨコナデ、（外）ミガキ	
75	369	土師器	皿	1	7F	土坑 642	8.0	—	1.6	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	370	古瀬戸	盤	1	7F	土坑 642	24.6	13.2	(6.3)	（釉）オリーブ黄、（胎土）灰白	（釉）5Y6/3、（胎土）7.5y8/1	灰白	7.5Y8/1	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・回転ヘラ削り	内面外面とも施釉
75	371	土師器	皿	1	5G	柱穴 384	8.3	—	2.2	浅黄橙	7.5YR8/3	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	372	焼締陶器	甕	1	5G・5H	柱穴 384	—	—	(6.0)	灰	5Y4/1	黄灰	2.5Y6/1	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	内面・外面とも自然釉付着
75	373	土師器	へそ皿	1	5F	溝 368	7.3	—	1.7	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	374	土師器	皿	1	6F	溝 368	8.2	—	1.6	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.5 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着、ひずみ大
75	375	土師器	皿	1	5F	溝 368	7.1	—	1.7	橙	2.5YR6/8	灰黄	2.5Y7/2	良	密（φ4.0 ㎜の礫と φ1.0mm 以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着、灯明皿
75	376	土師器	皿	1	5F	溝 368	8.5	—	1.9	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ4.0 ㎜の礫と φ1.0mm 以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	377	土師器	皿	1	5F	溝 368	8.5	—	2.0	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	378	土師器	皿	1	5F	溝 368	12.0	—	2.5	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	379	土師器	皿	1	5F	溝 368	14.2	—	2.4	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ1.5 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	380	土師器	皿	1	5F	溝 368	15.1	—	(2.6)	浅黄橙	7.5YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着
75	381	灰釉陶器	蓋	1	5F	溝 368	14.9	—	(3.6)	灰白	N7/0	灰白	N7/0	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）ロクロナデのち施釉、（外）ケズリのち施釉（ロクロナデ残る）	
75	382	土師器	皿	1	7G	土坑 380	8.0	—	1.9	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ2.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着、灯明皿
75	383	土師器	皿	1	7G	土坑 380	9.5	—	2.4	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ4.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着、灯明皿
75	384	土師器	皿	1	7G	土坑 380	9.9	—	2.2	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	385	施釉陶器	椀	1	7G	土坑 380	—	6.0	(6.5)	（釉）オリーブ褐	（釉）2.5Y4/3	にぶい赤褐	5YR5/3	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英を含む）	（内）施釉、（外）施釉・ケズリのち釉ハギ（蛇の目）	内面・外面とも貫入有
75	386	焼締陶器	甕	1	7G	土坑 380	—	—	(8.2)	にぶい赤褐	2.5YR4/3	褐灰	10YR4/1	良	密（φ4.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ	
75	387	土師器	皿	1	5H	礎石列 285	12.2	—	(2.25)	浅黄橙	7.5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/3	良	密（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
75	388	瓦	軒丸瓦	1	5H	礎石列 285	（残存長）2.7	（残存幅）14.1	（瓦当径）6.95	灰	N4/0	浅黄	2.5Y7/3	良	密（φ2.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）ヨコ方向のナデ、（表）笵（笵キズ有）・ナデ	
75	389	瓦	軒平瓦	1	5H	礎石列 285	（残存長）4.0	（残存幅）10.7	（瓦当厚）4.25	暗灰	N3/0	浅黄	2.5Y7/3	良	密（φ5.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）ケズリ、（表）ナデ・ケズリ・笵	

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
75	390	瓦	軒平瓦	1	5H	礎石列285	（残存長）6.8	（残存幅）12.6	（瓦当厚）3.3	暗灰	N3/0	浅黄	2.5Y7/3	良	密（φ5.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）ケズリ、（表）ナデ・ケズリ・笵	
76	391	土師器	皿	2	8M	溝430下位	8.8	—	1.9	浅黄橙	7.5YR8/4	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着
76	392	土師器	皿	2	8L	溝430下位	11.4	—	2.8	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
76	393	白磁	壺	2	8K	溝430下位	10.5	—	（3.7）	（釉）灰白	（釉）10Y8/1	白	N9/0	良	密	（内）ロクロ水挽き、（外）ロクロ水挽き	口縁部に貫入有
76	394	施釉陶器	甕	2	8K	溝430下位	—	—	（8.6）	にぶい赤褐	2.5YR4/4	灰	N6/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・ナデ、（外）ロクロナデ・鉄釉・施釉	外面の施釉（10Y4/2オリーブ灰）
76	395	瓦質土器	鍋	2	8K	溝430下位	22.1	—	（2.5）	灰	N4/0	灰	N6/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ハケ、（外）ヨコナデ・ナデ	
76	396	瓦質土器	羽釜	2	8K	溝430下位	18.9	—	（8.6）	灰	N4/0	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ハケ・ナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	
76	397	青磁	椀	2	8L	溝430下位	—	—	（3.87）	（釉）オリーブ黄	（釉）7.5Y6/3	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	内面に文様有
76	398	青磁	鉢	2	8L	溝430下位	22.8	—	（3.0）	（釉）明緑	—	白	N9/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	外面に蓮弁文浮彫
76	399	土師器	丸底鉢	2	8L	溝430中位	15.8	—	（8.6）	橙	5YR6/6	橙	5YR6/6	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・ハケのちナデ	
76	400	青磁	皿	2	8L	溝430中位	9.5	4.7	2.05	灰白	7.5Y8/1	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉・釉ハギ・施釉、（外）施釉・回転ケズリ・削り出し高台	内面・外面とも施釉（2.5GY8/1灰白）
76	401	青磁	椀	2	8L	溝430中位	—	—	（3.7）	（釉）オリーブ灰	（釉）2.5GY6/1	灰白	N8/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	外面に蓮弁文浮彫
76	402	瓦質土器	羽釜	2	8L	溝430中位	—	—	（8.65）	暗灰	N3/0	灰白	5Y8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ・石痕・ナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ・ナデ	外面に煤付着
76	403	焼締陶器	甕	2	8L	溝430中位	—	—	（12.9）	暗赤褐	7.5R3/3	暗赤褐	7.5R3/3	良	やや粗（φ3.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ・オサエ、（外）ヨコナデ・ナデ	
76	404	焼締陶器	甕	2	8L	溝430上位	—	—	（11.8）	にぶい褐	7.5YR5/4	灰	N6/0	良	密（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・自然釉	外面に自然釉付着（N7/0灰白）
76	405	焼締陶器	甕	2	8K	溝430中位	—	—	（10.0）	暗灰	N3/0	灰	N5/0	良	やや粗（φ3.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ	
76	406	須恵器	すり鉢	2	8L	溝430上位	—	—	（7.2）	にぶい赤褐	5YR5/3	にぶい赤褐	5YR5/3	良	やや粗（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ・すり目、（外）ロクロナデ	外面に重ね焼きの痕跡有、拓本有
76	407	焼締陶器	甕	2	8K	溝430上層	—	—	（34.9）	赤褐	10R4/4	赤黒	10R2/1	良	やや粗（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ・オサエ、（外）ヨコナデ・ナデ	
76	408	瓦質土器	風炉	2	8K	溝430上位	—	—	（5.8）	灰	N4/0	灰	N7/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ミガキか	外面に貼付突帯文（2条）・朱文ミガキか、拓本有
76	409	瓦質土器	火鉢	2	8K	溝430上位	—	—	（5.5）	灰	N4/0	灰	N7/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコミガキ、（外）ヨコミガキ・タテミガキ	外面にスタンプ文有・拓本有
76	410	瓦質土器	風炉	2	8K	溝430中位	—	—	（8.6）	灰	N4/0	灰白	2.5Y8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ミガキ・貼付突帯	
76	411	瓦質土器	火鉢	2	8K	溝430上位	—	—	（7.4）	灰	N4/0	灰	N7/0	良	密（φ2.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデのちミガキ・ミガキ・ナデ、（外）ミガキ・ナデ	
76	412	磁器	蓋	2	8L	溝430中位	2.3	—	1.3	（釉）灰白、（内）灰白	（釉）2.5GY8/1、（内）N8/0	灰白	N8/0	良	密	（内）ナデ、（外）施釉	つまみ有
76	413	瓦	道具瓦（磚）	2	8K	溝430中位	（残存長）11.9	（残存幅）13.1	—	暗灰	N3/0	黒	N2/0	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ、（表）布目・ナデ	穿孔
76	414	瓦	道具瓦（磚）	2	8L	溝430中位	（残存長）4.8	（残存幅）7.8	—	灰	N4/0	淡赤橙	2.5YR7/4	良	やや粗（φ2.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（裏）ナデ、（表）縄目のちナデ・縄目	
76	415	瓦	軒丸瓦	2	8L	溝430上層	—	—	（7.3）	灰	N4/0	灰白	N7/0	良	密（φ3.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ・ヨコ方向のナデ、（表）ヨコ方向のナデ・ナデ・笵	
76	416	瓦	軒平瓦	2	8L	溝430上層	（残存長）5.0	（残存幅）6.5	（瓦当厚）2.4	浅黄	2.5Y7/4	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ・ヨコ方向のナデ、（表）布目・面取り・笵	剣頭文
77	417	土師器	皿	2	7K	埋甕538	8.9	—	（1.2）	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・チャート・赤色粒子・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
77	418	土師器	Ⅲ	2	7K	埋甕538	11.8	—	(2.1)	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
77	419	瓦器	羽釜	2	7K	埋甕538	21.0	—	(6.2)	暗灰	N3/0	暗灰	N3/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ハケ・ナデ、（外）ヨコナデ・鍔貼付時のナデ・オサエ	
77	420	緑釉陶器	椀	2	7K	埋甕538	—	7.5	(2.4)	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y5/3	灰白	2.5Y7/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・黒色粒子を含む）	（内）施釉、（外）施釉・貼付高台・回転ケズリ	
77	421	緑釉陶器	椀	2	7K	埋甕538	16.9	7.9	6.8	（釉）灰オリーブ	（釉）7.5Y5/3	灰	7.5Y6/1	良	密（φ0.5㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）施釉、（外）施釉・貼付高台・回転ケズリ	外面に輪花文か
77	422	焼締陶器	大甕	2	7K	埋甕538	—	20.0	(73.9)	褐	7.5YR4/6	明褐灰	7.5YR7/1	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）自然釉・タタキ・ナデ	頸部から肩部にかけて自然釉付着
77	423	土師器	へそⅢ	2	7L	溝428最下層	6.5	—	1.4	浅黄橙	10YR8/3	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
77	424	土師器	Ⅲ	2	7L	溝428最下層	6.4	—	1.55	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
77	425	土師器	Ⅲ	2	7L	溝428最下層	8.5	—	1.9	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/4	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
77	426	土師器	Ⅲ	2	7L	溝428最下層	9.8	—	1.8	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	X中期
77	427	土師器	Ⅲ	2	7L	溝428最下層	13.4	—	1.75	灰白	2.5Y8/1	灰白	N8/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
77	428	土師器	Ⅲ	2	7K	溝428下位	8.0	—	1.85	にぶい橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
77	429	土師器	Ⅲ	2	7L	溝428下位	9.0	—	1.2	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着
77	430	土師器	盤	2	7L	溝428下位	—	—	(5.5)	にぶい黄橙	10YR7/3	灰白	10YR8/1	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ハケ、（外）ヨコナデ・オサエ・ナデ	
77	431	白磁	椀	2	7K	溝428下位	—	6.0	(2.2)	（釉）淡黄、（胎土）灰白	（釉）2.5Y8/3、（胎土）10YR8/2	灰白	2.5Y8/2	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	
77	432	磁器	椀	2	7L	溝428下位	—	6.0	(2.7)	（釉）灰白、（胎土）灰黄	（釉）N8/0、（胎土）2.5Y7/2	灰白	N7/0	良	密	（内）施釉・釉ハギ・施釉、（外）施釉・回転ケズリ・削り出し高台	
77	433	青磁	椀	2	7K	溝428下位	—	4.9	(3.3)	（内）浅黄橙、（外）にぶい赤褐	（内）10YR8/3、（外）5YR4/4	灰	N6/0	良	密	（内）施釉・ロクロナデ、（外）施釉・削り出し高台	内面・外面とも施釉（2.5GY6/1オリーブ灰）
77	434	瓦	軒丸瓦	2	7L	溝428下位	（残存長）8.6	—	（瓦当径）12.2	暗灰	N3/0	灰	N6/0	良	密（φ2.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）布目・ナデ、（表）タテ方向のナデ・ナデ・笵	巴紋
77	435	瓦	磚	2	7L	溝428下位	（残存長）14.5	（幅）13.5	—	灰	N4/0	灰白	N8/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）ナデ	巴紋
77	436	須恵器	Ⅲ	2	7K	溝428中位	7.4	—	1.6	灰	N5/0	灰	N6/0	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・糸切り	
77	437	青磁	稜花Ⅲ	2	7K	溝428中位	13.5	5.6	3.7	（釉）オリーブ灰	（釉）2.5GY6/1	灰	N6/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉	内面に文様有
77	438	青磁	椀	2	7K	溝428中位	—	5.1	(1.9)	（釉）オリーブ灰、（外）にぶい赤褐	（釉）2.5GY6/1、（外）2.5YR5/4	灰	N6/0	良	密	（内）施釉、（外）施釉・削り出し高台	
77	439	青磁	椀	2	7K	溝428礫層	14.6	—	(3.0)	（釉）オリーブ黄	（釉）5Y6/3	灰白	5Y7/1	良	密	（内）施釉、（外）施釉	外面に蓮弁文浮彫
78	440	土師器	ⅢS	1	4G	池256	9.2	—	1.9	浅黄	2.5Y7/3	浅黄	2.5Y7/3	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
78	441	土師器	Ⅲ	1	4G	池256	10.0	—	1.8	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0㎜以下の石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
78	442	土師器	Ⅲ	1	4G	池256	10.4	—	2.1	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
78	443	土師器	Ⅲ	1	4G	池256	9.0	—	1.5	明褐灰	7.5YR7/2	明褐灰	7.5YR7/2	良	密（φ0.5㎜以下の長石・石英・雲母を含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	
78	444	土師器	Ⅲ	1	4G	池256	13.1	—	(2.3)	灰白	7.5YR8/2	灰白	7.5YR8/2	良	密（φ1.0㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ヨコナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
78	445	土師器	皿	1	4G	池 256	13.2	—	2.5	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	密（φ1.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデ、（外）ヨコナデ・オサエ	口縁部に煤付着、底部に黒斑有
78	446	土師器	甕	1	4F	池 256	19.6	—	（6.7）	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ヨコナデ・ナデハケ、（外）ヨコナデ・ナデ	平安時代の甕、混入品か、別時期
78	447	施釉陶器	椀	1	4F	池 256	—	4.6	（4.3）	（外面釉）浅黄、（内面釉）黒	（外面釉）5Y7/4、（内面釉）5Y2/1	橙	7.5YR6/6	良	密（φ0.5 ㎜以下の長石を含む）	（内）施釉、（外）施釉・回転ヘラ削り・削り出し高台	
78	448	施釉陶器	輪花皿	1	4G	池 256	10.8	6.4	2.2	（釉）褐	（釉）7.5YR4/3	浅黄橙	10YR8/3	良	密（φ0.5 ㎜以下のチャート・赤色粒子を含む）	（内）施釉・釉ハギ、（外）施釉・輪トチン	
78	449	染付	椀	1	4G	池 256	—	4.7	（1.2）	（釉）灰白	（釉）10Y8/1	にぶい黄橙	10YR7/2	良	密（φ1.0 ㎜以下の石英・赤色粒子を含む）	（内）施釉・釉ハギ（蛇の目）、（外）施釉・貼付高台	底部に圏線、高台に砂付着
78	450	瓦	軒丸瓦	1	4F	池 256	（残存長）17.9	—	（瓦当径）14.9	灰	N5/0	灰白	5 Y 8/1	良	密（φ6.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）棒状圧痕・糸切りのち布目・ヨコ方向のナデ・ナデ、ヨコ方向のナデ（表）タテ方向のナデ・ヨコ方向のナデ・ナデ・笵・ナデ	
78	451	瓦	軒丸瓦	1	4G	池 256	（残存長）11.2	—	（推定瓦当径）14.0	灰	N5/0	灰白	5 Y 7/1	良	密（φ5.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）糸切りのち布目・ヨコ方向のナデ・ナデ、（表）ナデ・ヨコ方向のナデ・笵	
78	452	瓦	軒平瓦	1	4G	池 256	（残存長）10.0	（残存幅）16.9	（瓦当厚）3.7	暗灰	N3/0	灰白	5Y7/1	良	密（φ3.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）ナデ・ヨコ方向のナデ・ケズリ・ヨコ方向のナデ、（表）ナデ・ケズリ・笵	
78	453	瓦	軒平瓦	1	4G	池 256	（残存長）12.6	（幅）22.5	（瓦当厚）4.3	灰	N4/0	灰白	7.5Y8/1	良	密（φ8.0 ㎜の礫と φ3.5mm 以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（裏）ナデ・板ナデ・ケズリ、（表）ナデ・部分的にタタキ・ケズリ・ナデ・笵・ナデ	
78	454	瓦	軒平瓦	1	4G	池 256	（残存長）10.0	（残存幅）9.9	（推定瓦当厚）4.3	灰黄	2.5Y6/2	灰白	2.5 Y 7/1	良	密（φ4.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含む）	（裏）ナデ・ヨコ方向のナデ、（表）ナデ・ヨコ方向のナデ・ケズリ・ナデ・笵	二次被熱か
78	455	瓦	鬼板瓦	1	4G	池 256	（残存長）16.2	（残存幅）15.0	（厚さ）5.2	灰	N5/0	灰白	N7/0	良	密（φ6.0mm の礫と φ3.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（裏）—（表）ナデ・ヨコ方向のナデ・板ナデ・ケズリ	
78	456	施釉陶器	甕	1	4G	埋甕 53	55.8	16.1	54.7	にぶい赤褐	2.5YR4/4	灰白	7.5Y8/1	良	粗（φ1.5 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）ロクロナデ、（外）ロクロナデ・ナデ	
79	457	石製品	石鍋	1	5F	土坑 225	（残存長）7.0	（残存幅）3.6	（厚さ）1.6	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 53.0g、側面にノミ痕有、温石か
79	458	石製品	石鍋	1	5G	土坑 286	（残存長）4.3	（残存幅）11.6	（厚さ）2.1	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕・ノミ痕	重さ 162.5g、側面にノミ痕有、温石か
79	459	石製品	石鍋	1	5H	土坑 310	（残存長）3.4	（残存幅）5.0	（厚さ）2.7	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 50.5g、外面にノミ痕有、温石か
79	460	石製品	石鍋	1	5F	土坑 319	（残存長）7.3	（残存幅）7.4	（厚さ）1.6	—	—	—	—	—	—	（内）ノミ痕か・加工痕、（外）ノミ痕か・ノミ痕	重さ 170.5g、温石か
79	461	石製品	砥石	1	5G	土坑 287	（残存長）7.2	（幅）3.8	（厚さ）0.5	—	—	—	—	—	—	（内）使用痕、（外）使用痕	重さ 27.5g、仕上げ砥（4 面）、粘板岩～頁岩
79	462	石製品	砥石	1	5H	土坑 310	（残存長）8.4	（幅）4.2	（厚さ）0.8	—	—	—	—	—	—	（内）使用痕、（外）使用痕	重さ 64.0g、仕上げ砥（2 面）、変成岩
79	463	石製品	砥石	1	7H	土坑 317	（残存長）6.6	（残存幅）3.4	（厚さ）1.7	—	—	—	—	—	—	（内）使用痕、（外）使用痕	重さ 60.0g、中～仕上げ砥（4 面）
79	464	石製品	砥石	1	5G	土坑 320	（残存長）3.8	（残存幅）2.4	（厚さ）0.7	—	—	—	—	—	—	（内）使用痕（外）使用痕	重さ 11.5g、仕上げ砥、粘板岩～頁岩
79	465	石製品	砥石	1	5G	土坑 320	（残存長）7.7	（残存幅）6.4	（厚さ）7.2	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）使用痕	重さ 472.5g、中～仕上げ砥、ホルンヘルス
79	466	石製品	砥石	1	5G・5H	礎石列 285	（残存長）7.5	（幅）3.3	（厚さ）0.8	—	—	—	—	—	—	（内）使用痕、（外）使用痕	重さ 32.8 g、仕上げ砥、滑石、一部自然面残る
79	467	石製品	砥石	1	5G	土坑 286	（残存長）5.8	（残存幅）8.0	（厚さ）2.0	—	—	—	—	—	—	（内）使用痕、（外）使用痕	重さ 125.9g、仕上げ砥、滑石
79	468	石製品	砥石	1	5G	溝 367	（残存長）14.8	（残存幅）8.9	（残存厚）4.0	—	—	—	—	—	—	（内）加工か、（外）使用痕	重さ 635.0g、中～仕上げ砥、滑石
79	469	石製品	砥石	1	5G	土坑 392	（残存長）6.1	（残存幅）5.9	（残存厚）2.8	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	良	密（φ3.0 ㎜以下の長石・石英・チャート・雲母・赤色粒子を含む）	（裏）—、（表）ナデ	中～仕上げ砥、付着物有
79	470	石製品	未成品	1	5G	土坑 345	（長さ）17.2	（幅）14.3	（厚さ）1.7	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕・工具痕、（外）加工痕・工具痕	重さ 968.5 g、仕上げ砥、側面にノミ痕、滑石
79	471	石製品	紡錘車	1	6F	溝 325	（残存長）3.1	（残存幅）2.5	（厚さ）0.9	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 10.0 g、滑石
79	472	石製品	紡錘車か	1	5G	4 層	（長さ）3.7	（残存幅）1.9	（厚さ）1.9	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 27.3g、未成品（半製品）、穿孔時には破損か（穿孔未貫通）

図版番号	報告番号	器種	器形	調査区	地区	遺構名／層名	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	色調（内・外）		色調（断）		焼成	胎土	調整	備考
79	473	石製品	蛤刃石斧	2	8M	井戸 528	（長さ）6.8	（残存幅）7.0	（厚さ）3.0	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 159.3g、一部に使用痕有
79	474	木製品	箸	1	4F	井戸 279b 掘方	（残存長）12.5	（幅）0.6	（厚さ）0.4	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	
79	475	木製品	箸	2	10L・11L	井戸 509 井戸枠内	（残存長）9.8	（幅）0.4	（厚さ）0.4	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	全体的に磨滅
79	476	石製品	碁石	1	6H	土坑 247	（長さ）1.4	（幅）1.5	（厚さ）0.6	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 1.8g
79	477	石製品	碁石	2	10L	土坑 519	（長さ）1.5	（幅）1.6	（厚さ）0.7	—	—	—	—	—	—	（内）加工痕、（外）加工痕	重さ 2.8g
79	478	ガラス製品	ガラス棒	1	4F	土坑 260	（残存長）2.3	（幅）3.0	（残存厚）0.3	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	479	鉄製品	鎹	1	5F	土坑 319	（残存長）2.8	（残存幅）9.1	（残存厚）1.5	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	480	鉄製品	釘	1	6G	土坑 381	（残存長）6.0	（残存幅）1.4	（残存厚）0.9	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	481	鉄製品	釘	1	7H	土坑 317	（残存長）5.3	（残存幅）1.4	（残存厚）2.3	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	482	鉄製品	釘	1	4G	池 256 掘方	（残存長）6.0	（残存幅）1.3	（残存厚）0.9	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	483	鉄製品	釘	1	4G	池 256 掘方	（残存長）3.7	（残存幅）3.4	（残存厚）0.5	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	484	鉄製品	釘	1	4G	池 256 掘方	（残存長）5.4	（残存幅）3.3	（残存厚）1.3	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	
79	485	鉄製品	雁股鏃	1	6F	土坑 261	（残存長①）9.6、（残存長②）3.4	（幅）5.0	（厚さ a）0.9、（厚さ b）0.9	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	全体に錆付着
80	486	銅製品	鏡	2	10K	ピット 560	（径）10.3	（縁高）0.7、（菊花座紐孔）0.2	（厚さ）内区 0.1、外区 0.2	—	—	—	—	—	—	—	
81	487	銅製品	鍋	1	6F	土坑 322	24.2	—	7.8	—	—	—	—	—	—	—	
81	488	銅製品	手鍋（把手）	1	6G	土坑 381	（長さ）6.1	（幅）3.5	—	—	—	—	—	—	—	（内）—、（外）—	内面に付着物有
81	489	土製品	鋳型	1	4F	井戸 279a 掘方	（残存長）12.35	（残存幅）8.0	（厚さ）4.6	（内）にぶい橙、（外）灰黄	（内）7.5YR7/4、（外）2.5YR7/2	灰黄	2.5YR7/2	良	粗（φ1.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）不調整	
81	490	土製品	鋳型	1	4G	池 256	（残存長）8.6	（残存幅）7.2	（厚さ）2.4	灰白、淡橙	2.5Y8/1、5YR8/3	灰白、淡橙	2.5Y8/1、5YR8/3	良	—	（内）ナデ、（外）ナデ	モミ圧痕付着
81	491	土製品	鋳型	1	5G	土坑 286	（残存長）4.8	（幅）4.15	（残存厚）3.5	（表）赤灰、（側）浅黄橙	（表）5R6/1、（側）7.5YR8/6	浅黄橙	7.5YR8/3	良	—	（内）—、（外）ナデ	
81	492	土製品	鋳型	1	4G	4 層	（残存長）6.4	（残存幅）4.9	（厚さ）3.1	（表）赤灰、（裏）淡橙	（表）7.5R6/1、（裏）5YR8/4	浅黄橙	7.5YR8/4	良	—	（内）ナデ、（外）ナデ	
81	493	土製品	鋳型	1	4G	4 層	（残存長）5.8	（残存幅）5.0	（厚さ）2.8	（表）暗灰、（裏）灰白	（表）N3/0、（裏）7.5YR8/2	暗灰	N3/0	良	—	（内）調整ナデ、（外）調整ナデ	
81	494	土製品	フイゴ羽口	1	4H	ピット 267	（長さ）9.9	（幅）8.4	（厚さ）7.8	（内）橙・浅黄橙、（外）灰・にぶい黄橙	（内）2.5YR7/6・7.5YR8/6、（外）N5/0・10YR6/3	灰	N4/0	良	やや粗（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）—、（外）—	
81	495	土製品	フイゴ羽口	1	5H	土坑 310	（長さ）7.6	（幅）6.0	（厚さ）2.5	（内）にぶい橙、（外）灰白	（内）7.5YR7/4、（外）10YR8/2	灰白	10YR8/2	良	粗（φ2.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）不調整	
81	496	土製品	鋳型	1	7H	土坑 608	（体部径）25.5	21.6	（18.95）								
81	497	土製品	取瓶	1	5G	溝 367 上位	—	—	（6.6）	（内）褐灰、（外）灰黄	（内）7.5YR6/1、（外）2.5YR7/2	灰黄	2.5YR7/2	良	粗（φ2.0 ㎜以下の長石・チャートを含む）	（内）ナデ、（外）不調整	
81	498	土製品	取瓶	1	6F	3 層	16.2	—	（9.3）	（内）灰・灰赤、（外）灰・黒	（内）N5/0・2.5Y6/2、（外）N5/0・7.5 Y 2/1	灰	N4/0	良	粗（φ1.0 ㎜以下の長石・石英・チャートを含む）	（内）—、（外）—	外面に付着物有

表4　銭貨一覧表

図版番号	報告番号	調査区	地区	層位／遺構	遺構	銭貨名	初鋳年	渡来銭	法量（g）	外径（cm）	内径（cm）	書体	備考
82	499	2	1区	1層	—	紹聖（元）寶	1094	北宋	2.052	2.4	1.9	行書	欠け
82	500	1	5H	1層	—	乾道元寶	1165	南宋	2.700	2.5	1.9	真書	
82	501	1	5H	1層	—	寛永通寶（1期）	1636	—	3.813	2.5	2.0	真書	歪み
82	502	2	1区	1層	—	寛永通寶（1期）	1636	—	3.576	2.5	2.1	真書	
82	503	2	1区	1層	—	寛永通寶（1期）	1636	—	3.418	2.4	1.9	真書	
82	504	2	7K	1層	—	寛永通寶（3期）	1697	—	2.508	2.2	1.8	真書	背上：元
82	505	2	—	1層	—	絵銭	—	—	6.801	2.5	2.2	—	大黒天
—	506	2	9L	2a層	築地地業114	不明	—	—	0.457	—	—	—	割れ
82	507	1	4H	2a層	土坑67下層	熙寧元寶	1068	北宋	3.014	2.4	2.0	真書	
82	508	2	6K	2a層	土坑117	天聖元寶	1023	北宋	3.241	2.3	2.0	篆書	
82	509	2	6K	2a層	土坑117	寛永通寶（1期）	1636	—	3.241	2.5	2	真書	
82	510	2	6K	2a層	土坑117	寛永通寶（1期）	1636	—	3.439	2.5	2.0	真書	
82	511	2	2区	2a層	—	嘉祐元寶	1056	北宋	3.074	2.5	2.1	篆書	
82	512	2	6L	2a層	—	熙寧元寶	1068	北宋	4.102	2.5	1.9	篆書	
82	513	1	5H 5I	2a層	—	元豊通寶	1078	北宋	1.952	2.4	1.8	篆書	欠け
82	514	2	6L	2a層	—	元祐通寶	1086	北宋	2.557	2.4	1.9	篆書	
82	515	1	3区	2a層	—	元祐通寶	1086	北宋	3.775	2.5	1.9	行書	
82	516	2	2区	2a層	—	紹聖元寶	1094	北宋	3.526	2.4	1.9	行書	
82	517	1	5H	2a層	—	寛永通寶（1期）	1636	—	3.489	2.5	2.0	真書	
82	518	2	6L	2a層	—	寛永通寶（1期）	1636	—	4.312	2.4	1.9	真書	
82	519	2	6L	2a層	—	寛永通寶（1期）	1636	—	3.551	2.5	2.0	真書	
82	520	1	5G	2a層	—	寛永通寶（3期）	1697	—	1.943	2.3	1.9	真書	背上：佐
82	521	2	8L	2a層	—	寛永通寶（3期）	1697	—	2.589	2.4	2.0	真書	
—	522	2	2区	2a層	—	寛永通寶（3期）	1697	—	3.503	2.5	2.0	真書	
—	523	2	7K	2a層	—	不明	—	—	2.001	2.3	1.8	—	欠け
82	524	1	5H 5I	2a層	—	不明	—	—	1.461	—	—	—	割れ
82	525	1	5G	2b層	土坑95	政和通寶	1111	北宋	2.740	2.5	2.2	真書	
82	526	1	4F	2b層	—	天禧通寶	1017	北宋	2.53	2.5	2.1	真書	欠け
82	527	1	5G	2b層	—	寛永通寶（3期）	1697	—	1.741	2.1	1.8	真書	割れ
82	528	2	6L	2b層	—	皇宋通寶	1038	北宋	2.914	2.5	1.9	真書	
82	529	2	7K	2b層	—	大觀通寶	1167	北宋	3.038	2.5	2.3	真書	欠け
82	530	1	6H	2b層第2面	—	嘉泰通寶	1201	南宋	2.076	2.5	2.1	真書	背上：三、欠け、歪み
82	531	1	4G	3a層	池256堀方	皇宋通寶	1038	北宋	2.755	2.4	1.9	篆書	
82	532	1	4F	3a層	池256掘方	至和元寶	1054	北宋	2.268	2.4	1.9	真書	
82	533	1	4G	3a層	池256掘方	天聖元寶	1023	北宋	2.765	2.6	2.1	篆書	
—	534	1	7F	3a層	—	不明	—	—	0.924	—	—	—	破砕
—	535	1	5G	3a層	—	不明	—	—	2.909	—	—	—	破砕
—	536	1	6F	3a層	—	不明	—	—	1.889	2.5	—	—	錆、欠け
82	537	1	7H	3a層	—	熙寧元寶	1068	北宋	3.923	2.4	2.1	真書	
82	538	1	4H	3a層	—	元祐通寶	1086	北宋	2.486	2.5	2.2	行書	割れ
—	539	1	6H	3a層	—	不明	—	—	2.070	—	—	—	錆
82	540	2	8L	3a層	—	皇宋通寶	1038	北宋	2.337	2.5	2.0	篆書	
82	541	2	8K	3b層	溝430　礫検出時	永楽通寶	1408	明	3.777	2.5	2.1	真書	
82	542	1	4E	3b層	井戸279a西半掘方	景德元寶	1004	北宋	3.478	2.5	1.9	真書	
—	543	1	5G	3b層	土坑269東半	不明	—	—	—	—	—	—	
—	544	1	5G	3b層	土坑269東半	不明	—	—	1.714	—	—	—	
—	545	1	5F	3b層	土坑319北	不明	—	—	3.917	—	—	—	割れ
82	546	1	7H 7I	3b層	土坑391	天禧通寶	1017	北宋	3.217	2.6	2.3	真書	歪み
—	547	1	5G	3b層	土坑392	不明	—	—	3.747	—	—	—	割れ
82	548	1	5F	3b層	—	祥符通寶	1009	北宋	2.882	2.5	2.0	真書	
—	549	2	9Z・10Z	4層上面	—	□□□寶	—	—	3.398	1.9	1.6	—	歪み
82	550	2	7K	4層上面	—	皇宋通寶	1038	北宋	3.133	2.4	2.0	真書	欠け
82	551	2	9L・10L	4層上面	—	元祐通寶	1086	北宋	2.834	2.5	2.1	行書	欠け
82	552	2	7K	4層	溝535	皇宋通寶	1038	北宋	3.173	2.4	2.0	真書	
82	553	2	10L・10M・11L・11M	4層	井戸130	元豊通寶	1086	北宋	10.218	2.4	1.9	行書	表、553～555癒着
82	554	2	10L・10M・11L・11M	4層	井戸130	嘉定通寶	1208	南宋	10.218	2.3	2.0	真書	裏、553～555癒着
—	555	2	10L・10M・11L・11M	4層	井戸130	不明	—	—	—	—	—	—	553・555の間、553～555癒着
82	556	2	10L・10M・11L・11M	4層	井戸130	元豊通寶	1078	北宋	2.586	2.5	2.1	篆書	
82	557	2	10L・10M・11L・11M	4層	井戸130枠内	天禧通寶	1017	北宋	2.502	2.5	2	真書	
—	558	2	6L	4層	土坑163	不明	—	—	2.224	—	—	—	割れ
82	559	1	7I	4層	土坑386西半	皇宋通寶	1038	北宋	2.417	2.5	2	篆書	
82	560	2	10K	4層	土坑448南半	嘉祐元寶	1056	北宋	3.426	2.4	1.9	篆書	
—	561	2	9L	4層	土坑506南半	不明	—	—	2.136	1.9	1.5	—	欠け
82	562	2	7K	4層	土坑536南半	聖宋元寶	1101	北宋	8.419	2.4	1.9	行書	562・563癒着
—	563	2	7K	4層	土坑536南半	不明	—	—	—	2.3	1.7	—	562・563癒着
—	564	1	7F	4層	土坑627東半	不明	—	—	2.607	2.6	2.0	—	錆
82	565	2	10K	4層	ピット444	隆平永寶	796	—	6.674	2.6	2.1	真書	
—	566	2	—	4層	埋甕538北半甕内埋土	不明	—	—	5.604	—	—	—	錆
82	567	2	—	4層	埋甕538北半甕内埋土	祥符通寶	1009	北宋	3.330	2.5	2.0	真書	
—	568	2	—	4層	埋甕538北半甕内埋土	不明	—	—	0.431	—	—	—	錆、欠け
—	569	2	—	4層	埋甕538北半甕内埋土	□□□寶	—	—	2.589	2.5	—	—	錆、欠け

図版番号	報告番号	調査区	地区	層位／遺構	遺構	銭貨名	初鋳年	渡来銭	法量（g）	外径（cm）	内径（cm）	書体	備考
82	570	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	皇宋通寶	1038	北宋	2.083	2.5	1.9	真書	欠け
—	571	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	2.938	2.5	1.9	—	割れ
—	572	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	6.125	—	—	—	572・573 癒着、錆
—	573	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	572・573 癒着、錆
—	574	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	19.696	—	—	—	574 ～ 578 癒着
—	575	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	574 ～ 578 癒着
—	576	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	574 ～ 578 癒着
—	577	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	574 ～ 578 癒着
—	578	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	574 ～ 578 癒着
—	579	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	8.476	—	—	—	579・580 癒着
—	580	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	579・580 癒着
—	581	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	2.831	2.6	2.2	—	錆
—	582	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	15.451	—	—	—	582 ～ 584 癒着
—	583	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	582 ～ 584 癒着
—	584	2	—	4 層	埋甕 538 北半甕内埋土	不明	—	—	—	—	—	—	582 ～ 584 癒着
82	585	2	—	4 層	埋甕 538 南半甕内埋土上位	元豊通寶	1078	北宋	1.808	2.5	2.1	篆書	欠け
—	586	2	7 K	4 層	埋甕 538 南半甕内埋土	不明	—	—	3.211	2.4	1.9	—	錆
82	587	1	6 H	4 層	—	富壽神寶	818	—	3.064	2.4	2.1	真書	割れ
82	588	2	10L・10M・11L・11M	4 層	—	元祐通寶	1086	北宋	2.895	2.4	2.0	行書	
—	589	2	6 K	4 層	—	不明	—	—	1.578	1.9	1.6	—	
—	590	2	6 K	4 層	—	不明	—	—	1.536	1.9	1.6	—	
—	591	1	6 I	攪乱	—	不明	—	—	1.248	—	—	—	欠け
82	592	2	1 区	攪乱	—	元豊通寶	1078	北宋	3.742	2.6	2.1	行書	
82	593	1	7 H	攪乱	—	元祐通寶	1086	北宋	3.153	2.5	2.0	篆書	
82	594	1	—	攪乱	—	寛永通寶（3 期）	1697	—	2.898	2.5	2.0	真書	
82	595	1	4 I ～ 6 I 区	表採	—	天聖元寶	1023	北宋	3.097	2.4	2.0	篆書	
82	596	—	—	表採	—	寛永通寶（1 期）	1636	—	2.275	2.3	1.9	真書	背下：月
—	597	—	—	表採	—	不明	—	—	5.351	—	—	—	割れ

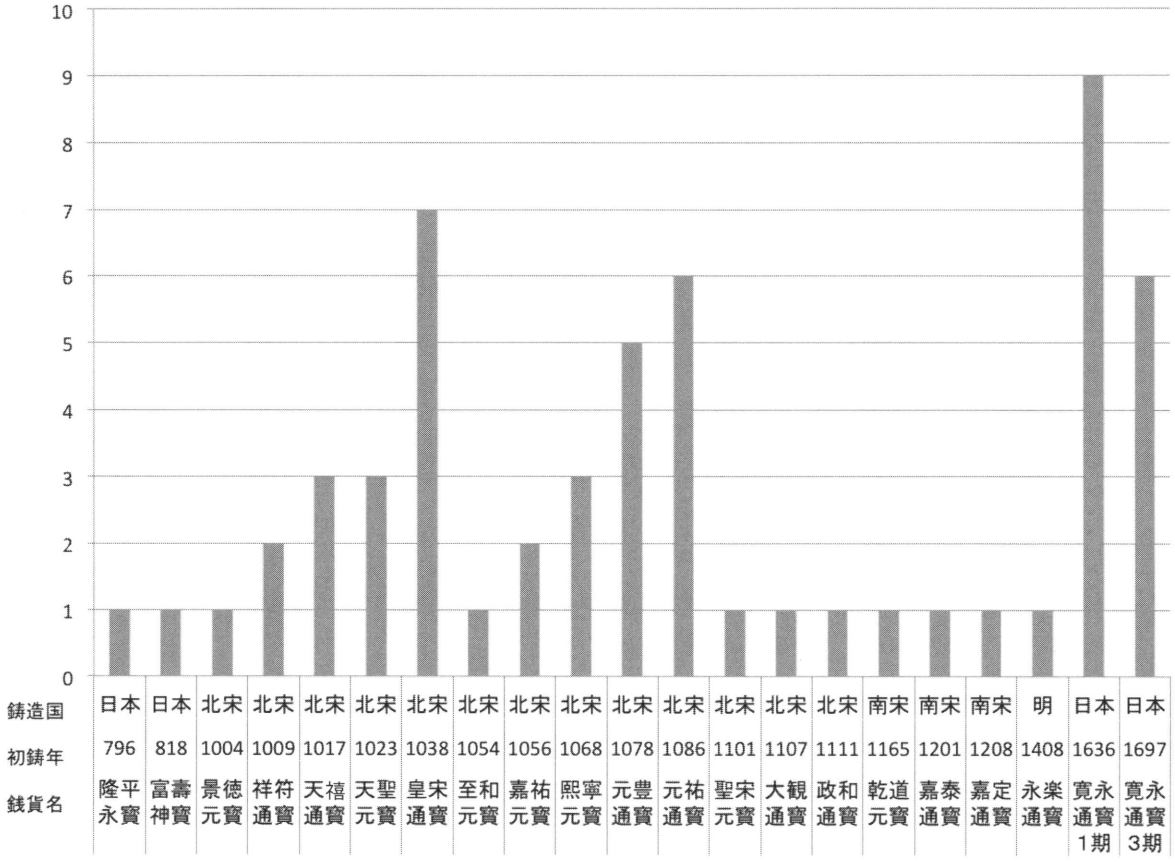


図19　出土銭貨種別点数ヒストグラム

V　考　　察

V　考察－1

龍谷大学大宮学舎東黌建設地出土和鏡の材質分析と保存処理

北野信彦

1　はじめに

龍谷大学大宮学舎東黌建設に伴う事前の発掘調査では、平安京東市跡各年代の遺構や遺物が多数検出された。この中には鎌倉期と推定される和鏡が1点含まれており、今回この資料の材質分析と保存処理を行ったので、その内容を報告する。

2　材質分析

2－1　調査方法

（和鏡表面の拡大観察）

本資料である和鏡の表・裏面の表面状態を目視で観察した後、細部の観察は、（株）スカラ社製のDG-3型デジタル顕微鏡を使用して、残存状態が比較的良好な部分を中心に50倍の倍率で行った。さらにサビが固着した劣化箇所の詳細な観察は、（株）ライカ社製のMZ型実体顕微鏡や（株）キーエンス社製のVHX-200型マイクロスコープを用いて拡大観察した。

（X線透過写真撮影）

本資料の基本的な構造と劣化状態の確認をするために、（公財）元興寺文化財研究所設置の（株）フィリップス社製MG-225型X線透過写真撮影装置を用いてX線透過写真撮影を行った。撮影条件条件は、管電圧＝100kV、管電流＝3mA、照射時間＝30秒、照射距離＝150cmである。

（材料組成の定性分析）

本資料の材料組成を調査するために、（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を用いた無機元素の定性分析を行った。設定条件は、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X管球はパラジウム（Pd）管球線、管電圧は15kVおよび50kV、電流は240μAおよび20μA、検出強度は200,0～250,0cpsである。

次に、本資料の元素マッピング分析を行うために（株）日立ハイテクサイエンス社製のEA6000VX型エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）を使用した。設定条件は、析設定時間は300秒、試料室内は常圧状態、X線管電圧は50kV、X線管球はロジウム（Rh）である。

2－2調査結果

①本資料は、白銅色を呈する和鏡である。現況の目視観察では表面には発掘時の包含土壌のサビ固着が多くみられるものの、鋳上がりおよび残存状態は極めて良好である。

②文化財の保存修復科学的には、金属製遺物表面に付着した土壌には、通常、金属腐食を促進させる塩化物や硫化物が含有されるため、なるべく除去した方がその後の資料保存管理上、さらには資料活用上好ましい。本資料の場合、全体的には遺物の残存状態は良好であるように目視観察

されるものの、細部を観察すると付着土壌が固着しているとともに、今後表層剥離を促進する危険性がある浸食性サビが一部に観察された。

③本資料のＸ線透過写真撮影を行った結果、目視観察では鏡文様のデザインが画像上でも明瞭に確認された。また鏡の鋳上がり自体は良好であるが、鋳込みの際の鋳造の湯沸きに伴うと考えられる小さい気泡痕跡もわずかながら確認された。その一方で、文化財の保存修復科学な観点からみると、一部には金属腐食の痕跡が観察され、その一部はすでに表層剥離崩壊を起していた（図１）。

このことから、本資料自体の保存状態は比較的良好ではあるが、今回の科学的な保存処理作業自体はあくまでも貴重な本資料の延命措置作業であり、今後は温・湿度などの保管環境の維持管理にも一定の注意を払う必要性がある。

④本資料表面は、埋蔵環境が良好であったためかブロンズ病の原因となる白緑色サビの発生はそれほど確認されず、平滑でオリジナルの光沢感を有していた。蛍光Ｘ線分析装置を用いた本資料の非接触･非破壊による材料組成の分析を行った結果、無機元素の主成分は、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）であり、これに微量成分として砒素（As）は検出されたが、錫鉱石の不純物として含まれるアンチモン（Sb）のピークは確認されなかった。そして、包含土壌由来と考えられる鉄（Fe）イオンも同時に検出された。このことから、本資料は純銅製品ではなく、銅＋スズ＋鉛の合金である青銅鏡であること、そして鏡製作工程の鋳込み時やその後の埋蔵環境に伴う金属偏在はあろうが、表面部分にはスズ（Sn）成分がリッチである特徴を有していた。また微量成分である砒素（As）は、原材料である銅鉱石由来と考えられる。以上のスポット分析箇所と分析結果一覧表、分析スペクトルを示す（図２，３，４，表２）。また、鏡面のマッピング分析も実施したので、その結果を（図５）で示す。

３　保存処理

前記したように、本資料は青銅製の和鏡であるが、研究室に搬入した時点ではまだ付着土壌の除去が十分に行われていない状況であった。透過Ｘ線写真観察の結果、目視ではメタルが健全であると観察される箇所においても内部錆化が進行しており、表面の付着土壌を注意深く除去しないと表面劣化が進行する危険性が高いことが想定された。そのため、本資料群は通常の青銅製品の保存処置方法を用いた保存処理作業を実施することとした。以下、保存処理の工程を述べる。

３－１事前調査

まず本資料は、一連の保存修復科学的な分析調査を実施するため、まず本学・文学部の北野研究室に搬入した上で一連の事前の分析調査を行った。その後の詳細な分析調査は、（公財）元興寺文化財研究所の分析科学研究室に北野が責任をもって搬入して実施した。

３－２クリーニング

北野研究室に搬入した時点では、本資料にはまだ付着土壌が多く残された状態で、その除去は行われていない状況であった。透過Ｘ線写真観察の結果、基本的には残存状態は良好であったが、資料表面の付着土壌は注意深く除去しないと表面劣化が進行する危険性が高いことが想定された。

また、顕微鏡下の拡大観察でも埋納痕跡である布繊維痕跡などは確認されなかった。そのため、エタノール溶液と筆、竹串などを用いて、慎重に資料の表・裏の表面および紐穴の付着土壌の付着土壌などの除去クリーニングを実施した。

3－3BTA 処理

出土青銅製品もしくは銅製品の場合、錆腐食防止を行なう方法として、ベンゾトリアゾール（BTA:C6H5N3）エタノール溶液に資料を浸漬して資料表面に発生する危険性があるサビ塩化物イオンを固定するBTA処理が通常実施される。これは、青銅製品もしくは銅製品をベンゾトリアゾールエタノール溶液に浸漬することで、資料表面に銅地金（Cu）とBTAが結合され、CuBTAの化合物被膜（バリア）がつくられるためである。今回の保存処理作業では、本資料は5%のBTAエタノール溶液を満たしたタッパーウエアーのなかに24時間浸漬させる方法でBTA処理を実施し、その後十分乾燥させた。

3－4強化含浸

出土金属製品の場合、資料自体の強化含浸処置と、大気中の水分による錆劣化進行を抑えるための表面コーティング作業を行うためには、通常、これまで文化財の保存修復作業で実績がある合成樹脂の一つであるアクリル樹脂が使用される。一般的にはアセトン溶液で融解したB-72溶液のアクリル樹脂を採用する事例が多いが、この濃度が濃い方が強化と表面コーティング効果は高いが、その一方で資料表面に不自然な光沢性がある樹脂艶が残る。今回の保存処理作業では、事前に1%,5%,10%のアセトン溶液に融解したB-72アクリル樹脂溶液を用いた樹脂含浸処理後の表面艶光沢のチェックを行い、最も低濃度の1%溶液を使用することにした。作業は、1%のB-72アクリル樹脂溶液を満たしたタッパーウエアーのなかに資料を浸漬させる方法で強化含浸工程を実施し、その後十分に乾燥させた。その際、凹部に溜固化が発生して不自然な樹脂光沢がみられる箇所については、アセトン溶液で樹脂光沢を除去するなどの配慮を行った。

3－5経過観察と事後処置

以上の保存処理作業を終了した各資料は、数週間の経過観察を行い、状態に変化がないことを確認したうえで、処理後の写真撮影を行い返却した。今後は、直射日光などの紫外線が当たらないとともに、博物館資料管理条件である温･湿度が安定した環境条件下で保管することが大切である。すなわち、上記の一連の科学的な保存処理作業はあくまでも現状維持保存のための一時的な延命措置工程である。今後、本資料の保管管理と資料活用をしっかり行うことが、この貴重な和鏡資料をより良い状態で後世に伝えることが可能となる点を強調しておきたい。

参考文献

沢田正昭編（2003）『遺物の保存と調査』、クバプロ

杉山洋（1999）『古代の鏡　日本の美術』、至文堂

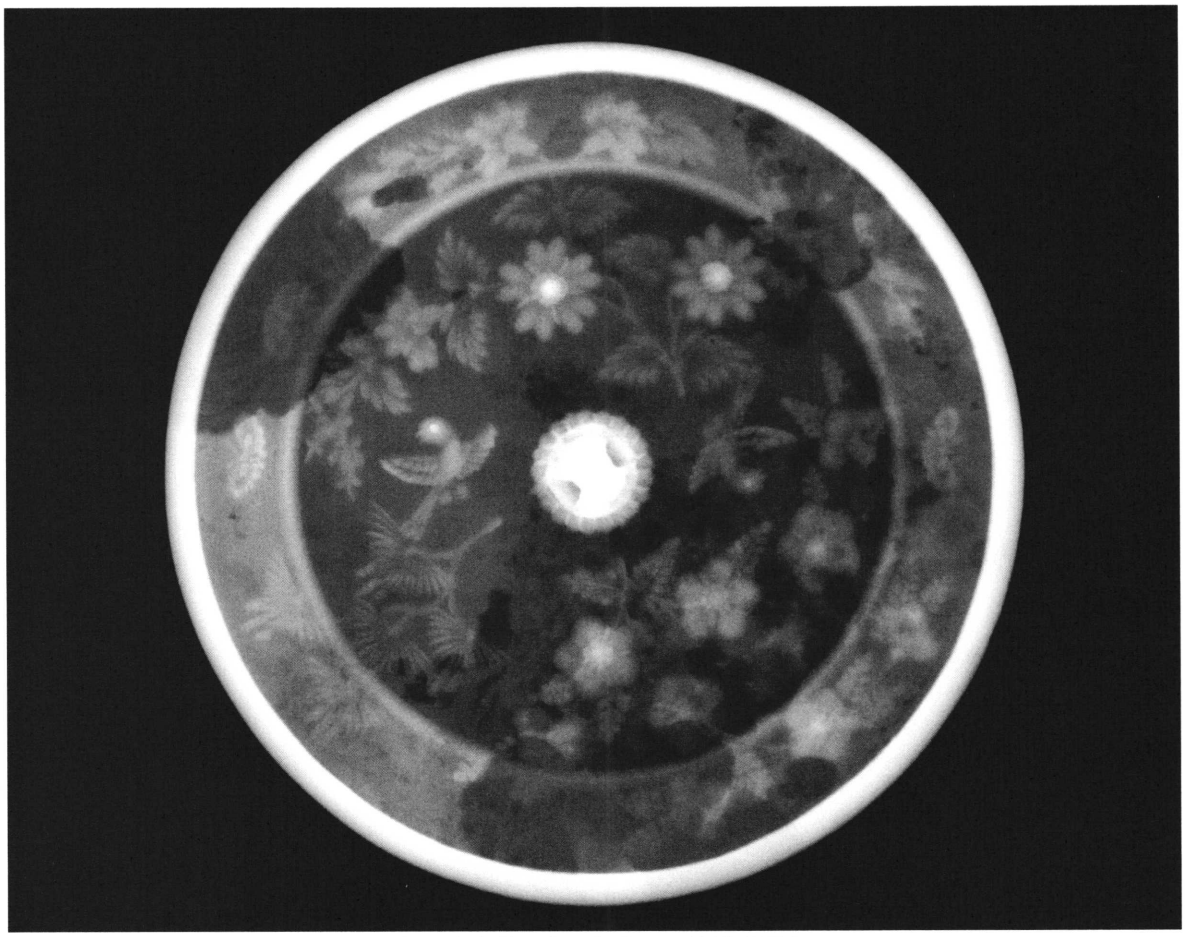


図1　本資料である和鏡のX線透過写真

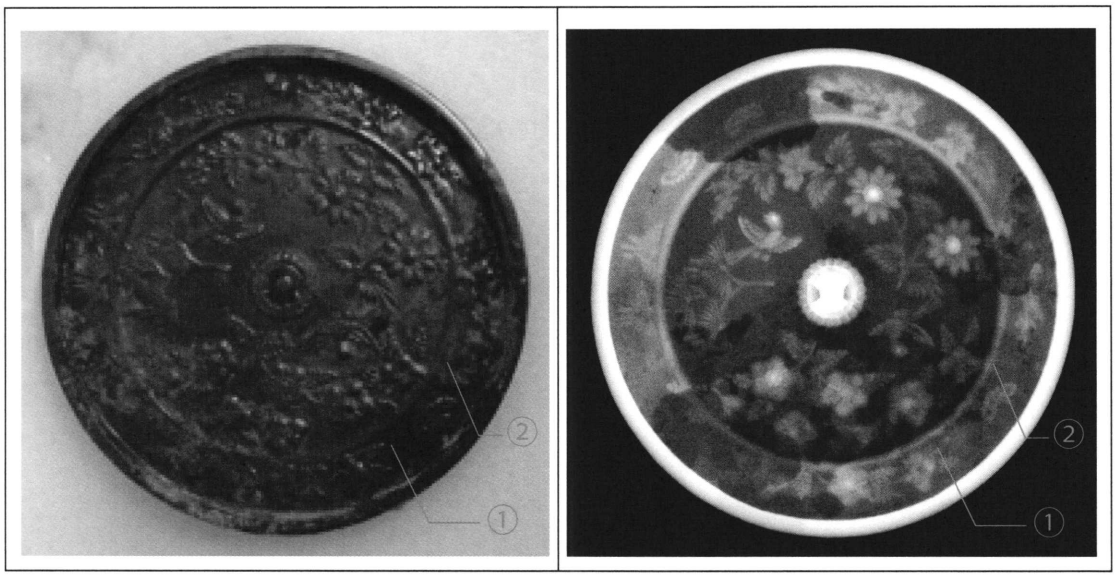


図2　鏡背の定性分析箇所

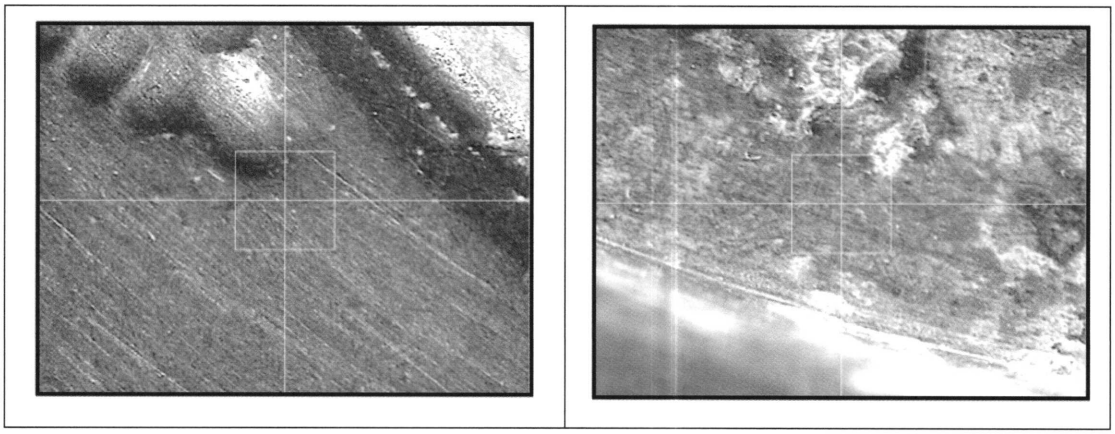


図３：鏡背の定性分析箇所

表1：分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A（cps）	B（cps）	ＲＯＩ（keV）
26	Fe	鉄	K α	4421.722	10609.507	6.23- 6.57
29	Cu	銅	K α	122202.151	81457.311	7.86- 8.23
33	As	ヒ素	K β	1439.196	1376.993	11.52-11.93
50	Sn	スズ	K α	3845.29	6172.526	24.91-25.47
82	Pb	鉛	L α	9174.825	13890.462	10.34-10.74

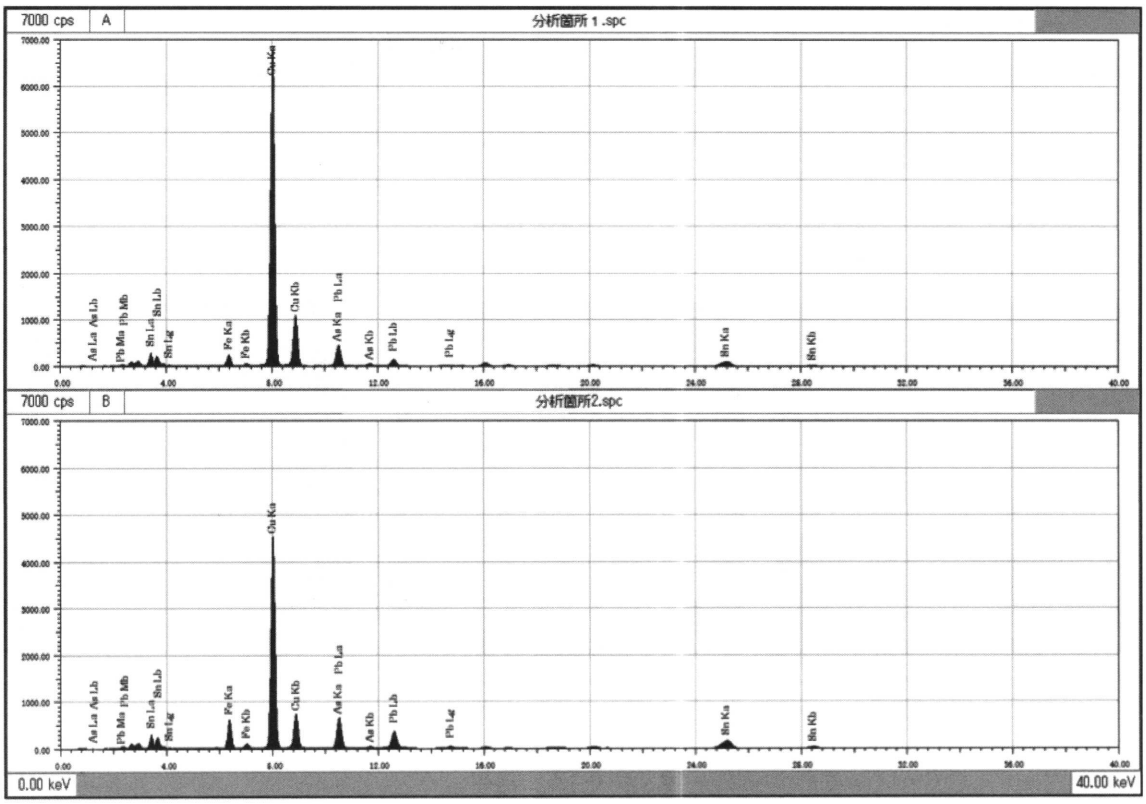


図４．分析箇所1,2の蛍光Ｘ線分析スペクトル

測定日時	2017/9/8 14:25	管電圧	50 kV
スキャンサイズ	109.560, 108.460 mm	管電流	1000 uA
画像サイズ	498 x 493 pixel	フィルタ	OFF
1点のサイズ	220 um/pixel	コリメータ	0.2×0.2mm
1点の測定時間	20.00 ms		
フレーム加算枚数	1		
マッピング所要時間	90.0 min		

表2　鏡面マッピング分析測定条件As）

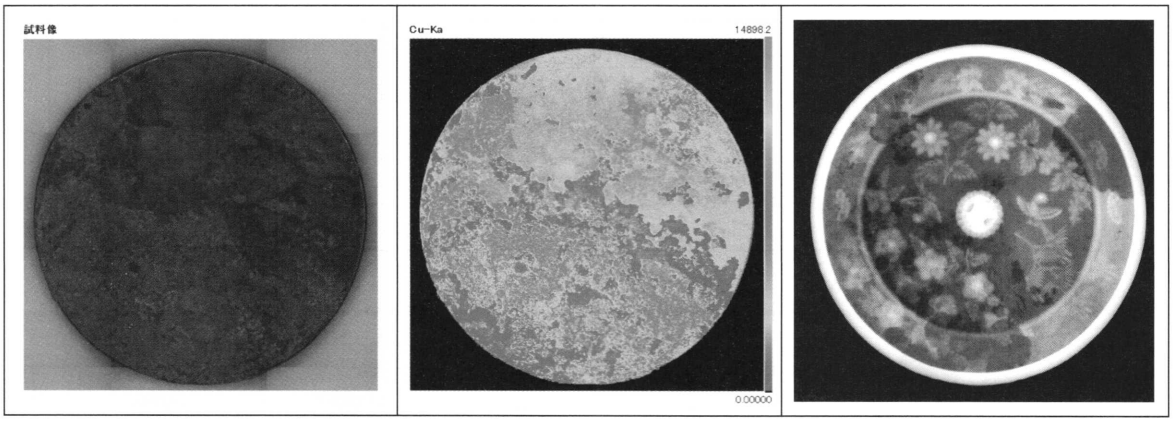


図5-1鏡面のマッピング分析結果①（左から、試料像、銅：Cu、X線透過像）

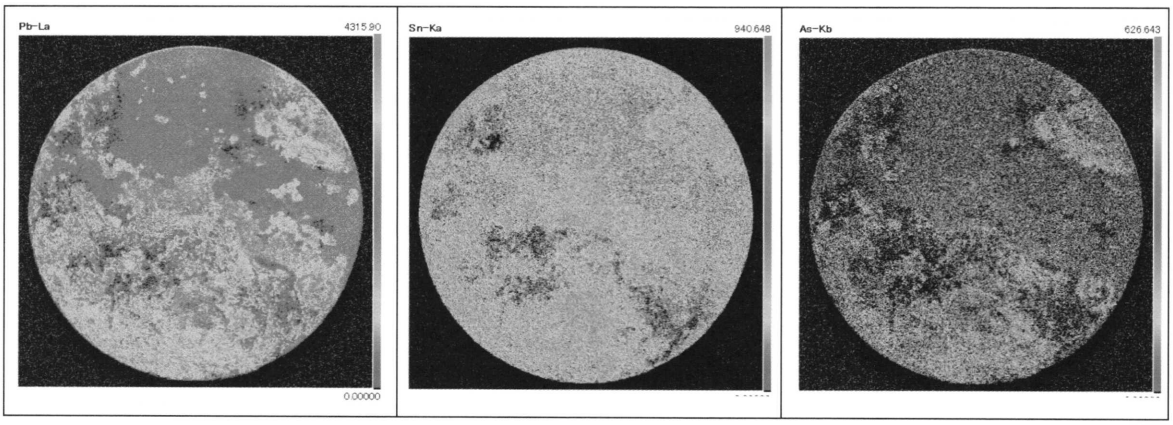


図5-2鏡面のマッピング分析結果②（左から鉛：Pb、スズ：Sn、ヒ素：As）

V　考察－2

龍谷大学大宮学舎東黌調査に伴う放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze

1　はじめに

京都府京都市に位置する龍谷大学大宮学舎東黌調査により検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2　試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-35382	位置：西トレンチ 試料 No.Loc.161019-04-1-② 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	種類：炭化物・材（草本類）	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）
PLD-35383	遺構：SE16 位置：東トレンチ 試料 No.Loc.161104-01-3-① その他：北方井戸掘方西壁	種類：炭化物・材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N）

ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3　結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸め

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-35382 試料 No.Loc.161019-04-1-②	-13.02±0.11	1846±20	1845±20	130-180 cal AD (43.5%) 186-214 cal AD (24.7%)	90-101 cal AD (2.5%) 123-235 cal AD (92.9%)
PLD-35383 試料 No.Loc.161104-01-3-①	-11.90±0.17	1896±18	1895±20	84-125 cal AD (68.2%)	58-137 cal AD (95.4%)

ていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うため

に記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730±40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4　考察

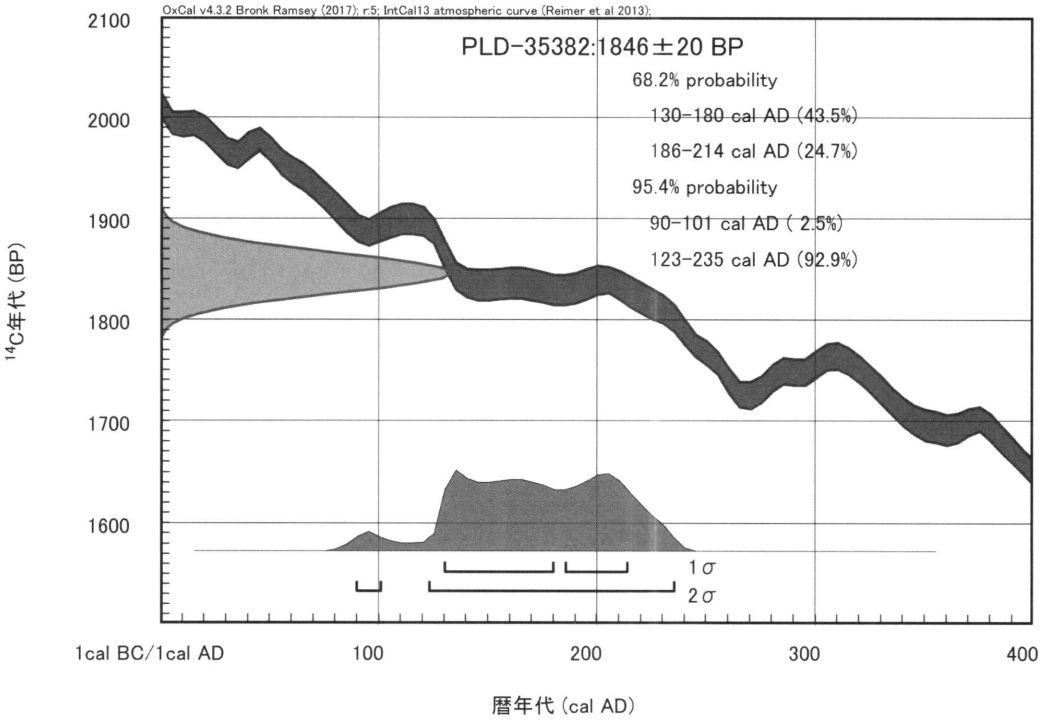
試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。

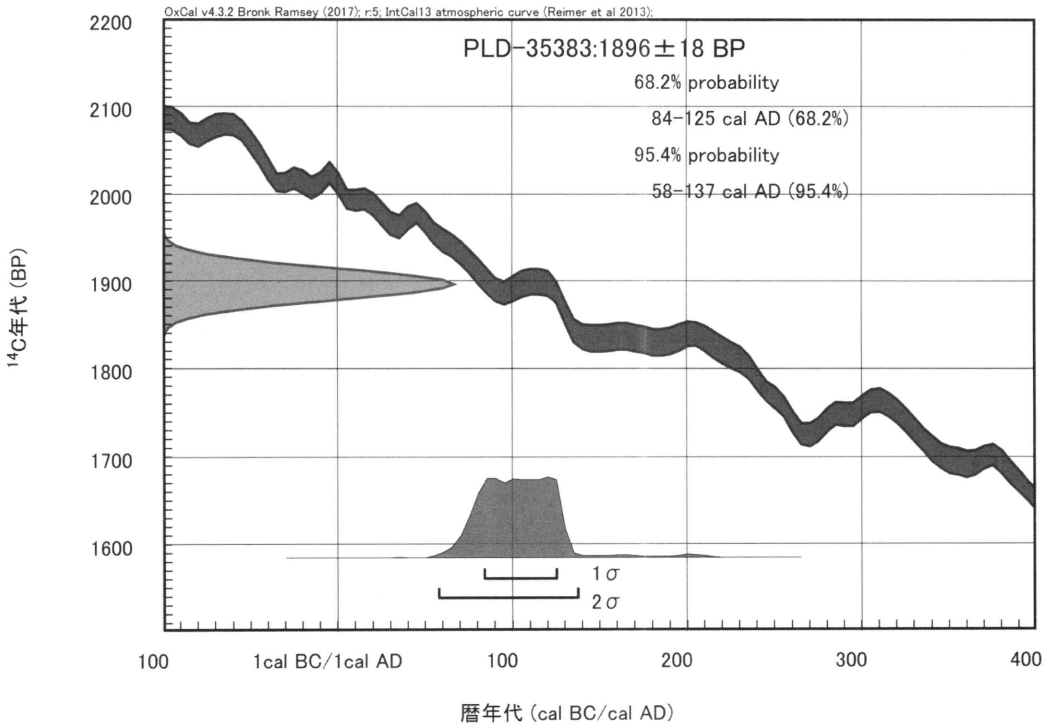
参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（1）, 337-360.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.（2013）IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55（4）, 1869-1887.


OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-35382:1846±20 BP
68.2% probability
130-180 cal AD (43.5%)
186-214 cal AD (24.7%)
95.4% probability
90-101 cal AD (2.5%)
123-235 cal AD (92.9%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
2100
2000
1900
1800
1700
1600
1cal BC/1cal AD
100
200
300
400
暦年代 (cal AD)


OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013);
PLD-35383:1896±18 BP
68.2% probability
84-125 cal AD (68.2%)
95.4% probability
58-137 cal AD (95.4%)
1σ
2σ
14C年代 (BP)
2200
2100
2000
1900
1800
1700
1600
100
1cal BC/1cal AD
100
200
300
400
暦年代 (cal BC/cal AD)

V　考察－3

平安京跡左京七条二坊五町における地形形成過程と人間活動

～古墳出現期前後の放射性炭素年代測定成果から～

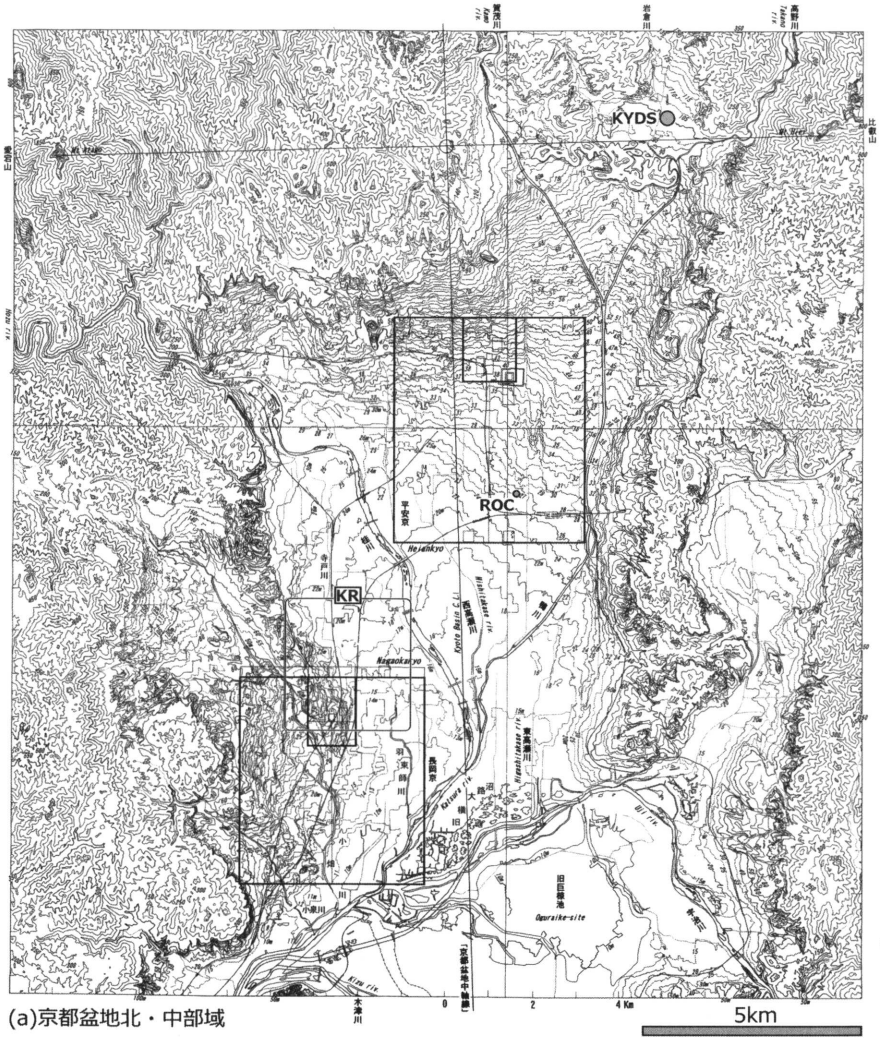
中塚 良

1　はじめに～自然資源としての地形と人間活動のかかわりをさぐる～（図1・5）

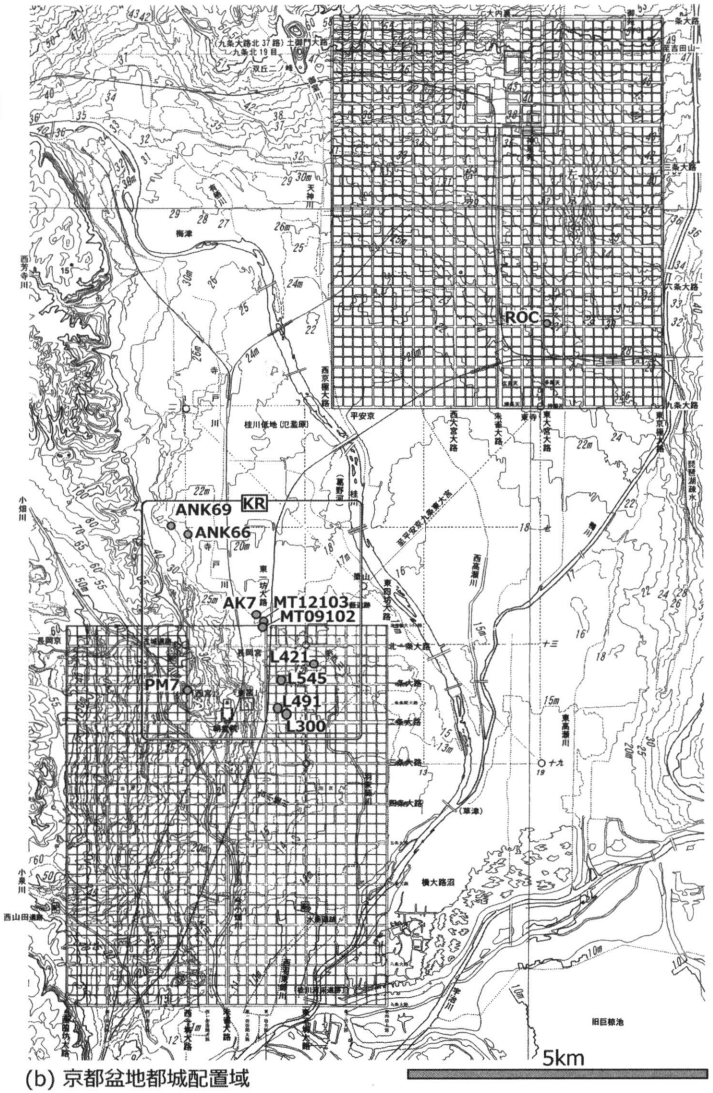
〔調査地の位置〕京都盆地北・中部域地形条件図、都城配置図（中塚・釜井 2011 に加筆・調整）に今回調査地点をプロットする（図1：略称 ROC）。標高 27 m、鴨川扇状地の扇央部にあたる。近年の地形発達史的研究（報告書本文図2参照）は調査地周辺を歴史時代の離水扇状地としての完新世段丘面として区分する。他方、今回の地質ボーリング調査成果（図5-d）は調査地の基盤が更新世段丘層で構成されると記す。評価を異にする地形・地質的所見について遺跡調査情報から再評価、再構成を試みる。

〔発掘調査成果からみる遺跡・地形形成過程〕今回発掘調査地における最古の遺構は、第2調査区北東隅において確認された古墳時代初頭に比定される土坑 580 である。他方、遺構の基盤層にあたる基本層序第5層・河成砂礫層からは下限年代資料として弥生時代後期前半所産の土器片が採取された[1)]。また、上位の歴史時代層準からは古墳時代前期（布留式）～後期土器片が出土している。この成果に従えば、本遺跡基盤地形の形成年代は弥生時代後期以降古墳時代初頭にかけての考古学年代幅として把握しうる。この比較的短期の地形面形成の年代観は今回調査地の地形条件のごとく河川の活動場を利用する上での不安定性、すなわち流路形成・埋積のくりかえしを地形発達条件とする扇状地面における人間活動域の移動性、生産基盤的資源としての流路への干渉のありかたをうかがわせる情報に相当する。

〔遺跡・地形形成過程”Site & Land Formation Process”研究のねらい・課題〕一方、今回の考古年代観を近年の放射性炭素 ^{14}C 年代測定成果（較正暦年代）に置換すれば、およそ 2000～1800yB.P. 幅の年代的へだたりがともなうことが示唆される。年代幅への評価、解釈が遺跡景観変遷の見え方におおきくかかわると言えよう（中塚 1995）。年代測定によるクロスチェックが要請された。以下示すように、年代測定結果は地形形成年代と地形面利用年代の近接性を示唆した。他方、暦年較正用標準年代値（IntCal による）と日本産樹木の炭素年代測定にもとづく年代値（J-Cal 仮称）間の齟齬が近年知られるようになり（春成・小林・坂本ほか 2011）、後述のごとく今回調査地で得られた 1850・1900yB.P. を前後する年代値の較正暦年代が日本産樹木試料の成果に従えばより新期に補正される可能性が示唆される[2)]。前述、庄内式期土坑 580 と基盤堆積層の実年代観に関わる課題にあたる。ここでは地形形成から人間活動開始ないし再開にかけての考古年代的ヒアタスの存否に対し自然史的側面から検証をこころみる。弥生時代末から古墳出現期に至る地形発達・人間活動関係史についてより具体的かつ詳細な情報を入手すべく、また、平安京域の自然史にかかわる基礎的資料の蓄積の端緒となるべく、遺跡層序の観察・確認と発掘成果・放射性炭素年代



(a)京都盆地北・中部域



(b) 京都盆地都城配置域

弥生/古墳時代境界14C年代測定地点コード〔**KYDS**:岩倉忠在地遺跡(岩倉盆地)
ROC:龍谷大学大宮キャンパス(鴨川低地(本報告)) **KR**:桂川右岸域測定地点群(図a・b枠内)
ANK:中海道遺跡 **PM**:元稲荷古墳　寺戸川・石田川流域低地遺跡群 (**AK**:久々相遺跡 **MT**:向日市詳細分布調査地 **L**:長岡京跡左京調査地)〕

図1　調査地域概観図・調査地位置図

測定分析を重ね併せ上記課題に応えたい。

2　放射性炭素年代測定試料採取地点の層序・年代測定結果・微地形形成過程（図２～４）

基本層序第４層上面遺構群の精査過程において、各調査区層序の観察、年代測定を目的とする試料採取の機会を得た。観察地点ごとに概要を記す。図中の遺構コードは埋蔵文化財調査における汎用アルファベット表記に相当する。

〔第１調査区 Loc.161019-04-1・2〕土坑 310 を中心とする東西向き掘方の北壁断面（図２・３：Loc.161019-04-1）、以北の南北溝 SD367 掘方を利用する東壁断面（図３：Loc.161019-04-2）の２方向断面（配置関係：図２（a）上段）から本調査区遺構基盤の微地形的形成過程に検討をくわえる。

Loc.161019-04-1：図２（b）が俯瞰状態での断面・法面、同（c）が水平分割撮像をオルソグラフィックに接合・展開し、連続性をもつ葉理パターンを描線的に分区する解釈断面である。基本層序第５層細部の層序構成に相当する。堆積過程における層理として認識される境界に対向的に横矢印を付す。

層序は下位から順に５ｄ：褐灰色系砂礫～礫質壌土（年代測定用炭質物試料採取層準。図２ａ下段：試料細部。放射性炭素年代測定値：1845±20yB.P.、暦年較正用年代：1846±20yB.P.、暦年較正 cal 130-180AD（１σ）・cal 123-235AD（2σ））、５ｃ：緑灰色系シルト・砂互層（上方正級化相、砂泥葉理）、５ｂ：灰色系砂礫（上部：逆級化相。大礫クラス亜角礫の散在）、５a：暗灰色系シルト質砂壌土～砂礫が積層する（亜層アルファベット名：本節にて便宜的に呼称）。調査区底以深において５d 層は後述するように下部が河床的条件を示唆する掃流相、上部が壌土質を呈する。河床面が離水（５d 上部～頂部層準。短期の放棄流路化か）したのち、再び砂礫～砂・シルトが微弱に流入する水域的環境に推移し（５c 層準）、さらに氾濫性の流路充填堆積物（５b 層準）によって埋積にいたる河成作用・過程が示唆される。図３（a）に５b・c 層準葉理の走向・傾斜を示す。a2：流路形成時、a1：溢流積層時の流向に相当する。南西から南南東向きへのトレンドの推移が示唆される。５b/ ５c 層界では、５c 層上部を西傾斜で高角気味に切る砂礫の脈状ないし孔状分布を確認した。平面形状は不明であるが、少なくとも５b 積層後に形成された、年代測定結果から 1845yB.P. 以降の含水塑性変形痕跡、地震動にともなう液状化痕と推察される。５b/ ５c 層界の液状化層準を、後述第２調査区層序対比における鍵層として利用する。

Loc.161019-04-2：図３（b）に５b 層準下部（本文での第 35・36 層準相当）を中心に層序と堆積相を示す。画面中央枠内はステレオグラフおよび配向解釈図に示すように南方、南東成分の流向を示唆する覆瓦構造を確認できる（礫長軸の走向 N23° W、計測位置：矢印）。前述 a1・a2 同様の動水的条件、ここでは粗粒堆積物の前置層的形成条件が示唆される。

〔第２調査区 Loc.161104-01-1・3〕調査区中央やや東寄りに南北にならぶ井戸 SE130（Loc.161104-01-1・2）・SE509（Loc.161104-01-3）各掘方断面を利用し層序観察・試料採取を試みた（図４a）。前者は東壁断面（01-2）について井戸裏込め層の除去不完全の可能性が指摘されたた

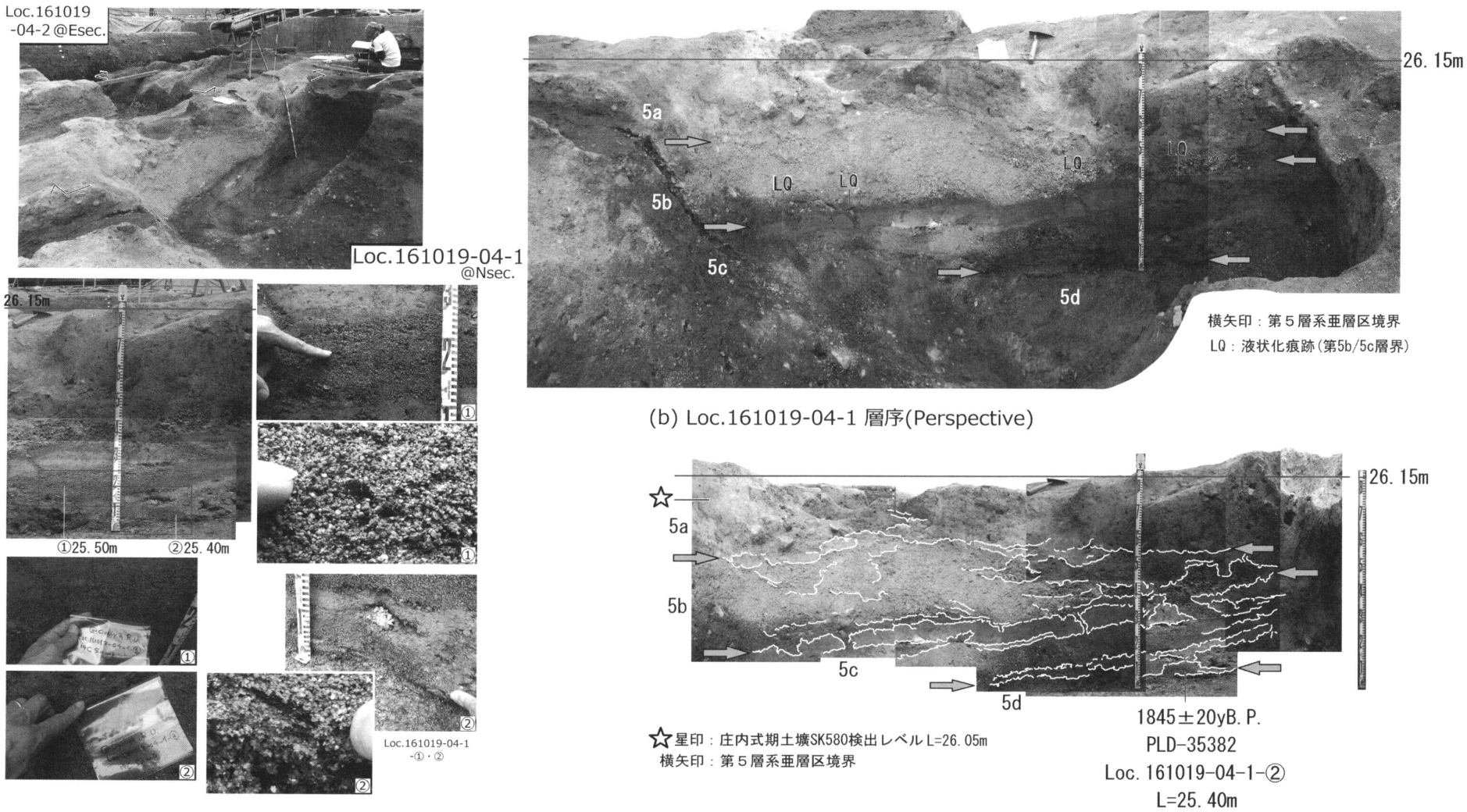
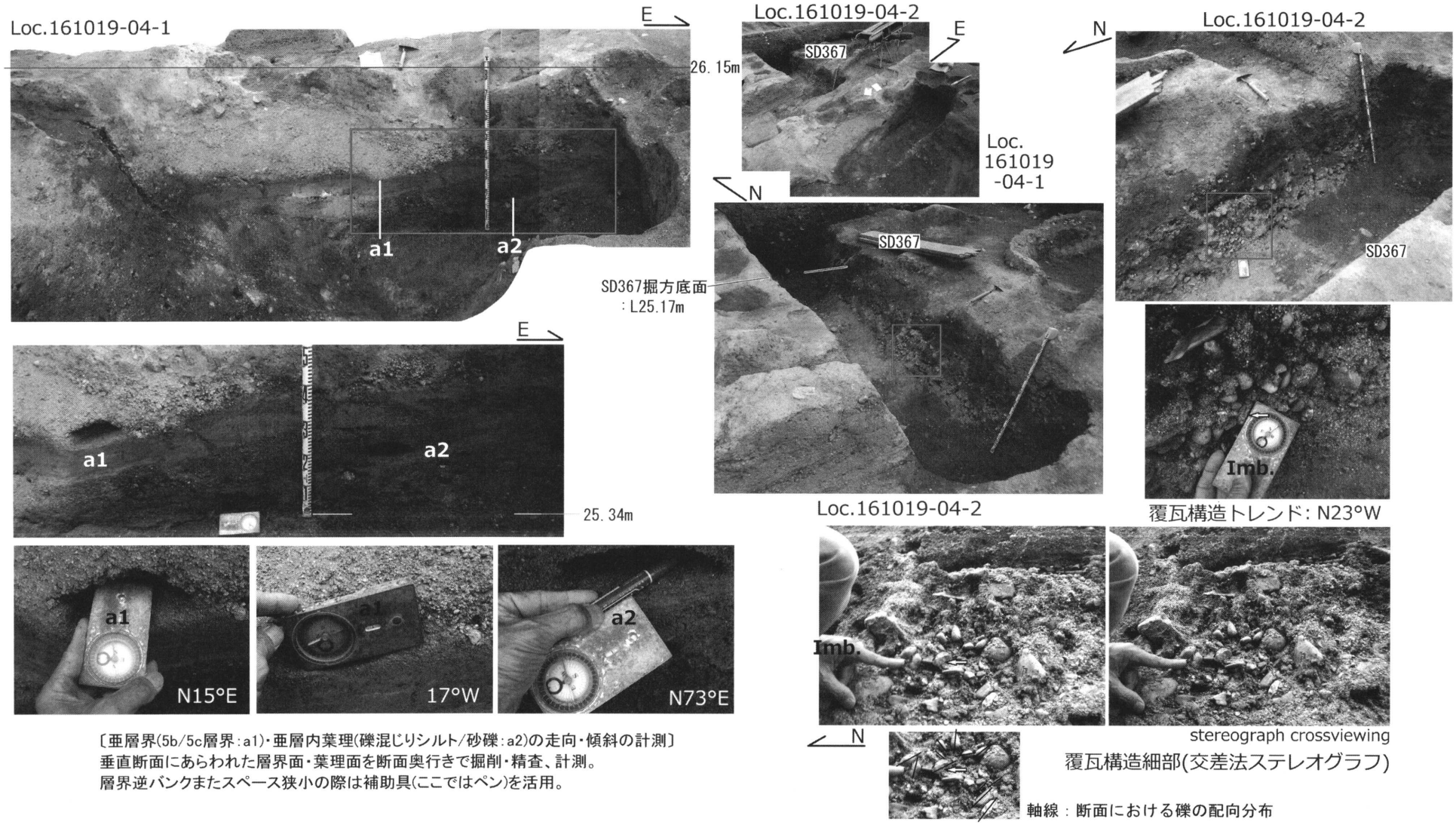


図２　第１調査区の層序と試料採取層準



〔亜層界(5b/5c層界：a1)・亜層内葉理(礫混じりシルト/砂礫：a2)の走向・傾斜の計測〕
垂直断面にあらわれた層界面・葉理面を断面奥行きで掘削・精査、計測。
層界逆バンクまたスペース狭小の際は補助具(ここではペン)を活用。

(a)基本層序第５層系中・下部葉理の検出・計測
(Loc.161019-04-1)

(b)基本層序第５層系中部の堆積構造の観察・計測
(Loc.161019-04-2)

図３　第１調査区の層序と堆積構造

め、ここでは西壁（01-1）の成果を提示する（図４b）。

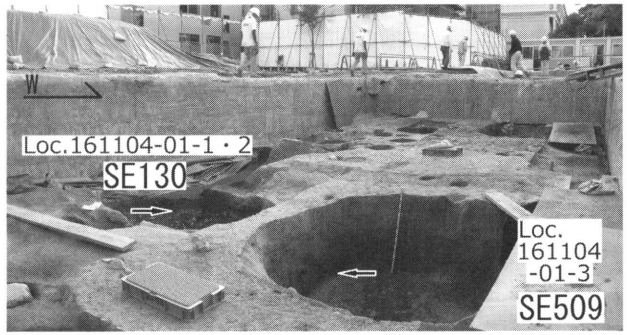
Loc.161104-01-1：図４（c）に第５c 層下部以深の層序を示す（水平標尺：標高 25.38m）。前述、第１調査区 Loc.161019-04-1 同様、５d 層最上部が褐色を呈し擾乱的に堆積構造が乱れる。他方、中～大礫の目立つ粗粒の砂礫からなる下位層準は横矢印の対向的分布パターンに示すように交互に覆瓦構造を伴う葉理が形成され、流路的条件を示すいわゆるトラフ型の斜葉理群を単位にして積層する。５c 層は Loc.161019-04-1 に比して細粒のシルト～細砂相からなり、流路縁辺的条件を示す。

Loc.161104-01-3：図４（d ～ f）に層序全体と試料採取層準の細部、試料の状態を示す。層序中～上位に水平的積層の乱れが認められ、標尺下端＋ 0.4 m付近以浅にロートないしパイプ状断面形を呈す変形、さらに以浅に不連続、ブロック状の粗粒物の分布が存在する。液状化痕跡と推察される。前者の下端が Loc.161019-04-1 の第５b/c 層界に対比される。なお標尺＋ 0.3m 付近にブロック的に分区する不均質な偽礫層は、井戸裏込め層残存部に相当する。第５c/d 層界、５d 層最上部採取の炭質物試料は放射性炭素年代測定値：1895 ± 20yB.P.、暦年較正用年代：1896 ± 18yB.P.、暦年較正 cal 84-125AD（１σ）・cal 58-137AD（2σ）を示す。前記の Loc.161019-04-1-①1845 ± 20yB.P. に年代値差で 50 年先行するが、層序対比的に第５c/d 層界が両地点とも擾乱的条件を示す可能性が考えられることから、年代幅が人為的活動を可能とする離・排水（土壌生成）的期間に相当すると解釈される。ただし調査区２地点の層序断面が不連続であることから、そのまま堆積層序的前後関係（河床的条件の段階的移動性）を示す可能性を否定しえない。今回調査地では 1845・1895yB.P. を遡る層序年代は不明であるが、後節の同一集水域における同時代前・後の ^{14}C 年代測定成果集において地形発達史的観点から可能性をさぐる。

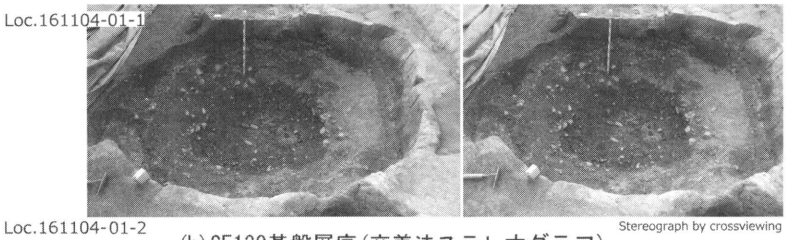
３　年代測定成果・地質ボーリング結果の対比（図５）

図５（a ～ c）に今回 ^{14}C 年代測定２層準を併記し、同（d）において調査地周辺における深度約８mにおよぶ地質ボーリング結果（2016 年）に年代層準をプロットする。地質調査報告（オキココーポレーション ,2016）は層序を完新世盛土層（B）と更新世段丘層（Tg）に大別２区分する。今回測定層準を Tg 層最上部、庄内式期以降の遺構検出レヴェルを以浅のＢ層準にプロットしうる。地質ボーリングと考古学的調査の目的差（建築的要件としての支持層深度確認、対し年代層序学的資料化）が端的に表現されると推察される。地質資料に対し完新統 / 更新統境界について再評価が要されるので、貫入試験値（N 値）の垂直分布傾向からあらたに２解釈案を提示する。Tg 層最上部と評価されてきた完新統層準は N 値 30（B2 地点参照）を示し、今回年代測定深度 - １m程度に向け N 値 40 ＋αに達する（図 d：左向き矢印）。下位に向け一旦 N=30 程度に下降したのち再び締まりを増し標高 22 ～ 23 m付近（深度５～６m）で N=50 を超える傾向（右矢印）を観取しうる。矢印で示すこれら N 値の急変深度のいづれかが完新統 / 更新統界、もしくは沖積 / 洪積層界にあたると推察される。前者を境界面と考える場合、約１～２万年前以降の堆積物の厚みが１mと薄く、土砂堆積と侵食・排出が均衡する掃流卓越的な流路帯が長期に更新、維持されたとみなさねばな

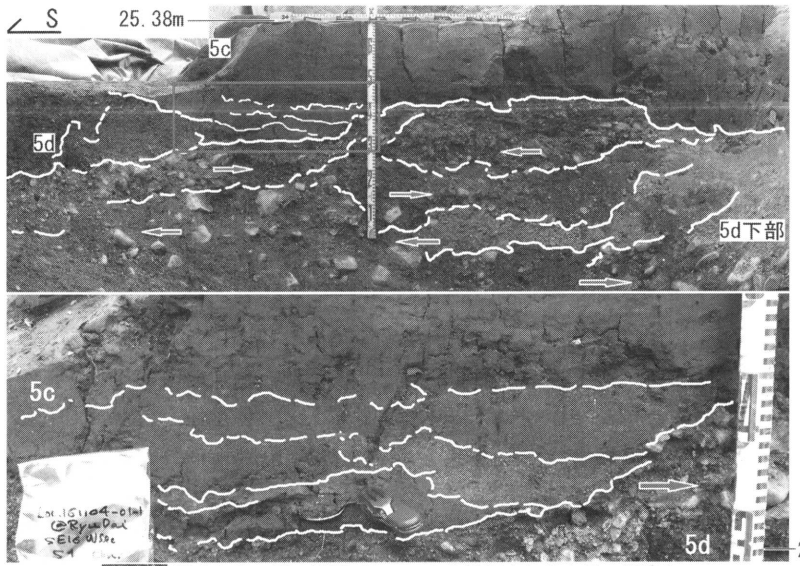
(a) Loc. 161104-01-1～3位置



＊図中黒矢印：基本層序第５層系・下部礫層レベル

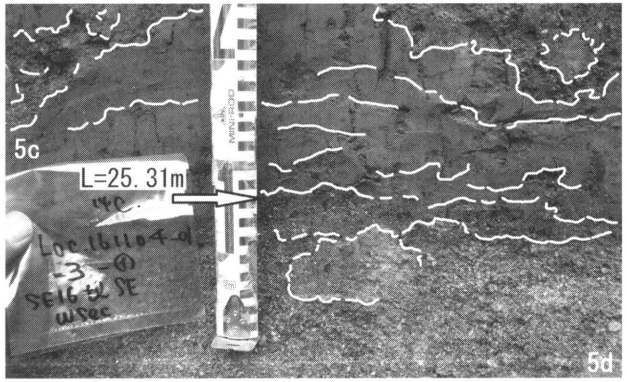


(b) SE130基盤層序（交差法ステレオグラフ）

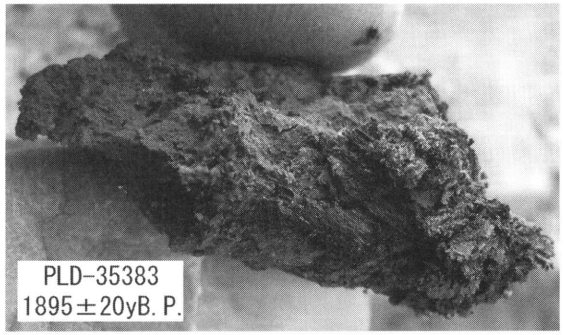


図中矢印：礫の覆瓦パターンから推測されるトラフ型流向

(c) SE130基盤層序・Loc. 161104-01-1詳細

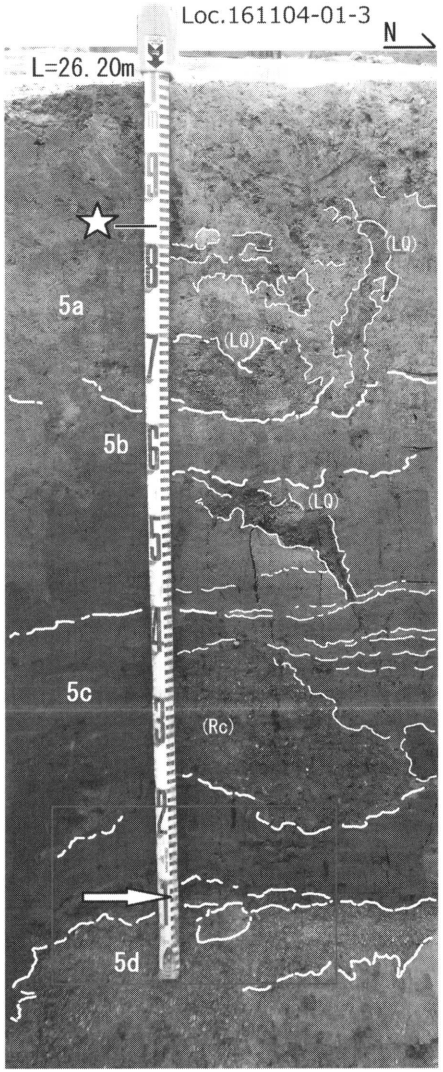


(d) SE509基盤下部・試料採取層準細部



(5d層最上部・土壌生成層準)

(e) 試料Loc. 161104-01-3-①詳細



＊図中白矢印：試料①採取深度 L=25.31m
星印：庄内式期土壙SK580検出レベルL=26.05m
(LQ)：液状化痕跡可能性　Rc：井戸裏込め残存
断面画像右端に層界・葉理群境界の解釈刻線。

(f) SE509基盤層序・Loc. 161104-01-3

図４　第２調査区の層序・堆積構造の試料採取層準

らない。一方、下位の後者の解釈案にかかわる情報として、桂川右岸沖積低地・寺戸川直近地点における深度29 mにおよぶ縦坑掘削にともなう古文化財科学的調査が知られる（図１-b:KR 領域・L421 地点北東。矢野・中塚・佐々木ほか,2014）。ここでは地表下約４～９ｍに埋没する河床性の礫層（中下部層準：N 値 43）を確認し、礫層上位材：5010±30yB.P.、同・下位有機質（含アカホヤ火山灰 K-Ah）：4910±30yB.P. の各 ^{14}C 年代値が得られた。古木効果的な上位の年代値を留保して 4900yB.P. 頃（cal3650BC 頃）における短期の河床面の上昇、大規模な河成地形発達過程の可能性が指摘された。今後の知見を待たねばならないが、広域水系での流域連動的河床条件変化を考慮すれば今回調査地における N 値急変ゾーン上半層準の堆積物が縄文時代前期層準あるいは完新統に帰属する可能性が示唆される。

4　京都盆地北・中部における古墳出現期前後の ^{14}C 年代測定成果について（図１・５e）

a. 今回の ^{14}C 年代測定成果と較正年代の関係

今回成果（Loc.161104-01-3-①：1895±20yB.P.、暦年較正用年代：1896±18yB.P.、暦年較正 cal 84-125AD（1σ）・cal 58-137AD（2σ）。Loc.161019-04-1-②：1845±20yB.P.、暦年較正用年代：1846±20yB.P.、暦年較正 cal 130-180AD（1σ）・cal 123-235AD（2σ））を ^{14}C 年代値／標準的暦年較正値（Int-Cal）・日本産樹木年輪試料にもとづく暦年較正値（J-Cal 仮称）相関グラフ（図５e：春成・小林・坂本ほか 2011- 図 10・25 に加筆）にプロットする。Int-Cal カーブに対し暫定 J-Cal カーブが系統的に新規にズレを描くゾーンに今回年代値が位置することが見てとれる。春成ほか(2011)に留意すれば、Int-Cal 暦年代と J-Cal 暦年代それぞれを前提に、考古学的型式年代・実年代的比較、解釈が必要であることが示唆される。暦年較正年代値（2σ）は単純に中心の値にして、また、西暦世紀に置き換えて、

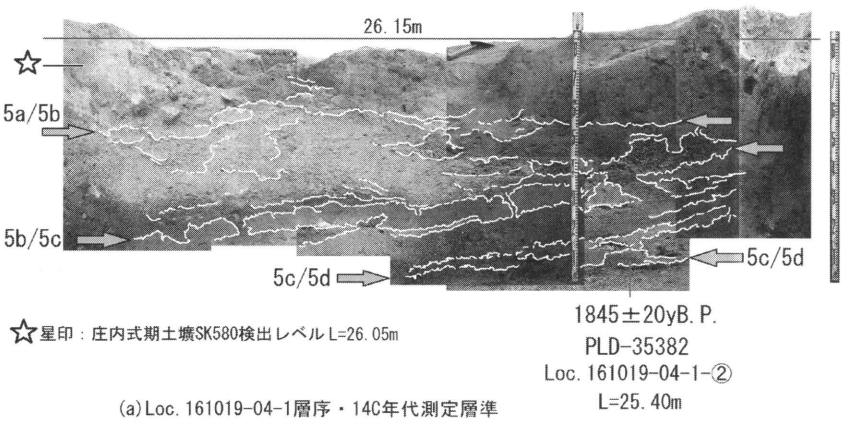
・試料 161104-01-3-①：cal AD98（AD1c/2c 境界 ,Int-Cal）・AD2c 中葉（J-Cal）、

・試料 161019-04-1-②：cal AD179（AD2c 後葉 ,Int-Cal）・AD3c 前葉（J-Cal）の各々約 50 年を位相する２年代値案を併記しうる。

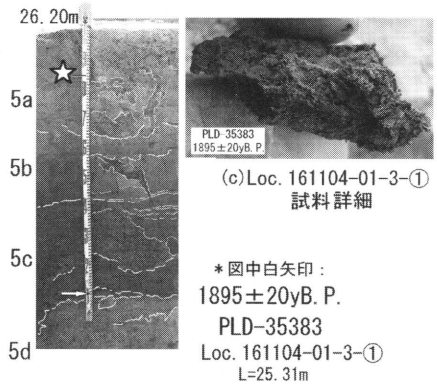
試料採取層準は前述のごとく流路的地形条件から土壌・炭質物生成、また人間活動が可能となるような、水域が一旦遠のく排水路的条件に変化していた状況が示唆される。流路活動休止推定年限は今回成果で踏み込めば、AD1c/2c 境界～ AD2c 後葉（Int-Cal 案）、AD ２c 中葉～ AD3c 前葉（J-Cal 案）に整理、解釈される。これらの放射年代の下限以降、再び流路的条件に推移し、氾濫的に流路充填化過程を経て地形面的更新、さらに発掘成果としての庄内式新相期の遺構、土坑 580 の構築時期にいたる。J-Cal 暦年較正モデル AD3c 中葉下限とする地形面形成・更新期と庄内式新相期の土器型式年代観が近接あるいは重複する印象が得られる。「地形・遺跡形成過程」の初動のすがたをうかがう上で今回の年代情報が注目されるのである（中塚 1995）。

b. 弥生時代後期／庄内式期境界および前後における ^{14}C 年代カタログ（京都盆地中・北部編）

今回の年代測定値（暦年較正用年代）、1846・1896yB.P. 前後（1900 ～ 1800yB.P. 年代間および

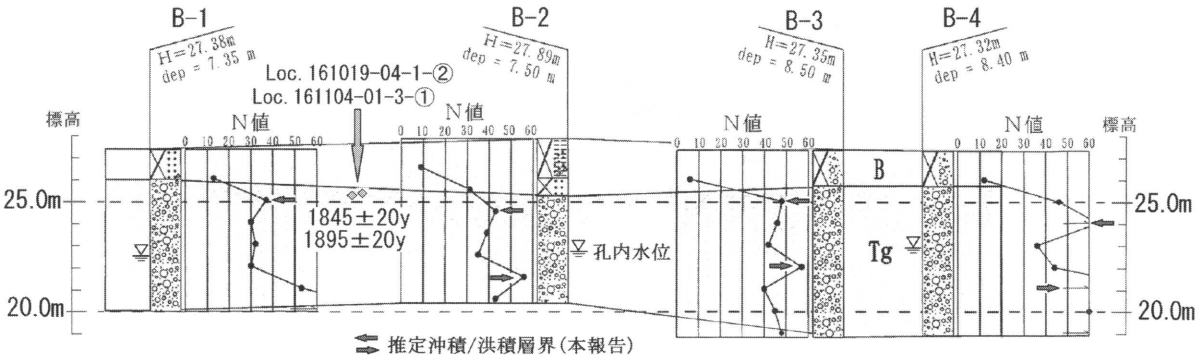


(a) Loc. 161019-04-1層序・14C年代測定層準

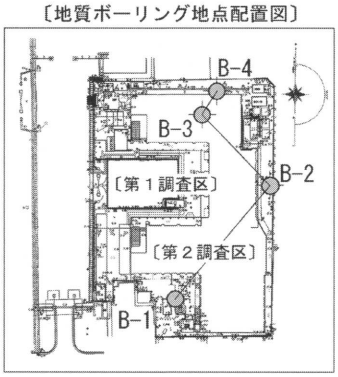


(c) Loc. 161104-01-3-①
試料詳細

(b) Loc. 161104-01-3・SE509基盤層序
14C年代測定層準



〔地質ボーリング地点配置図〕



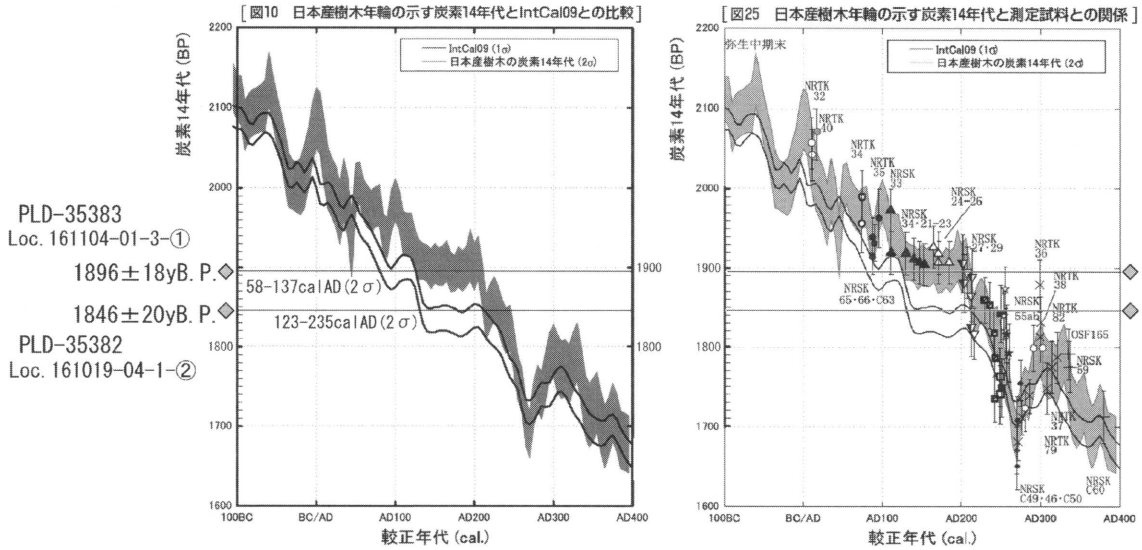
〈凡　例〉

地質時代			地質区分	記号
新生代	第四紀	完新世	盛土層	B
		更新世	段丘層	Tg

件　名	学校法人慶谷大学　大宮キャンパス 東館建替に伴う追加地盤調査
図面名	推定断面図
縮　尺	H＝1/400，V＝1/200
作成年月	平成２８年６月
株式会社 オキコ コーポレーション	

＊ ㈱オキココーポレーション(2016.6)推定地質断面図を一部調整し、今回14C年代測定試料レベル・年代値をプロット。
なお、同図は地質区分について完新世盛土層/更新世段丘層に２分するが、ここでは変更を加えていない。
貫入試験の垂直分布値を参考にすると、年代測定深度以深に上位から順にN40<、N50<のピークを確認しうる。いずれかが沖積/洪積層界(≒完新/更新統境界)相当と推察される。

(d) 大宮学舎調査地地質層序・遺跡年代層序対比図



(e) 14C年代測定値・暦年較正値(日本産樹木年輪試料測定値・Intcal)と今回測定値の関係
(春成・小林・坂本他, 2011に加筆調整)

図５　調査地周辺の地質層序と ^{14}C 年代測定成果

近接値）を示す京都盆地中・北部における年代成果についてアンダーラインで示す。各年代測定地点を図１にコード表記で示す。今回成果と各調査成果を、図５の２種の較正暦年代カーブを手がかりに比較し付記する。

京都盆地北隣・高野川支流域の岩倉盆地と京都盆地中西部・桂川右岸域（図１-KR 領域）の間のエリア、すなわち平安京域および周辺域ではこれまで当該期の年代測定成果が得られず、今回の資・試料調査成果は地域間の空白域をうめる点で貴重といえよう。

注記は、* 暦年較正用補正年代、**IntCal04、***IntCal04 以降のバージョン、無印：IntCal98。

〔岩倉忠在地遺跡：竪穴住居１炭化材（歴民博・年代測定グループ）〕

同志社大学歴史資料館編（2006）『岩倉忠在地遺跡同志社小学校建設に伴う発掘調査報告書・同志社大学歴史資料館研究報告』第６集

・KYDS-C1（サンプル #2）/PLD-4632：1935 ± 25yB.P.* / cal AD 20-125 ** (0.947)

・KYDS-C2（サンプル #3）/PLD-4504：1895 ± 20yB.P. */ cal AD 55-135 ** (0.920)

・KYDS-C3（サンプル #5）/PLD-4503：1830 ± 20yB.P.* / cal AD 130-235 ** (0.954)

縄文時代中期末～後期（北白川下層Ｃ式期以降）下限形成の扇状地性地形面において確認された竪穴住居群の中で、焼失住居と解釈される遺構の炭化材試料の年代値である。焼失住居土器資料に型式的に同時もしくは近似するとされる資料（住居群隣接の開析性浅谷への多量廃棄資料）は「庄内式前半期・古相」（佐山Ⅱ-1 式併行）に比定されている。下限年代に相当するサンプル # 5:1830yB.P. の暦年較正値 AD130-235y は今回得られた 1846yB.P. のそれにほぼ被るが、日本産樹木試料にもとづく暦年較正値（以下 J-Cal と仮称）に照らせば、IntCal 曲線の平坦的ゾーンより新期に位相し IntCal 較正年代幅の下端 AD235y ３世紀前半～中葉が中心年代となる可能性が示唆される。上限年代のサンプル #2:1935yB.P. は今回の古期年代値 1896yB.P. や忠在地遺跡サンプル # 3:1895yB.P. により近接する可能性が考えられる。

〔中海道遺跡（ANK）第 69 次〕中塚・辻本（2017）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 105 集

・ANK69-SD6918（溝構成層 , 炭片 , 庄内式古相）/

PAL-10020：2045 ± 20yB.P.*/calBC60-20***（1σ/0.603）/calBC113-calAD7（2σ/0.959）

・ANK69-SX6916（竪穴住居状構築層 , 炭片 . 庄内式新相 . 褐色系深成岩質土器片含層以浅）/

PAL-10021：1868 ± 20yB.P.*/calAD85-142（1σ/0.759）/calAD81-216（2σ/1.000）***

低位段丘面に立地する乙訓地域拠点集落遺跡の最新の成果である。後者の SX6916 土器資料は単体では在地系土器ペーストの材質で、庄内式新相＞古相の型式幅で捉えなければならないが、遺構下位層準検出遺構に深成岩材質土器（いわゆる生駒西麓系薄手甕）砕片が確認されたことから、庄内式新相相当とみなした。年代値 1868yB.P. は今回の二つの年代値のちょうど中間を示し IntCal 年代幅（2σ）の下端 AD216y か、もしくは続く３世紀前葉の J-cal 較正年代を考慮すれば、今回調査地検出遺構の土器資料の年代観（庄内式新段階）および測定結果の整合性をサポートしうる。

〔中海道遺跡（ANK）第 66 次〕中島・中塚・辻本（2007）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 76 集

・ANK66-Loc.060915-02-S1（水路状遺構 SX6601 法肩打込みアカガシ亜属杭材）/

IAAA-1048：1876±93 yB.P.*/calAD47-243***（1σ/0.942）/calAD54-385（2σ/0.997）***

・ANK66-Loc.060914-01-S1（水路状遺構 SX6601 最下部材）/

IAAA-1049：1623±85 yB.P.*/calAD334-540***（1σ/1.000）/calAD239-606（2σ/1.000）***

低位段丘崖下の沖積面に設けられた推定用水施設の成果である。土器資料からは弥生時代Ⅴ期的様相以降の年代観、放射年代では上記のごとく 1623yB.P. と下るが、打ち込み杭材 1876yB.P. は先述 ANK69-SX6916 年代値にごく近似し遺構構築下限年代推定（庄内式新相以降）に貢献する。

〔元稲荷古墳（PM）第７次〕梅本・辻本他（2011）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 89 集

・PM7-4h（墳丘第１段斜面構成層，アカガシ亜属炭化材）/

IAAA-101776：1792±27 yB.P.*/calAD210-257（1σ/0.596）/calAD133-261（2σ/0.809）***

元稲荷古墳は考古学編年的に乙訓古墳群最初期の古墳のひとつと解釈される。1792 yB.P. の年代値は IntCal、J-Cal 共に狭い暦年較正値を示すゾーンに相当し両者を勘案すれば IntCal 較正値下端 AD260y か直後の年代観とみなせる。今回の下限年代値および先述 ANK69-SX16 年代値から解釈される３世紀中葉（庄内式新相）から、ここでの後葉初期に庄内式 / 布留式期境界を位置づけうる。

〔寺戸川・石田川流域遺跡群（久々相・渋川・東土川西遺跡、石田・鶏冠井遺跡）〕

[久々相遺跡（AK）第７次] 中塚・高橋・古環境研（2002）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 57 集

・AK-7-S4（「古寺戸川」左岸・用水状遺構構築層（第 6b 層），法留め杭材）/

Beta-166473：1570 y±60yB.P.*/calAD420-560（1σ）/calAD380-620（2σ） IntCal98

・AK-7-S18（「古寺戸川」流路充填堆積物（第 6c 層），木材）/

Beta-166475：1600 ±60yB.P.*/calAD400-540（1σ）/calAD340-600（2σ） IntCal98

[詳細分布調査（MT）第 09102 次] 中塚・辻本（2012）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 93 集

・MT09102-Loc.100225-02-1（古寺戸川右岸水路状遺構 SD10201 法肩打込みムクノキ杭材）/

IAAA-93166：1819±24 yB.P.*/calAD208-235（1σ/0.369）/calAD128-249（2σ/1.000）***

・MT09102-Loc.100225-02-2（水路状遺構 SD10201 第 4c 層，植物遺体）/

IAAA-93168：1800±24 yB.P.*/calAD209-251（1σ/0.586）/calAD132-258（2σ/0.919）***

・MT09102-Loc.100225-02-2（水路状遺構 SD10201 第 4d 層，植物遺体）/

IAAA-93169：1820±23 yB.P.*/calAD208-237（1σ/0.395）/calAD130-250（2σ/1.000）***

1800 ～ 1820yB.P. の短期に構築・埋没プロセスを経る推定用水施設の成果である。今回測定値以降でもっとも近接し、先述の元稲荷古墳盛土の年代値直前の年代を示す一群である。IntCal、J-Cal 共に狭い暦年較正値を示すゾーンに相当し、後者に照らせば３世紀中葉中心頃に較正される。共伴土器資料を伴わないが AD250 ～ 260y 頃が庄内式 / 布留式期境界年代と解釈される。

[詳細分布調査（MT）第 12103 次]

矢野・中塚ほか（2014）『日本文化財科学会第 32 回大会発表要旨集』

・MT12103-Loc130222-01（古寺戸川右岸・用水状遺構構築層（偽礫相：盛土堆積物，材）

IAAA-134216：1546±23 yB.P.*/ calAD432-490（1σ/0.730）/ calAD428-566（2σ/1.000）***

[長岡京跡左京（L）第 421 次（東土川西遺跡）]

中塚・山口・環境考古研究会ほか（2003）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 58 集

・L421-Loc.990304-02-S47（古寺戸川右岸・溜池状遺構 SG421162 第 3b-4 層下部：有機質）

Beta-141153：2120±70yB.P. / calBC205-50（1σ）/ calBC375-30（2σ） IntCal98

・L421-Loc.990304-02-S46（古寺戸川右岸・溜池状遺構 SG421162 第 3b-4 層上部：有機質）

Beta-141153：1930±60yB.P. / calAD20-130（1σ）/ calBC50-AD230（2σ） IntCal98

以下に示す L545・L300 測定例とともに、今回の上限値 1896yB.P. 以前で最も近接する年代値に相当する。発掘成果に従えば、溜池遺構構成層下部の 2120yB.P. 測定値層準が弥生時代Ⅳ期後葉～末の型式年代を示し、2120 ～ 1930yB.P. 間に灌漑水田関連遺構機能期から埋積期にいたる地形条件的変遷を履歴する。今回成果では 1896yB.P. が地形条件的安定期の下限年代と解釈されることと勘案すれば、1930 ～ 1896yB.P. 間に堆積・侵食基準面を共有する流域群的水文条件変化が進行する可能性が示唆される。なお、1930 ～ 1950yB.P. 測定値は IntCal 曲線では AD1 世紀中葉～後葉が中心年代を示すが J-Cal では AD1 世紀中葉と 2 世紀前葉のふたつの較正ゾーンが認められ、年代値、年代幅の解釈に留意を要する[3)]。

奈良盆地土器型式年代と測定値の関係（春成・小林・坂本ほか 2011）では、Ⅴ期：2000yB.P.（AD/BC 境界）、Ⅵ-2 期：1970yB.P.、Ⅵ-3 期：1960yB.P.（AD1 世紀～ 2 世紀初頭）、庄内式 0-1 期：1920yB.P.（2 世紀前葉～末）、庄内式 3 期：1880yB.P.（3 世紀前半）の各年代観が示される。これらに照らせば 1930 ～ 1950yB.P. 年代幅は奈良盆地弥生Ⅵ期 / 庄内式期境界年代に比定しうる。

[長岡京跡左京（L）第 545 次（石田遺跡）] 梅本・辻本『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 92 集

・L545-C2（第 3b 層：黒灰色腐植質泥層，炭化材片）

IAAA-111434：1940±23 / calAD47-83（1σ/0.745）/ calAD16-93（2σ/0.842）

[長岡京跡左京（L）第 491 次] 中塚・辻本（2006）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 74 集

・L491-W3（流路構成層（上方正級化相）第 4b/4c 層界，広葉樹材）/

IAAA-51549：1744±34 yB.P.*/ calAD246-336（1σ/1.000）/ calAD217-399（2σ/1.000）***

Int-Cal 暦年較正値が較正ゾーンの昇降繰り返し傾向から、3 世紀中葉～ 4 世紀前葉（90 年幅）/ 3 世紀前葉～ 4 世紀末（約 180 年幅）におよぶ。J-Cal ではさらに較正年代幅が増幅する傾向にあることで、年代的評価への留意が必要となる。発達史地形学的成果を援用、解釈を加えてみよう。水系的に L491 流路遺構の上流域にあたる流路に接続すると考えられる前述 MT09102 地点用水遺構が 1800yB.P. 前後（今回、3 世紀中葉を想定）に埋積・放棄されることを勘案すれば、L491 較正年代幅上限の AD246 年に近接する時期に、下流側にあたる本地点における流路の埋積・充填につながる堆積作用の進行を履歴したと推察される。

[長岡京跡左京（L）第 300 次] 中塚・辻本（2006）『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 74 集

・L300-E-Loc.930331（流路開析面を充填する有機質シルト）

N-6592：1950±85yB.P.（未補正年代値）

前述、L491 流路堆積物下部、流路地形の埋積開始期頃の年代値にあたる。暦年較正年代と発達史的解釈の組み合わせによって、AD 2世紀前半～3世紀中葉にかけて地形面が更新される。さらに上流水系域の一角、今回大宮キャンパス周辺における流路形成過程、扇状地面発達史を考える上で参考となる年代観に相当する。

5　小結～京都盆地古墳出現期の遺跡・地形形成過程と人間活動～

本報告では京都盆地北部沖積低地・鴨川扇状地扇央部を構成する流路地形と古墳時代初期遺跡の形成過程について、^{14}C 年代（暦年較正年代）と考古学的編年成果の組み合わせから時系的に検討をおこなった。

〔年代分析成果〕今回調査地において、遺跡の立地基盤にあたる地形形成から地形面利用（遺構構築）にいたる過程は考古学調査成果単独では弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式古相期土坑資料、堆積物採取資料）の型式年代幅をもつ。他方、流路地形休止面にかかわる炭質物試料2例の ^{14}C 年代測定値（暦年較正年代値）を地形更新後の遺跡立地にむけての下限年代とした場合、AD2c 中葉（Int-Cal）、AD3c 前葉（J-Cal）の二つの放射年代的解釈案が導かれる。土器型式年代観に現況で整合的な後者、J-Cal 暦年代と遺構・堆積物伴出資料の型式年代は近接、もしくは一致する傾向をしめす。このことは今回調査地周辺における本流性流路地形の最終的な発達（堆積物充填・埋積≒周辺域への主流路変更）終了と遺跡立地が時系連続的におこなわれた可能性を示唆する。前述、京都盆地中部地域例では河川活動の活性化期に相当する可能性を指摘した。今回、地形条件変化への人間活動対応の景観描出の端緒をとらえた印象である。考古学的調査に加え ^{14}C 年代測定・地形形成過程探査による人文・自然複合的研究の有用性をとなえたい。

〔古墳出現期遺跡・地形形成過程研究，今後〕弥生時代後期から古墳時代前期にかけての首長系古墳を存立させていく時代に、生産基盤となる沖積低地はどのような環境・景観を構成していたのであろうか。灌漑水系を維持・発展させるバックグラウンドとしての、治水の対象としての地形のもつポテンシャル（発達史的安定・不安定性）の実態理解が鍵となろう。今回調査地の基盤にあたる流路微地形の広域的集合形態が扇状地、また、下流側に展開する氾濫原面の本質に相当するという素朴な知見は、地形条件とむすびつく用水利用の生産体系が自然と人間の複合・不可分の産物であることをあらためて教えてくれる。当該期の発達史的・年代学的分析対象となる遺跡資料は図1に示すようにまだ僅かである。今回収集しえた年代資料を出発に今後とも調査成果を目的的に蓄積、編集することで研究進展のみを歩みたい[4)]。

〔謝辞〕本稿をなすにあたり、京都盆地中西部のテストフィールドを拠点としての自然科学・考古学複合的調査研究における長年のパートナー辻本裕也氏（古生態学専攻）に査読いただき、あわせて、今回の年代測定分析主担中村賢太郎氏からは当該 ^{14}C 年代測定値域的成果･課題について教示いただいた。そしてなにより、古墳出現期土器型式的研究と古代宮都研究を共通の研究活動場とする三十有余年来の先輩國下多美樹先生は、今回調査研究の機会を設けてくださった。公私にわたるご縁の各位に深甚の感謝のことばを申し述べます。

註

1）土坑580資料（図版57－1）は底部平底（弥生時代後期的要素）であるが球胴、頸部～口縁形状から庄内式古相所産とみる。第5層資料（同－2）はハケメを多用するが、下位の細条タタキメパターンは庄内式的要素を推察される。第4層資料（同－6）は布留式中（＞新）相。以上、資料観察による所見。

2）後述、図5（e）を参照。IntCal曲線ゾーンに比して暫定J-Calゾーンが相対的に上位にあり、較正年代的に古い値を示す傾向を確認しうる。時系的な^{14}C年代（^{14}C濃度）の地域的差異の存在について、中村（2014：研究代表者中村俊夫「樹木年輪の^{14}C年代測定の実験室間比較による高精度の暦年代較正データの確立」『科学研究費助成事業研究成果報告』6頁。ウェブサイト公開版。辻本裕也氏紹介・教示）は、太陽活動の変動をバックグラウンドとする自然地理学（気候学）的要因によって説明する。大気循環的地域・経年的差異が大気中の^{14}C濃度変動をもたらすという。東アジア中・低緯度域において、①太平洋高気圧増大条件下（太陽活動：増大）における^{14}C生成の減少：^{14}C年代値の遡及化・古相化、②同・高気圧縮小条件下（太陽活動：減少）での^{14}C生成増加：^{14}C年代値の新相化という、気候的変遷と^{14}C年代の位相の連関を指摘している。このモデルに従い地形発達史的条件との関わりを整理するならば、それぞれ①梅雨季・台風季での多雨傾向期＝地形形成・水文的変動ポテンシャル増強期、②同・寡雨的傾向期＝同・低下期に換言しうる。古文化財への酸素同位体分析にもとずく環境史研究とならび、暦年較正曲線の変動パターンが自然地理的（＝気候学的・地形学的）変遷指標となりうる可能性が示唆される。今回の^{14}C年代値を含む較正年代域がIntCal・J-Calともに、とくにJ-Calカーブの急変部に相当する。

3）遺跡層序と^{14}C年代値・考古学年代指標的資料のコンテクストに留意した年代学的解釈が要件となる年代域に相当する。発達史を編むうえで、周辺域遺跡における検証が必要である。

4）遺跡の^{14}C年代と考古学的層序の組み合わせを端緒とする地形発達史を主題に、別稿を期したい。文化・経済活動の「時代」の境目における自然史編年および自然景観描写にあたる。人文科学的側面を内在する自然地理学において、地形・地質・水の資源利用史とも換言可能である。

〔引用・参考文献（50音順）〕

・財団法人大阪府文化財センター編『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』2003年（474頁収載：Ⅳ様式後半～古墳時代前期暦年代案）

・『講座［文明と堆積］6歴史と気候』171-182頁　朝倉書店　1995年

・小橋健司「放射性炭素年代測定と古墳のはじまり」『研究ノート』41　市原市埋蔵文化財調査センター.WWW.city.ichihara.chiba.jp/maibun/note/notebook41

・中塚良・釜井俊孝『長岡宮都図譜～都の自然景観と防災の考古学～』同朋舎　2011年

・春成秀爾・小林謙一・坂本稔・今村峯雄・尾嵜大真・藤尾慎一郎・西本豊弘「古墳出現期の炭素14年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集134-176頁　2011年

・森岡秀人・西村歩「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター　2006年

・矢野健一・中塚良・佐々木尚子・浦蓉子・杉沢淳司・木村啓章・辻本裕也「京都盆地中西部低地、向日市寺戸川縦坑・河床堆積層の文化財科学的研究」『日本文化財科学会第32回発表要旨集』2014年